

FD・SD教育改善支援拠点の活動（2）

平成 24 年度総合報告書

名古屋大学高等教育研究センター



FD・SD教育改善支援拠点の活動（2）

平成24年度総合報告書

はじめに

名古屋大学高等教育研究センター(以下、センターと略)は、設立当初より、高等教育機関の質の向上に取り組み、高等教育研究の一大拠点となることを目標に掲げ、多様な教育改善・教育支援のニーズに応えるべく、着実にその活動を発展させてきました。具体的な活動内容としては、学内外の教職員との協働による種々の研究会の立ち上げと運営、実践的な教材や教育プログラムの開発、教職員や大学院生・ポスドクを対象としたセミナー、ワークショップの企画・開催などが挙げられます。

センターは、平成 22 年、文部科学省より教育関係共同利用拠点「FD・SD 教育改善支援拠点」の認定を受け、拠点としての活動を開始しました。その拠点としての活動事業の目的として、それまでのセンターの活動内容を基本としつつも、教職員の自発的な教育改善の取り組みをより大切に、中部地域を中心とした各大学での教育・学生支援の質向上により貢献することを掲げています。

本報告書は FD・SD 教育改善支援拠点の平成 24 年度活動状況をまとめたものです。

平成 24 年度の拠点活動では、前年度の拠点活動を総括する中から、研究会活動の充実、大学職員に関わる活動の発展、他の FD・SD 拠点との連携活動の強化などを重点課題としました。専門領域に即した内容の高等教育研究を実施する研究会活動では、昨年度までに立ち上げた研究会では研究対象とできなかった分野のために、新規の研究会を立ち上げ、教職員の協働による研究会活動の多様性をめざしました。大学職員に関わる活動では、学内職員の海外研修派遣や複数の大学職員を対象とした SD 開催などを実施し、大学職員の能力向上に資する取り組みの発展をめざしました。

今年度の活動が拠点としての活動事業の目的達成に多少とも資することができたとすれば、それはセンターの活動をご理解いただき、ご支援、ご協力いただいている学内外の多くの皆様方のお陰であります。ここに心より感謝申し上げますとともに、本報告をご一読いただき、忌憚のないご意見をいただければ幸甚に存じます。今後とも、引き続き、センターの活動に、ご支援、ご鞭撻をいただきますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

平成 25 年 3 月 15 日

名古屋大学 FD・SD 教育改善支援拠点運営委員会委員長
名古屋大学高等教育研究センター長

早川義一

目次

はじめに	1
目次	3
2012 年度の総括	7
はじめに	9
1 組織的研修	10
2 研究会活動	11
3 教材・プログラム開発	12
4 新たな課題	12
事業報告	15
1 組織的研修	17
1-1 大学教育改革フォーラム in 東海 2013	
開催概要	19
参加者アンケート集計結果	24
資料 1 大学教育改革フォーラム in 東海 2013 ポスター	30
資料 2 大学教育改革フォーラム in 東海 2013 プログラム集	32
1-2 大学教員準備講座	
開催概要	60
開催スケジュール	61
参加者アンケート集計結果	61
1-3 セミナー・ワークショップ	
第 106 回招聘セミナー「「学習させる大学」における学生の正課外活動」	68
第 107 回招聘セミナー「学生の学習ニーズの多様化に対応した教育・学修支援」	69
第 108 回招聘セミナー「組織学習論から見た FD・SD」	71
第 109 回招聘セミナー「英国大学におけるガバナンス、リーダーシップ、マネジメント—経営人材に求められる能力や準備とはなにか—」	72
第 61 回客員教授セミナー「大学のナレッジマネジメント—IR から KM へ—」	73
第 110 回招聘セミナー「フランスの大学改革と執行部のリーダーシップ」	75
第 62 回客員教授セミナー「中国の大学における教員組織と執行部の葛藤」	76

第 111 回招聘セミナー「学習研究が教育改革・FD/SD にどのような影響を与えるか」	77
第 63 回客員教授セミナー「大学におけるリーダーシップの形成」	79
第 112 回招聘セミナー「ケースメソッドで主体的学びを実現する」	80
第 113 回招聘セミナー「中国の高等教育における国際教育戦略」	81
第 64 回客員教授セミナー「わが国の専門職養成をめぐる動向と課題」	82
第 65 回客員教授セミナー「大学の授業における認知的負荷量のマネジメントー学習効率性を高めるためにー」	83
1-4 教職員海外派遣事業	
事業概要	86
2012 Annual POD Conference 参加報告書①	87
2012 Annual POD Conference 参加報告書②	91
2012 Annual POD Conference 参加報告書③	95
1-5 名古屋大学新任教員研修プログラム	
平成 24 年度名古屋大学新任教員研修プログラム	100
参加者アンケート集計結果	102
1-6 学外研修 大学職員研修の進め方	
開催概要	104
実施報告	105
資料 FD・SD 教育改善支援拠点事業「大学職員研修の進め方」ポスター	107
1-7 名古屋大学 部局等における研修	
センター主催・共催	108
センター・スタッフ協力	112
1-8 名古屋大学外における研修等	115
1-9 教員メンタープログラム	120
資料 Nagoya University Faculty Mentoring Program (英文パンフレット)	121
1-10 東海高等教育研究所刊行物の利用促進	122
2 研究会活動	123
2-1 アカデミック・ライティング研究会	125
2012 年度名古屋大学学生論文コンテスト	127
資料 1 2012 年度名古屋大学学生論文コンテストのポスター	128
資料 2 2012 年度名古屋大学学生論文コンテストの投稿論文題目	129
資料 3 2012 年度名古屋大学学生論文コンテスト表彰式の様子	130

2-2	アカデミック・リーダーシップ研究会	131
2-3	教育学における映画を題材とした授業開発研究会	133
2-4	研究推進・支援研究会	135
	研究マネジメントセミナー2012「研究グループを率いるために」	135
	資料 研究マネジメントセミナー2012「研究グループを率いるために」ポスター	137
2-5	大学院共通的教育研究会	138
	大学院共通科目についての提言	139
2-6	図書館活用研究会	142
	資料 院生・教職員のためのスキルアップセミナー「授業で図書館を活用する方法」ポスター	144
2-7	名古屋 IR 研究会	145
2-8	なごや科学リテラシーフォーラム	146
2-9	名古屋サイエンスコミュニケーション教育研究会	149
	サイエンスイラストレーション・サマースクール 2012in あいち	150
	研究発表資料をつくる—ポスター・スライドづくりの理論と実践—	154
	学術広報誌制作教室 2012	155
	大学院共通科目「研究のビジュアルデザイン」提案シラバス	156
	資料 1 「サイエンスイラストレーション・サマースクール 2012in あいち」ポスター	157
	資料 2 「研究発表資料をつくる—ポスター・スライドづくりの理論と実践—」ポスター	159
	資料 3 「学術広報誌制作教室 2012」ポスター	160
2-10	名古屋哲学教育研究会	161
	名古屋哲学教育研究会 2012 第 1 回哲学カフェ「哲学教育の意義とは？」	162
	名古屋哲学教育研究会 2012 第 2 回哲学カフェ「教養科目の「哲学」で学生は何を学んだらよいのか？」	164
	名古屋哲学教育研究会 2012 第 3 回哲学カフェ「大学生にとって必要な教養とは？」	166
	哲学教育についての哲学カフェの意義	167
	徴候知のトレーニングとしての哲学カフェの進行経験	169
	資料 哲学カフェポスター	172
2-11	能力認定学位研究会	173

2-12	物理学講義実験研究会	174
2-13	留学生研究会	176
	資料 Nagoya University New Faculty Handbook 表紙	178
3	教材・プログラム開発	179
3-1	博士のキャリア展開に資するスキル開発プログラム	
	設計と実施	181
	院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー2012	
	クリティカルシンキングの技法—科学技術と社会の接点から	183
	研究倫理ワークショップ	185
	Writing is thinking!	186
	-Introduction to the logical thinking in academic writing-	
	科学技術とは何か—ガリレオを歴史の観測点にしてみる	188
	科学技術と社会—対話する社会へ—	189
	イノベーションと科学技術	190
	話す技術	192
3-2	大学の教務 Q&A	195
	参考資料	197
1	拠点の概要と設立経緯	
	設立経緯	199
	研究領域	199
	活動内容	199
	特徴ある活動	200
2	センターおよび拠点の規定	
	名古屋大学高等教育研究センター FD・SD 教育改善支援拠点運営委員会規定	202
	名古屋大学高等教育研究センター規定	203
	名古屋大学高等教育研究センター運営委員会規定	204
3	委員会実施状況	
	第3回拠点運営委員会	206
	運営委員会委員名簿	206
4	拠点が提供している教育改善支援ツール	207

2012年度の総括

2012 年度の総括

はじめに

平成 24 年度は、FD・SD 教育改善支援拠点としての単独での活動 2 年目となった。平成 22 年度までは「FD・SD コンソーシアム名古屋」としての活動と併行して行ってきた。コンソーシアム事業との間で活動の調整を行う必要はなくなったため、拠点事業に集中して取り組めるメリットが生じた。その一方で、コンソーシアムで培った他大学との連携をいかに維持・発展させるかが新たな課題になった。

拠点事業の開始に当たって掲げた目的は、以下のとおりである。

- ① 大学教員の教育能力および職員の職業能力の開発・向上を通じて、教職員の自発的な教育改善の取組を促進すること。
- ② 中部地域を中心とした各大学における教育・学生支援の質向上を実現すること。

目的の一部に、教職員の能力の開発・向上を掲げていることは、当拠点の名称に FD・SD を掲げている以上、当然のことである。しかし、言うまでもなくこれは手段にすぎない。目的は、教育改善であり、その結果としての教育・学生支援の質向上を実現することである。

教育改善への自発的な取組が、教育改善活動を行う上で不可欠であることは、改めて指摘するまでもない。教育やそれを改善する活動には、多大な時間と労力とともに想像力と創造力が必要であり、それらは自主性や自発性のないところには成立しないからである。

教育改善が、外圧によって強制されるのではなく、教員の自発性・自主性にもとづいて行われるためには、教員の最も大切にしている価値や活動に根ざすことが必要である。その代表的なものは、各教員の専攻領域に関するものである。それぞれの専攻領域で研究を行うにとどまらず、専攻領域の内容やみずからの研究成果を学生に伝えること、学生の学習活動を支援することは、大学教員としての自分の職務遂行やキャリア形成にどのような意味をもつのか。これは素朴ではあるが、根本的な問いである。この問いを抜きには、ホンネで教育改善活動を語ることは難しい。

これらの点は、高等教育研究センターが以前からとくに大切にしてきたことであり、拠点事業を進める上でも正面に掲げている。

拠点事業のいまひとつの特徴は、対象地域の拡大である。「FD・SD コンソーシアム名古屋」としての活動では、主に愛知県を中心に東海地域の大学・短大等を対象としてきた。これに対して、拠点事業では中部地域の高等教育機関を対象としている。これは、当拠点とともに認定された総合的な FD 拠点としての東北、京都、愛媛の 3 大学と、担当する地域を分担する狙いによるものである。このため、従来以上に、スタッフの力量を高めるとともに、活動内容を充実させることが求められている。

拠点事業では、この目的の実現に向けて、多様な活動を行っている。大きく分けると、

1. 組織的研修
2. 研究会活動
3. 教材・プログラム活動

に分類することができる。以下、この 3 つの柱に沿って、今年度の活動内容を振り返ってみよう。

1. 組織的研修

組織的研修については、大きく名古屋大学学内で実施するものと、学外で実施するものとに分けることができる。

1.1 名古屋大学学内での取組

名古屋大学学内での研修は、センターが開催しているセミナーが中心となっている。招聘セミナーと客員教授セミナーである。招聘セミナーは、全国各地で高等教育の研究や実践に従事している研究者・実践者を招聘して行っている。講演者の取り組んでいるテーマについての最新の成果を報告していただき、それに対してフロアとの質疑応答を行う形である。今年度は7回開催した。

客員教授セミナーは、高等教育研究センターの客員教授によるものである。形式は、招聘セミナーと基本的に同じである。今年度は、昨年度と同様に5回開催することができた。うち2回は外国人によるもので、中国と韓国における大学教育改革推進のための大学ガバナンスの在り方、学生の学習成果測定に関する研究成果について、密度の濃いセミナーを実現することができた。

招聘セミナーと客員教授セミナーをあわせると、ほぼ毎月セミナーを開催することができた。参加者も毎回一定数を得ている。必ずしも学内の教職員だけに限らず、学外からの参加者も少なくない。所属の大学等も、東海地域に限定されることなく、全国的な広がりをみせている。

1.2 名古屋大学学外での取組

セミナーは、名古屋大学学内だけにとどまらず、学外の多様な場で、多様な内容で開催している。

1.2.1 SD セミナー

今年度は、名古屋大学総務部、岐阜大学人材開発部との共催で、SDセミナーを開催した。これまで主に開催してきたセミナーは、FDが中心であった。SDについては、上記の招聘セミナーとして、年に数回程度開催するにとどまっていたが、SDに対するニーズは確実に存在すること、そのニーズはときにFD以上であることを感じていた。事実、SDをテーマとするセミナーでは、ほぼ毎回のように参加者が多い。

SDセミナーをより効果的に開催するためには、拠点の運営を担う高等教育研究センターの単独ではなく、名古屋大学内の担当部署、あるいは他大学との連携が必要と判断した。しかも教員だけでなく、職員を加えて教員と職員が協働して取り組むことも重視した。これらを考慮して、上記の2部署との連携での開催を決定した。場所も、名古屋大学ではなく、岐阜大学の岐阜駅前キャンパスとした。対象者は、国公立大学の職員研修の担当者として、職員研修の進め方についてのヒント・ノウハウを共有することを目的に掲げた。

広報のための期間が十分に確保できなかったにもかかわらず、参加者は約60名になった。SDに対する各大学のニーズが大きいことを改めて確認する結果となった。

1.2.2 他大学におけるセミナー

他大学でのFD・SDの実施を支援する活動にも取り組んでいる。要請のあった大学には、高等教育研究センターのスタッフを講師として派遣している。平成24年度は20件以上にのぼった。平成24年度は、大学・短大だけでなく、大学コンソーシアム、専攻領域を同じくする全国的な教員組織等からの要請が複数寄せられた。

これらの講師派遣は、各大学等の要請に基づいて行っている。大学教育改善の輪が多様な形態で、また多様な地域で進みつつあること、その組織から当拠点の活動が一定程度認知されていることを示している。この点は、幅広い組織・場所で大学教育改革・改善を進めること、その動きを側面から援助することを目的とする本拠点の趣旨に合致するものと言える。

1.3 「大学教育改革フォーラム in 東海」

名古屋大学の学内外での取組をベースに、年に一回、「大学教育改革フォーラム in 東海」を開催している。毎年の年度末 3 月に名古屋大学での開催である。東海地域をはじめとする大学・高専・高校等の関係者が一堂に会して、実践報告や率直な意見交換を通じて各機関の教育活動改善の方策を見いだそうという趣旨である。今年度の参加者数は 397 名である。参加者の所属地域も東海地域、中部地域、さらには関東、関西、九州など全国に拡大している。

フォーラムでは、オーラルセッションのほかに、ポスターセッションなどが設けられており、日頃の研究や実践の成果を発表できる。発表の件数が増えている中で、所属機関や教職員個人のニーズに即した発表を見いだしやすいことが、教職員にある程度評価されていると考えられる。

また、フォーラムの開催は 2012 年度で 8 回目となり、次第に全国の教職員に認知されるようになっていくことも、参加者人数の増加につながっていると考えられる。

2. 研究会活動

組織的研修が比較的多数の教職員を対象とするのに対して、研究会活動は小規模な活動である。教育改善、授業改善などの活動は、教員みずからの専門領域にかかわったところで追求しないと、一般的な内容になりがちである。結果的に、活動への参加意欲が薄れがちであり、長続きしない。しかし、研究と関わらせて組織できれば、教員の意欲を高めること、効果も高めることができる。このような考え方にたち、本拠点事業では研究会活動を組織したり、活動を支援したりしている。

平成 23 年度に本拠点事業としての活動を行ったのは、アカデミック・ライティング研究会、留学生研究会、物理学講義実験研究会、アカデミック・リーダーシップ研究会など、9 研究会であった。平成 22 年度は 3 研究会であったことを考慮すれば、大幅な増加と言える。平成 24 年度はさらに 13 研究会へと増加した。IR 研究会、大学院共通的教育研究会、図書館活用研究会等が新たに加わった。

通常の一部局所属の教員ばかりでなく、各大学の大学教育センター所属の教員や評価企画室等の大学評価部門の組織に所属する教員も参加している。また、教務研究会のように、教員だけで研究会を組織するのではなく、大学職員も加わって教員と職員が共同で研究会を組織する動きもみられる。

このことは、FD や SD の活動の輪が確実に広がっていることを示している。さらに、従来、教員や職員の間でかなりの程度普及してきた FD や SD の概念を変える可能性がある。集合研修ばかりが FD・SD 活動ではないこと、もっと小規模で、手軽に取り組めること、したがって日常的に実施することも十分に可能であること、むしろ研究会のような組織の方が効果を参加者の間で確保し共有しやすいことなどが、理解されよう。また、教員・職員を問わず、自分の担当する業務を、当面する業務を処理するだけでなく、より広い視点からとらえ直し、大学の置かれた環境や課題に対応させるべく業務の内容や進め方を改善する一つの契機になり得る。

3. 教材・プログラム活動

本拠点事業としての活動の重点項目の一つは、FD・SD に関する教材づくりである。これは、以下のような考え方によるものである。

- ・FD・SD 活動を単発のイベントにせず効果を持続させること。
- ・FD・SD を主催する側のメッセージを、確実に参加者・対象者に伝達すること。

これらの点は、拠点活動を実施する際の留意事項でもある。それを具体的に実現するための手段の一つが教材づくりである。セミナーなどでは、しばしば外部から招聘した講演者による講演や、若干の質疑応答が行われている。その場合に、パワーポイントの資料が配付されるだけで、まとまった資料が配布されることは少ない(場合によっては、パワーポイントの資料さえもないこともあり得る)。そのような場合には、通り一遍の情報を得るにとどまり、効果は一過性である。これでは、実際に大学教育の改善につなげるのは難しい。セミナー終了後にも、セミナーの趣旨や内容を繰り返し振り返ること、場合によっては参加者同士で内容をめぐって協議したりすることが必要なはずである。それを促すためには、FD・SD 対象者の職位・職務内容や専門性の多様性に対応して、それぞれのニーズに的確に答え得る教材の開発・刊行が不可欠である。また、教材としてまとめておけば、それを他大学に活用してもらうことも容易になる。

この活動は、名古屋大学高等教育研究センターの基本的なスタンスとして、従来から展開してきたものであるが、本事業でも同様のスタンスで臨んでいる。

今年度の活動としては、名古屋大学の教員向けに『Nagoya University New Faculty Handbook』(名古屋大学新任教員ハンドブック英語版)の発行を行った。昨年度作成した日本語版をベースに、英語版を作成した。多くの大学では、外国人教員も勤務しているが、彼らの職務遂行を支援する取組は、多くの場合ほとんどなされていないのが実情である。その理由の一つは、ことばによるコミュニケーションが必ずしも得意ではない教職員が多いことであろう。せめて英文の資料があれば、外国人教員が働きやすくなり、職務への意欲も高まると考えられる。このような観点から英文版の資料を編集・発行した。

4. 新たな課題

今年度の活動を展開する中で、新たな課題も明らかになった。主に以下のような点である。

① 研究会活動の充実

上記のように研究会活動は、比較的小規模で組織できること、専門領域に即した内容で行えることなど、活動を行ううえでのメリットが多い。大学・学部環境や学生のニーズは今後とも多様化することが予想されるため、これに対応すべく研究会をさらに増やして、多様な活動内容で展開することが求められる。そのために、名古屋大学内だけでなく、大学の枠を超えて問題意識を共有する教員や職員で研究会が組織されるように、支援を行うことが必要である。

② 大学職員向けの SD 活動

大学職員対象の SD では、所属の部署を問わず、全職員を対象に行われることもしばしばである。しかし、所属部署によって職務内容や求められる能力等は異なる。もちろん、それぞれの部署の職階等によってもこれらは変化する。そのため、SD が職務遂行能力の形成・向上をめざすのであれば、一斉に行うばかりでなく、所属部署ごとの実情に即した内容で行うことが求められる。実施のタイミング等にも留意す

る必要がある。

本拠点事業としての研究会活動には、大学職員が主要なメンバーとなっているものもある。しかし、まだその数は限られている。一方、大学職員の能力向上に関するニーズは大きく、これに応えていくことが必要になっている。大学職員が中心となって組織している大学行政管理学会をはじめ、大学の連合体組織等とも連携しつつ、大学職員向けの各種の活動の実施や支援を行うことが求められている。

③ 他の FD・SD 拠点と連携した相互の機能の拡充・強化

本拠点とともに認定された FD・SD 拠点は、東北大学、京都大学、愛媛大学の各大学教育センター等を拠点とするものである。これらの大学とは、共同の会合を開催するなどして情報交換に努めている。大学執行部等の管理職調査など、共同で実施している活動もある。4 拠点は、直面する課題には共通する点も多く、活動内容が重複することもしばしばである。相互に協力したり分担したりすることにより、活動内容をより生産的・効果的にすることができる部分もある。相互の連携を緊密にして、協力が必要かつ可能な活動を追求することが必要である。

事業報告

組織的研修

大学教育改革フォーラム in 東海 2013

大学教育について、近隣の大学関係者が一緒に議論し、連携、連帯を深め、もって質の高い大学教育をこの地区に実現することを目指して、本年度も大学教育改革フォーラム in 東海を開催した。

開催概要

場 所 名古屋大学東山キャンパス ES 総合館(一部中央図書館)

日 時 2013年3月2日(土)

10:00-10:10	開会あいさつ
10:10-11:00	基調講演
11:10-12:30	オーラルセッションⅠ(1・2・3)
12:30-14:00	ポスターセッション・ミニワークショップ・昼食
14:00-15:20	オーラルセッションⅡ(4・5・6)
15:30-16:50	オーラルセッションⅢ(7・8・9)
17:00-18:30	情報交換会・ポスターセッション

実行委員会 大川 隆(南山大学)

近田 政博(名古屋大学) * 事務局幹事

中井 俊樹(名古屋大学) * 事務局幹事

夏目 達也(名古屋大学) * 実行委員長

間野 益次(中京大学)

事務局 名古屋大学高等教育研究センター

主 催 大学教育改革フォーラム in 東海 2013 実行委員会

名古屋大学高等教育研究センター [FD・SD 教育改善支援拠点]

U R L <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/forum/tf2013>

○開会あいさつ

山本 一良(名古屋大学)

○基調講演「学生の主体的学びをどう促すか」

川島 啓二(国立教育政策研究所)

○オーラルセッション1「大学職員の学びと実践」

座長：加藤 史征(名古屋大学)

報告1「変わる学びの形—個人における意味と組織における意味を考える—」

中元 崇(京都大学)

報告2「学問のムスメ—共に学び続ける大学職員を目指して—」

満田 清恵(愛知教育大学)

報告3「職員の成長が大学の成長へ—実践からみる職員の学びの必要性—」

檜森 茂樹(名城大学)

○ オーラルセッション2「融合的・総合的な理系教養教育の可能性」

座長：安田淳一郎(岐阜大学)

報告1「理系のための教養教育？」

高橋 真聡(愛知教育大学)

報告2「獣医学教育や共通教育を事例とした教養教育の在り方に関する考察」

副土 秀人(岐阜大学)

報告3「3・11」を経ての教養教育

黒田 光太郎(名城大学)

○ オーラルセッション3「協同学習の場としての大学図書館」

座長：岡部幸祐(名古屋大学)

報告1「読書ブログ『栞輪』でつなぐ学びの空間：学生サポーターとともに3年」

中田 晴美(名古屋学院大学)

報告2「静岡大学附属図書館における学生協働の取組み」

次良丸 章(静岡大学)

○ オーラルセッション4「教務の実務的知識の共有」

座長：上西 浩司(奈良教育大学)

報告1「教務事項の業務ノウハウ共有と継承ニーズ—中小規模大学の実務担当の立場から—」

辰巳 早苗(大阪樟蔭女子大学)

報告2「教員免許事務における体系的知識の獲得と実践的知識への活用」

小野 勝士(龍谷大学)

報告3「教務系職員の職能開発促進のための新たな提案—『大学の教務 Q&A』発刊の反響から—」

村瀬 隆彦(佐賀大学)

○ オーラルセッション5「大学経営と評価」

座長：室 敬之(星城大学事務局長)

報告1「地域専門職戦略に向かう短期大学経営」

花原 大輔(名城大学)

報告2「新しい大学事務システム KUALI がもたらす未来」

角谷 充彦(名古屋大学)

報告3「戦後日本における大学の適格判定制度—大学基準協会と他機関の関係を中心に—」

藤原 将人(学校法人立命館)

○ オーラルセッション6「教養・基礎教育の基礎設計」

座長：栗原 裕(愛知大学)

報告1「大学カリキュラム体系化の現状と課題—日本語リテラシー教育を事例として—」

伊藤 奈賀子(鹿児島大学)

報告2「LMSとタブレットPCを組み合わせた教養系科目の教授法の開発」

内田 啓太郎、池田 瑞穂、谷村 要(関西学院大学)

報告3「クリティカルシンキングをどのように測定するかー標準テストの分類に基づく検討ー」

久保田 祐歌(愛知教育大学)

○ オーラルセッション7「課題解決型学習の可能性」

座長：大津 史子(名城大学薬学部)

報告1「三重大学における新しいPBL教育空間に関する研究」

加藤 彰一、毛利 志保、長澤 多代(三重大学)

報告2「地域企業との協働プロジェクトを通じた総合的学資力養成プログラムの試み」

山口 満、村松 東、見目 喜重、三好 哲也(豊橋創造大学)

報告3「政策学部におけるPBL教育の実践報告」

川北 泰伸(同志社大学)

○ オーラルセッション8「学生・学習支援の現在」

座長：池田 輝政(名城大学)

報告1「短期間でゼロから学生参画型FDを展開するコツ」

橋本 勝(富山大学)

報告2「履修相談制度とその情報の使い方」

増田 淳矢(中京大学)

報告3「カカ・ワリあう、学生相互の支援・協働活動ー学生交流センターの活動を通じてー」

東 誠(南山大学)

○ オーラルセッション9「日本の大学におけるIRの実践とノウハウ」

座長：藤井 都百(名古屋大学)

報告1「公開データを使用した時代学の現状把握の事例」

藤井 都百(名古屋大学)

報告2「評価マインドとIR人材の育成に向けてー大学評価コンソーシアムの取組からー」

浅野 茂(神戸大学)

報告3「京都光華女子大学におけるEM・IRの取り組み実践報告」

阿部 一晴(京都工科大学)

○ ミニワークショップ「物理現象と概念を結ぶー講義実験という挑戦(2)」

講演と実演1「単振り子と剛体振り子の関係を理解させる実験など」

三浦 裕一(名古屋大学)

講演と実演2「パソコン計測を利用した講義実験」

牧原 義一(三重大学)

講演と実演3「2次元振動モードパターン(クラド二図形)観測器製作」

岡島 茂樹(中部大学)

講演と実演4「どうやって学生に実験を見せるのかーWebカメラ活用の試み」

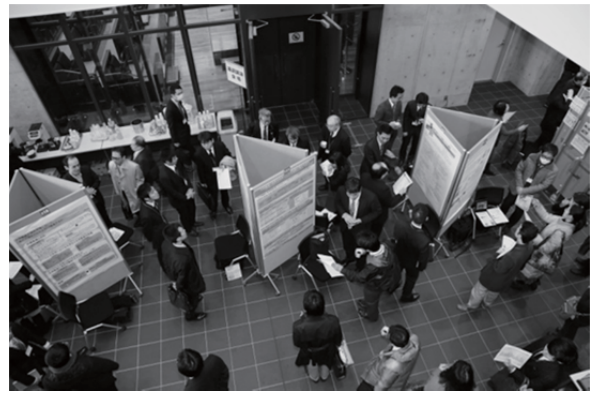
原科 浩(大同大学)

講演と実演5「机上で行うコンパクトな高速測定実験など」

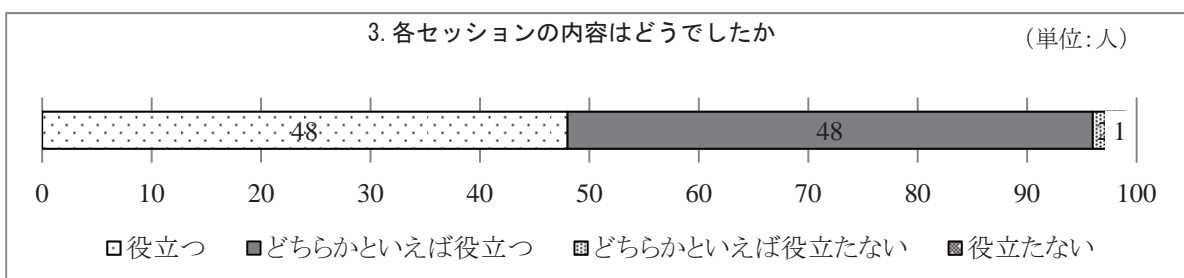
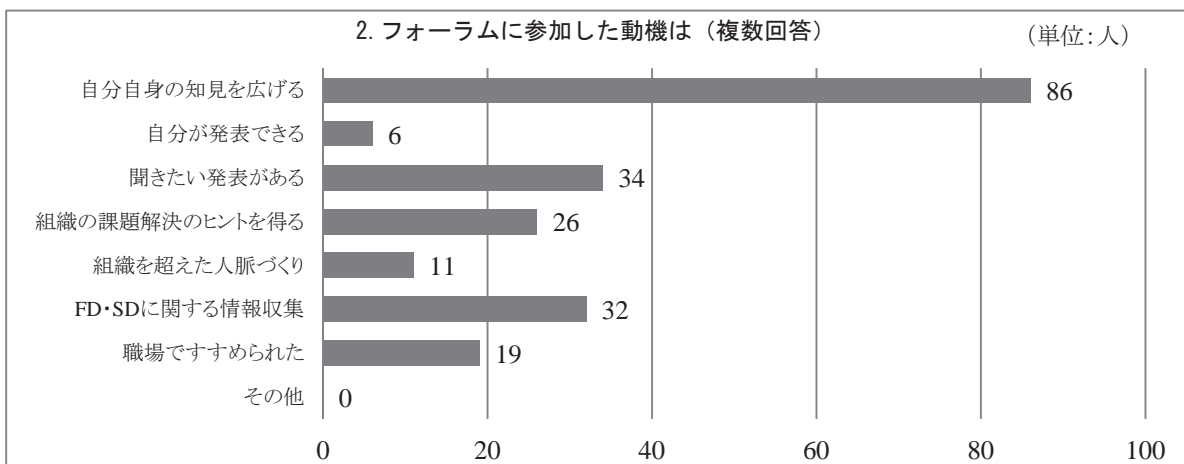
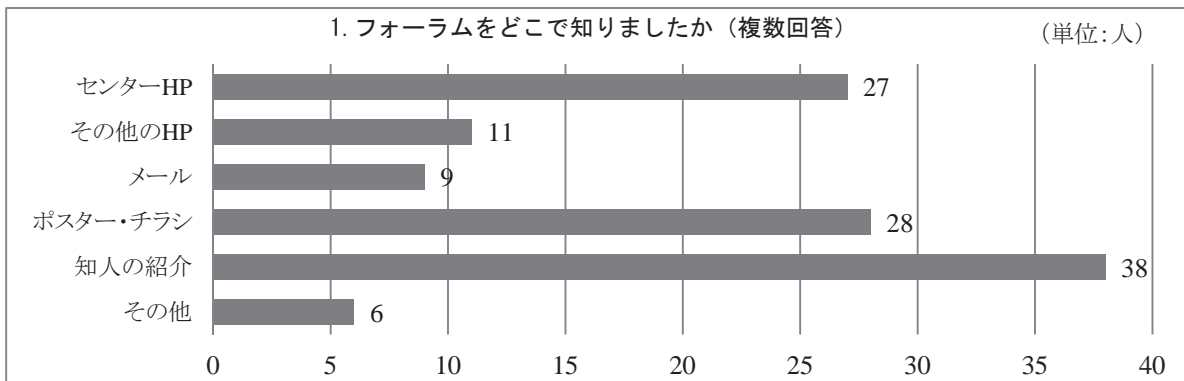
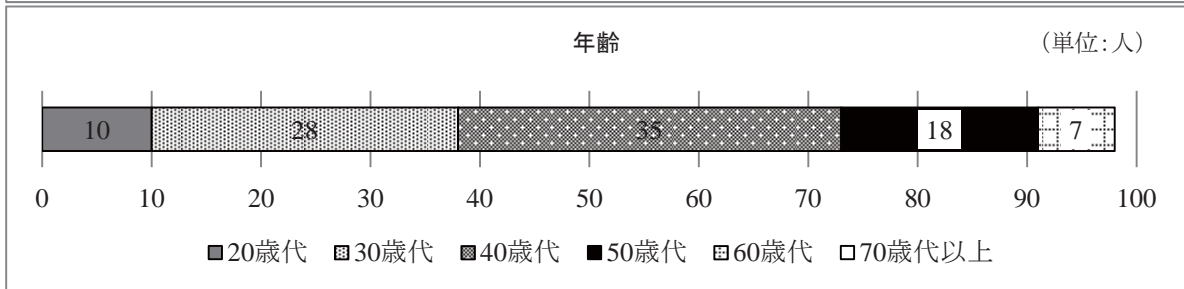
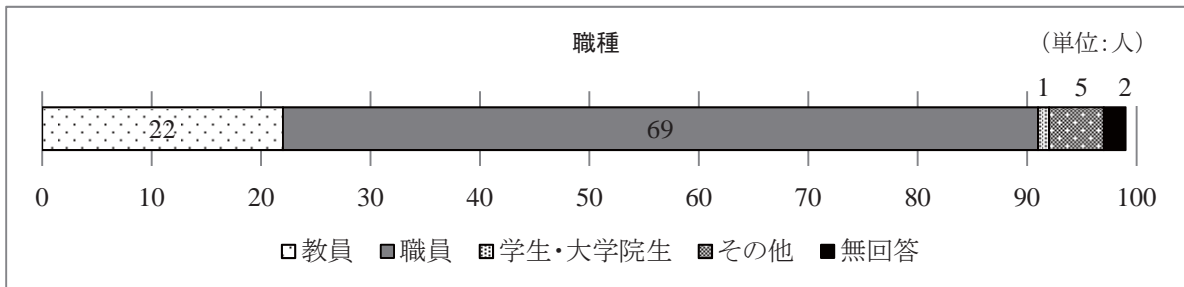
中村 光廣、林 熙崇(名古屋大学)

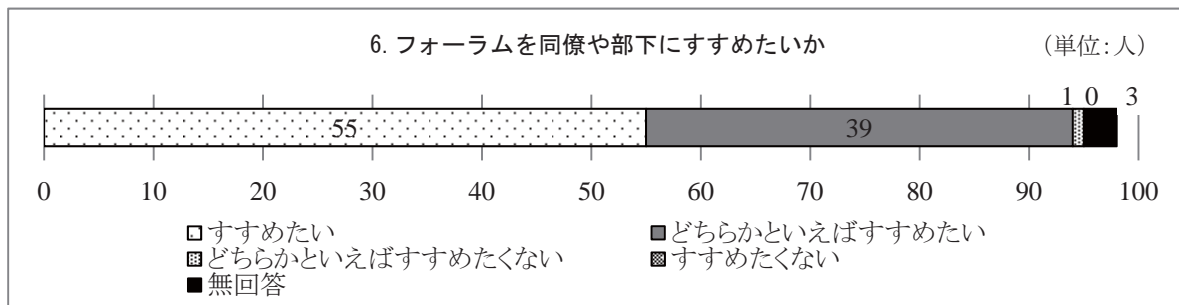
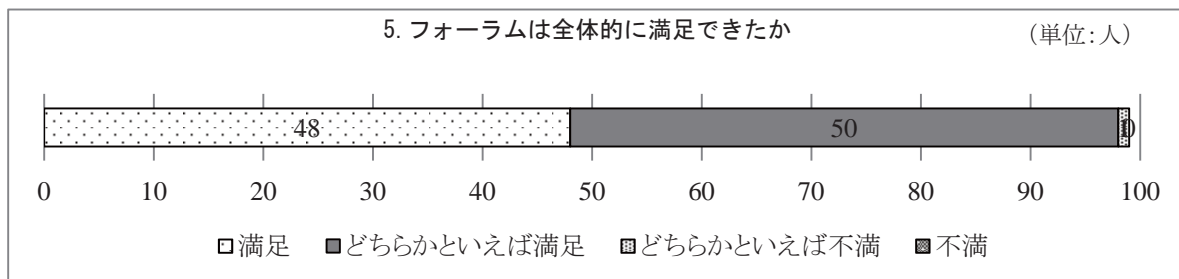
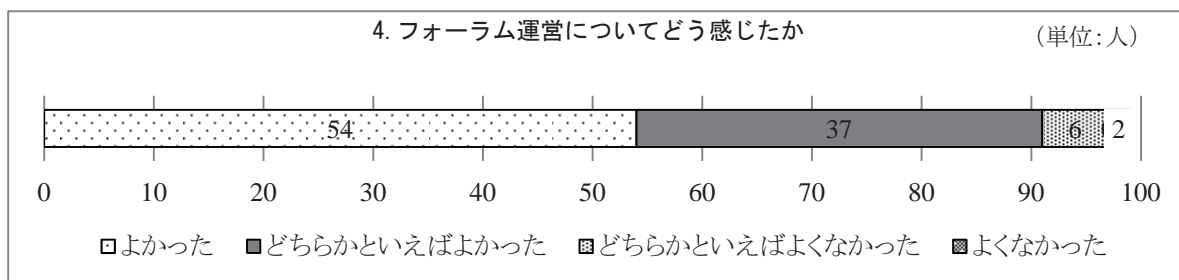
○ ポスターセッション

- P1 「アカデミックライティング科目の実践と意義に関する考察」
- P2 「「教養科目」に対する新しいアプローチ—社会連携型 PBL による同志社大学「プロジェクト科目」について—」
- P3 「初年次導入教育が後年次の学修に与える効果」
- P4 「教室の外で哲学をまなぶ—哲学カフェという手法について—」
- P5 「主体的な学びを育む学生 FD 活動」
- P6 「ラーニング・コモンズにおける学習環境デザイン—グループ学習エリアの利用実態から考える—」
- P7 「臨床判断能力向上のための共育プログラム—気づきを与える指導薬剤師の養成を目指して—」
- P8 「東海がんプロの取り組み—組織横断的がん診療を担う専門医療人の養成—」
- P9 「国境を越えた法制度の移植計画を立案し、実施を統括できる能力をもったリーダーの育成」
- P10 「実践的リスク予防学の修得バイオ技術者育成」
- P11 「食の安全・食育にかかわる教育のための大学連携フードコンソーシアム」
- P12 「『持続学のすすめ』による実践型人材の育成」
- P13 「中国大学の学生支援における学生の主体性育成への注目」
- P14 「中国の大学における留学生受入れ部門の役割変化に関する研究」
- P15 「愛知県立大学のグローバル人材育成推進事業」
- P16 「大学国際化に対応するアカデミック・キャリア形成支援の取組」
- P17 「グリーン自然科学国際教育研究プログラムの取組」
- P18 「大学教員の職能開発において『誰が』『誰を』『どのように』推進するか。—大学教員のキャリア・ステージの視点から—」
- P19 「大学職員研修の展開期における体制・内容に関する基礎的研究」
- P20 「私立大学事務局長の職務及び役割」 *優秀ポスター賞
- P21 「大学職員の教育支援者としての役割に関する研究」 *優秀ポスター賞
- P22 「映画を教材とした授業モデルの構築—「ジェネリックスキル」の育成を目的として—」 *優秀ポスター賞
- P23 「アクティブラーニングに向けた授業開発の検討—授業教材としての映画の可能性—」
- P24 「教育デザイン研究室の取り組みと ICT 教材の活用状況について」
- P25 「物理学講義における系統的演示実験のための教材開発と導入方法」
- P26 「批判的思考に基づく自発性を大学教育で育成するための課題」
- P27 「教員養成系学部・大学のリベラル・アーツ教育の研究枠組み—学際学部の視点から—」
- P28 「教員養成課程における「いじめ対策」に関する授業開発(中規模クラス編)」 *優秀ポスター賞
- P29 「教員養成課程における「いじめ理解」に関する授業開発(大規模クラス編)」 *優秀ポスター賞
- P30 「実践事例を通して主体的に学び考える保育士・幼稚園教諭養成」
- P31 「現任者研修を意識した「教職実践演習」の開発(その2)—保育者の資質向上のための共同学習の意義—」
- P32 「教員養成系大学におけるジェネリックスキル教育の課題—教員アンケート・ヒアリング調査結果をもとに—」



参加者アンケート集計結果





各セッションで取り上げられた内容は、あなた自身にとってどうでしたか？(自由記述)

- 具体的な改善への示唆のある発表がされたセッションは非常に役立った。
- FD と学生のかんけいがよりよくなつた。
- 他大学の実践を知ることはいいヒントになった。
- 他大学職員の情報を知ることにより刺激になる。
- 様々な取組事例を知ることができ有意義でした。
- 同一セッションのテーマの統一性に課題が見られる部分があった。
- オーラルセッション I 大学職員の学びと実践は参考になりました。
- 現在の教育課題に適した内容でよかったです。
- 自分の学びに迷いがあったので、解決の糸口をもらえたような気がします。
- 大学院で学びたいという気持ちが強くなった。
- FD にしろ、SD にしろ、今、教員及び職員が何を考え、どう行動しているかを知ることが、同じ大学をフィールドに働く者として意味がある。
- 事務職員のセッションをさらに深めてほしい。
- 自分の能動性について、考えさせられ、学ぶことの重要性を見つめなおすことができた。
- 「新しい大学事務システム KUALI がもたらす未来」大変すばらしかった。勉強になりました。
- 今後、基調講演は、大学関係者のみでなく、行政・企業関係者も含めた人選を考慮願います。
- 「3 協同学習」は、ささやかな取組みの中に、努力する姿を知り、参考になりました。

- ・図書館のラーニングコモンズは参考になりました。
- ・「大学職員の学びと実践」に参加し、大変よい刺激をいただいた。私自身も教職協同と言われる中、職員が大学院で学ぶことは必要と重要と考えている。このセッションでは、大学院での学び、MBA に特化していた？という意見も同僚から聞かれた。進学は1つの方法として、その他の例も聞いてみたい。
- ・色々な視点からの話を聞いた。
- ・自分自身で学ぶことの必要を感じていたので確認ができた。
- ・自分の業務に関するセッションに参加し、とても良い情報に触れることができた。今後、大学に戻ってから、役に立てていきたい。
- ・オーラルセッションの題をもう少しわかりやすくした方が良いのでは。
- ・今回のようにだ大学教職員が交流できる場は、必要と思います。(特に大学の枠を超えることは大変よいです)
- ・刺激と情報
- ・「自分の大学の実状をここで知るの」やはり問題ではないか。
- ・アカデミック・ライティング、レポートを書かせる授業については実践的なアドバイスが得られました。(オーラルセッション 6) 学生の立場からの「わからないこと」の視点は新鮮でした。
- ・目を向けていない分野の活動について知ることができたことがとても良かったです。
- ・担当者の考え方や現場での状況について知ることができたので、参考になった。
- ・図書館の活性化、クリティカルシンキングに関するとりくみ、地域連携を通した問題発見・解決型授業など、今後の参考になりました。
- ・他大学の事例を知る貴重な場所でした。ありがとうございます。
- ・役立ったが、時間が短いため、少し内容が浅く感じた。興味のある、実際に従事していない内容は、広く浅く知ることが出来、良かった。
- ・教員と職員の協力関係というテーマが浮かびあがってきたことを面白いと思った。そういうセッションを設定してはいかがか。
- ・実際の課題を共有することができた。
- ・大きな視点で、教育の質の保証を確保し、社会に役立つ人材として送り出すために職員自らも常に改善意識をもって企画立案していくことの重要性を改めて確認することができた。
- ・オーラルセッション II-2「新しい大学システム KUALI がもたらす未来」の発表者が、大学関係者とは違う立場で、外から見た大学を本音で語っていた。内容は学務システムという範囲ではあったが非常に参考になった。この様に外部から見た大学のセッションがもう少しあって良いと思う。
- ・他の大学でも同じような課題をもっていることがわかりました。
- ・SD について、具体的な内容を含め、もう少し踏み込んだ議論がなされてもよかったのではないか。
- ・他大学の事例や取り組みを聞くことによって、新しい発見や異なった見方を持つことができた。
- ・自学の改革に反映させたい。
- ・発表者の方の技量の差がずいぶん大きいように感じられました。もう少し練られた方が、わかりやすくなると思います。
- ・I 大学職員の学びと実践→モチベーション UP、IX IR 実践とノウハウ→知らない知識に触れる
- ・大学職員の学びについて考えさせられました。私たちの世代は、人に教えてもらうでもなく、ルーティンワークの中で仕事をしていましたが、今後の厳しい大学の中では学びが必要と思います。

- ・現在の業務上、参考となる点が多かったため。
- ・テーマと内容(報告)が不一致と思われる。
- ・事務系職員についてのテーマも多く、他大学も含め、モチベーションの高い方が多く参加していたように感じました。
- ・大学職員の学びと実践、発表内容から他大学の取組を知るとともに、自らのモチベーション向上にもなりました。また参加者がとても多く、本テーマへの関心の高さを改めて知る良い機会になりました。
- ・普段あまり考えていないテーマだったので、勉強になりました。
- ・私は大学職員ですので、オーラルセッション I「大学職員の学びと実践」が特に役立ちました。職員の方が、ここまで前向きにがんばっている姿に大いに刺激を受けました。
- ・特に IR については、今後役に立ちそうです。
- ・多くの先生方の知見は、自己成長や職務的立場でもたいへん意味深く、多くご教示をいただいています。

フォーラムの運営についてどう感じましたか？(自由記述)

- ・カフェスペースが参考になった。
- ・ちょうど良い機会ですので、ラーニング・コモンズの見学会があれば面白いのではないのでしょうか。
- ・滞りなく運営されていてよかったです。
- ・手慣れた運営をされているとの印象です。
- ・組織的運営がうまくいっていますね。年を重ねたことが力ですかね。
- ・一つの建物でプログラムが実施され、スケジュール等も適切であった。
- ・内容・プログラムがとても充実していて、とてもよかったです。
- ・スムーズで濃い内容だったと思います。次回も参加したいと思います。
- ・とても親切に運営いただきましたが、内容が盛りだくさんなので休けいが少ない気もしました。
- ・サインもわかりやすく、ポスターセッションも盛り上がっていた。
- ・聞きたいセッションが重なり残念である。
- ・様々なセッションがあり、多様化していてよかったです。
- ・同一セッション内のテーマの統一性に課題が見られる部分があった。
- ・時間配分が難しい部分もあったが、座長がうまく仕切っていた。
- ・会場に入出口が複数あれば、入れ替えがよりスムーズであった。
- ・マイクの未使用のため聞きづらかった。資料の不足。
- ・オーラルセッションで、会場に人が入りきらない、資料が足りない所があった。
- ・セッション I で配布資料が足りなくなったことが残念。
- ・資料が不足してもらえなかった(分科会)
- ・発表会場が寒い。
- ・教室が寒かったです。(オーラルセッション I のとき)
- ・会場も良く、時間も丁度良かった。
- ・ポスターセッションの配置が前回より巡回しやすくなった。
- ・ポスターセッションの場は、それぞれの空間にもう少しゆとりがあったら良かったと思います。
- ・今回はセッション発表をさせていただきましたが、事前連絡を含め、大変丁寧な対応をいただきました。感謝申し上げます。

- ・丁寧にご対応いただき良かったです。
- ・発表ができて良かったです。
- ・親切な対応に感謝申し上げます。
- ・大変人が多いなか、ありがとうございました。
- ・予想外に参加者が多かったのだと思いますが、席が足りませんでした。
- ・来場者の予測が不十分。会場規模のミスマッチ。プリントの配布は会場外の入り口で1人の担当者を置き、配るようにする。
- ・基調講演で立ち見だったので疲れしました。また、受付は昨年のようにもう少し奥にあると良いと思います。それ以外はとても良い対応だったと思います。
- ・基調講演の人数と会場、事前に把握しておいた方が良いのでは？
- ・立ち見は改善した方が良い。
- ・立ち見の方達がいまして。せっかく来場したのに失礼だと思う。
- ・参加者の方が多くて、立ち見の方がかわいそうに思えました。ないようも充実し、次年度以降も多くの方が参加するように思いますので、ご配慮いただければと思います。
- ・事前に参加申し込みをして会場規模や座席数などを調整した方がよいと思います。
- ・会場の入り口が狭いので出入りに混雑した。
- ・受付で手際の悪さが目立った。発表直前でもスムーズにできるようにしてほしい。
- ・受付が少しあやしい。
- ・受付の対応や各セッションの資料配付で混雑していた。

フォーラムの発展のためにどのような改善が必要だと思いますか？(自由記述)

- ・参加者が読めない分、人数のキャパシティを超えたセッションも散見されたが、あえて改善というよりは、このような形態を推進することが、特色があつてよいと思う。
- ・年々参加者が増加しているので事前に申し込みをすることで、参加者数に見合った会場設定が出来るのではないのでしょうか。準備大変でしょうがご検討ください。
- ・人数多数のため座れないセッション会場がありました。
- ・教室規模の把握のために事前申込制を採られたほうがよいのではないかと思います。
- ・参加人数の事前把握。資料配付の効率化。
- ・配布資料が不足していました。事前にセッション参加者の把握も必要なのでは？
- ・セッションによっては資料が足りなかったようです。難しいかもしれませんが、事前登録で大まかな参加人数を知ることは必要ではないのでしょうか。
- ・今回で3回目の参加になりますが、年々参加者も増えているように感じます。今回のように立ち見の参加者もあつたりしたので、「事前申込」の方法も検討いただけたらと思いました。
- ・休み時間が短すぎる。延長した際に移動が大変。
- ・参加者間でディスカッションする場があれば良いのだが、場を設けたとしても、うまくディスカッションが盛り上がるかどうかは非常に難しく、運営サイドにすれば設定しづらいただろうと思う。失敗を恐れず挑戦していただけると嬉しい。
- ・数年掛けないと、各セッションの内容を知り得ないため、冊子(今回フォーラム)としてまとめてみえるのでしょうか。レジュメはありますが、報告書と呼べる冊子体が望ましい。

- ・概念や抽象的な理念はよく理解できるので、具体的な事例を多く取り上げてほしい。そして共有したい。
- ・発表者がツツなくまとめたプレゼンをしていたりすると、浅い議論で終わってしまうこともあるので、あらっぽくてもよいので攻める発表をしてもらえるとよかったなあと感じる発表もあったように思います。
- ・3人の提題者の発表の方向性がバラバラでかみ合わないセッションだったりすると、折角のフォーラムなので、ちょっともったいないなあと思いました。その辺りのすり合わせができるとよかったなあと思うものもありました。
- ・セッション内のそれぞれの発表者に関連、連携がもっとあるとよいと感じました。
- ・改革というならば、各セッションの発表内容についてお任せではなく、事前にチェックすること、必ず「提言」をさせることを義務づけた方がよかったですよ。
- ・報告者としては、タイムキーパーを司会の方と別に立てておくと、報告がやりやすいと思います。
- ・一人の発表時間をもう少し長くしてほしい。3名の相互の議論も聞いてみたい。
- ・セッション報告の時間が若干短い印象でした。
- ・各セッションの時間が短いので、会場での発表者を少なくし、会場を増やした方がよいと思います。
- ・セッションによって報告者3名の報告内容にまとまりのあるものとなないものがあった。1つのテーマを3名の複眼的に、コンセプトに従って報告してもらえるとよい。
- ・発表者の練度をあげていただければと思います。
- ・広報の充実。
- ・直前でたまたま知ったので、知るすべ(広報)が欲しかった。
- ・基調講演を動画配信してください。後日の学び直し、参加できなかった人に対する情報提供で、資料のみでは限界があるため、動画配信していただけると有力かと存じます。
- ・開催時期 3月下旬は大学の卒業式と重なる場合があり、大学職員の参加が難しいケースがあります。7～8月頃等、時期次第でより多くの参加が可能と思いました。
- ・大学をめぐるステークホルダー各々の視点をとり入れて比較できるような試みがあると面白くなるか。教職員間の壁？溝？をとり払う試み、それ自体をテーマとしてみては？名大の社会(科)学系スタッフの姿を見ないのが気になった。
- ・数多くあるFDセミナーやフォーラムなどの中で、当フォーラムはどのような方向性で開催されるのか。具体性(独自性?)がみられるとよいと思います。
- ・是非、教務系職能開発促進のための勉強会・研究会設立をお願い申し上げます。
- ・教務事務関係のフォーラムを行ってほしい。
- ・管理部門、庶務、会計、施設・システム担当のための話題提供があるとよい。
- ・ポスターセッションの投票は夕方までにしていきたい。
- ・一階ポスター発表の場が非常に寒く感じました。ヒーターなど簡易的なものがあると良かったと思います。
- ・ポスターのための時間が少なすぎると感じました。(どのポスターも良質で、時間をかける事ができると思います)
- ・ポスターセッションの場所が狭く、思うように見ることができなかった。通路が広いと良かった。
- ・女性の割合はどうしたら増えるの？ネクタイの似合う教育は形だけ、戸田山式(元センター長)でゆきたいですね。

大学教育改革フォーラム in 東海2013

大学教育について、一緒に議論をし、連携・連帯を深め、質の高い大学教育をこの地域に実現しませんか。
大学教育をよりよくしたい、という意志や希望をお持ちの方々のご参加をお待ちしております。

2013年3月2日(土) 10:00-18:30 **会場** 名古屋大学東山キャンパス ES総合館ほか
事前参加登録不要、参加費無料、情報交換会(2,000円)

プログラム(予定)

9:00 受付

10:00 開会あいさつ

10:10 基調講演

学生の主体的学びをどう促すか

川島 啓二 氏(国立教育政策研究所総括研究官)

11:10 オーラルセッション

1 : 大学職員の
学びと実践

座長: 加藤史征(名古屋大学)

報告者: 中元 崇(京都大学)

満田清恵(愛知教育大学)

檜森茂樹(名城大学)

2 : 融合的・総合的な理系
教養教育の可能性

座長: 安田淳一郎(岐阜大学)

報告者: 高橋 真聡(愛知教育大学)

福土 秀人(岐阜大学)

黒田光太郎(名城大学)

3 : 協同学習の場としての
大学図書館

座長: 岡部幸祐(名古屋大学)

報告者: 中田晴美(名古屋学院大学)

次良丸章(静岡大学)

12:30 昼食・ポスターセッション

ミニワークショップ「物理現象と概念を結ぶ - 講義実験という挑戦(2)」

14:00 オーラルセッション

4 : 教務の実践的知識の共有

座長: 上西浩司(奈良教育大学)

報告者: 辰巳早苗(大阪樟蔭女子大学)

小野勝士(龍谷大学)

村瀬隆彦(佐賀大学)

5 : 大学経営と評価

座長: 室 敬之(名城大学)

報告者: 花原大輔(名城大学)

角谷充彦(名古屋大学)

藤原将人(学校法人立命館)

6 : 教養・基礎教育の設計

座長: 栗原 裕(愛知大学)

報告者: 伊藤奈賀子(鹿児島大学)

内田啓太郎(関西学院大学)

久保田祐歌(愛知教育大学)

15:30 オーラルセッション

7 : 課題解決型学習
の可能性

座長: 大津史子(名城大学)

報告者: 加藤彰一(三重大学)

山口 満(豊橋創造大学)

川北泰伸(同志社大学)

8 : 学生・学習支援
の現在

座長: 池田輝政(名城大学)

報告者: 橋本 勝(富山大学)

増田淳矢(中京大学)

東 誠(南山大学)

9 : 日本の大学における
IR の実践とノウハウ

座長: 藤井都百(名古屋大学)

報告者: 藤井都百(名古屋大学)

浅野 茂(神戸大学)

阿部一晴(京都光華女子大学)

17:00 情報交換会・ポスターセッション

主催: 大学教育改革フォーラムin東海2013実行委員会、名古屋大学高等教育研究センター(FD・SD教育改善支援拠点)

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/forum/tf2013/>

大学教育改革 フォーラム in 東海 2013

名古屋大学東山キャンパス
ES総合館 ほか
2013年3月2日(土) 10:00-18:30



プログラム

9:00	受付
10:00	開会あいさつ
10:10-11:00	基調講演
11:10-12:30	オーラルセッション I
12:30-14:00	昼食・ポスターセッション ミニワークショップ
14:00-15:20	オーラルセッション II
15:30-16:50	オーラルセッション III
17:00-18:30	情報交換会・ ポスターセッション

会場案内図



事務局

名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町1
Tel: 052-789-5696
Fax: 052-789-5695
Email: info@cshe.nagoya-u.ac.jp

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/forum/tf2013/>

大学教育改革 フォーラム in 東海 2013



プログラム

日時 2013年3月2日(土)
10:00-18:30

会場 名古屋大学東山キャンパス
ES総合館

主催 大学教育改革フォーラム
in 東海2013実行委員会
名古屋大学高等教育研究センター
(FD・SD教育改善支援拠点)

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/forum/tf2013/>

大学教育改革 フォーラム in 東海 2013



■ 日程表

10:00	開会あいさつ
10:10 11:00	基調講演 学生の主体的学びをどう促すか 1F・ホール 川島 啓二 (国立教育政策研究所総括研究官)
11:10 12:30	オールラセッション 2F・A 会場 1: 大学職員の学びと実践 座長: 加藤 史征 (名古屋大学) 報告者: 中元 崇 (京都大学) 満田 清恵 (愛知教育大学) 檜森 茂樹 (名城大学) 2F・B 会場 2: 融合的・総合的な理系教養教育の可能性 座長: 安田 淳一郎 (岐阜大学) 報告者: 高橋 真聡 (愛知教育大学) 福士 秀人 (岐阜大学) 黒田 光太郎 (名城大学) 中央図書館 3: 協同学習の場としての大学図書館 2F・ラーニング コモンス 座長: 岡部 幸祐 (名古屋大学) 報告者: 中田 晴美 (名古屋学院大学) 次良丸 章 (静岡大学)
12:30 14:00	1F・ロビー 昼食・ポスターセッション 1F・会議室 ミニワークショップ「物理現象と概念を結ぶ - 講義実験という挑戦 (2)」
14:00 15:20	オールラセッション 2F・A 会場 4: 教務の実践的知識の共有 座長: 上西 浩司 (奈良教育大学) 報告者: 辰巳 早苗 (大阪樟蔭女子大学) 小野 勝士 (龍谷大学) 村瀬 隆彦 (佐賀大学) 2F・B 会場 5: 大学経営と評価 座長: 室 敬之 (星城大学) 報告者: 花原 大輔 (名城大学) 角谷 充彦 (名古屋大学) 藤原 将人 (学校法人立命館) 2F・C 会場 6: 教養・基礎教育の設計 座長: 栗原 裕 (愛知大学) 報告者: 伊藤 奈賀子 (鹿児島大学) 内田 啓太郎 (関西学院大学) 久保田 祐歌 (愛知教育大学)
15:30 16:50	オールラセッション 2F・A 会場 7: 課題解決型学習の可能性 座長: 大津 史子 (名城大学) 報告者: 加藤 彰一 (三重大学) 山口 満 (豊橋創造大学) 川北 泰伸 (同志社大学) 2F・B 会場 8: 学生・学習支援の現在 座長: 池田 輝政 (名城大学) 報告者: 橋本 勝 (富山大学) 増田 淳矢 (中京大学) 東 誠 (南山大学) 2F・C 会場 9: 日本の大学における IR の実践とノウハウ 座長: 藤井 都百 (名古屋大学) 報告者: 藤井 都百 (名古屋大学) 浅野 茂 (神戸大学) 阿部 一晴 (京都光華女子大学)
17:00 18:30	1F・ホール 情報交換会・アトラクション・ポスターセッション

ごあいさつ

夏目 達也

大学教育改革フォーラム in 東海 2013 実行委員長
(名古屋大学高等教育研究センター教授)

本日は「大学教育改革フォーラム in 東海 2013」にご参加くださり、ありがとうございます。
「大学教育改革フォーラム in 東海」は、東海地域の大学・短大等に所属する教員や職員が、一堂に会して教育改善の方策について率直に意見交換をしようという趣旨で、毎年開催しているものです。皆さまのご協力によりまして、今回で8回目を迎えることができました。

大学を取り巻く環境の厳しさは、従来から指摘されてきましたが、ここ数年とくに厳しさが際だっているように見受けられます。18歳人口の減少による学生の確保は、従来以上に困難になっています。入学してくる学生は、高校教育改編等の影響もあり、従来以上に多様化しています。中には、大学教育を受けるための準備が、学力面だけでなく心の準備という点でもまだ不十分とみられる学生もいます。

われわれ大学・短大等で働く教員・職員は、このような現実を目を背けることはできません。自分たちの職場である大学・短大に責任を負い、そして何より自分たちの大学・短大を入学先として選んでくれた学生たちに責任を負っている以上、現実がいかに厳しいものであっても、事態の改善のために努力することが求められていると言えましょう。

大学・短大等は、社会が直面する諸問題の解決に向けて、新たな知識を創造することを使命としています。現在の大学・短大、そして学生をめぐる現在の状況を、解決に必要な社会問題の一つとしてとらえるならば、われわれは問題解決のための方策、少なくともその糸口を社会に対して提示することを求められます。

「大学教育改革フォーラム in 東海」を、その困難な、しかしやりがいのある課題に、われわれ大学関係者が取り組むための場とすべく、実行委員会で内容を検討して参りました。今年は、これまで参加者全員で行ってきたパネル・ディスカッションに代えて、オーラルセッションの枠を拡大しました。より多くの方に日頃の研究や実践の成果を発表していただくとともに、フロアとの活発な議論に参加していただけるように考えた結果です。その結果、従来にない新たなテーマを掲げることができました。一会場あたりの規模が小さくなった分、密度の濃い議論が期待できると思われれます。さらに、ポスターセッションでは、優れた企画に対する表彰制度を設けることになりました。表彰者は皆さまの投票により決定されます。ぜひ、これと思う発表を見つけてください。ミニワークショップでは、物理学教育の講義実験に関する発表があります。

活発な議論を通じて、明日からの大学教育改革に向けたエネルギーを養っていただけますよう、皆さまのご協力をお願い申し上げます。

ご案内

すべての参加者のみなさまへ

1. ポスター投票のお願い

参加者からの投票により優秀ポスター賞の表彰を行います。受付で配られた投票用紙の指示に沿って、午後2時までに受付の回収箱に入れてください。情報交換会にて結果発表いたします。

2. アンケートのお願い

今後のフォーラム運営に反映させるためにアンケートをお願いしています。アンケート用紙に率直なご意見を記入し、お帰りになる前に受付の回収箱に入れてください。

3. 昼食など

本プログラムの裏表紙に食事ができる場所（生協食堂等）を示しています。また、数に限りがありますが、受付で弁当（¥800 お茶付）を販売しています。ご利用ください。会場内に飲食禁止エリアがあります。表示をご確認ください。喫煙は指定場所（裏表紙地図参照）にてお願いいたします。

4. 情報交換会

プログラム終了後にE S 総合館 1階にて行います。優秀ポスター賞の表彰式も行います。会費 2,000 円です。受付にてお申し込みいただけますので、ぜひご参加ください。

5. コートハンガー

E S 総合館 1F 会議室にコートハンガーがあります。ただし貴重品は各自で管理をお願いいたします。万一盗難、紛失等の事故がありましても責任を負いかねますのでご了承ください。

座長および口頭発表者の方へ

1. ご報告の準備について

各会場には10分前を目安にお越しください。セッション座長と相談して進め方を確認してください。各会場にノートパソコンをご用意していますので、セッション開始前にノートパソコン上でご報告ファイルの動作確認をお願いします。

2. 打ち合わせ

オーラルセッションを担当される方には打ち合わせ用の会議室があります。E S 総合館2階のE会場をご利用ください。

ポスター発表者の方へ

1. ポスター掲示の時間

12:30までに掲示をお願いします。ポスター発表の時間は12:30～14:00です。共同発表をされる場合は2階のC、D会場を開始前の打ち合わせ用にお使いいただけます。情報交換会の参加の可否にかかわらず、ポスターは遅くとも19:00までにはがして、各自でお持ち帰りください。19:00を過ぎても貼ってある場合は、その後の対応は事務局に一任させていただきます。

2. 表彰式

情報交換会においてもポスターセッションと表彰式を行います。情報交換会に参加される場合は14:00以降もそのままポスターを掲示していただき、情報交換会の際にもぜひご自身のポスターについて質疑応答をお願いします。

優秀ポスター賞を受賞されたポスターについて、情報交換会に参加されない場合は、受賞されたことを事務局から後日お知らせします。

3. 写真撮影

大会記録用に各ポスターの写真撮影をさせていただきますので、あらかじめご了承ください。個別ポスターの写真は、報告者の了解なしに、ウェブ等で公開することはありません。

基調講演

学生の主体的学びをどう促すか

川島 啓二（国立教育政策研究所総括研究官）

昨年8月28日に出された中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」においては、「主体的な学修を促す学士課程教育への質的転換」の必要性が言及された。特に「主体的な学び」の「始点」としての「学修時間」が取り上げられ、日本の学生の学修時間の少なさがクローズアップされている。

ただ、大学教育の目的が、学生の主体性や様々な能力の育成にあると位置づけられてきたのは、今回の「質的転換答申」が初めてではない。例えば、1998年の「21世紀の大学像と今後の改革方策について」においては、「課題探求能力」即ち「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」が謳われたし、2005年の「我が国の高等教育の将来像」においては、「21世紀型市民」すなわち「専攻分野についての専門性を有するだけでなく、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、あるいは社会を改善していく資質を有する人材」の育成が謳われた。さらに、2008年の『学士課程教育の構築に向けて』においては、「学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針」としての「学士力」が、知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、統合的な学習経験と創造的思考力の4領域に整理・提示されたことは記憶に新しい。

それらを受けて、今次の「質的転換答申」では、平成20年12月の「学士課程答申」などにおいて詳細に示されている学士課程教育の質的転換のための方策を、「各大学が大学支援組織や文部科学省、地域社会、企業等と連携しながら、改革サイクルの中で、着実に実行するための具体的な手立てを明確にしたものである」と述べ、具体的な実践的導入を促しており、様々なレベルでの改革と質的転換の「実行」が、各大学に「待ったなし」で求められていると言って良い。今後はその実行の効果についても、検証と評価が求められることになるのだろう。

主体的な学びを促すために、答申の軸となる考え方は、まず「成熟社会において学生に求められる能力をどのようなプログラムで育成するか＝学位授与の方針に従ったプログラム全体の中で個々の授業科目は能力育成のどの部分を担うかを担当教員が認識し、他の授業科目と連携し関連し合いながら組織的に教育を展開することが重要である」とされている。つまり、「はじめに個々の授業科目があるのではなく、まず学位授与の方針の下に学生の能力を育成するプログラムがあり、それぞれの授業科目がそれを支えるという構造にならなければ、個々の教員が授業の改善を図っても、学生全体が明確な目標の下で学修時間をかけて主体的に学ぶことは望めないのである。」とされるのである。ここで、学生「全体」の主体的な学びが語られているように、学士課程教育の構造的な問題として、「主体的な学び」が焦点化されていることに留意する必要がある。

もちろん、学士課程教育のプログラムといった基幹的構造だけではなく、学生の主体的学びのためには、様々な工夫と努力が必要であるし、また、そのような実践的取り組みも積み重ねられてきた。それでは、「主体的に学ぶ」学習行動とはどのようなものなのか、授業ベースで整理し

10:10 11:00
1F・ホール

てみると、丁寧なケアによって、何とか勉強する、指示されたことはこなす（それ以上はやらない）、授業の予習・復習だけは指示されなくてもする、予習・復習以上の学習にも取り組む、（授業に触発されて）授業以外の学びの機会に参加する、（授業とは関係なく）自分の進路・将来・関心に即した学びの機会に参加するといったシーンが考えられ、それぞれのシーンに対する具体的な方策としては、学習支援、初年次教育、ピア・サポート、シラバス、予習・復習の指示、アドバイジング、予習・復習を前提とした授業、成績評価、GPA、学生参加型授業、授業での問題提起、（浮きこぼれ対策型）ピア・サポート、触発する授業、体験学習、サービスマーケティング、産学連携教育、多様な学習機会の提供（留学、ボランティア、資格講座）といった実践の形態が試みられていると（大まかに）整理されよう。

つまり、学士課程教育を貫くマクロなコンセプトとその構造といった問題と、リアルなシーンを支える方法的な工夫やティップスの組み合わせといった、いささかお決まりの構図に行き着いてしまうのだが、その構図に大学教職員がそれぞれ「主体的に」関わっていく、そのことこそが問われているのかもしれない。

略歴

国立教育政策研究所高等教育研究部総括研究官。

専門は高等教育論・教育行政学。

1954年生まれ、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程学修認定退学。

芦屋大学助教授、国立教育研究所教育経営研究部高等教育研究室長を経て現職。

日本高等教育開発協会会長、初年次教育学会理事、大学教育学会常任理事。

著書に『大学における「学びの転換」と言語・思考・表現』（共著、東北大学出版会、2009年）

『新時代を切り拓く大学評価 - 日本とイギリス - 』（共著、東信堂、2005年）など。

オーラルセッション

大学 職員の学びと実践

座長：加藤 史征（名古屋大学総務課）

11:10 12:30
2F・A 会場

趣旨

大学は一つの学び舎である。この学び舎において、育成しようとする学生像を実現化していくためには、大学で働く職員自身がその将来像を体現していることが近道になるだろう。学生の本分は学びにある。であるならば、大学職員も同時に、学ぼうとする大学職員であることを求められるのではないか。

では、大学職員の学びとは何か。大学職員の業務の高度化・複雑化と重要性の高まりは、すでに様々な場面で論じられている。これらに対応するため、人材開発に関するプログラムが大学内外で数多く展開されているが、大学職員はそこで何を学び、成果をどのように活かしているのだろうか。

報告者の3名は、これまでに様々な形で学び、またこれから学ぼうとしている大学職員である。学びに至る動機、学ぶ中での葛藤、学びの先にある成長など、それぞれ事例とともにお話しいただき、学びを職場での実践にどうつなげていくのか、フロアとも意見交換を行いたい。

1. 変わる学びの形

個人における意味と
組織における意味を
考える

中元 崇
(京都大学総務部付)

本報告は、座長からの問いかけを受け止め、既存の研究(大学職員論等)との関係を整理するとともに、本セッションの他の報告者の話題とつなげていくことを目的としている。

まず、大学の置かれた状況を1980年代以前と1990年代以後に大きく分け、その前後で「大学と大学職員の状況、そして『大学職員の学び(職能開発)の形』がどのように変化してきたのか」に触れる。次に、大学職員の学びのあり方(方法、涵養する能力の種別・水準、提供者など)を整理する。

最後に、学びに対して「個人が期待すること・個人が果たす役割」と「組織が期待すること・組織が果たす役割」を提示する。この二つの内容・相互関係については概要的な説明にとどめ、具体の事例における解釈は、満田報告・檜森報告で展開する。

2. 学問のムスメ

共に学び続ける
大学職員を目指して

満田 清恵
(愛知教育大学教育創造開発機構運営課)

近年、様々な職業・職種を対象に「社会人大学院」における学びが展開されてきており、大学職員も例外ではなくてきている。しかし、実際に自分の周りを見渡したとき、まだまだその数は多いとはいえない。そうした中で、大学院で学ぶことは個人にとってどのような意味を持つのであろうか。

本報告は、報告者自身のキャリアを一つの例に、個人がどのような葛藤を経て大学院への進学を希望し、そこでの学びに何を期待しているのかといった学びを求め背景について私見を述べるものである。そのうえで、フロアとの意見交換により、大学職員が学ぶことの意義を一部でも明らかにしたいと考えている。

3. 職員の成長が大学の成長へ

実践からみる
職員の学びの必要性

檜森 茂樹
(名城大学総務部)

言うまでもなく、大学を取り巻く環境はより一層厳しいものになっている。この競争市場の中で、各大学は維持・発展のため、戦略を打ち出し、その戦略実現に向け、教職員は自らの役割を認識し、日々の業務を推進している。この背景を踏まえ、教員の役割を教育・研究とするならば、職員の役割・使命は何か。この職員の力こそが、大学の競争優位性の一つとなり、職員の成長が大学の成長につながるかと考えている。本報告では、自身の『学びと実践での成果』を共有するとともに、あらためて抽象論ではない、当事者からの大学職員の使命・役割を考え、その中で職員の学びとは何か、参加者の皆さんと共に考える『価値ある機会』としたい。

オーラルセッション

融合的・総合的な理系教養教育の可能性

座長：安田 淳一郎（岐阜大学教養教育推進センター）

11:10 12:30
2F・B会場

オーラルセッション

趣旨

予測困難な時代における我が国の苦境を受けて、中教審答申等において教養教育の重要性が強調されてきている。皮相もしくは偏狭な知識を学生に教えるだけの教養授業からの転換が求められているのである。現代の教養教育に求められていることの例としては、専門外の知識や考え方を専門分野に融合させる態度の涵養や、問題解決力など総合的に物事を考えられるスキルの養成が挙げられる。

本セッションでは、各大学各分野における理系教養教育の事例報告に基づいて、教育目標の立て方や教育方法など授業の工夫を共有することを目的とする。さらに、各事例の共通項を見出して、融合的・総合的な理系教養教育の在り方について考えるための糸口を探る。理系教養教育の対象には多様な専門分野の学生も含まれるため、多様な専門分野の教員方からもご意見を頂きたい。

1. 理系のための教養教育？

教養教育改革の背景には、近年の情報氾濫や多様な価値観などに対する高度な判断力の養成があるのだろう。便利すぎる生活は“自然”を遠ざけてしまい、人間の立ち位置が不透明になっている感もある。このような社会や生活の変化に伴い大学教育も進化すべきだが、時代の変化に取り残されてきた感がある。愛知教育大学では、平成24年度秋以降「新教養科目」を開設し、今の時代に求められている基礎的能力獲得のための教育強化を目指す。その柱には「市民」「多文化」「科学」「ものづくり」の4つのリテラシーがあるが、このうち特に「科学リテラシー」が目指す教養教育について紹介する。

高橋 真聡
（愛知教育大学理科教育講座）

2. 獣医学教育や共通教育を事例とした教養教育の在り方に関する考察

総合的な知識と見方・考え方の育成が大学教育においてなすべき教育であると考えている。事例として獣医学教育および共通教育を紹介したい。獣医師は「動物のお医者さん」とみられがちだが、実際には環境保全、安全・安心な食の確保、感染症対策、伴侶動物医療、さらに生命科学の一分野としての役割も担っている。ともすれば専門的な知識偏重教育になりがちな獣医学教育において、私の授業では、専門にとどまらない知識の立体化や多面的な見方の育成を目指している。一方では、全学共通教育を担当し、多様な背景をもった学生たちに授業を行っている。これらの事例を紹介し、専門性に埋没しない、総合的な教養教育について意見交換をしたい。

福士 秀人
（岐阜大学応用生物科学部 教養教育推進センター長）

3. 3・11を経たの教養教育

2011年3月11日の東日本大震災、福島原発震災を経験して、日本および日本人のあり方、見方を大きく変えないと、もうやっていけない状況にわれわれは直面しています。しかし、これからのエネルギー政策をどうするのかに関してはまだ方針が定まっていないのが現状です。一方ドイツでは、3・11を受けて、政府は脱原発への政策を短時間で決定しています。この違いは、国民の原子力に関するリテラシーの状況に大きく依存しているのではないのでしょうか。初等、中等教育における原子力教育を大きく見直さなければならぬとともに、大学においては教養教育の中で原子力に関するELSI(倫理的、法的、社会的影響)をすべての学生が学んでいくことが求められています。

黒田 光太郎
（名城大学大学院大学・学校づくり研究科）

オーラルセッション

協同学習の場としての大学図書館

座長：岡部 幸祐（名古屋大学附属図書館情報サービス課）

11:10 12:30

中央図書館

2F・ラーニングcommons

趣旨

長い間、多くの大学生にとって大学図書館は書庫にすぎなかった。ようやく近年になってラーニングcommons等が整備されるに伴い、大学図書館は学習空間としての可能性を飛躍的に高めつつある。このことは大学図書館が「本を借りる」「読む」という個人完結型の学習空間から、「仲間と一緒に調べる」「思案をめぐらす」「相談する」「協同作業を行う」という総合的な知的生産活動の拠点へと変貌しつつあることを意味している。

学習の質を高めるためには、施設面の拡充だけでは不十分である。図書館が積極的に学生の学習意欲を喚起し、持続的に学習支援を行うソフト面の創意工夫も同時に必要となる。このセッションでは、図書館が学生を知的探検へと誘うための知恵について考えたい。名古屋学院大学と静岡大学の事例を通して、大学生が図書館の活動に参加することによって、彼ら自身が何を学んだのか、同時に図書館がどのように活性化したのかという観点から議論を深めたい。

1. 読書ブログ『菜輪』で つなぐ学びの空間： 学生サポーターと ともに3年

中田 晴美
（名古屋学院大学学術情報センター）

2007年、名古屋キャンパス開設と同時にラーニングcommonsを設置した。当初は入館者増に満足していたが、開設から3年経ち、学生視点の運営が必要なこと気づく。偶然、「本について話し合える場ってないよね。」と、学生に声をかけられ、それがきっかけで学生サポーターによる読書会が始まり、企画展示、イベント企画へと展開、さらにその活動を広く伝えるための読書ブログ『菜輪』を開設。この3年間の学生サポーターの活動を報告し、主体的な学びを支援する図書館で学生サポーターがどのような役割を果たせるのかを、参加者の方と一緒に考えたい。

2. 静岡大学附属図書館に おける学生協働の 取組み

次良丸 章
（静岡大学附属図書館図書館情報課）

本報告では静岡大学附属図書館で取り組んでいる学生協働の試みを報告する。学生ボランティアによる新入生向け図書館ツアー、大学イベントでのワークショップ開催、大学院生による半年にわたる図書館カフェの運営、図書館ギャラリー企画展での学習成果発表、学生の視点を活かした電子リソース活用キャンペーンなどである。当館はLearning Parkのコンセプトを掲げ、人が出会い、集い、学び空間としての図書館をめざしているが、学生たちとの様々な活動を通じて見えてきた、アクティブな学びの場としての図書館の可能性を考えたい。

ポスターセッション

12:30 14:00

17:00 18:30

1F・ロビー

P1 アカデミックライティング 科目の実践と意義に関する 考察

林 雅代 / 中野 清 / 金田 裕子
(南山大学人文学部心理人間学科)

本発表では、発表者らが携わった、アカデミックライティングを学ぶ科目「心理人間学基礎演習」(南山大学心理人間学科初年次必修科目<以下「基礎演習II」>)の実践過程を検討し、その意義と今後の課題について考察を行う。2005年に開講された基礎演習IIの授業デザインは、学生の授業アンケートと担当教員(発表者ら)の振り返りをもとに改変されてきた。その過程を検討し、論理的な文章作成スキルの養成と学生の創造的な探究活動の両立の可能性、グループワークによる学生の学び合いの意義、教員の役割の重要性について考察する。さらに、専門領域の異なる教員が協働でアカデミックライティング科目を考案・実践することの意義を考察する。

P2 「教養科目」に対する 新しいアプローチ ～社会連携型PBLによる 同志社大学『プロジェクト科目』 について～

平田 有喜宏 (同志社大学教務部教務課
(兼 PBL 推進支援センター事務局))

同志社大学では2006年度より教養教育改革の一環として『プロジェクト科目』を設置しています。本科目は「PBL(Project-Based Learning)」を基調として実施され、位置付けは「全学共通教養教育科目」のキャリア形成支援科目群として年間20科目程度を開講しています。特徴としては、社会全般から「テーマや講師を公募」し、各クラスは「少人数」で構成され、学期ごとに「授業運営に係る必要経費」を予算計上しています。これまで2006年度現代GP「公募制のプロジェクト科目による地域活性化」、2009年度教育GP「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育」と2度にわたるGP採択の中心となった本科目についてご紹介いたします。

P3 初年次導入教育が後年次の 学修に与える効果

稲垣 太一 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科
博士前期課程)

現在日本の大学で、「初年次教育」と称する取り組みが多くの大学で行われるようになってきている。とりわけ、高校までの学習から大学での学修への転換・大学教育への適応を促すための支援の重要性に関する認識は、大学関係者間で共有されるようになってきている。しかし、これらの教育・支援を受けた学生が2年次以降に学修様式をどのように変化させているかは、まだ十分に明らかにされていない。本発表では、以下の点を明らかにする。

初年次教育を受けた学生、とくに積極的に受講した学生が、2年次以降に、学修様式をどのように変化しているのか、学習様式の変容には、どのような内容・方法の授業が効果的なのか。

P4 教室の外で哲学をまなぶ 哲学カフェという 手法について

三浦 隆宏 (桐山学園大学人間関係学部)
久保田 祐歌 (愛知教育大学教育創造開発機構
大学教育研究センター)

「哲学」系の科目が少なくない大学から姿を消しつつあるいま、教室の外で哲学をまなぼうとする新たな実践が広がつつある。たとえば私たちは、名古屋哲学教育研究会の企画として2012年度に2回、名古屋大学内のカフェで教養教育としての哲学を問う哲学カフェを共同で開催したほか、発表者の一人は、勤務先の学生ラウンジで受講者らとともに哲学カフェの授業を行った。

本発表では主に今年度の活動を紹介しながら、(1)哲学カフェの国内での展開状況、(2)哲学カフェを実施する上での指針・進行の方法、(3)哲学教育の一環としての哲学カフェの意義について報告を行う。

P5 主体的な学びを育む
学生FD活動

満田 清恵 (愛知教育大学教育創造開発機構運営課)

近年、教員組織における教育改善活動であるFDに、学生を参画させる大学が増えている。教育の受容者である学生の意見を反映させることで、より実践的で効果あるFDにすることが、活動の意義の1つとして挙げられる。では、FDに参画する学生そのものにはどのような成長があるのだろうか。

本報告では、本学の「学生教職員参加型FD組織あいこね」の事例をもとに、学生FD活動に参加している学生の学びに変化があったのか、またそれを支援する職員の役割とはどのようなものか、現状における課題と効果を報告する。

P6 ラーニング・コモンズにおける
学習環境デザイン
- グループ学習エリアの
利用実態から考える -

岡部 幸祐 / 堀 友美 / 安福 奈美
鈴木 美奈子
(名古屋大学附属図書館情報サービス課)

名古屋大学中央図書館ラーニング・コモンズも4年目を迎え、会話しながら勉強ができる空間として学生の間に浸透してきた。グループラーニングエリアを中心に連日賑わいを見せているが、「グループで一緒に学習」している集団と「グループ学習」を行っている集団、授業との関連の有無、使用ツールの差異など、利用の実態は多様である。

本発表では、このエリアにおける利用者の観察・インタビュー調査の結果を検証し、その利用形態、目的および方法を明らかにすることで、主体的な学び合いを促進するために必要な学習環境をデザインする端緒としたい。

P7 臨床判断能力向上のための
共育プログラム
気づきを与える指導薬剤師の
養成を目指して

長谷川 洋一 (名城大学薬学部薬学教育開発センター
実務実習部門)

大津 史子 (名城大学薬学部医薬情報学研究室)

黒野 俊介 / 伊東 亜紀雄
(名城大学薬学部薬学教育開発センター実務実習部門)

後藤 伸之 (名城大学薬学部医薬情報学研究室)

永松 正 (名城大学薬学部臨床疾患制御学研究室)

早川 伸樹 (名城大学薬学部臨床薬物治療学)

脇田 康志 (名城大学薬学部臨床薬物治療学)

半谷 眞七子 (名城大学薬学部病院薬学研究室)

藤崎 和彦 (岐阜大学医学教育開発研究センター)

野田 雄二 (愛知県薬剤師会 理事)

今高 多佳子 (愛知県病院薬剤師会
薬学生病院実習検討委員)

瀬井 雅行 (名城大学薬学部薬理学研究室)

小嶋 仲夫 (名城大学薬学部衛生学研究室)

チーム医療に貢献できる薬剤師の養成を目指し、平成23年度文部科学省「専門的看護師・薬剤師等医療人材養成事業」(3カ年)として「臨床判断能力向上のための共育プログラム - 気づきを与える指導薬剤師の養成を目指して -」(以下、共育プログラム)が採択された。この共育プログラムは、薬学部学生と薬剤師が共に育つ「共育」の実現を図ることを目標にしており、本学6年制学部教育で行っている適正な薬物療法実施のための臨床判断能力育成カリキュラムを薬剤師向けに提供し、薬剤師としての臨床判断能力と実務実習における指導者としてのコーチング能力の向上を目指すものである。発表ではプログラムの詳細および実施状況について報告する。

P8 東海がんプロの取り組み
...組織横断的がん診療を担う
専門医療人の養成...

立松 三千子 / 金田 典雄
(名城大学大学院薬学研究科)

がん医療のプロフェッショナルや研究者の人材育成を目的として、平成24年度から文科省事業「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」が始まった。全国で15の取り組みが行われており、そのうち東海地区では名古屋大学、浜松医科大学、岐阜大学、名城大学、名古屋市立大学、愛知医科大学、藤田保健衛生大学の7大学が共同で「東海がんプロ」として取り組んでいる。がん医療のプロフェッショナルや研究者を目指す医師、看護師、薬剤師などの教育を目的として、各大学のそれぞれの特色を生かしたコースが設けられている。今回、その概要について紹介する。

P9 国境を越えた法制度の移植計画を立案し、実施を統括できる能力をもったリーダーの育成

名古屋大学大学院法学研究科リーディング大学院は、日本人学生と留学生による比較法・比較政治の共同研究を通してアジアを強く意識した国際的な人材ネットワークを育てることを目的としている。
 その中で、日本の独自性を理解した上で、アジア諸国に対して社会運営の基礎となる法制度を構想・設計し、その国の文化に配慮しながら法制度を移植する事業に従事する国際チームを組織・統括できるリーダーを養成する。

松浦 好治（名古屋大学法学研究科）

P10 実践的リスク予防学の修得バイオ技術者育成

事業の目的は、建学の精神「不言実行、あてになる人間」を信条として、民間企業等と連携しながら、企業において問題発生を事前に防止すること、あるいは軽減させることを目指した「予防；事前防止（Prevention）の観点から、21世紀型バイオ系企業にとっての「リスク管理とリスク低減」を総合的にかつ実践的に修得した、実践的バイオ技術者の育成・教育を行うものです。
 この実践的バイオ技術者は、遺伝子等のバイオと化学の両分野に精通しており、企業現場等において、即戦力として大きく期待されています。

和田 俊夫（中部大学応用生物学部食品栄養科学科）

P11 食の安全・食育にかかわる教育のための大学連携フードコンソーシアム

中部大学と名古屋大学が共同申請し、採択されたプロジェクトです。
 本プロジェクトは、我が国における食に関する教育の改善を図るために、学部教育・大学院教育のための新たなカリキュラムを構築して、その内容を国内外に提示するとともに、当該カリキュラムに必要な教材を整備することにより、我が国における「食」の教育に新しい概念を提示するものです。
 また、地域の自治体、教育機関、企業、他大学等と協力しながら「食」や「食の安全」の概念などを向上させるとともに、市民の「食」に関するさまざまな意識についても飛躍的な向上を図ることも目的の一つとしています。

森山 龍一（中部大学応用生物学部食品栄養科学科）

P12 『持続学のすすめ』による実践型人材の育成

中部大学は7学部29学科を擁する文理融合型の総合大学です。さまざまな課題に直面している現代社会を支える「地球規模で考え、足元から行動する『あてになる人間』」を育成するため、文系・理系の学生が融合した幅広い学びを実現します。そこで本学では新たに、地球規模で考える「持続学の基礎教育」と足元から行動する「持続学の実践教育」を新設し、教員においても文系・理系の壁を超えた指導体制と評価体制を整備しています。

上野 薫（中部大学応用生物学部環境生物科学科）
 伊藤 守弘（中部大学生命健康科学部生命医科学科）

P13 中国の大学の学生支援における学生の主体性育成への注目

学生の主体性を育成することは、大学生の学習成果の向上を促すだけでなく、社会人として、人生におけるさまざまな問題でも主体的に解決して働き続ける人材の育成につながる。そのため、近年の中国の大学教育研究では、大学生の主体性を育成する必要性がしばしば指摘されている。本発表は、中国の大学教育研究における学生の主体性育成に関する論説と学生支援の政策調整を考察しながら、大学の学生支援において学生の主体性育成のアプローチと課題を明らかにすることを目的とする。

吳 嬌（名古屋大学大学院教育発達科学研究科 博士後期課程）

P14 中国の大学における留学生
受入れ部門の役割変化に関
する研究

ショウ ガキ
姜 雅琪 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科
博士前期課程)

2010年7月、中国政府は「中国留学計画」を正式に発表し、2020年ま
でに外国人留学生をのべ50万受け入れ、アジア最大の留学生受け入れ国とす
るという発展計画を発表した。

これを機に、中国の大学は留学生受け入れ部門の発展に力を入れ始め、国際
学院の拡大、国際交流処の事業合併など留学生受け入れ部門の役割が変化し
つつある。しかし、中国の大学における留学生受け入れ部門の役割がどのよ
うに変化しているかという点に関する研究はまだ少ない。本研究は、中国の大
学における留学生受け入れ部門の役割の変遷を明らかにしたい。その上で、日
中比較を通じて、中国の留学生受け入れ部門に存在している問題について解決
案を提示したいと考えている。

P15 愛知県立大学のグローバル
人材育成推進事業

堀 一郎 (愛知県立大学外国語学部)
木下 圭一郎 (愛知県立大学学務課長)
川島 香織 (愛知県立大学外国語学部係長)
松崎 久美 (愛知県立大学学務部学務課)

愛知県立大学は、文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」に採択さ
れ、外国語学部が中心となり「学士課程における発展的留学制度を通したグ
ローバル・キャリア育成プロジェクト」がスタートします。本構想では、外国
語学部学生の60%以上が単位修得を伴う海外留学を経験するという目標
を設定した上で、留学前・留学中・留学後のプロセスを、グローバル人材を
育てる一貫した発展的教育過程としてとらえ、各段階に必要な能力を育てる
体系的なプログラムを実施します。

このポスター発表において、本プログラムの概要を紹介するとともに、今
必要とされているグローバル人材の育成と取組について考えます。

P16 大学国際化に対応する
アカデミックキャリア
形成支援の取組

東 望歩 (名古屋大学高等教育研究センター)
岩城 奈巳 (名古屋大学留学生センター)
安井 永子 (名古屋大学文学研究科)
中井 俊樹 (名古屋大学高等教育研究センター)

2011年9月から2012年2月にかけて実施したPFF研修「英語で教える」
について、実践報告とその意義についての検討を行う。本研修では、日本文
学・日本語学・日本文化学を専攻する大学院生・ポストドクターを対象とし
た研修を設計、「授業設計・教授法」「英語・異文化コミュニケーション」に
関するレクチャーの受講、レクチャー内容に基づいて自らの専門分野に関
する講義を設計し、作成したプレゼンテーションと資料について実践的指導
を受ける「スピーチとライティング」、研修成果としての公開セミナー「GSI
Seminar for International Students」開講の三段階に分けて実施した。
研修内容について紹介するとともに、研修参加者に対するインタビューおよ
びアンケート、公開セミナー受講者によるアンケートを通して本研修の意義
と今後の課題について検討する。

P17 グリーン自然科学国際教育
研究プログラムの取組

藤縄 祐 (名古屋大学グリーン自然科学国際教育
研究プログラム)

グリーン自然科学分野における本学の実績に立脚し、分子科学研究所、基
礎生物学研究所、理化学研究所、産業技術総合研究所、豊田中央研究所、豊
田理化学研究所という我が国を代表する産官学の研究所と連携しながら、
「全体を見渡す科学力と社会性」、「基礎研究から応用成果を引き出す展
開力」、「地球規模で活動する国際性」を涵養し、この分野の次世代を担う
「シーズを産業に育てる企業研究者」、「新発想を学術領域に育てるアカデ
ミア研究者」、「国際社会で活躍する環境科学コーディネーター・メンター」
を育成している。当日は、具体的な取組を紹介する。

P18 大学教員の職能開発において
『誰が』『誰を』『どのように』
推進するか
- 大学教員のキャリア・
ステージの視点から -

岡田 準郎 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科
大学院研究生)

大学教員を対象とした職能開発は、各大学によって様々な形式で取り組ま
れている。それに対応して、職能開発の議論は、大学間、全学、学部・学科、
個別というような『推進主体』の視点から議論されている。しかし、多様な
キャリアを経て就いた大学教員のキャリア・ステージの視点から、大学教員
の職能開発は議論されてきたのであろうか。

本報告では、大学教員のキャリア・ステージの視点から、『誰が』『誰を』
『どのように』推進していくべきかを提示したい。

P19 大学職員研修の展開期における体制・内容に関する基礎的研究

坪井 啓太 (名古屋経済大学キャリアセンター)
伊藤 博美 (名古屋経済大学 人間生活科学部教育保育学科)

21世紀に入る前後から、大学職員の能力形成・向上が注目され、学内外での研修の機会も増え、大学アドミニストレーターなどプロフェッショナルの養成を目的とした研修も行われている。例えば早稲田や立命館など、充実した各大学の研修制度の事例も複数紹介されている。また、大学職員を対象とした国大協や私大連盟等、各種団体の研修事業の動向については、佐野(2007)が明らかにしている。

そこで本発表では、佐野の継続的研究として、2012年12月までの大学職員の研修に関する報告や研究(例えば寺尾・檜森(2011))を対象とし、背景や経緯も視野に入れながら、研修体制や研修内容の変化を観点として分析した結果を報告する。

P20 私立大学事務局長の職務及び役割

原 裕美 (学校法人名城大学経営本部渉外部)

近年、大学職員論や理事長・学長のリーダーシップについては多くの研究がされている。しかし、事務組織のトップである事務局長に着目した研究は少ない。本研究では、事務局長には「補佐役」の役割が重要であるとの仮説を立てた。私立大学事務局長の職務と役割を明らかにするため、ミンツバーグ(1993)のマネジャー10の役割を当てはめ、調査を行った結果を報告する。

事務組織のリーダーとはいかなるやりがいと大変さを抱えているのか。インタビュー調査の結果を取り纏め報告する。

P21 大学職員の教育支援者としての役割に関する研究

竹中 喜一 (関西大学教育開発支援センター)

大学の教育目的を達成するために必要な職員は「教育支援者」と呼ばれている。従来、職員の教育的役割については経営的役割ほど注目されず、「教育支援者」の職能開発についても十分な検討がなされていなかった。

しかし、職員が教育の質的向上に直接関与する必要性は高まっている。そこで本発表では「教育支援者」である職員の役割や職能開発の現状及び課題を明らかにし、教育の質的向上に資する「教育支援モデル」を提示することを目的とする。「教育支援モデル」提示に至るまでに調査を行った事例も併せて報告する。

P22 映画を教材とした授業モデルの構築
「ジェネリックスキル」の育成を目的として

田中 秀佳 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程)
寺田 佳孝 (愛知教育大学)
小林 忠資 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程)
中井 俊樹 (名古屋大学高等教育研究センター)

ユニバーサル段階にあるわが国の高等教育において、授業の質をいかに向上するかが問われている。

学生の意欲を喚起し、学習者のニーズに対応した授業が求められる一方、学習者に対しても「ジェネリックスキルの獲得」などが求められている。この状況に対応した授業方法が求められる中で、「映画」を用いた授業実践が注目されている。「教材としての映画」については、これまでアメリカを中心に諸外国で研究が蓄積されつつある。本発表では、先行研究において分析されている「教材としての映画」の事例、その意義と効果について整理し、実際の授業において映画を用いる上で必要なパースペクティブを得ることを目的とする。

P23 アクティブラーニングに向けた授業開発の検討
授業教材としての映画の可能性

寺田 佳孝 (愛知教育大学)
小林 忠資 / 田中 秀佳 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程)
中井 俊樹 (名古屋大学高等教育研究センター)

本発表では、アクティブラーニングのための教材としての「映画」の利用手法を検討する。具体的には、授業目標を学習者がいかに主体的に、かつ効果的に獲得できるかという点に着目して、教材としての使用場面、発問・発話の方法などの提示手法、ディスカッションやレポートなどの作業課題の方法などを、先行研究に基づき検討する。また、この「授業教材としての映画」の検討のために、今年度より立ち上げた「教育学における映画を教材とした授業開発研究会」について、その活動内容を紹介するとともに、報告者らが実際に行なっている映画を用いた授業実践についても触れたい。

P24 教育デザイン研究室の
取り組みとICT教材の
活用状況について

竹生 久美子 / 吉田 雅彦
(日本福祉大学教育デザイン研究室)
佐藤 慎一 (日本福祉大学国際福祉開発学部)

日本福祉大学教育デザイン研究室では、魅力的で効果の高い教育の実現を目指し、オンデマンド教材の開発・提供、情報通信技術(ICT)の教育活用を推進している。具体的には、オンライン教育用の完結型オンデマンド教材の制作に加えて、ゼミ発表やイベント等の撮影と教材化、アニメーション教材の制作、各種媒体の教材のデジタル化等、対面授業で活用できる教材の開発支援を行っている。また、ソーシャルメディアや学習支援システムを活用した授業支援にも取り組んでいる。本発表では、これら教育デザイン研究室での取り組みを紹介するとともに、本学におけるICT活用の状況について報告する。

P25 物理学講義における系統的演示実験
のための教材開発と導入方法

三浦 裕一 (名古屋大学大学院理学研究科)
安田 淳一郎 (岐阜大学教養教育推進センター)
中村 泰之 (名古屋大学大学院情報科学研究科)
小西 哲郎 (名古屋大学大学院理学研究科)
千代 勝実 (山形大学基盤教育院)
古澤 彰浩 (名古屋大学教養教育院)
齋藤 芳子 (名古屋大学高等教育研究センター)

非物理系初年次を対象にした物理の講義において、演示実験のための教材の開発と授業への導入方法、及び教育効果の評価方法の開発を、科研費基盤(C)の助成を受け、大学と学部を横断した有志で進めている。
学生が物理法則を発見的に理解できるよう、授業中に段階的に実験を進めながら推論を進める方法を開発している。また、直観的に理解させるため、なるべく電子的なセンサーを使用せず、学生自身の肉眼で観察できる実験を工夫している。
今回は、「作用-反作用の法則」、「実体振り子をを用いた慣性モーメントの理解」をテーマに、開発した教材と、その効果的な導入方法を報告する。

P26 批判的思考に基づく自発性を
大学教育で育成するための
課題

山本 晃輔 (奈良教育大学学校教育講座)
鍋田 智広 (北陸先端科学技術大学院大学
大学院教育イニシアティブセンター)

社会における問題解決は問題を自ら定式化し、一意に決まらない答えを見つけて出す、複雑かつ能動的なプロセスである。それゆえ与えられた問題に受動的に取り組むことに慣れた大学生にとって、自発性の獲得は社会人として適応するための大きな壁となっている。こうした問題への対処として、近年多くの大学で、教育心理学的観点から、批判的思考と呼ばれる、自己省察的な自発性の基盤となる思考形式の育成が試みられている。ここでは、発表者の批判的思考に関する研究成果の概要を紹介し、目に見えない思考形式を対象とした教育実践の難しさ、および思考を教育する上での指針について議論・検討する。

P27 教員養成系学部・大学の
リベラル・アーツ教育の
研究枠組み
学際学部の視点から

内山 弘美 (非常勤講師)

報告者は、教員養成系学部の新課程への改組と近年の揺り戻し、および大綱化以降の教養教育・学際学部の動向を研究してきた。この視点に基づき、教員養成系教員養成系学部・大学のリベラル・アーツ教育の研究枠組みについて報告する。

P28 教員養成課程における
「いじめ対策」に関する
授業開発(中規模クラス編)

川村 遼 / 増本 直弘 / 平野 能子 / 戸崎 紗絵
(静岡大学大学院生)
藤井 基貴 (静岡大学教育学部)

昨今の日本の学校では、「いじめ」対策が大きな課題となっている。一方で、大学における教員養成課程において「いじめ」対策に関する授業は十分に開講されていないという実情がある。本発表では、いじめに関する最新の研究成果をもとにして、教育学部学生に向けた新しい形の授業の開発の成果と課題を報告する。具体的には、スタンフォード大学デボノ博士の提案した「六色の帽子」による教育方法を応用し、受講者がさまざまな観点および立場から、「いじめ」への対策を提起、検討する授業をデザインおよび実施し、授業の具体的手順、特色、受講者からのフィードバックについて紹介および分析する。

P29 教員養成課程における
「いじめ理解」に関する
授業開発(大規模クラス編)

深澤 吉紀 / 嶋田 龍彦 / 三田 千智
鈴木 貴大
(静岡大学大学院生)
藤井 基貴(静岡大学教育学部)

発表内容の概要:近年、学校におけるいじめの深刻化が問題となっている。中央教育審議会においても教員養成課程において、どのような教育プログラムの導入および開発が必要なのかについて検討がはじまっている。実際に教職課程のシラバス分析から、教職を履修する学生たちがいじめについて必ず学習する機会が保証されているわけではないことが明らかとなった。加えて、いじめについての基本的な知識を習得する大学の授業実践例も少なく、伝えるべき事柄も明確ではないという現状が見えてきた。本研究では近年の教育学者および心理学者による最新の研究成果および知見をもとにして、100人規模のクラスにおける授業の開発と実践を行なった。その結果を報告する。

P30 現任者研修を意識した
「教職実践演習」の開発
(その2)
保育者の資質向上のための
共同学習の意義

青山 佳代 / 森山 雅子
(愛知江南短期大学)

教職実践演習は、現在、4年制大学よりも先行して短期大学において実施されている教職課程における必修科目である。愛知江南短期大学では、(1)具体的な実践の論理的背景・多角的視点の理解、(2)コミュニケーション・スキル、および(3)プレゼンテーション・スキルの向上を目的とした「教育実践演習」の方法を開発した。これまでの2か年の授業実践のなかで、共同学習を通じて、大学での学びを統合し自分の能力や保育実践を省察することを目指した。本発表では、共同学習を通して、どのように保育者としての資質が向上していくのかを考察する。

P31 実践事例を通して主体的に
学び考える保育士・幼稚園
教諭養成

新川 朋子(四日市大学)

中央教育審議会第82回総会 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)の中で、「4.求められる学士課程教育の質的転換」において「ディスカッションやディベートといった双方向の授業による主体的な学修を促す学士課程教育の質的転換が必要である」と指摘された。主体的に学び、考え続ける力を持った保育士、幼稚園教諭を養成するため、保育所における保護者支援を学ぶ際、実践事例を提示して共通理解を深めた。その後、実践事例についてディスカッションして学び合った。

P32 教員養成系大学における
ジェネリック・スキル教育の
課題
教員アンケート・ヒアリング
調査結果をもとに

久保田 祐歌(愛知教育大学教育創造開発機構
大学教育研究センター)

愛知教育大学教育創造開発機構においては、平成23年度より文科省特別経費によるプロジェクト「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」を推進している。「リベラル・アーツ型教育」の構築を目指す本取り組みは、学生のジェネリック・スキル(汎用的技能)の涵養を一つの柱としている。今年度は、平成25年度からの新教養教育カリキュラムの実施に向けて、ジェネリック・スキル教育に関する教員アンケート及びヒアリング調査を実施した。本報告ではこれらの調査結果に基づき、(1)教育目標としてのジェネリック・スキル、(2)ジェネリック・スキルの教育方法、(3)今後解消すべき課題について報告する。

ミニワークショップ

物理現象と概念を結ぶ 講義実験という挑戦(2)

企画：物理学講義実験研究会

12:30 14:00
1F・会議室

企画概要

大学の教養の物理学講義において、物理的概念や物理法則を学生に理解させるためには演示実験や、簡便な実験を学生に体験させる方法が効果的である。しかし、大学の授業レベルに合った実験はそれほど多くない。授業の課題との関係が明確で、かつ印象に残る実験が必要である。また、授業への効果的な導入方法や、その実験結果を元に学生に仮説を立てさせ、それを立証させる工夫も重要である。昨年に引き続き、招待した方々に実験を授業に生かす工夫を、実演を含めて紹介していただき、教育効果を上げる方法を議論する機会としたい。

講演と実演

司会：古澤 彰浩（名古屋大学教養教育院）

(1) 三浦 裕一（名古屋大学大学院理学研究科）

「単振り子と剛体振り子の関係を理解させる実験など」

(2) 牧原 義一（三重大学教育学部）

「パソコン計測を利用した講義実験」

(3) 岡島 茂樹（中部大学工学部）

「2次元振動モードパターン（クラド二図形）観測器製作」

(4) 原科 浩（大同大学教養部）

「どうやって学生に実験を見せるのか～Webカメラ活用の試み」

(5) 中村 光廣・林 熙崇（名古屋大学大学院理学研究科）

「机上で行うコンパクトな光速測定実験など」

オーラルセッション

教務の実践的知識の共有

座長：上西 浩司（奈良教育大学入試課）

14:00 15:20
2F・A 会場

趣旨

大学職員の業務の高度化、専門性の向上は大学教育改革のための重要な要件である。このため、大学内外のさまざまなレベルで大学職員の能力開発に関する議論、実践、研究が活発化している。しかし、教務系職員の業務に必要な体系的な知識を見据えた上での具体的実践的な展開は、いまだ進んでいないのではないだろうか。

本セッションは、報告者が実践的な見地から独自の経験に基づいて教務に関する取組を語ることにより、会場の参加者が報告者の経験を共有し、教務の実践的知識を深めることをねらいとした。教務に関する体系的な知識の深化に寄与できればという願いからである。また、教務の実践的知識の体系化を目的とした、教務に關与する教職員による研究や実践、それらの蓄積及びネットワーク構築並びに次世代の育成等を支援するための「大学教務実践学会」（仮称）の設立についての企図の場ともしたい。

1. 教務事項の業務ノウハウ共有と継承のニーズ

中小規模大学の
実務担当の立場から

辰巳 早苗
（大阪樟蔭女子大学修学支援課）

基本的なルールに則った教務事務の運営ノウハウは比較的継承しやすいが、イレギュラーな事態が起こった際にどう対応するかは、教務事務の裁量性の高さから、それぞれの担当者に委ねられる場合が多い。各担当者は齟齬がなく妥当性のある対応を、根拠とともに検討することになるが、頻繁に発生する訳ではないことから、適切な対応を選択するためのノウハウを維持・継承していくことは、そうたやすいことではない。

そこで、本セッションでは、中小規模大学における実務担当の立場から具体的な事例を挙げ、教務事務の業務ノウハウの共有・継承をどう行っていくか、現状と問題点を確認し、今後の課題を検討していきたい。

2. 教員免許事務における体系的知識の獲得と実践的知識への活用

小野 勝士
（龍谷大学文学部教務課）

教員免許事務の特徴は、教務事務の中で最も法令に関する知識を必要とする教務事務であるということである。にもかかわらず、関係法令に関する公的な概説書がないのが現状である。そこで、複雑化する教員免許法及び同法施行規則に対応するため、教職課程を有する私立の大学・短期大学で組織されている全国教職課程研究連絡協議会の専門委員会である教員免許事務検討委員会において、概説書「教職課程担当者の手引き」の作成を行っている。

本セッションでは、法令解釈編等4冊の執筆に携わった経験をもとに、体系的知識の実務場面での活用に関する取組事例を紹介し、セッションにおけるフロアとの意見交換を行いたい。

3. 教務系職員の職能開発促進のための新たな提案

『大学の教務Q&A』
発刊の反響から

村瀬 隆彦
（佐賀大学学務部）

名古屋SD研究会は、大学における教務系職員のSDに資する書物として、平成24年3月に『大学の教務Q&A』を玉川大学出版部から発刊した。その反響は、当初の予想をはるかに上回るものであった。好評価のもの、批判的なもの、その他種々の意見や批評をいただき、総じて大学職員のニーズに応え、時宜に合ったものであったと考えられる。このことから、SDそのものに対する関心の高さやSD教材への大学関係者の期待の大きさを窺い知ることができる。では、次の段階ではどのようなことを行うべきだろうか。

本セッションでは、『大学の教務Q&A』作成の経験から見えてきた教務系職員の職能開発促進に関する展開について報告したい。

オーラルセッション

大学経営と評価

座長：室 敬之（星城大学事務局長）

14:00 15:20
2F・B会場

趣旨

すべての日本の大学は、7年以内のサイクルで認証評価を受けることが義務づけられている。しかし、大学教育の質に対する課題はいまなお山積しており、認証評価の仕組みが十分に効果をあげているとはいいがたい。そこで文部科学省では各大学に一層の情報開示を求めるために、平成26年度から「大学ポートレート」(仮称)の運用を開始し、これを国内大学の共通データベースとして活用する方針を示している。つまり、経営上の透明性を高めつつ、同時に教育の質を担保するという難題が各大学にいつそう問われている。このセッションでは、短期大学経営、大学事務システム、大学基準協会による適格認定制度に焦点を当て、日本の大学が抱える経営と評価の問題について議論したい。

1. 地域専門職戦略に向かう短期大学経営

学士課程の前期課程として位置付けられた短期大学制度が「四大中心主義」の制度構造の中で安住できた時代は終わった。学校基本調査によると、そのことを裏付けるものとして、短期大学の学校数は1996年の598校をピークにそれ以降は減少を続け、2012年現在では372校にまで減少した。学生数からみると、約33万人の激減である。

本発表では、こうした動向にも触れながら、短期大学のアイデンティティを確立し、地域のなかで持続的に発展していく戦略経営の観点から、「地域専門職人材の育成と質保証」をコアにした短期大学づくりに着目し、モデルとなる事例を見つけ、それが短期大学経営の普遍的なモデルとなりうるかを考察したい。

花原 大輔

(名城大学大学院大学・学校づくり研究科修士課程)

2. 新しい大学事務システム KUALI がもたらす未来

現在、日本の多くの大学では事務効率化を目指し事務システムのIT化を進めています。このIT化のため大学は多大な支出を余儀なくされています。近年アメリカではこの傾向に歯止めをかけるべく大学事務システムにて使用するソフトウェアの無償化が進んでいます。無償のソフトウェアはKUALIと呼ばれ、現在全米約80校にてKUALIの導入稼働が始まり大きな費用対効果をあげています。このKUALIのご紹介とともに年一度行われる大学職員約1,000名が集うKUALIカンファレンス参加報告を行います。そしてKUALIが大学にもたらす未来について考えたいと思います。

角谷 充彦

(名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程)

3. 戦後日本における大学の適格判定制度

大学基準協会と
他機関の関係を中心に

本報告では、日本の大学にふさわしい大学評価の展開を検討するために、戦後日本における大学の適格判定制度(アクレディテーション)形成の背景を、その推進主体となった大学基準協会と関係機関との関係や、それらの議論状況に注目して分析する。そして、当時の大学関係者や政府を含む関係機関に、どのような影響があったかを考察し、第三者組織による大学評価の位置づけや効用、課題を明らかにすることを試みる。

とくに、大学基準協会および関係機関資料の分析を通じて、大学基準協会やその適格判定制度が創設時においてどのように受けとめられていたかを明確にし、第三者組織による大学評価を有効に機能させる具体的条件を考察する。

藤原 将人

(学校法人立命館総務部)

オーラルセッション

教養・基礎教育の設計

座長：栗原 裕（愛知大学経済学部）

14:00 15:20
2F・C会場

趣旨

高等教育の大衆化に伴い、大学における教養教育や基礎教育のあり方が問われている。高等学校での履修内容を必ずしも十分に理解していない大学新入生に対して、大学での学習に不可欠な基礎知識をどのように理解させればよいだろうか。また、グローバル社会あるいは高度知識社会における「良き市民」となるために必要な教養とはどのようなものだろうか。それはどのようにすれば身につけることができるだろうか。このセッションでは、高大接続の観点から、および学士課程教育の質保証という観点から、教養教育や基礎教育が抱える課題について活発な議論を行いたい。

1. 大学カリキュラム体系化の現状と課題

日本語リテラシー教育を
事例として

伊藤 奈賀子
（鹿児島大学教育センター高等教育研究開発部）

大学教育に期待されるものが多様化する中、授業科目の新設によってそれに応えようとする動きがある。例えば日本語リテラシーが重要であるという観点から日本語リテラシー教育を実践する大学は増えているが、その多くは「日本語リテラシー」を冠した新規科目の設置として行われている。

しかし、特定科目によって能力を育成しようとするこの方法は、カリキュラムの体系化に対する重要性が叫ばれる昨今の趨勢と相容れない。また、多くの実践が初年次教育として大学での学びを円滑にすることのみに焦点が当てられていることも問題である。

本報告では、体系的なカリキュラムの構築について、日本語リテラシー教育を事例としながら検証を試みたい。

2. LMS とタブレット PC を組み合わせた教養系科目の教授法の開発

内田 啓太郎
（関西学院大学高等教育推進センター）
池田 瑞穂
（関西学院大学共通教育センター）
谷村 要
（大手前大学メディア・芸術学部）

関西学院大学にて開講している教養系科目（スタディスキル科目および情報科学科目）では、現状としてLMS（Learning Management System）が十分に活用されている。発表者のグループは現在LMSとiPadを組み合わせた新しい教授法を開発している。今回の発表を、授業中のグループワークにおいてiPadを活用した実践報告と位置づけ、あわせてiPadとLMSの連携も含めた具体的な教授法について発表したい。

3. クリティカルシンキングをどのように測定するか

標準テストの
分類に基づく検討

久保田 祐歌
（愛知教育大学教育創造開発機構大学教育研究センター）

汎用的技能としてのクリティカルシンキング（批判的思考）は、学士課程教育の学習成果の一つであり、育成と共に評価方法が重要な課題となっている。海外ではその測定方法として、授業の内容や文脈を離れて汎用的技能を測定する各種標準テストが高等教育の質保証という観点から実施されている。近年、国内大学においても汎用的技能に関する教育目標の設定や外部標準テストの開発に伴い、思考力を測定する標準テストが導入される例が見られる。本発表では、大学生のクリティカルシンキングを測定する国内外の標準テストの分類・検討に基づき、身につけるべきクリティカルシンキングの定義及びこれを測定する上での課題を提示する。

オーラルセッション

課題解決型学習の可能性

座長：大津 史子（名城大学薬学部）

15:30 16:50
2F・A 会場

趣旨

課題の解決を目指して学習するという形態の授業が大学において増加している。課題に取り組みさせることで、学習の動機づけを高め、知識の統合を図り、問題解決などのさまざまな能力を涵養することが期待できる。本セッションでは、課題解決型学習を通して学生に質の高い学習をどのように与えることができるのかについて議論することを目的とする。課題解決型学習とはどのようなものか、すぐれた課題解決型学習はどのような方法や学習環境で達成することができるのか、大学はどのように支援することができるのかなどについて議論し、課題解決型学習の可能性と課題を検討する。

1. 三重大学における新しいPBL教育空間に関する研究

加藤 彰一 / 毛利 志保
（三重大学大学院工学研究科）
長澤 多代
（三重大学附属図書館）

主体的な学びの実践として、問題発見解決型学習（PBL: Problem Based Learning）を導入した、三重大学工学部建築学科に関連した取組について発表する。対象授業は、学部1年前期共通科目「『4つの力』スタートアップセミナー」（担当：長澤）、学部1年後期「建築計画」と学部3年後期「建築経営工学」（担当：加藤）である。発表では、グループワークの比較分析を中心に、新しく建設された本年度から利用が開始された、PBL演習室の利用状況分析から、その計画の特徴を論じ、同演習室下階のラーニング commons の計画概要や利用状況について報告する。また、米国教育心理学者 David Kolb が提唱する経験学習理論に基づく、学生の学習スタイル分析についても考察を行う。

2. 地域企業との協働プロジェクトを通じた総合的学士力養成プログラムの試み

山口 満 / 見目 喜重
村松 東 / 今井 正文
三好 哲也
（豊橋創造大学経営学部）

平成20年の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」を踏まえて、専門的な知識教育だけでなくコミュニケーション力や態度・志向性の養成を含めた総合的な教育の実現のための様々な取り組みが報告されている。豊橋創造大学経営学部では、就業力や社会人基礎力養成を踏まえた総合的学士力養成を目標に掲げて、地域企業との協働プロジェクトを中心とした教育プログラムを展開している。本報告では、地域企業とのプロジェクト活動に関する実践報告とその教育プログラムの運営を通じた教育目標の共有化活動について報告する。企業との協働活動で企業の求める能力や資質と大学教育の目標について考察する。

3. 政策学部におけるPBL教育の実践報告

川北 泰伸
（同志社大学政策学部）

2011年と2012年に同志社大学政策学部では滋賀県長浜市と共同研究を行い、長浜市が発展するための政策提案を行ってきた。連携の内容は、長浜市職員を学部へ派遣してもらい、学部生と一緒に政策立案を行った。また指導教官からは学生への指導に加え、職員に対しても実務を念頭においた政策形成の指導を行った。そして成果発表の場として、市長や市の幹部に対して政策提案を行い、フィードバックを得た。本報告では、大学側の事務局として関わった実践報告を行う。特に利益の異なる大学と行政が連携するに当たり配慮が必要だった内容や打合せの過程を中心に報告したい。

オーラルセッション

学生・学習支援の現在

座長：池田 輝政（名城大学人間学部）

15:30 16:50
2F・B会場

趣旨

大学進学率が5割を超え、学生の学力や勉強目的の多様化が進む中で、大学教育は従来以上に困難な状況を迎えている。この状況下でも、学生が主体的に学ぶ姿勢を獲得し、一定の学習成果をあげるようにすることは、大学に課せられた責務である。それを実現するためには、個々の教員や職員が日々の授業・職務の中で、試行錯誤を繰り返しつつ、地道に働きかけを行うことが必要になろう。本セッションでは、各大学において、教員および職員の立場で学生の学修支援に取り組んでいる方から、取り組みの内容を報告していただく。それに基づいて、各大学で学生の主体的学びを実現するために何が必要なのか、日々の実践をどのような方向で発展・深化させるべきか等について参加者とともに検討する。

1. 短期間でゼロから学生参画型FDを展開するコツ

橋本 勝
（富山大学大学教育支援センター）

2001年に岡山大学を基点に本格展開が始まった学生参画型FDは、近年、木野茂氏などを中心とした「学生FDサミット」の開催等で弾みがつき、今や50大学以上に広がる一大ムーブメントとなっている。展開内容は大学により多様であるが、「学びの主権者」たる学生が各自の学びではなく学生集団全体の学びに目を向け、教職員と一緒に主体的学びの実現を目指すこの活動は、教職員だけでアリバイ的に進めるFDよりはるかに好ましい。

本報告は、岡山大学を10年間リードした報告者が、そのような素地が全くなかった北陸で、1年半でそれを軌道に乗せたコツを披露することによって、この活動に関心を持ちながら第一歩を踏み出せない大学にヒントを提供することを目的とするものである。

2. 履修相談制度とその情報の使い方

増田 淳矢
（中京大学経済学部）

中京大学経済学部では学期の始めに学生に対して履修相談を行っている。履修相談では学期の始めにそれまでの勉学の進捗状況や希望進路等を踏まえ、履修科目や進路等の相談を行っている。対象にしている学生は春学期では1～3年の全ての学生と4年生の成績不良者、秋学期では成績不良者は強制参加でそれ以外の学生は任意である。本報告では、この履修相談制度の制度設計および実施における問題点について概説を行う。その後、履修相談やその他成績情報を利用して授業等に活用する方法について報告を行う。

3. カカ・ワリアう、学生相互の支援・協働活動 学生交流センターの活動を通じて

東 誠
（南山大学学生課）

高等教育機関の学修支援の現場において、ピア・サポートが大きな意味を成すことに、もはや異論が挟み込まれる余地はないであろう。学年・学科を越えた学生相互のカカ・ワリ(関わり)を通じて、様々な「学び」に対する学生自身の主体的な関与が、真に求められている。

本報告は、2009年度から2011年度まで文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業」(学生支援推進プログラム)として採択されたプログラムを経て、現在も南山大学の学修支援の主要な活動拠点となっている学生交流センターの取組を紹介する。そして、学生交流センターにおける活動を通じて、教職員も含めた学生相互の支援・協働活動の今後の方向性について考察を試みるものである。

オーラルセッション

日本の大学における IR の実践とノウハウ

座長：藤井 都百（名古屋大学評価企画室）

15:30 16:50
2F・C会場

趣旨

大学の諸活動を分析する組織としてインスティテューショナル・リサーチ(IR)に注目が集まり、海外の先進的な取組が紹介される段階を経て、日本でも各大学の事例を報告できる段階に入ったと考えられる。学生の学習時間、大学生活の満足度、教育情報の公表など、ここ数年のキーワードからは、大学が自組織の状況をよりいっそう客観的に把握せざるをえない状況にあることが分かり、IRに寄せられる期待も高まっている。

今回は、教育改善・学生支援のIR、および、評価対応のIRの実践事例の報告を通じて、日本におけるIRのはたらきと大学の諸活動改善に果たす役割について議論し、今後のIRのありかたについて検討したい。

1. 公開データを使用した 自大学の現状把握の 事例

藤井 都百
(名古屋大学評価企画室)

IRの活動の一つに、自大学の現状を客観的に把握できるようなデータを付した資料を作成することがある。他大学との比較を通じて自大学の位置付けを知るデータを求められることは多いが、他大学のデータの入手はしばしば制限を受ける。本発表では、公開されているデータのみを用いた分析である、論文数と被引用数の比較、科学研究費補助金獲得状況の把握の事例を紹介し、公開データで分析を行なう際の困難と解決およびその限界について整理する。

2. 評価マインドと IR 人材 の育成に向けて

大学評価コンソーシアム
の取組から

浅野 茂
(神戸大学企画評価室)

日本の大学においては、自己点検・評価の義務化、法人評価及び認証評価の一巡などにより、評価文化が徐々に定着しつつある。しかし、評価プロセスにおいて把握、または評価結果を通じて認識する様々な問題点が、必ずしも改善には結びつかない状況が生じている。これは、組織内に改善志向型の「評価マインド」が定着していないこと、さらにはその役割を担える人材が不足していることに加え、改善を促進する制度構築が不十分であるからである。これらの現状を打開すべく、大学評価コンソーシアムにおいては、「評価を評価で終わらせない」、「元気の出る評価」をスローガンに、国公私立大学の評価担当(経験)者を対象に「大学評価担当者集会」を開催し、人材育成や課題共有とその解決策の検討を行っている。本報告では、その成果と今後の方向性等を参加者と共有したい。

3. 京都光華女子大学における EM・IRの取り組み 実践報告

阿部 一晴
(京都光華女子大学EM・IR部 情報教育センター)

本学では平成18年度より、学生の入学前から卒業後までを対象に一貫して教育と学生支援を組織的・体系的に展開し、満足度の高い教育サービスを実現する総合学生支援策「エンロールメント・マネジメント(EM)」に取り組んでいる。平成20年度から4力年この取組が学生支援GPの選定を受け、全学的に更に発展、充実させることが出来た。これまでの活動を通じ、様々なデータの精緻な分析とエビデンスに基づく組織的なEMの実現の必要性を強く感じ、GP期間終了となった本年度から、教職一体でこの課題に取り組む責任部署として、学長直轄の「EM・IR部」を立ち上げた。本発表では、EM・IR部を中心とした本学の取組について報告する。

MEMO

Dotted lines for writing.

大学教育改革フォーラム in 東海 2013

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/forum/tf2013/>

主催

大学教育改革フォーラム in 東海 2013 実行委員会
名古屋大学高等教育研究センター
[FD・SD 教育改善支援拠点]

実行委員会

大川 隆(南山大学)
間野 益次(中京大学)
夏目 達也(名古屋大学) * 実行委員長
近田 政博(名古屋大学) * 事務局幹事
中井 俊樹(名古屋大学) * 事務局幹事

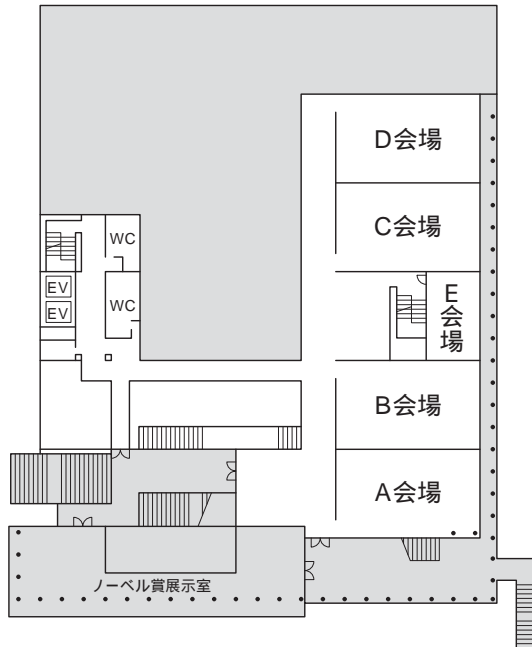
事務局

名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町 1
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695
E-mail: info@cshe.nagoya-u.ac.jp

大学教育改革フォーラム in 東海 2013 プログラム

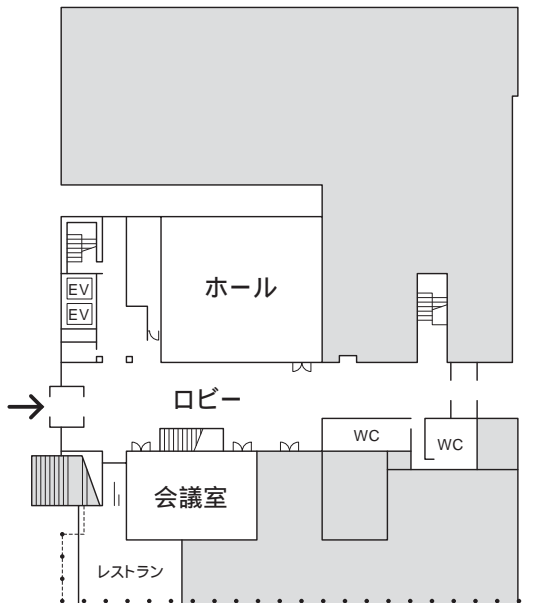
2013 年 3 月 2 日
制作：大学教育改革フォーラム in 東海 2013 実行委員会
発行：名古屋大学高等教育研究センター

ES総合館2F



A会場		
11:10	オールラセッション	1: 大学職員の学びと実践
14:00	オールラセッション	4: 教務の実践的知識の共有
15:30	オールラセッション	7: 課題解決型学習の可能性
B会場		
11:10	オールラセッション	2: 融合的・総合的な理系教養教育の可能性
14:00	オールラセッション	5: 大学経営と評価
15:30	オールラセッション	8: 学生・学習支援の現在
C会場		
14:00	オールラセッション	6: 教養・基礎教育の設計
15:30	オールラセッション	9: 日本の大学におけるIRの実践とノウハウ
中央図書館ラーニングcommons (裏表紙参照)		
11:10	オールラセッション	3: 協同学習の場としての大学図書館

ES総合館1F



ホール		
10:10	基調講演	学生の主体的学びをどう促すか
17:00	情報交換会・アトラクション・ポスターセッション	
ロビー		
12:30	ポスターセッション	
会議室		
12:30	ミニワークショップ	物理現象と概念を結ぶ 講義実験という挑戦(2)
終日	事務局	

会場案内図

名古屋大学東山キャンパス



地下鉄名城線「名古屋大学」駅②③番出口

● 指定喫煙所 ※建物内および歩行喫煙は禁止です。

周辺施設

◎食堂・カフェ

(生協) 北部食堂	11:00～14:00
(生協) ダイニングフォレスト	11:30～13:30
STARBUCKS名古屋大学附属図書館店	9:00～16:30
フレンチレストランシェ・ジロー (ES総合館)	11:30～20:00 (ランチタイム 11:30～14:30 L.O.)

◎購買

(生協) 北部購買	10:00～14:30
(生協) 理系ショップ	10:00～16:00
ファミリーマート名古屋大学IB館店	7:00～23:00

大学教員準備講座

大学教員準備講座は、将来大学教員の職に就くことを目指す大学院生やポスドクに対して、能力開発の機会を提供するものである。課外セミナーとしての開講を経て、昨年度は教育発達科学研究科の専門科目「高等教育学研究Ⅰ—大学教員準備講座」として正規開講した。本年度は教養教育院において新たに開始された大学院共通科目「大学教員論」としても提供することとなった。

開催概要

担当者	夏目達也、近田政博、中井俊樹、齋藤芳子(名古屋大学高等教育研究センター)
開講形式	前期 集中講義 7月31日(火)～8月3日(金)10:00～17:00
授業概要	大学教員になるために必要な知識、スキル等の獲得をめざし、多面的に大学教員の職務を検討します。受講生の今後のキャリア設計、キャリア開発に資するよう、グループワーク等を適宜織り込んで、実践的に進めます。
授業目標	<ul style="list-style-type: none">・大学の成り立ちや大学教員の職務について理解する。・大学という組織で働くために必要な知識、スキルを身につける。・授業で得た知識、スキルをもとに、自身の今後の学修やキャリア設計を進めることができる。・多様な考え方、経験で培った事例を尊重し、共に教え学び合う雰囲気貢献する。
履修条件	博士課程前期1年以上に在籍 教科書『大学教員準備講座』(玉川大学出版部 2010年)を開講までに準備
成績評価 レポート	授業への参加・小課題 60% レポート(8月17日締切)40% <ul style="list-style-type: none">・参考文献はすべてリストにする。・A4用紙を使用する。・すべてのページにページ番号をつける。・ホッチキスで留めて提出する。・担当教員にもメール添付で課題レポートのファイルデータを送る。
クラス内の 方針	<ul style="list-style-type: none">・特別な学習支援を必要とする学生:身障者など特別な学習支援を必要とする学生は、すみやかに担当教員に連絡してください。学習を支援できるようなクラス環境や授業方法について検討します。・受講者の学習権:他の受講者の学習環境を阻害するような行動をとる者に対しては履修を取り消すように求めることがあります。・不正行為:大学での不正行為とは、カンニング行為によって自分の能力を不正確に伝えたり、他人の論文などを剽窃したりすることで他人の権利を侵害することなどがあつたりします。万が一、不正行為があつた場合は、教育発達科学研究科の規則にそつて対応します。・ハラスメント:名古屋大学ではハラスメント防止基本宣言を定め、大学のすべての構成員が、お互いに自由や権利を尊重しあうことが不可欠であるとしています。万が一、ハラスメントが発覚した場合は、厳格に対応します。また名古屋大学にはハラスメント相談センターがあり、専門のカウンセラーがいます。

開催スケジュール

第1日目 (7月31日)	<p>第1回 大学教員という職業 自己紹介/この授業に関する説明/大学教員職の歴史/大学教員職の特徴</p> <p>第2回 授業を設計する 授業のシラバス/シラバス作成法</p> <p>第3回 教授法の基礎 授業づくりの基本の型/学生参加型授業</p> <p>第4回 学習成果を評価する 教育評価の論点/評価の具体的方法</p>
第2日目 (8月1日)	<p>第5回 学生のキャリア形成を支援する 就職支援からキャリア形成支援への転換/主体的進路決定の支援</p> <p>第6回 多様な高等教育機関 教育・研究条件の多様性/多様性への対応</p> <p>第7回 大学教員のライフコース 生活設計/職階で異なる仕事</p>
第3日目 (8月2日)	<p>第8回 研究マネジメント 大学教員の研究活動の特徴/研究プロジェクト管理の基本</p> <p>第9回 社会サービスに取り組む(1) 社会サービスの歴史/社会サービスの類型</p> <p>第10回 社会サービスに取り組む(2) 社会サービスにおける現代の課題</p> <p>第11回 大学教員の倫理 倫理とは何か/教育・研究の倫理的実践/大学教員の自由と責任</p>
第4日目 (8月3日)	<p>第12回 書く力をつけさせる(1) 事前準備/授業中の働きかけ/採点/フィードバック</p> <p>第13回 書く力をつけさせる(2) 模擬授業(グループワーク)</p> <p>第14回 大学教育におけるチームワーク 大学内の組織/学内リソースの活用法</p> <p>第15回 国際化のなかの大学教員 国際化のなかの大学教員/教育の国際化への対応/研究の国際化への対応</p>

参加者アンケート集計結果

○ 第1日目

今日の授業にどんなことを期待して参加しましたか？

- ・大学教員になるために必要なこと、考えるべきことは何か。
- ・大学職員についての知識。

- ・授業をつくる側の工夫、大学教員についてよく知り、自分の問題としてとらえて今後に生かすこと。
- ・大学教員とはどういう職種なのかを理解するため。
- ・将来、自分が大学教員になる時に役立つことです。
- ・大学教員になりたいので、そのために知っておくべき知識を得るために受講しました。
- ・セミナーとかで「発表」することがあるが、それを「授業」と昇華させるためには、どのようなことが必要か？という理論。
- ・大学教員側からみた仕事について知りたいと思ったから。
- ・失礼ながらあまり「期待」はしていなかったです。(私の心構えの問題)
- ・大学教員になるためにはどのような準備をするべきなのか、どのような知識を持っている必要があるのか、具体的な情報・レクチャーを期待して参加しました。
- ・大学教員の現状と授業の構成の考え方を修得する。
- ・大学教員のことを学びたいと考えました。
- ・大学教員に対して抱いている自分の勝手なイメージを超え、真の大学教員の姿がどういうものでどのような業務を行っているかを知り、職業選択の際に参考にしたいと考えたため。
- ・「人に何かを教える」ということの細かいところ・点を教えてもらえると期待して参加しました。

今日の授業で、ご自分の今後のキャリア展開への手がかりが得られましたか？

とてもあった 68% ある程度あった 32% どちらとも言えない 0% あまりなかった 0% まったくなかった 0%

- ・これまで見えていなかった(見ようとしていなかった)視点からの気づきがありました。
- ・大学院生の中に自分に何ができるのかが明確になった。

今日の授業のなかで印象に残ったことを教えてください。

- ・「グループ毎で課題を取り組む」こと。
- ・模擬授業で全く違う分野の方と交流、授業ができたこと。
- ・グループワーク、模擬授業。
- ・大学教員の実情(給料、人数など)がデータでわかったこと。
- ・大学教員の仕事がとても多く、更に責任重大な仕事だと感じた。
- ・模擬授業をしたことです。
- ・大学教員という職業についてあいまいなイメージだけあったんですが、いろんなことが分かってよかったです。考えるべきことについてもたくさん学びました。
- ・模擬授業。導入のみだったが、その導入の作ることの大変さとか、重要性がよく分かる形だった。
- ・大学教員の現状にもいろいろ驚くことが多かったが、授業全体の構成の仕方などとても役に立った。
- ・先生の授業の組み立てだけでなく、空気作り、TAとの連携。かなり緊張していたのですが、ノビノビ過ごせました。(グループ作りに気をもむこともなく)
- ・模擬授業は、自分自身の教育法のクセを知ることができるので、非常に楽しくて興味深かった。
- ・授業づくりの基本の型「導入」「展開」「まとめ」は授業の構成を考える上で参考になりました。授業は学生とのコミュニケーションとすることが自分の理想です。
- ・実際に模擬授業を行ったこと。短い時間だったが、改めて人に教えることの難しさを感じた。最初は教えてもらった型を参考にし、次第に自分なりの型が持てるようになりたいと思えたこと。

- ・頭で考えていることを実際に授業で行うのは難しい。
- ・上手な先生になるためにはもっともっとがんばらなければならないと考えました。授業の時にやったグループディスカッションは印象に残った。

今日の授業を改善するとしたらどのような点でしょうか？

- ・もう少しこまめに休憩があるとありがたかった。
- ・午前のウォームアップの時間が長かったでしょうか…。
- ・私も授業中よくふらふらしてしまうのだが、先生は、資料やパソコンなど必要ないときもあれこれ持ちかえたりされていて少し気になった。見る資料が変わるのか気になってそわそわしてしまった。
- ・机が少し小さかったです。
- ・内容的にはありません。授業日程を8月の中旬以降にしてほしい。
- ・大体今日の授業でOKだと思いますが、参加人数が少なかったら全員の模擬授業をみてみたかったです。

その他、本授業に関連するご意見やご感想を自由にお書きください。

- ・参考書、文献、出典リストがあると自分で勉強できやすいかと思います。
- ・とても楽しかった。受講者のコメントを聞く機会も何度もあって、とても参考になった。
- ・とてもたのしくて有意義な時間でした。ありがとうございました。
- ・後輩にもすすめたい講義でした。ありがとうございました。
- ・満足度の高い授業だったため、特にありません。
- ・有意義な講義でした。
- ・非常によく勉強になりました。ありがとうございます。

○ 第2日目

今日の授業にどんなことを期待して参加しましたか？

- ・キャリアや就活の現状について知識を深めること。
- ・大学教員の裏話。
- ・大学教員とはどのような職種であるかを理解するため。
- ・大学教員について知りたくて参加。
- ・大学教員というものに対する考え方、特に自分独自の視点として理系文系というものに共通するもの、異なるので応用できないこととは何か？
- ・大学教員について、表面的なことではなく、本質的なことを知りたい。
- ・大学教員の裏話業務内容等について正しく知りたいと考えたため。
- ・日本の高等教育、教員としての仕事などを知るためです。
- ・毎回、先生が変わるので、どのような授業スタイルか？
- ・高等教育の現実を知る。
- ・大学教員が置かれている現状を詳しく知るため。
- ・大学教員になる上での知識。

今日の授業で、ご自分の今後のキャリア展開への手がかりが得られましたか？

とてもあった 47% ある程度あった 53% どちらとも言えない 0% あまりなかった 0% まったくなかった 0%

・大学教員のシビアな現実を知り、それでも目指すのか？と自分自身に問いかけなおす良い機会になった。

今日の授業のなかで印象に残ったことを教えてください。

- ・文系と理系とで就職が全く異なること。教育大学の経営状況が悪いこと。
- ・ディスカッションタイムがメロメロになったこと。
- ・キャリア科目について。
- ・大学教員の中での、教育、学生指導への比重の大きさが高いことを実感した。
- ・大学教員が学生の就職・キャリア形成にもちゃんと目をくばらなければならないということが初めて分かった。
- ・キャリアアップというものの考え方。大学が就職関係に関与しているのは当然知っていたが、最近の考え方の変化については新たに知った。
- ・グループワーク。同じような答えでも、理由や考え方が違ったりしておもしろかった。
- ・先生の白熱した語り口や言いまわしがとても良く、楽しみながら授業を受けられて有意義でした。
- ・結局、通常(?)教員になる人は、義務的な目的の学生の気持ちはわからない(知ろうとしていない)のだと思った。
- ・キャリア形成支援の必要性と可能性について、そのディスカッション。
- ・昨今、キャリア活動の必要性が叫ばれている中で、今もなお大学内でのキャリア活動の重要度がさほど高くないこと。
- ・大学教員になるうえでのコツ。

今日の授業を改善するとしたらどのような点でしょうか？

- ・ディスカッション時には問題を広げることを前提にしてはと思いました。
- ・途中から講義形式に変わってしまった。
- ・学生にあてるときにもう少し言いやすい雰囲気を作ってほしい。
- ・配布資料が1ページにスライド6枚だと、字が小さくて読みづらいところがある。
- ・学ぶ内容が多くて無理があるかもしれないが、グループで考えながら意見を交換できる時間がほしかった。
- ・先生の人をあてるテンポに、少しついて行けなかった。
- ・内容が盛りだくさんなので、もう少し簡潔にした方が分かりやすくなると思う。教育・キャリア形成に関する海外の実状紹介もあるともう少し幅広くなるのではないか。
- ・1人で考えをまとめる時間をもう少し長くってほしかった。
- ・ディスカッションをもっと増やした方がいい。

その他、本授業に関連するご意見やご感想を自由にお書きください。

- ・ありがとうございました。ためになりました。
- ・参加型の授業で、学んだという実感がもてました。

○ 第3日目

今日の授業にどんなことを期待して参加しましたか？

- ・大学教員になった時、自身の発言には責任が重くのしかかってくる。倫理的な面から、教員はどのようなことに気をつければよいのか知りたいと思った。
- ・大学教員としての職業を理解するため。
- ・予習をしておらず「白紙」で参加しました。
- ・大学教員というもの、特に独自の視点として、理系文系による共通点、相違点について。
- ・教員になってから直面することを具体的に想定すること。
- ・参加型の手法。
- ・倫理的な問題。
- ・大学教員としての姿勢を学ぶために。
- ・大学教員について現実の業務の内容や求められる能力等について正しく理解したいと考えたため。
- ・すてきな授業。
- ・とくに何も。

今日の授業で、ご自分の今後のキャリア展開への手がかりが得られましたか？

とてもあった 64% ある程度あった 36% どちらとも言えない 0% あまりなかった 0% まったくなかった 0%

- ・内容もですが、先生の授業のやり方が手掛かりです。

今日の授業のなかで印象に残ったことを教えてください。

- ・ディスカッションを重ねる中で、自分では気がつかなかった意見がどんどん出てきて、視点が広がった。
- ・倫理に関するグループワーク。
- ・自分の授業に使えるような形態が多々あった。(絵をかかせて、他の人のを説明、YES/NO 選択、グループディスカッション後、紙にまとめさせる)
- ・YES NO で分かれよう、大学のイメージ図、グループワーク。
- ・大学の社会的位置(イメージ)、倫理、社会サービスについて系譜と視点が分かりやすく紹介された。
- ・レジュメが簡潔で美しい。見せ方の勉強になります。
- ・絵、図を用いた説明をしたこと(議論しても、まとめるときにまとまりにくい議題も多かった)
- ・グループワークがとても深かった！！
- ・「人間」の倫理⇔「教員」の倫理の境界とは何か考えさせられました。
- ・参加型授業についてしっかり学んだと思います。楽しかったです。
- ・改めて倫理の重要性について考えさせられました。(大学教員が直面しそうな倫理的問題について)
- ・大学のイメージを図示する→ややこしいことを考えているとややこしい絵になる。当たり前ですが、新鮮な発見でした。
- ・グループのメンバーとの話し合いがよかった。今日のメンバーがよかった。

今日の授業を改善するとしたらどのような点でしょうか？

- ・グループを作った時、スライドが見にくかった。
- ・ディスカッションの時間が、時々長いところがありました。

- ・グループワークが多いので、司会、発表、書記などの役割を決めてまわした方がよいかもしれません。
- ・ワークシートを回収することにもっと早く気づいていれば、メモの取り方を改善できたと思う。
- ・実際、大学教員はどのように研究マネジメントしているか事例をまじえて知りたかった。
- ・時間の配分をより分かりやすくお知らせくださればと…。
- ・研究倫理クイズの正誤答を知りたかった。
- ・予想通り素敵な授業でした。

その他、本授業に関連するご意見やご感想を自由にお書きください。

- ・楽しかったです！
- ・グループワークはやるだけでなく、内容に深みのあるグループワークであることが大事なので、その点で今回の授業の満足度はとても高いです。
- ・とても有意義な1日でした。
- ・また受講したいと思いました。

○ 第4日目

今日の授業にどんなことを期待して参加しましたか？

- ・大学の実態をどこまで把握できるか(もちろん概要ですが)
- ・急速に国際化が進む中で、大学教員は留学生をどのように支援し、どう対応すべきか考えるために参加した。
- ・今まで気づけなかった大学の側面に触れること。
- ・大学教員の実際の業務や役割について正しく理解したいと思ったため。
- ・大学という組織について。
- ・学内の詳しい組織について:教員にとっては知っていて当然のことで、学生にとってはまったく知らないこともある。
- ・素敵な授業。
- ・書く力を自分も身につけたいと思って参加した。
- ・大学教員について、特に今回の講義の内容が理系文系によってどう違うか?相違点はどうなっているか?
- ・大学教員についての知識。
- ・大学教員になるために知っておくことを学ぶため。

今日の授業で、ご自分の今後のキャリア展開への手がかりが得られましたか？

とてもあった 68% ある程度あった 32% どちらとも言えない 0% あまりなかった 0% まったくなかった 0%

- ・ゲストスピーカーから具体的なお話を聞いたことは違った視点から教員の仕事を知るきっかけとなって非常に有意義だった。

今日の授業のなかで印象に残ったことを教えてください。

- ・ケース教材を用いたディスカッションは、大学教員の目線に非常に近い状態で考えることができ面白かった。

- ・非常識と狂気(研究へのどん欲さ)。書く力、論文の基本。
- ・外部の講師(サカイ先生)の先生の話聞き、学校によりさまざまなカラーがあることを肌で感じる事ができてよかった。
- ・先生が体験したという留学生のエピソード事例もリアリティがあり、問題提起としてよい資料だったと思う。
- ・ある教員の告白。
- ・自分も「書く・作文」の授業を担当することがあるので、授業のいいアイデアになった。
- ・ゲストスピーカー。グループワーク。
- ・グループディスカッションの中で、日本の国際化は英語教育を進めるのではなく、日本から外国へ魅力ある文化・産学を発信することであるとの結論が出たこと。
- ・レポートの書き方指導。留学生を受け入れるために必要なこと。
- ・大学の委員会などの構成について。今所属している研究科のことも史郎としていなかったの、手元にまったく情報がなかった。
- ・国際化について。いわゆる一般的な「何を残し、何を考えるか？」がこの問題にも関係しているようである。
- ・グループディスカッション。特別講師のサカイ先生のお話。
- ・大学教員の立場でも留学生に関わるいろいろな事情があるということがわかってよかったです。専門学校についてもお話が聞けてよかったです。ありがとうございました。

今日の授業を改善するとしたらどのような点でしょうか？

- ・授業の目標と進め方が明確で分かりやすい授業でした。気になったのは、「質問は？」「どう思う？」ということが苦手な学生は少し気おくれするかもしれない。
- ・グループワークの時間設定:もう少し長く取りたい場合や、時間を短く切ったほうがいいのか場合など、どれくらいのペース配分が適切か考えるのが難しかった。グループ内でも全員の意見が聞けない。
- ・大学の組織についてほとんど知識がないため、詳しい説明がほしかった。
- ・もう少しグループディスカッションがあつていいと思った。

その他、本授業に関連するご意見やご感想を自由にお書きください。

- ・個人的には、この授業の展開と語りは合うものだった。
- ・楽しかったです。ありがとうございました。
- ・最初、先生のリズムがつかみにくくて困りました。全4回とも違う先生で、内容もですが、それぞれの先生方のスタンス自体が異なっていて、それ自体も勉強になった。
- ・昼休みが1.5Hあったのは近田先生だけで、少しゆっくり休みがとれて、さらによかったです。同じ授業で先生が毎日変わったので、色々な先生のカラーがあり興味深かった。
- ・とても刺激的だった。全体討論やグループワークの成果を発表する機会がほしかった。
- ・非常に勉強になる講義でした。

セミナー・ワークショップ

○ 2012年4月27日 第106回招聘セミナー
「学習させる大学」における学生の正課外活動



講師：井下 理（慶應大学総合政策学部 教授）

日時：2012年4月27日 16:00～18:00

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概要：学生が学習しないのを自己責任として突き放すのではなく、大学が「学習させる大学」に自己変革しようと努力している。今や大学は、多様な学生の学習意欲を喚起し、学習行動を支援し、さまざまな工夫を重ねる。学習法やカリキュラムの開発・実践的な研究にも力を注いでいる。その主たる照準は、正課学習に限定されていた。しかし大学の教育力は、正課学習だけではない。大学は、正課外活動も視野に収め、それらをいかにデザインし、どう展開すべきか。これからのあるべき姿を共に考えたい。

講演要旨

「学習させる大学」とは「学生の成長に関心を向ける大学」を意味する。大学は「学生が学習しないのは学生の自己責任である」「学びたい者だけが大学に来ればよい」という姿勢で、みずからの教える責務を放棄することはできない。学生が自分で学ぶことへの関心を育て、意欲を喚起し、自発的に学習するように仕向ける（強制するのではなく）努力と創意工夫が必要となっている。「学習させる大学」というのは、「自動車を作る自動車会社」「治療する病院」「研究する研究所」という表現と同じでいわば当然のことである。だが、その当然のことである学生の学習について、自由と責任という建前のもとにいわば大学の教育責任を軽視していた面もあるのではないか。高い学費の中には、学ぶ楽しさが実感できず、学習意欲がわかない学生に対しても、しっかりと勉学意欲を喚起し、準備状態の不足を補い、広く「学ばせる」指導力・教育力を発揮することが求められているはずである。「学生の成長に関心を向ける大学」は当然のこととして、学生が「自発的に学習する」ことに関心を払って教える工夫している。そうした工夫とは、教授法・学習法開発や各種プログラムの開発にとどまらず、食堂など厚生施設の整備なども含まれ快適な環境の充実も図られてきた。そうして今では、学生の主体性喚起のために課外活動のもつ教育的効果をも視野に入れ

始めた。つまり学業面だけでなく、幅広い人間性や社会性の涵養を大学教育の目的に含めて考えるならば、知性のみならず感性、対人関係形成能力、コミュニケーション能力の育成も学習成果に入れて、総体として大学が提供できること、すべきことを検討する段階にきた。そのためには、正課のみならず課外活動も視野に入れた総合的な新しい枠組みの再設計が必要となっている。

そうした流れの中で、従来のように授業を通じての教室での学びだけではなく、正課外活動の意義と効用をどうデザインしなおすか、その方法論が求められている。学生の成長発達に大きく寄与する課外活動や学外活動を大学の教育過程にどのように接続したらより効果的なデザインが可能となるのか。インターンやボランティア活動、さらには、フィールドワークなどの学外での正課活動の機会と幅も拡大している。学生の成長に高い関心をもつ大学では、課外活動が持つ教育力に以前にも増して着目しつつある。社会人基礎力や学士力で目標とされるいくつかの項目は、課外活動を通じて習得される面も多い。一方で正課の学習法が多様化し学外へ、学期以外にも展開する形での拡張が進んでいる。この傾向と呼応して、課外活動の「正課化」といった双方向の活動すら検討段階に入ったと言えるだろう。

課外活動の一層の充実強化に着手するとすぐに注目されがちなのが、「課外活動の単位化」である。しかし、課外活動の教育力は、学生に「単位」と言う「報酬」を与えることでかえって学生たちの自主的内発的動機づけに水を差すことにもなりかねない。まずは慎重な現状分析、実態調査などが求められる。個々の大学、それぞれの学生のニーズに対応した形での学生支援として課外活動と正課活動の包括的な再編・再構成が期待される。

正課と正課外活動との区別の付け方や、課外活動をどのように位置づけ、支援したらよいのか。カリキュラム上の位置づけだけでなく、学生支援の観点からも広くまた多角的な考察とデザインをすることが重要ではないだろうか。

課外活動の支援、活性化の業務を誰が担うのか。教員よりも職員への期待は一層高まるであろう。しかし、それに充当しうる学内の人的資源をいかに確保し、指導力を育成していくことができるのか。SD と FD さらに BD との連携が欠かせない。

○ 2012年5月18日 第107回招聘セミナー

「学生の学習ニーズの多様化に対応した教育・学修支援」



講 師：居神 浩（神戸国際大学経済学部 教授）

日 時：2012年5月18日 18:30～20:00

場 所： 東山キャンパス 文系総合館 7階 オープンホール

概 要： 「ユニヴァーサル段階」における大学の教育・学修支援は、高校までで基礎的教科の普遍的履修が完成するという理念の下での「高大接続」と、学卒後の速やかな職業社会への移行を保障していた「日本的雇用システム」が機能不全に陥っているという認識を持って語らねばならない。大学教育の現場でさしあたりできることは、教育—学習行為の「レリバンス」の回復であり、特に「職業的レリバンス」の向上を求める声が強いが、本セミナーではむしろ「市民的レリバンス」を高めることを主張してみたい。

講演要旨

高等教育のいわゆる「ユニヴァーサル段階」に達した現在、学習履歴の範囲やその理解の程度などにおいて、実に「多様な」学生に対して教育・学修支援を行う必要に大学教員は迫られている。にもかかわらず、多くの大学教員は自分が見たい学生だけを見てしまう傾向にある。見たくない学生も含めて、かれらがどのような状況に置かれているのか、その事実を受け入れるという大前提から、このテーマについては語らなくてはならない。

拙稿「ノンエリート大学生に伝えるべきこと」(日本労働研究雑誌 第 602 号 2010 年)では、今日の大学生の卒業後の進路はかつてのように、事務・営業職等からスタートしながらも、専門職あるいは管理職への昇進を経て、さらに経営者へのキャリアを展望しうるものではなくなりつつあることを踏まえた上で、そうした「エリート」とは異なる「ノンエリート」へのキャリアを歩む若者たちへの学習行為の「レリバンス」を問うてみた。

今回のセミナーでは、教育—学習行為の「レリバンス」の回復は、本田由紀氏が強く主張するところの「職業的レリバンス」の確立を前提としながらも、「学習者が教育システムを離れたのちに、市民ないし家庭人ないし労働者として生きる上で、直接的にはその個人自身にとって武器となり、間接的には社会にとっても有意義であるような、様々な手段や知識」と本田氏みずからが定義されるところの「市民的レリバンス」を強く意識すべきことを主張した上で、具体的な教育・学修支援プログラムのあり方について議論を展開していった。

かれらが教育システムを離れたのちに、「ノンエリート」としてのキャリアを歩むことを想定したときに大学の間に身につけておくべきは、例えば「学びなおしに効く」学力(杉浦和彦『小・中・高の学びを結ぶ学力 20の指標』きょういくネット 2010 年)や「職業人としての矜持を守るための権利意識」(上記拙稿では「異議申し立て力」)などではないかと論じてみた。

卒業後の不安定なキャリアを支えるのは「途中で希望が変わり、やり直したいと思った時に、必要な知識や技の学びを支えるだけの学力」(杉浦同上書 14 頁)であり、劣悪な労働環境に対して正当な「異議申し立て」を行うには、労働法の知識のみならず、職場内外の様々なサポートの存在を知ってもらい、そして何よりも「これだけは許せない」というある種の正義感を教えることが必要であろう。

大学教員はどうしても自分の「ワーク」がすべて自分の「ライフ」と重なってしまうような「エリート」だけを学習者として前提してしまう。しかし、これからは「ワーク」と「ライフ」をはっきり分けて生きる人たちという意味での「ノンエリート」をも学習者として前提し、かれらが「市民ないし家庭人ないしは労働者として生きる上で」の「市民的レリバンス」を高める方向で、教育・学修支援の具体的プログラムを構築していくべきではないだろうか。

○ 2012年6月20日 第108回招聘セミナー

「組織学習論から見たFD・SD」



講師：安藤 史江（南山大学大学院ビジネス研究科 准教授）

日時：2012年6月20日 18:30～20:00

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 カンファレンスホール

概要：外部環境が変化し、大学に期待される役割にも大きな変化が生じている中、専門職としての大学教員と事務職としての大学職員、学部学生や大学院生などの多様な価値観や行動様式を持つ組織メンバーにとって、今後ともに目指すべき方向性は何で、実現にはどのようなことが求められるのだろうか。本報告では、組織学習論の紹介および参加者との意見交換を通じて、この問題を考えていきたい。

講演要旨

高等教育の場であり、知識や技術を創造する場でもある大学。だが、グローバル化や情報化の進展に伴う求められる人材像の変化、学生の意識や質の変化、そして朝活、勉強会、フューチャーセンターなどの自発的な学び、相互啓発の場の活発化などといった、さまざまな環境変化の中、大学に期待される役割にも自ずと変化が生じていることが近年指摘される。では、これからの大学の立ち位置はどこに定めるべきか、より将来的にはどういった存在を目指すべきか、そのために今、何を変革し、何を維持すべきなのか。

これらの問題に取り組もうとするとき、やはり大学の持つ重要な組織資源の1つである、多様なステークホルダーの知恵を最大限に活用することが必要不可欠になると考えられる。大学には、専門職としての大学教員、事務職としての事務職員、大学院生や学部生などの内部の組織成員から、高校など他の教育機関や企業、社会、学生の保護者、将来および過去の組織メンバーなどの外部の関係者まで、実に多様で多彩な人々・組織がさまざまなレベルで関与している。

そこで本報告では、こうした多様なバックグラウンドや価値観を持つステークホルダーとの協働を通じて、組織が目指す学習活動やその成果を達成するには、どのようなマネジメントが有効と考えられるのか、組織学習論の知見から検討を行うことにした。組織学習論とは個人の学習とは一線を画した、組織の学習プロセスやメカニズムを主な研究対象とする研究領域である。

多様性が組織学習プロセスや成果に与える影響についての先行研究を整理すると、今後の大学組織にもある程度応用可能と考えられるいくつかの興味深い知見が得られる。たとえば、どの程度の多様性を

迎え入れるかによって、目指すべき結果の実現度が大きく変わってくることが予想された。また、多様性のマネジメントの方法を誤ると、目標を達成できないばかりでなく、むしろ望ましくない結果につながりやすい仕組みも明らかになっている。これに関連して、組織が持つ当初の多様性をどの程度に見積もるか、その正確性も結果に重要な影響を及ぼす可能性も指摘することができた。

こうした既存研究のレビューに基づいた本報告を一つのたたき台として、今後の大学組織はどうあるべきなのか、参加者同士で率直で活発なディスカッションが行われた。

○ 2012年7月19日 第109回招聘セミナー

「英国大学におけるガバナンス、リーダーシップ、マネジメント—経営人材に求められる能力や準備とはなにか— Governance, Leadership and Management in UK Higher Education」



講師：デイビッド・ワトソン卿（オックスフォード大学グリーンテンプレトンカレッジ 学長）

日時：2012年7月19日 16:00～18:00

場所：東山キャンパス 教育発達科学研究科 大会議室

概要：近年、イギリスでは、高等教育の大衆化の進展とともに、複雑な問題が多く発生しており、大学経営はしばしば困難に直面している。その中で、大学の経営を維持し機能を高めるために、大学経営陣の担う役割と責任は大きくなっている。大学経営に関しては、ガバナンス、リーダーシップ、マネジメントがキーワードになるが、そのあり方に関して学外・学内両面から期待とプレッシャーが強まっている。本講演では、イギリスの大学での学長経験や大学経営に関する国際比較研究から得た知見をふまえて、大学経営のリーダーとして求められる能力や準備とはいかなるものであるかを検討する。

講演要旨

大学は、かつてないほど社会からの強い期待に直面している。同時に、その期待は、多くの矛盾に大学を直面させている。伝統と先進性、競争と協働、金銭的自立と説明責任、卓越した成果と社会的正義の価値観などである。とくに世界水準の大学を目指そうとする大学の場合、これらの矛盾がいつそう深刻になる。そのような大学は、国際的な評価を得るために「大学ランキングにカウントされる大学」であることが要請される。一方、政府や自治体からは、大学の財政を負担する立場から「公益に資する大学」であることが要請される。この二つの要請はしばしば二律背反的なものである。

大学のリーダーには、これらの矛盾や関連した多くの問題を抱える大学を指導する責任が伴う。彼らに求められるものは何であろうか。大きくは、ガバナンス、リーダーシップ、マネジメントの3つに分類できる。

ガバナンスとは、主に理事や執行部が大学の各種資産を保持することに関する責任である。この場合の資産とは、金銭的資産にとどまらず知的財産なども含まれる。リーダーシップとは、大学のパフォーマンスを上げることであり、執行部は大学構成員に対して執行部への信頼感を維持させつつ、彼らの意欲を高い水準に高めさせることが求められる。マネジメントとは、システムを維持させていくことである。低レベルの機能だけでなく、高レベルでの教育プログラムや研究プロジェクトなどを機能させなければならない。これらの3要素は一見すると独立しているように見えるが、重なり合う部分もある。要素の関係のあり方によって大学の戦略が規定される。

戦略を構築することは容易であっても、それを実施することは難しいといわれる。しかし、大学の戦略が上首尾に機能する場合もある。そのための条件の一つは、安定した財政基盤の確保である。余裕のある財政運営ができていれば、自由で大胆な戦略を立てることができる。また、近年、大学経営において重要になってきているのが、ITの役割である。大学の多くの側面で実際にITがどのように活用されているかについての一定程度の理解を、大学執行部が得ておく必要がある。IRの重要性も強調される必要がある。IRを上首尾に機能させている大学では、トップダウン的な大学経営を行っていない場合がしばしばである。重要な決定はミドル階層が行い、トップはブレーン役になっている。

その他、以下の点を指摘した。①成功している大学のリーダーシップは1人の英雄的なものではないこと、②自己の大学の知識と成熟した文化が必要であること、③大学人にとって仕事と私生活の切り替えが難しいこと、そのため自己管理が重要であること、である。

○ 2012年7月26日 第61回客員教授セミナー

「大学のナレッジマネジメントーIRからKMへー」



講師：松塚 ゆかり（一橋大学大学教育研究開発センター 教授）

日時：2012年7月26日 16:00～18:00

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概要：学生ニーズの多様化、質保証の要請、競争の激化、予算削減への対応が迫られる中、大学は教育・研究・組織運営において自らの特徴や資源並びに市場を正確に把握することが求められている。その主翼を担うのがIRであり、本講演ではIRの具体的活動、体制、スキルミックスを紹介し、

その発展的展開として、学内外の「知」を集約・共有し、教育改善、研究強化、組織改革へとつなげるとされるナレッジマネジメントの可能性を検討する。

講演要旨

学生ニーズの多様化、質保証の要請、競争の激化、予算削減への対応が迫られる中、大学は教育・研究・組織運営において自らの特徴や資源および市場を的確に把握することが求められている。これを可能とするのが大学機関調査(IR)であり、本講演ではIRの具体的活動、体制、スキルミックスを紹介し、その発展的展開として、学内外の「知」を集約・共有し、教育改善、研究強化、組織改革へとつなげるとされるナレッジマネジメント(KM)の可能性を探った。

アメリカの8大学を対象にナレッジマネジメントの実践・浸透状況を調査した結果明らかになったのは、(1)KMは大学の運営を強化する方策の一つとして推し進められていること、よって、(2)運営・管理、研究、教育に関わる方針作成に有用な情報や資料の提供・共有がKMの主要な活動となっていること、(3)KMの実行可能性は、学内データベースの統合・拡充と、学外マクロデータの統合により拡大すること、(4)執行部の強力なリーダーシップは改革の最大の牽引力ではあるものの、部局を横断した各部局内に浸透し得るコミュニケーションチャンネルを通して議論を重ねることで有効なKMが実現すること、(5)特に教育分野においては、「学生のため」であることの明確な合意があれば、KMは活性し拡大すること、などであった。

次いで日本におけるKMの可能性を、IRを早期より開始した一橋大学の例を挙げて検討した。同大学では2006年にIRに着手して全学教育DBを構築しつつ、教学データを中心とした分析と分析結果の学内共有を進めてきた。2010年に文部科学省の競争的資金を得たことをきっかけに、これまで学内専門委員会や評価委員会への報告が主な情報提供ルートとしていた段階を越えて、(1)学内の教職員が必要な時に必要な情報およびデータを抽出・活用できるインターフェイスの構築、(2)そのために必要なシステム基盤とセキュリティの強化、(3)分析工程の簡素化と効率化、(4)KMポータルの開発・運用を目指して事業が進められている。

IRをカタリストとして教育、学習、学生生活のための支援を学内に広く深く浸透させようとするものであり、KMの機会を尊重することにより、十分な情報共有とフィードバックを密に反映するPDCAサイクルの実現が期待される。さらに、GPAの適正運用、三つのポリシーをはじめとする教学方針の策定、大学の特徴強化等に資するリソースを、学内のコンセンサスを確認しながら蓄積することが可能となる。

しかしながら、各大学の教育方針は定量化された情報をもとに、アウトカムベースで、あるいは一定のターゲットに到達するために定められるものではないと思われる。コアとなる教育方針はそれぞれの大学がその歴史の中で培ってきた哲学や文化に根ざすものであり、そこから生まれてくる人材像は多分にオープンエンドで未知なる可能性にあふれた個々人である。IRはむしろ、実態を客観的に把握する姿勢を維持し、時に特定の意思決定や活動を裏付けあるいはその再考を促し、必要があれば修正へと導く「科学的根拠」を提示できるよう位置づけられることが望ましいのではないか。その上で大学を構成し支えるコミュニティにそれらの情報を適宜配信して大学教育の説明責任を遂行するリソースを蓄えることがもう一つの重要な使命であると考えられる。

○ 2012年9月11日 第110回招聘セミナー
「フランスの大学改革と執行部のリーダーシップ」



講師：アラン・クーロン（前・フランス高等教育・研究省副局長）

日時：2012年9月11日 16:00～18:00

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概要：「欧州高等教育圏」の構築をめざす作業が EU と各国レベルで進められている。フランスでは、高等教育および研究活動でのすぐれた成果により同国の国際競争力を確保すべく、近年、大学改革が矢継ぎ早に実施されてきた。

講師はこの6月まで、サルコジ政権の高等教育・研究省副局長として、この動きを促進してきた。その立場から、同政権が進めてきた改革の概要を紹介するとともに、今後の政策展開、大学と行政機関との関係のあり方、そこにおける大学執行部の役割等について検討する。

講演要旨

本講演では、フランス政府が進めている大学教育改革の概要とその若干の特徴について検討した。

2007年に「大学の自由と責任法」(2007年8月10日付け法律、以下、新大学法と略)が制定された。これは、大学の管理・運営に関する各大学の権限の強化・拡大を目指すものである。とくに、学長を中心とする執行部の権限拡大と、それによる機関決定を迅速に行えるような管理・運営方式の実現を企図している。従来認められなかった学長の再任を認め、実質的に長期在任に道を可能にした。全学審議・決定機関である管理評議会と学長との関係緊密化を実現したうえ、同評議会の権限強化を規定した。具体的には、①委員総数を大幅に減少(従来の30～60名から20～30名)、②職員・学生代表の委員数を削減、③管理評議会単独での学長選出(従来は他の評議会と合議)、④学部新設、学内財政配分の権限をもつ。

大学は高等教育・研究省との間で中期計画を結ぶ。大学は諸事業について計画を提出し、国は審査を行った上で実行を支援すべく5年一括の予算を大学に提供する。教職員の勤務時間の変更、各種手当での配分、大学の施設の所有権獲得等の権限を大学に付与した。

これらの権限拡大を受け、各大学では教育改革が進められている。とくに、留年・中退率の高さが顕著であった学士課程での学生の学習支援を強化する。①進学する大学・専攻の選定の際の情報提供や相談の強化、②学業困難な学生に対する上級生による学習相談の充実、③就職支援に向けてインターンシップや各種情報提供の充実、等である。

各大学・執行部の権限を強化する一方で、活動の透明性と説明責任の強化も重視されている。その一環として、外部専門機関による会計監査や内部監査の強化、大学の諸活動に関する情報の公開(たとえば、学生の課程修了率等の情報)等である。

同時に、大きな権限を新たに付与された大学執行部が、その職務権限を有効に行使できるように、高等教育・研究省は彼らに対する研修機会の提供を行っており、そのための研修機関(高等国民教育研修学院 ESEN)も設置されている。大学執行部との定期的な会合も行っている。

このように大学改革が急速に進んでいるが、課題は少なくない。たとえば、大学の管理・運営をより高度化・専門化させることである。大学は伝統的に、自己管理と自主性を運営原理としており、両者間の矛盾をどう調整するかという課題に直面している。

○ 2012年9月13日 第62回客員教授セミナー
「中国の大学における教員組織と執行部の葛藤」



講 師：胡 建華 (南京師範大学教育科学学院 教授)

日 時：2012年9月13日 17:00～19:00

場 所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概 要：中国の高等教育改革では1990年代から大学のガバナンスに変化がみられる。その変化は大学の教員組織と執行部との関係という視点からとらえることができる。大学において教員組織は意思決定にどんな役割を果たしているか。従来のトップダウン型の大学運営はどこまで変わりつつあるか。本セミナーでは、現在の中国の大学における教員組織と執行部の葛藤について掘り下げたい。

講演要旨

1985年に『中国共産党中央委員会の教育体制の改革に関する決定』が公表されてから、中国の高等教育は新たな改革期に入った。今回の改革は、持続する時間と影響する範囲から見れば、20世紀50年代初期に行なわれた改革をはるかに超えたものであるといえる。約30年を続けているこの改革は、高等教育の色々な面で深刻な変化を引き起こした。

周知の通り、80年代半ば以降に中国では計画経済から市場経済へ移行し始め、また知識経済のグローバルでの進行中に高等教育の国際化、大衆化に直面され、改革の進展に伴い、多くの課題や問題が生

み出された。例えば、大学の管理・運営に自主権が拡大されたことにつれ、大学内の管理体制、ガバナンスといった問題は大学の管理者と研究者の注目を集めるようになった。

『中華人民共和国高等教育法』には中国の大学の指導体制が明確に規定されている。すなわち、「国が設置する高等教育機関で中国共産党の高等教育機関委員会の指導のもとでの学長責任制を実施する」。この法律の条文を見れば、中国の大学の指導体制が党委員会の集団指導であることがわかる。具体的には、党委員会の常務委員会は大学の最高意思決定機関ということである。

現在、中国の大学のガバナンスでは、いくつかの教授を主体に設立された委員会は重要な役割を果たしている。たとえば、教育活動に関する学部教育委員会、大学院教育委員会、学位委員会、学術研究に関連する学術委員会、教員人事に関連する教授審査委員会などがある。一般的に、学長あるいは副学長は各委員会の委員長を務め、委員会のメンバーに各学院からの教授が含まれている。各委員会の責務範囲は 1952 年に行なわれた大学改革により、「学院」という組織は中国の大学から消えた。そして 80～90 年代になると再び、中国の大学に「学院」が続々と設立されるようになった。現在、ほとんどの大学に「学院」のシステムがあり、「学院」が大学の管理運営の上で重要な役割を果たしつつある。

中国の大学における教育組織と執行部の関係は次のようにまとめることができる。

- (1) 党委員会の常務委員会は、中国の大学において最高の意思決定の機関である
- (2) 大学が重要な政策を策定する場合、教授の意見をよく聴取する
- (3) 従来のトップダウン型の大学運営はある程度ボトムアップ型に変わりつつある
- (4) 学院の力が以前より強くなる傾向がみられる

○ 2012 年 10 月 17 日 第 111 回招聘セミナー

「学習研究が教育改革・FD/SD にどのような影響を与えるか」



講師：森 朋子（島根大学教育開発センター 准教授）

日時：2012 年 10 月 17 日 18:30～20:00

場所：東山キャンパス 文系総合館 7 階 オープンホール

概要：学習研究という聞きなれない領域が、世界の教育政策で徐々に注目を集めつつある。学習研究は、認知科学、教育心理学、教育社会学等の学際分野であり、1960 年代にアメリカで興った。教育が「教える学問」であるのに対して、学習研究は「学ぶことの学問」であり、まさに教育学と学習研究は相互補完的関係にある。

本セミナーでは学習研究が教育改革・FD/SD にどのような影響を与えうるのかに関して、その背景にある理論と事例を報告する。

講演要旨

本セミナーでは、教育と学習の相互補完的な関係性を明らかにし、これまでの FD/SD の主語と目的があくまでも教職員を基盤とする教育学の視点で展開されていたことを指摘した。その上でさらに教育改革や教育改善の最終的な目的は、まさに学生の学びの質の保証および向上であり、その観点からすれば、教職員の職能開発はその一つの手段に過ぎないとする報告者の見解を述べた。

これまでの FD/SD では、教職員が教職員を対象に展開しているため、どうしても同じコミュニティの中で個人の「ビリーフ」に抵触してしまう。学生教育への強い思いは同様であっても、一般的な FD/SD 活動と教職員個人の「ビリーフ」が相容れないことは多く、これはまさに FD/SD を促進しようとする大教センターと教育の主体である学部との間にも垣根として大きく立ちはだかっている。

「学生はどのように修学するのか」「学生の学習に何が起きているか」を、定性と定量的データをもって明らかにする学習研究は、まさにその垣根を乗り越え、学部と大教センター教員が、学生の学習状況・ニーズを共有し、お互い専門的な立場から方策を検討できる新しい教育改善の手段として位置づけられる。つまりこれまでの FD/SD が抱えていた教職員間において活動を「推進する」「推進される」の二項対立を回避し、学生の学びを豊かにすることを目的に、活動を共にするコミュニティが形成されるのである。学生の現状を把握し、教育的処置を施し、それをまた検証し、結果を共有するといったサイクルを何度も繰り返す。その改善プロセスを共有し、実際に学生の学びが改善されることを目の当たりにすることで個人の「ビリーフ」を超えた実体験がアクション・ラーニングを生み出す。

地方国立 S 大学自然科学系学部は、JABEE 認定プログラムを導入していることから成績評価の厳格化や系統的なカリキュラムには定評があった。しかし学生の基礎学力不足や動機づけの弱さを起因する留年や中退問題を抱えていた。この現状に対応するため、大教センターと学務課は、成績データを分析した内容をもって粘り強く学部働きかけ、1年生を対象にした複数の修学をサポートする教育プログラムの開発に漕ぎ着けた。大教センターはそれらのプログラムの運用もサポートしながら、4 年経つ今現在も学生の学習状況をモニタリングしている。このように学部と大教センターが協働で教育改善にあたることで達成できた学生の学びの質向上について報告したと同時に、その裏に見え隠れする持続可能な教育改善コミュニティとして在るための課題についても示唆を行った。

○ 2012年11月13日 第63回客員教授セミナー

「大学におけるリーダーシップの形成」



講 師： 淵上 克義（岡山大学大学院教育学研究科 教授）

日 時： 2012年11月13日 16:30～18:30

場 所： 東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概 要： 本講演は、第一に大学において行使されるリーダーシップとその効果について概観することによって、大学経営におけるリーダーシップの特徴について明らかにする。第二に、近年の組織におけるトップ・マネジメント・チームにおけるリーダーシップの研究成果を拠り所としながら、大学経営におけるリーダーシップの形成のあり方について論じる。第三に、リーダーシップを発揮するための前提条件であるリーダーによる意思決定とリーダーの資質に焦点を当てながら、リーダーが効果的なリーダーシップを発揮するために必要な条件について考える。

講演要旨

本講演は、大学におけるリーダーシップの形成についてまとめたものであり大きく三つの目的から構成されている。

第一に大学組織において行使されるリーダーシップとその効果について概観することによって、大学経営におけるリーダーシップの特徴について明らかにした。まずリーダーシップの効果は、フォロワーの受け入れ次第であることを確認した。そして大学組織は、①フォロワーである教員の認識、②リーダーである学長・副学長の認識、③組織としてのアウトプットの可視化という観点から、フォロワーがリーダーシップの恩恵を認識しにくいという条件を本来的に備えていることを明らかにした。

第二に、このような大学組織の特徴を踏まえながらも、より効果的なリーダーシップをもたらすための条件について考えた。近年リーダーシップ研究において注目されている組織におけるトップ・マネジメント・チームにおけるリーダーシップや共有リーダーシップなどに関する先行研究成果を拠り所としながら、大学経営におけるリーダーシップの形成について論じた。さらにはトップ・マネジメント・チームの形成に関わる組織構造的な要因として、対人交流記憶、共有メンタルモデル、チーム効力感などの諸要因を取り上げながら、このような効果的なリーダーシップを発揮できるようなチーム構造のあり方について述べた。

最後に、リーダーシップを発揮するための前提条件について述べた。効果的なリーダーシップが発揮されるためには、その前提としてリーダーにどのような条件が求められるのであろうか。本講演では特に重要であると指摘されている、①リーダーに求められる要因（リーダーによる意思決定能力に関する認知的

な能力と倫理性などのリーダーとしての資質)、②トップ・マネジメント・チーム内における環境要因(互いに助け合い、学びあうという互酬的なチームの雰囲気)という二つの要因に焦点を当てながら、リーダーが効果的なリーダーシップを発揮するために必要な条件について考えた。

○ 2012年12月11日 第112回招聘セミナー
「ケースメソッドで主体的学びを実現する」



講師：丸山 恭司 (広島大学大学院教育学研究科 教授)

日時：2012年12月11日 16:30～18:30

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概要：「主体的学び」を可能とするアクティブラーニングの一手法として、また「単位の実質化」という点からも、いまケースメソッドが注目されています。本セミナーでは、まずケースメソッドがどのような教育方法であるのかを紹介し、学生と教育機関の双方にとっていかなる意義と可能性をもつものであるのかを解説します。さらに、本セミナーがケースメソッド導入のきっかけとなるよう、具体的な進め方や留意点を挙げて検討します。

講演要旨

大学(院)における授業方法として、いまケースメソッドに注目が集まっている。ケースメソッドを取り入れることによって、単位の実質化が図られ、学生の主体的学びが実現すると考えられるからである。本セミナーでは、まずケースメソッドの概要を紹介し、その運用のメリットと成功のポイントを解説した。

1. ケースメソッドの概要: ケースメソッドは専門職者を養成するために開発された授業方法である。20世紀初頭にハーバード大学で確立されたとされる。ケースメソッドは、具体的なケースをめぐって話し合うことを基本とする。この点が、従来の講義型授業、すなわち、講師から学生に一方的に知識を提供する授業と大きく異なっている。この授業方法は、三つのステップを踏む。すなわち、①事前学習(個別読解)、②グループディスカッション、③クラスディスカッションである。学生はまず事前にケースを読み、与えられた設問の解答を準備する。ケースの理解度は通常それまでの経験に依存した限定的なものに留まる。グループディスカッションでは数人の学生と意見を交わす。自分の考えが整理され、クラスディスカッションのよい予行演習となる。講師に導かれるクラスディスカッションでは、様々な観点や考え方に触れ、多様な立場や関係を配慮できるようになる。

2. ケースメソッドを用いるメリット: ケースメソッドを用いるメリットには次のものがある。学生は、既習の知識・理論を応用的に理解すること、多様な考えを受容し自らの考えを他者に説明できること、さらに、専門職教育の場合は、専門職者としての考え方・態度・倫理感を形成できること、等である。ケースメソッド授業が要求する学習活動により、学生は、授業外学習に時間をかけ(単位の実質化)、授業に主体的に参加する(アクティブラーニング)。授業に主体的に参加した学生は授業への満足度が高く、また学習内容の定着度も高い。そのため、大学にとっては、学生による授業評価も成績評価も高い授業を提供していることになり、教育活動の説明責任を果たすうえでも有益である。

3. 運用を成功させるための留意点: 学生が発言しなければケースメソッド授業はうまくいかない。発言が出にくい理由として、学生が授業のなかで発言することに慣れていない(どう発言していいかわからない)ことや、本気で話し合うことを好まない(発言によって傷つけ合うのを恐れる)こと、また講師もディスカッション授業を受けた経験がない(その意義や導き方を知らない)ことなどが挙げられる。学生がクラスは寛容的であると認識し、反論されても礼節を保ったものであると予測できれば、批判し批判される勇気をもつことができるため、発言が出てきやすい。ケースメソッド授業を成功させるためには、そうした授業づくりへの工夫や、FD などによる授業技術の研鑽が講師に求められる。

○ 2012年12月21日 第113回招聘セミナー

「中国の高等教育における国際教育戦略」



講師：黒田 千晴 (神戸大学留学生センター 准教授)

日時：2012年12月21日 13:30～15:00

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概要：これまで中国は留学生送り出し大国として語られることが多かった。しかし、今日において中国はすでに日本を上回る留学生受け入れ大国であり、2020年までに50万人の留学生を受け入れる計画が進行中である。また、トランスナショナルプログラムなど、高等教育の国際化に向けてさまざまな戦略を打ち出している。このセミナーでは、急速に変貌しつつある中国の国際教育交流戦略について紹介し、日本の高等教育への知見を得たい。

講演要旨

1990年代以降、社会主義市場経済体制の影響で、中国の高等教育は「大衆化」、「市場化」、「国際

化」、「重点化」の方向で発展してきた。現在では世界トップレベルの研究・教育水準を誇る大学が出現しつつあり、大学間の格差も拡大している。また、高等教育の大衆化に伴い、教育機関の多様化が著しくなった。しかし、学費の高騰による家庭の負担増加、卒業生の就職難などの問題も多数存在し、中国の高等教育の現状は複雑である。

2010年、中国教育部は『国家中長期教育改革・発展計画綱要(2010-2020)』を公布し、「教育強国」・「人材資源強国」の目標を明確にし、教育の対外開放の拡大を強調した。また、外国の優れた教育資源の導入、外国人留学生受け入れの拡大などの政策を打ち出した。同年度、中国は「中国留学計画」を公布し、「2020年までにアジア最大の留学目的国とする」、「中国のことをよく知り、中国に友好的な素養の高い留学生を大量に育成する」などの目標を掲げた。中国の高等教育機関に在籍している留学生は、中国の近隣諸国からの留学生が最も多く、また非学歴留学生が半分以上などの特徴があるため、中国政府は学歴教育・専門教育の拡充の目標を掲げ、中国の特色を生かし、国際的に競争力のある学位プログラムを重点的に支援などの施策を打ち出した。

留学生を対象とした英語を教授言語とする学位プログラムの開設は著しいが、北京大学、清華大学等のトップレベルの大学では、学部レベルの授業は中国語のみと規定されている。大学院レベルでは英語を教授言語とするプログラムが中国のトップレベル大学で行われている。また、中国の大学は留学生のニーズに合わせた学位プログラムを開設し、日本の強力なライバルになっている。中国の大規模・スピーディーの留学生受け入れの姿勢に対して、日本の大学がどのように自分の強みを生かし、留学生獲得市場において優位に立てるかを検討すべき時期にきている。

○ 2013年1月8日 第64回客員教授セミナー

「わが国の専門職養成をめぐる動向と課題」



講師：橋本 鉦市（東京大学大学院教育学研究科 教授）

日時：2013年1月8日 16:30～18:30

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概要：現在、わが国の専門職養成は大きな転換期にある。2003年度から新設された「専門職大学院」はそれを象徴しているが、従来の学士課程の専門(職)教育においても改革・改編が進められている。本発表ではそうした動向に触れつつ、わが国の専門職全体を視野に入れた上で、高等教育機関における養成プロセス、量と質のコントロール、政策領域の生成と変容、アクターの布置構造などを整理し、今後の展望と課題について考察してみたい。

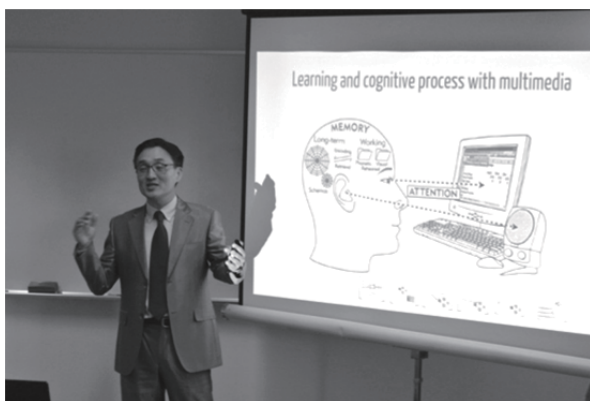
講演要旨

専門職の定義は様々であるが、高等教育レベルにおける養成プログラムの特性に着目するならば、市場に対するプログラムの閉鎖性とその期間の長さという2つの軸によって専門職化の度合いを測ることが可能である。昨今ではどの専門(職)教育も養成プログラムが長期化し、また閉鎖化・非弾力化・計画化が目指されてきており、専門職化の成熟度合いを高めつつある。ただし、いずれの専門(職)教育においても、専門的市場のニーズを過不足なく充足させる量(数)の計画的な供給と、専門的業務を遂行するための教育プログラムの質の維持・保証という問題は大きな課題となっている。また現代の専門職養成は、①高等教育(大学などへの入学選抜→専門準備教育→専門教育→実習→卒業試験)→②資格試験(国家試験などによる評価・選抜・認定)→③現場での採用・研修・より高次の資格取得・生涯学習、などといった一連のプロセスが想定・設定されている。そして上記の専門職の量と質は、この3つの段階ごとに様々な方策・方略によるコントロールが可能である。ここで重要となるのは、それに関与するアクターとその戦略・ロジックである。専門職養成に関わるアクターとしては、大別して①国家(政府)セクター、②高等教育セクター、③市場セクターという3者が想定できるが(アクター群の政治権力的な体制=「レジーム」)、近年では国家・政府といったアクターだけではなく、他の様々なアクターがこの養成レジームに関与・介入の度合いを強めてきている。特に外国籍の専門的人材の流入という課題は、従来の一国的なレジームに国外からの圧力というファクターを含み込まざるを得なくなってきた。

以上のように、近年の専門職養成の動向を俯瞰すると、養成プログラムの「長期化」、カリキュラムの専門的市場との「レリバンズ化・標準化」、専門職の量や質に関わる「計画化・管理化」、国内外における「流動化」といった方向性が確認できるが、その背景には専門職市場におけるコンピテンシーについて、その質を保証する養成プログラムを求める現場や顧客からの要求・要請の高まりがあり、またそうしたニーズの的確な把握とそれに従った計画的な供給の必要性などが高まってきていること、またこれと並行してこれまでの福祉国家体制が緩んで市場主義的でグローバルな志向が高まった結果、レジーム内外の様々なアクターが多様な意図と恣意を持ち込み、その複層性が増してきていることなどが指摘できよう。

○ 2013年2月20日 第65回客員教授セミナー

「大学の授業における認知的負荷量のマネジメント—学習効率性を高めるために—Leveraging Learning Effectiveness by Managing Cognitive Load for Instruction」



講師：柳 志憲（国立全南大学教育学部 副教授）

日時：2013年2月20日 16:00～17:30

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概要：現代の高等教育環境においては、情報過多によって教育の質はむしろ低下しつつあり、学習者にはますます複雑な学習が求められるようになった。このため、授業担当者にとっても、学習者にとっても、より効率的な教授方略が必要とされている。

このセミナーでは「認知的負荷理論」(cognitive load theory)の観点から、学習者の認知要求についての理論的根拠を提示する。認知的負荷理論のねらいは、授業担当者がより効率的な教授環境を工夫することにより、最終的な学習成果を高めることにある。

最初に、認知的負荷理論の基本的な考え方、およびこれを授業設計に援用する方法を紹介する。次に、授業設計の際の基準設定や学習成果の測定方法について言及する。最後に、「認知的効率性」(cognitive efficiencies)を測定するための具体的な方法を提示する。

備考：このセミナーは英語で行います。日本語通訳はありません。

講演要旨

Overview

Improving learning outcomes has been a very important issue in education for social accountability. However, current instructional environment is not friendly particularly in higher education because of too much information to teach. Information overload erodes the quality of instruction. Not only is the increased amount of information, but so also is the complexity of problems college learners must puzzle out. More information and demanding tasks require more efficient instructional strategies for learners. This seminar is to provide theoretical rationales to manage learner's high cognitive demands in terms of cognitive load theory. Cognitive load theory is to help instructors to design their instruction become more efficient instructional environments finally leading to faster and better learning outcomes. The purpose of this seminar has two folds. First purpose aims to introduce basic concepts of cognitive load theory and its' application for instructional design. Design principles and measurement methods will be presented. Second but more importantly is to provide practical methods on measuring cognitive efficiencies. Furthermore this seminar will lead trends and issues for the implications of cognitive load theory. This seminar consists of four sections. 1) Section one explains cognitive process of learning and the purpose of schema construction. It will provide psychological foundations of cognitive load theory. 2) Section two presents the types of cognitive load and its relationship. This section will introduce key concepts of cognitive load theory and their relations. 3) Section three provides instructional design principles for efficient cognitive management. It will explain what cognitive process can be exploited in cognitive overload. 4) Section four proposes the measuring methods of cognitive load and learning efficiencies. It can be defined as a tool that teachers use to measure student grasp of specific topics and skills they are teaching

Objectives

Participants will:

Gain a better understanding of cognitive process of learning.

Identify different types of cognitive load and their roles in learning.

State instructional design principles to improve learning.

Apply measurement methods of cognitive efficiencies for instruction.

Session structure

Introduction 5 min. – Background information

Section one 15 min. – Cognitive process and schema acquisition

Section two 15 min. – Types of cognitive load

Section three 25 min. – Various instructional design principles with examples

Section four 20 min. – Measuring learning efficiencies and issues

Discussions 10 min.

教職員海外派遣事業

教職員海外派遣事業概要

目的

- ・先進的に FD・SD を行っている海外の実践を学び、日本への示唆を得る。
- ・日本での FD・SD の取り組みを異なる視点からとらえ直す機会を持つ。

海外研修先

参加学会 : 2012 POD Conference

期 間 : 2012 年 10 月 26 日(木)～29 日(日)

開 催 地 : アメリカ合衆国ワシントン州シアトル市

会 場 : シアトルシェラトンホテル

POD 大会に参加することの意義

- ・POD は Professional and Organizational Development Network in Higher Education の略であり、大学における教授法、カリキュラム、組織開発を目的とした学会であり、教員と職員、専門家(いわゆるファカルティ・ディベロッパー:以下 Fder と略す)が多角的な見地から大学教育をとらえることが可能である。
- ・POD の主な参加者は、全米各大学の FD 部門担当部署(大学教育センター、教授・学習センターなど)に所属する教職員であり、実践報告やディスカッションを通して、自分の大学に知見を持ち帰ることができる。
- ・日本ではまだ十分に確立されているとはいえない、大学における専門職のあり方についても知見を得ることができる。

2012 POD Conference のテーマ

Pencils & Pixels: 21st Century Practices in Higher Education

鉛筆とピクセル(意識:アナログとデジタルの融合):高等教育における 21 世紀型の実践

研修参加者

近田 政博(名古屋大学 高等教育研究センター准教授)

山田 利幸(名古屋大学 文系教務課 共通業務グループ掛長)

塩井 洋介(名古屋大学 文系教務課 共通業務グループ掛員)

1. 今大会のテーマと重点課題

今大会のテーマは **Pencils & Pixels: 21st Century Practices in Higher Education** であった。ここからは、デジタル化の進む高等教育において鉛筆とピクセルすなわち、教育におけるアナログとデジタルの関係はどうあるべきか、どのように融合させるべきかについて、さまざまな実践知を通して議論を行い、示唆を得ようとする意図がくみ取れる。プログラムによれば、個別セッションの重点課題については、次のようなものが挙げられている。

- ・非常勤教職員の能力開発
- ・執行部のリーダーシップ
- ・教育活動の評価
- ・多様性
- ・大学院生の職業能力開発
- ・組織開発
- ・Fder の能力開発
- ・新任教員のスタートアップ
- ・持続性
- ・テクノロジー

ただし、今回のテーマに鑑みて、個別セッションは教室空間におけるティーチング&ラーニングに関するものが圧倒的に多かった。

2. 大会運営上の工夫

POD 大会の中核は 75 分程度の枠で平行して設けられている対話型の分科会(セッション)、および全体会である。このほか、さまざまな趣向を凝らした行事が提供されている。

大会にはじめて参加する人のためには、オリエンテーションのセッションが設けられている。このオリエンテーションでは会長による歓迎のスピーチに加えて、各種ゲームが取り入れられるなど、初参加者が打ち解けやすいようにさまざまな配慮がなされている。初日のディナーにおいても会長が **POD** はどうあるべきかについて基調講演を行い、さまざまな問題を提起した。二日目のディナーでは優秀会員の表彰式も行われた。このほかにも、外国からの参加者のための朝食会など、随所に交流行事が設けられていた。最後の全体セッションでは、今大会で得た知見を各大学にどのように持ち帰るかという観点で総括が行われた。こうした特徴からも、POD の本質は人脈づくりとリトリート(日常業務から離れて自分を見つめ直すこと)にあるようだ。

なお、日本からは名古屋大学以外に同志社大学、愛媛大学、帝京大学、日本教育大学院大学、徳島大学、北陸先端科学技術大学院大学から教職員の参加があった。

3. 参加したセッションの概要

“Is there an App for that?” Faculty Mindset and Motivation

教員の志向に合ったアプリ、意欲を高めるアプリはどんなものか？

大学教員は自分がなじんだ従来型の教育ツールを使いたがるものである。新しいテクノロジーの効用を知ってもらい、それを活用してもらうにはどうしたらよいか。iPad のクラウド型アプリケーションの評価と有効性を検証した。新しい教育テクノロジーの受容に関する教員向けのアンケートの結果、および教室でのモバイルツールの利用適切性に関するアンケートが紹介された。教員が新しいツールを用いることの敷居を低くするために、Fder はどのような支援をすべきかについて意見が交わされた。

このテーマは、たとえば e ラーニングツールを効果的に用いるにはどうすればよいか、iPad や Facebook を大学教育にどのように活用できるかなど、日本の大学教育の文脈においても重要な意味を持つだろう。

Teaching, Learning and Librarianship: Reaping and Benefits of Collaboration

教授・学習とライブラリアンの関係：協働関係をどう築くか

教授・学習センターと図書館職員(ライブラリアン)との関係は、アメリカにおいてもそれほど緊密だったわけではない。この重要性が指摘されるようになったのは近年のことである。Stonehill College では、学生の情報リテラシースキルを高めるための FLPP プログラム(Faculty Librarian Partnership Program)を、Fder と教員、ライブラリアンの三者で協力して立ち上げた。この発表ではその意義と有効性について議論を行った。

日本の大学図書館は学習支援に着手するところが増えつつあるが、図書館職員が教員と連携してプログラムを提供するところは少ない。学生が情報リテラシーのスキルを高めるためには、従来型の「待ちの姿勢」では不十分であり、カリキュラムやプログラムづくりに図書館職員が積極的に関わることが求められる。

Acting up: Rehearsing for the Future Using Interactive Theater

羽目を外そう：双方向型の演劇を教育活動に取り入れる試み

ワシントン大学教授・学習センターが提供する演劇プログラム(「教授学としての双方向型演劇」：Interactive Theater as Pedagogy)の紹介を通して、大学における差別や抑圧、葛藤に関する問題について協働して問題解決を図るために、演劇プログラムがどのような可能性を持っているかについて議論した。このプログラムでは教員や大学院生が寸劇のアクターを演じる。そして、参加者に多様性や社会正義とは何かを考えさせ、問題を抱えた状況のなかで、当事者としてどのように対応すればよいかを提案する能力を高めることをねらいとしている。

このセッションでは、4 人程度の小グループに分かれて、各グループで大学教育現場における象徴的なシーン(いじめ、ステレオタイプなど)を選んでシナリオをつくり、それを即興で「彫刻」(静止図)を演じることが求められる。これを他のグループの人がコメントや修正を加え、最後にこの手法の課題や効果について全員で議論を行った。

アメリカでは FD に演劇プログラムを取り入れる大学が増えている。理論や概念よりも、身体を使って協働して取り組めるプログラムの方が盛り上がるし、参加者全体で一体感を得やすい。しかし、日本人

の感情表現は概して即興性やドラマツルギーに乏しいので、この手法が日本の大学でどのくらい共感を得られるかは微妙だ。参加者に恥ずかしいと思われたり、何の効果があるのかといった反発を受ける可能性もあるだろう。それでもなお、大学教育改革・改善の活動に学生を巻き込んでいく上で、演劇プログラムは大きな可能性を秘めているように思われる。

The End of Wonder in the Age of Whatever by Michael Wesch(Kansas State University)

基調講演:「なんでもあり」の時代における感動の終焉

メディアとテクノロジーの進歩によって、「何でもあり」の時代が到来した。しかし、同時に人々の注意力は散漫になり、互いに疎外感を強め、感動体験を喪失しているかもしれない。こうした現代において学生に伝えるべきことは、単なる知識の羅列ではなく、好奇心、知的探求心、「他者の心の痛みを感じ取り」(embrace vulnerability)、他者に共感し、得られた知見を自分の行動にフィードバックさせることではないだろうか。

これまでの大学教育では論理的な思考を行う「悟性」の発達を促すことに重きを置いてきた。しかし、世界を理解し、社会をよくするためには、悟性と同時に「感性」を高めることも重要ではないか。大学教員の多くは、学生の感性にどう訴えるかという点で努力を怠ってきた。学生の共感度を高めるような授業を実現するには、まず教員および職員の感受性を高めるような工夫や仕掛けが必要であろう。

International Perspective on Building a Teaching Center

教授センター設立に関する国際的観点

ミシガン大学学習・教授研究センターがアフリカのウガンダにあるマケレレ大学教授センターの設立に協力した経緯と内容が紹介されたあと、そのニーズ調査のための調査票案が提示され、改善方法をめぐって意見が交わされた。アメリカの大学における教授学習センターの経験とノウハウを途上国に活かすことは可能であろうか。その場合にはどのような点に留意する必要があるだろうか。

最初に必要なことは、当該国における学習観や教育観を知ることだろう。たとえばティーチングアシスタントの役割を議論する前に、授業をすることはどういうことか、教員と学生の関係性はどうか、などについて把握しておくことが必要だろう。国際的な協力関係を構築するには、相手国の状況に合わせた「柔軟性をもった実践」(elastic practice)が必要であろう。

Habits of Highly Effective Writers

書く名人になるためのコツ

大学教員やFderでさえも、アカデミック・ライティングの体系的な教育を受けた人は非常に少ない。ましてや学生に書く名人になることを期待するのは容易ではない。まずは、教員自身が文章を書く際にどのような習慣や感情を抱いているかを振り返る必要がある。このセッションでは、より生産的な書き手となるためのコツとして、①毎日書く、②まず書いて、あとで修正する、③書く時間を優先する、④進捗状況をチェックする、⑤他人と一緒に書く、⑥走り書きをする、⑦書くことに没頭する、⑧書く計画を立てる、⑨どの書き方が自分に合っているかを試してみる、⑩書くことを楽しむ、の十箇条を提案した。

学生に書くことを奨励する上で、教員自身が自分の書き方について振り返り、その特徴や習慣、あるいはバイアスについて自覚することは有益だろう。

FD に成功している大学は何が違うのか

学生が粘り強く学習に取り組んでいる大学、教員が優れた授業実践に成功している大学は他の大学と比較して何が異なるのだろうか。調査の結果から、こうした大学では教員、Fder、大学執行部の三者の関係が良好で、Fder が触媒的な役割を果たしていることがわかった。Fder は、何よりも執行部と良好な関係を築くこと、執行部と連携して仕事をする事、教員と結びつきを深めること、全学的な学習コミュニティを築くことが重要である。

本発表は Fder が教員との関係だけでなく、大学執行部をいかに味方につけるかという点が重要であることを主張した点で、POD のなかでは希少な発表であった。なお、英語の administrator はアメリカでは学長や副学長などの執行部を指すが、イギリスでは事務職員一般を指すことが多く、意味が大きく異なるので注意を要する。

4. まとめ

POD では単にティーチングの知識やスキルの共有にとどまらず、互いの学びを尊重する文化が根づいている。翻って、日本の専門学会は新しい知見を示すことに重きが置かれており、協調的というよりもむしろ競争的である。POD では参加者同士が知的バトルを繰り広げる専門学会のような光景はほとんどみられなかった。互いの人脈を拡張、他者の意見を傾聴する文化を身につけるといふ点では、POD は絶好の学習機会であると思う。

また、いずれのセッションも発表者と参加者が対話を重ねながら進めていく方式をとっており、協働学習や双方向型学習が望ましいというのが、参加者の暗黙の前提になっているようだ。日本の大学教育では、むしろ双方向型学習や協働学習に対して、不慣れな教員や学生がストレスを感じるが多い。過度の対話や議論は参加者を疲れさせることもある。POD の文化は日本の大学教育現場では通じにくい点があるかもしれない。

5. 残された課題

POD のメンバーの中核は Faculty Developer と呼ばれる専門職であり、元教員もいれば、教員と兼任の人もいる。彼らの能力開発の対象は大学教員、大学院生、および自分自身である。一方、事務職員の能力開発については、POD は必ずしも射程に入れていないように見受けられた。あえて、日本の大学事務職員の文脈に置き換えるなら、POD は「教員あるいは教育活動をどう支援するか」という点では参考になるだろう。しかし、事務職員としての能力開発という点では直接的な示唆を得にくかったかもしれない。

また教職員のリーダーシップ能力開発や大学院生に対する研究指導能力など、授業以外で求められる大学教員の重要な職務遂行能力については、教授・学習のあり方を重点的に議論した今大会ではあまり取り上げられることはなかった。来年度以降に期待したい。

1. 参加セッション等の報告

(1) Maintaining Faculty Development Excellence in Times of Transition

高等教育センターの周りで事務、センター長、比較的上位の教職員に異動があった際、どのようにそれに備え、センターとして実施しているプログラムの品質をいかに保つか、というセッション。発表者から議論の枠組みとなる下記の6つの方法が示され、それぞれについて具体的な実施案を会場の円卓グループごとで話し合いまとめるよう指示があった。実際の円卓グループでの議論は、互いの経験談を次々に出し合い書記役がそれをまとめるという感じで、議論の終了後はグループごとに分かれて発表を行なった。その後、セッションのまとめとして発表者から事前に準備した具体的な実施案が発表された。

6つの方法	具体的な実施案（一部抜粋）
① 短期目標の再構築	- センターを監督する立場の人物に会い、プログラムやその他内部の変更について事前に説明する
② 利害関係者に自身の存在価値を伝える	- センターの最近の成果をまとめ、学内の上層部に見てもらえるようにする - 異動の動きがある早い段階で、それに関わるキーパーソンとミーティングをする
③ 組織の安定性を保つ（少なくとも見かけ上は）	- 現状維持。継続する必要がある事業のうち、外部からの目につきやすいものとする。そうでないものを判断する。 - 学内の他部署や教員との連携を強くし、コラボレーションを行なうことで事業やそれにかかる費用を分担する。
④ 情報収集のため、学内外とのネットワークと組織としての知識を高める	- 大学の最新の認定評価書や戦略的プランなどを読み、情報収集を怠らない。
⑤ 不慮の事態に備え運用計画の代替案を用意しておく	- 教員の期待が高いプログラムは特に代替案を用意しておく。 - 必要最低限のサービスが提供できるよう、他の部署と連携する
⑥ 必要に応じて資源（人、金）の分配を見直す	- 本当に必要なものしか買わない - 学内の他部署と連携し、費用や時間的、人的コストを分担する。 - 学生を雇うことで経費を抑える

参加者は25人ほどで、参加したセッションの中では比較的賑わっている方だった。異動とそれに伴う組織の運営方法などの変化は、常日頃の組織、役職でもあることと考えて参加した。実際に扱っていた話題は教員の異動だったが、アメリカの高等教育センターの背景に関する知識が無かったためセッションの内容を理解するのに時間がかかった。PODに参加している Faculty Developer などの多くは期限付き雇用などテニユアではない不安定なポジションであり、それゆえ学長や役員など大学上層部の評価やセンターへの関心が低かったりすると経費削減の対象が自分の人件費にまで及んでしまう可能性がある。そのため大学上層部に異動があった場合、継続して自分やセンターの成果や存在意義、必要性をアピールし、理解を得ていかなければいけない状況にあるとのことだった。とはいえ表に挙げられたアイデアは日本の大学でも考えられるものであり、既にやっているのではと思えるものや、試してみる価値があると思え

るものもあった。また人に説明する、人とミーティングをする、連携するなど、セッションを通して人に働きかけることを重要視している点が興味深かった。

(2) Welcome for First-Time POD Conference Attendees

初回参加者が POD および年次学会がどのようなものなのか理解するためのオリエンテーション。前会長など数名がリラックスした雰囲気ですれ違ひと POD の概要説明をした後、他のセッションと同様インタラクティブに進められた。ホールを世界地図に見立てて出身地別に別れて立ち参加者を国別に俯瞰したり、運営委員会のメンバー数名が一人ずつ会場に散らばって立ち、参加者は興味のある人の所へ行き、その人なりの POD にまつわるストーリーや説明を聞くというスタイルで POD 紹介が行われたりと、様々な工夫がされていた。POD 全体の参加者の国別割合は不明だが、このセッションでは参加者の8~9割ほどがアメリカ合衆国からで、その他に自分も含めた日本人3人、イギリス、モロッコ、中国からの参加者もいた。

(3) Engaging International Students through Blended Learning

21世紀の高等教育における2つの大きな流れ:留学生の増加とブレンド形態による教育について考えるセッション。教育現場において直面する留学生に関するさまざまな問題を明らかにし、それに対応するためのブレンド型教育、学習方法を考えて提案することで教職員をサポートする方法を考える。セッションは大まかに、前半は留学生、後半はそれに対応するためのブレンド型教育というように分けられていた。

セッションは8名ほどの参加者の簡単な自己紹介から始まり、続いて発表者の大学(オレゴン大)における留学生の割合、国別割合など基本的なデータが示された。全米では学部比べて大学院での留学生の増加率が伸びているのに対して、オレゴン大では学部生の増加が著しく、出身国別の内訳では、1位:中国、2位:韓国、3位:日本とのこと。次に参加者全員で経験した留学生に関する問題をフリートークで挙げていった。

- ・授業を欠席した学生に理由を聞いたところ、母親の話を聞かなければならなかったとのこと。家族関係をとても優先する文化の国から来ている?
- ・中国人留学生が質問をしてこない。
- ・アメリカの学生が遠慮なく教授に質問をする関係を失礼だと考えている。(中国人留学生)
- ・同じ国の学生同士で仲良くなると、そのネットワークで情報共有し授業の内容を理解はしているようだが、相変わらず直接質問に来ることは無い。
- ・授業が終わってからオフィスへ質問に来る。そのためオフィスアワーを十分にとる必要はあるが、とはいえオフィスで授業と同じことをもう一度やるわけにもいかない。
- ・男尊女卑が強い文化出身の男子留学生が女性教員の指示をあまり尊重しない。

この後、前半のまとめとして、オレゴン大が調査した留学生に関する問題が示された。(一部抜粋)

I. 一般的な問題	
文化的背景知識	
習得語彙数	入学時点で英語の語彙数がネイティブに比べて不足している。 3000-5000 words(= TOEFL 500 点程度 十分とはいえないレベル)を中心に、下は 2000 words から上は 50000 words (主に大学院生)まで幅広い。

II. オレゴン大でみられる問題	
A. リスニング理解力	半分以上の授業で理解度の高い学生とそうでない学生の差が大きく開く。
B. 授業での議論や(積極的な)参加	授業中に発表をする、自分のアイデアや考えクラス全体に伝える、自分から質問に答えるなど、授業に能動的な反応することをためらう。
C. グループワーク	授業中にアメリカ人学生と混合の5人以上のグループで作業をすることをためらう。
D. 試験	長時間問題を解かなければいけないこと、辞書を使えないこと、時間制限があることが試験中のストレスとなっている。

次に発表者が替わり、テーマはブレンド形態による教育に移った。前半の議論が盛り上がり時間がかかったためか、こちらはあまり議論する時間は無く、事前に準備された下記のような研究内容が駆け足で紹介された。

ブレンド形態による教育を設計する際考慮すべき点
<ul style="list-style-type: none"> - 留学生は講師の話を理解に時間がかかるため、授業に十分に集中できない。 - 留学生は内気なため、大勢の学生の中で目立たなくなってしまう(教員の目が届きにくい) - 留学生は授業中あまり発言しないため、書く、読むといった動作が中心になってしまう。 - 留学生は人前に出たがらないので、周囲との文化的なつながりを失ってしまう。 - 留学生は自分だけで学習しようとするので、学習速度がマイペースになってしまう。
具体的なアイデアの例
<ul style="list-style-type: none"> - Citation のモジュールを組む - Reading, Writing, Grammar のモジュールを組む - Language Practice のモジュール (Voice boards を使う) - クラスの Facebook や chat room を作り利用する
Universal Design を心がける
<ul style="list-style-type: none"> - 学生が学習する際に障害となるものをなくす。 - ステレオタイプに陥らないようにする。 - 学生がアクセスしやすいものにする。

このセッションは自身の現在の担当業務に関連のある留学生というテーマを取り扱っていたため、今回参加した中では議論の内容も一番よく理解でき、参考になる部分も多かった。ただ前半と後半のテーマの関連づけはあまりなく、それぞれ別個の発表を聞いているという印象だった。留学生が抱えているさまざまな問題(自明と思われるようなものから、今まで気づいていなかったものまで)を整理、分類して明らかにして示している点で大変参考になった。留学生の事務業務においても、こういったことを認知、理解し、それをふまえて窓口、メール、掲示板など彼らへの接し方を工夫してゆけばスムーズに業務遂行できるのではと思った。

またセッション中の他の参加者とのやりとりを通じて、中国人や日本人などアジアの留学生が彼らの目にどのように映っているのかを肌で感じることもできたのも大変興味深かった。概ねアメリカの学生に比べてあまり積極的に発言しない、と認識されているようだが否定的な意味は無く、それ自体も取り組むべき課題の一つと捕らえているように感じた。

(4) Getting the Most Out of Your Budget: Financing 101

予算縮減はほとんどの Faculty Developer にとって死活問題である。どうすれば今ある予算を最大限に活かせるか、どうすれば新たに歳入を増やすことができるか、というテーマのセッション。20人ほどの参加者が3つのテーブルごとにグループ分かれて、発表者の指示のもと予算を増やす方法や支出を減らす方法などをあげていった。研究助成金、教育助成金に応募する、学内外のパートナーと共同でプログラムを実施してパートナーが持つ資金をシェアさせてもらう、理事や研究科長などに直接掛け合う、同窓生に寄付を募るなど日本でも考えられる色々なアイデアが出された。また予算を減らされないために、日頃の業務量とそれに必要な人や時間のリソースをいつでも提示できるよう準備しておく、よい年次報告書を書く、といった点も挙げられていた。

同じ時間帯の参加しようとしていたセッションがキャンセルとなったため、急遽他に何か無いかと探して参加した。限られた予算を最大限に利用するというテーマは万国共通であり、セッションで挙げられていたアイデアはほぼ日本の大学にも通用すると思われた。

2. POD 参加のまとめ

会場は全体的にとっても和やかで、部屋に集まって時間が来たらすぐ議論が始まるようなフランクな雰囲気。最初に少し戸惑ったほどだった。日ごろ自身の大学で FD を進めるべく働いている Faculty Developer が年に1回、この POD で一同に会うことで抱えている問題を共有し、情報を交換し、ネットワークを広げようとしているという印象があった。会長が挨拶で仰っていた「Welcome back home」という言葉は POD の会場の雰囲気をよく表していたように思う。また大会中にセッション内外で話をした方はみな自分に対しても親切で、どのセッションでもこちらから質問をすると色々と教えてくださった。

一方 POD が取り扱う FD という分野が自分の現在の担当業務と関連が薄かったため各セッションの内容を完全に理解できたというにはほど遠かったように思う。とはいえ、その中でも自分の現在の担当業務も関連がありそうなセッションにもいくつか参加することができたし、その他のセッションも大学職員としての視野を広げるという意味では参考になるものだったのでと思う。また各セッションのテーマもさることながら、英語ネイティブの議論に加わること自体が大変貴重で刺激的な体験であり、これから英語力を高めていきたいと思うよい動機付けになった。

2012 Annual POD Conference 参加報告書③

名古屋大学文系事務部教務課

山田 利幸

1. はじめに

平成24年10月25日から28日に、アメリカ合衆国ワシントン州シアトルにおいて開催された Professional and Organization Development Network in Higher Education (高等教育専門組織開発ネットワーク;以下POD) 年次大会(2012 Annual POD Conference)に参加する機会を得た。

POD 年次大会には例年全米に加えて日本を始めとした各国から多くの教職員が参加しているとのことだが、残念ながら今回は日本からの参加者は私たち名古屋大学からの参加者を含め10名前後と少々寂しいものとなった。

今大会のメインテーマは"PENCILS & PIXELS"、21世紀の高等教育におけるハイテクとローテクの活用についてだったが、もちろんこのメインテーマに直接関係しない内容も多数あった。

大会のプログラムの構成は、講演とセッション及び様々な交流会であり、私たち日本からの参加者もアメリカ人参加者と同じ立場で自分の関心に沿った内容を選択し出席した。

講演は大会場での座学、セッションは小部屋でスクール形式あるいは丸テーブルを囲んでの討論であったが、いずれも出席者は積極的に発言しないとそこにいる意味が無いといった雰囲気であった。出席者同士の小グループで討論したり、具体例をお互い挙げたりといったことも頻繁に行われた。

大会を通して最後の締めくくりであるアンカーセッションでは参加者全員に対して、「あなたが普段キャンパスで抱えている問題をに対して、今大会で得たヒントは何か」という問いかけがなされた。私としてはその答えとして「違いを知ること」と「よく説明をすること」を挙げて、以下この二つにキーワードに沿って今大会参加を報告したい。

2. 参加したワークショップ、セッション、講演等について

W9:Facilitation Techniques that Move People and Projects Forward

ワークショップ「人々と計画を前進させる技術」

ファカルティ・ディベロップメント及びスタッフ・ディベロップメントの立場から、関係者を巻き込んで計画を前進させるための技術・手法を扱ったワークショップであった。

要点は、本質を理解し関係者によく説明をして理解・協力してもらうということ、具体的な技術・手法としては、①どうやって議論を明確な目的や行動に導くか(目的、反応、解釈、結果の明確化など)、②どうやって関係者に関与を促すか(ロードマップの作成など)、③どうやってグループが適切な決定をするための手助けをするか(コンセンサスの形成など)、④どうやってグループが複雑な問題の実行可能な解決へ向けて協力する手助けを出来るか(戦略的な計画遂行のデザインなど)の各側面について話し合われた。

文化の違いから全てをそのまま日本で活用できる訳ではないが、アメリカという職場でも皆が自分の意見を積極的に述べて前向きなのかと想像していたらそうでもなく、意図的に関係者を巻き込んでいく努力をしているということだった。

ワークショップ終了後にプレゼンターと直接話したところ、そうした努力が大学を運営するためのデモク

ラシーだとのことだった。ちょうどアメリカは大統領選挙の時期ということもあってこの言葉には感銘を受けた。

Learner-Centered Teaching: Where the Pixels Meets the Pencils

セッション「学習者を中心にした教育:ピクセルとペンシルが会う場所」

ピクセルとは「画素:画像の最小要素」であり、今大会のテーマでもある"PENCILS & PIXELS"、伝統的な技術と現代的な技術を教育の場でどう活用するかを扱ったセッションであった。

まず現代的な技術、具体的には主にIT技術で教育に活用できるものは何があるかを参加者がリストアップすることから始まった。リストアップされたものにはブログ、Twitter、Facebook、YouTubeなど日本でも馴染みのあるものから、聞いたことのないものまで多岐に渡った(聞いたことのないものは、最先端の技術もあれば日本の実情には合わず普及していないものまで様々だと思われる。気になっていくつか調べてみたところ Clicker や Voice Thread などは面白く活用できそうである)。

更にそれらのIT技術がどう役立つのか、プレゼンテーション、フィードバック、コミュニケーション、情報収集などの項目に区分けされた。

その上でそれらがファカルティのメンバーにどのように共有されるべきかが議論された。共有されるためには開放的な姿勢で新しい技術がどう役に立つのか、問題を解決してくれるのかを伝えることなどが挙げられた。先のワークショップとも通じて、問題点あるいは本質を明確にし、それを丁寧に説明することが強調されていた。

The End of Wonder in the Age of Whatever

講演「何でもの時代における感動の終わり」

大会のテーマである"PENCILS & PIXELS"に沿って新しいテクノロジーが教育に中でどう意味するかについての講演であった。

IT技術の革新により教育の主眼も for knowledge to knowledge-able、知識そのものの教授から知識を得ることができる能力の育成へとシフトした。その上で学ぶに当たって大切なことは、「知識を探求し (Quest)、関係を持ち (Invite Connections)、傷つきやすさを受け入れる (Embrace Vulnerability * ネット上で知ったことを現実で起こっていることとして受け入れるということ)」ことであり、このことによって「確実性を失っていく (Loss of Certainty)」ような「邪悪な循環 (the Vicious Cycle of the Age of Whatever)」に陥ることなく、共感や可能性を持った学びの好循環を作れると説いた。

Excursion 2: An Afternoon at Microsoft

小旅行「マイクロソフト本社を訪問」

シアトルにあるマイクロソフト本社を訪問して、マイクロソフトの人材開発 (Talent Management, Talent Framework) についての説明を聞く機会があった。世界に9万人、本社でも東アジア、南アジア、中東系と見られる多様な社員を擁するグローバル企業の人材開発として期待していたが、内容は一般的な話に終始して特筆すべき点はなく残念な結果となった。

マイクロソフト本社はシアトルのダウンタウンにあるPOD会場からバスで30分ほどの所に位置して、大学のキャンパスを連想させる広大な敷地と建物配置だった。ちょうどハロウィンの時期でおそらく厚生事業の一環として従業員が家族を本社に連れてきてハロウィンを楽しんでいる姿が印象的だった。

International Perspectives on Building a Teaching Center

セッション「教育センターを設立するにあたっての国際的な視点」

ミシガン大学がウガンダのマケレレ大学に教育センターを設立するにあたっての経験から、教育センターを他国で設立するにあたっての国際的視点について、言い換えると文化的な違いから来る問題をどう克服するかを扱ったセッションだった。ミシガン大学のプレゼンターに加え、TV会議システムを通してマケレレ大学のカウンターパーソンも出席した。

実際にミシガン大学がマケレレ大学での教職員、TA及び学生等に対して行った各種アンケートを基に、文化的な違いからどのような問いが無効であったか、どのように調査するのが有効であるのかが討論された。例えばTAの身分や担当する仕事についても、ミシガン大学とマケレレ大学では差異があったとのことだった。

Engaging International Students through Blending Learning)

セッション「留学生との様々な学習をとおしての関わり」

アメリカでの留学生受入について扱ったセッションであり、私の日常業務にいちばん近いテーマだった。プレゼンターはオレゴン大学の教員で、留学生数内訳も中国 955、韓国 205、日本 127、台湾 100、サウジアラビア 92(ヨーロッパ全土からの留学生数とほぼ同じ)と日本の留学生数内訳とよく似た構成だった。

実際の留学生の受け入れから、下記の事例が紹介された。

- ① 学生は自分の学習よりも家族との関係を優先する。
- ② 議論が苦手、特に教員に対して反論を挙げることが出来ない。
- ③ 発音がよく似た英単語同士で意味を取り違えられる。fuel を few と聞き間違えられたので(実際私も聞き間違えた) fuel を energy と言い換えるようにした。
- ④ 語彙の問題から留学生には辞書の持ち込みを認めるべきか否か。

これらの事例を踏まえ、今大会のテーマにも併せて、留学生に対する on-line の教育の可能性についても、on-line によって自分のペースで恥ずかしがらずに学ぶことが出来ると紹介された。留学生が学び難い理由は単純ではなく、学びの障壁を取り除くにはステレオタイプな物の見方を捨てて、留学生が近づきやすくするために最新技術も積極的に使うべきだと説かれた。

私からは自分自身のこの大会での経験を踏まえて、グローバル時代の今、留学生はグローバルに行動することとはアメリカ人のように行動すること(自分の意見をはっきり述べるなど)と認識しているが、実際に自らの内にある障壁(自分の今まで育った文化による規制)を取り払って行動することは難しいとコメントした。しかし、認識したことを実際に行動で表すことが「技術」だとするなら、練習によって習得が可能はずであり、合理的な学習によってそうした技術を効率よく取得できるかもしれない。

Treating Students Equally in Class While Simultaneously Honoring Their Diversity

セッション「多様性を尊重した上での平等な学生の扱い」

留学生をはじめとして多様な学生に対して、特にそれらの学生が問題を抱えた時にどのように対応していくかを扱ったセッションだった。

例題として、アメリカ人には発音しにくい名前の留学生が教員にアメリカでの名前をもっていないのか

問われてとまどうケース、工学部のセミナーに在籍するただ一人の女子学生が疎外感を感じるケースについて討論された。

①自分の中にどのような偏見があるか、②クラスの変化に気がつくこと、③ステレオタイプなものを見方をしないこと、④学生との信頼関係を深めること、⑤何が共通して何が異質なのか、また、それらを理解した上でどのようにクラス内での平等が達成できるか、などが話し合われた。

私自身がこのセッションの参加者の中でただ一人の外国人だったので、プレゼンターにその立場として異文化へ適応するに当たってはどのような心構えが必要かと質問したところ、その答えが"Knowing the difference"「違いを知ること」だった。

これは全くその通りで、異文化の中で自分が適応するにあたって、また名古屋大学において留学生が適応するにあたって、まず違いを知ること、何が、どう、どの程度違うかを知ることによって気持ちにも余裕が出来て適応が出来るように思う。

なお、このセッションのプレゼンターはアフリカ系アメリカ人の男性で、リズムカルに畳み掛けるマシンガントークに特徴があり、その話し方には引き込まれた。言語の違いやリズム感の差もあって日本人には真似できそうにないユニークな教授法だった。

3. まとめ

(1) 違いを知ること

アメリカへの留学生の中でも、例えば中国人留学生などは教員に対して討論する、あるいは反対意見を出すという文化がないので教室の中でも発言しにくいということを何度か聞いた。これはもちろん日本人にも当てはまることである。今回私は

- ①アメリカの大学からの視点(アメリカの大学側としてはそうした留学生をどう扱うか)。
- ②アメリカに来た日本人からの視点(アメリカの大学文化へどう適応していくか)。
- ③日本の大学からの視点(日本の大学における留学生受け入れにおいてはどう対応するべきか)。

と、少なくとも三つの視点で考えさせられた。これら三つの視点もそれぞれの立場が違うからであり、お互いどう歩み寄るかを考えるにあたって、まず違いを知ることが第一歩あり、違いを知るということは多様性を受け入れることで大切なことである。

(2) よく説明すること

POD 年次大会参加へ先だつ 10 月 24 日にワシントン大学を訪問した。その際にキャンパスを案内してくれたボランティアの学生が、入学当初は自分の考えをはっきりと話すことができるようになるまでとても苦労したと語ってくれた。この学生はシアトル郊外の出身だそうで恐らくアメリカ生まれのアメリカ人なのだろうが、アメリカ人でも自分の考えを話すことができるようになるにはある種の心構えと訓練が必要だということと印象に残ったエピソードだった。

私自身も今大会への参加を通して、単なる出席者といえども積極的に発言することが終始求められ、質問の形であってもなんとか発言するように努力した。

アメリカにおいても大学を民主的に運営していくにあたってよく説明すること、またそこから理解と協力を引き出すことが重要であり、ファカルティ・ディベロップメント及びスタッフ・ディベロップメントという立場で

は、なおさら関係者によく説明することが必要とされ、今大会のプログラムでもそのための心構え、また具体的な技術等が頻繁に取り上げられた。

具体的な説明の技術は文化の違いから簡単に日本で応用は出来ないかもしれないが、説明という仕事における基本の大切さを今大会への参加によって改めて感じさせられた。(分かり切ったことまで何度も説明されるのには少々うんざりしたが。)

この経験を踏まえて、日本での日々の業務においても民主的な運営を心掛けていきたい。

(3) その他

PIXELS : 今回の大会を通して、プレゼンテーションに使われるスライドは凝ったものが多かった。スライドに使われる画像が事例そのものだけでなく、比喩を効果的に伝えるために使われることも多かった。センスの良い画像が多く、どこからそんな画像を探してくるのか不思議だった。中にはビートルズの「アビーロード」や日本のテレビゲームのジャケット写真が使われたこともあったが、著作権上は問題ないのだろうか？また、画像には様々なエフェクトが掛けられていてどのようなソフトを使っているのか気になった。

話し方 : ほとんどのプレゼンター(マイクロソフト本社を含めて)は話し方の訓練をしているのではないかと思われた。それほど分かりやすい話し方だった。本学でも教職員に話し方の訓練を施す研修があってもいいのではないだろうか。

(4) 最後に

これまで何度か海外へ出張してきたが、今回はこれまでになく時差ぼけに悩まされた。時差ぼけから回復できなかった原因は、緊張していたからか、あるいはスターバックスのコーヒーを飲みすぎてしまったのか不明だが、恐らくこの時期のシアトルは日照時間が少ないから体内時計がリセットされなかったからではないか。いずれにしろ時差ぼけのために集中力が削がれ英語の聞き取りに苦労した。

しかしアメリカ人同士が真剣に討論していく場に入っていくことは、大統領選挙の時期とも相まってアメリカの討論する文化・デモクラシーを目の当たりにして大変刺激になった。また、今大会の様々なセッションは私にとって以前ミネソタ大学で研修を受けた際から大きなテーマとなっている「多様性 (Diversity)」の受け入れについても考えを深める良い機会となった。

この場をお借りして、今回POD年次大会へ参加する機会を与えてくださった関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

名古屋大学新任教員研修プログラム

○ 平成 24 年度名古屋大学新任教員研修プログラム

日 時：2012 年 4 月 6 日

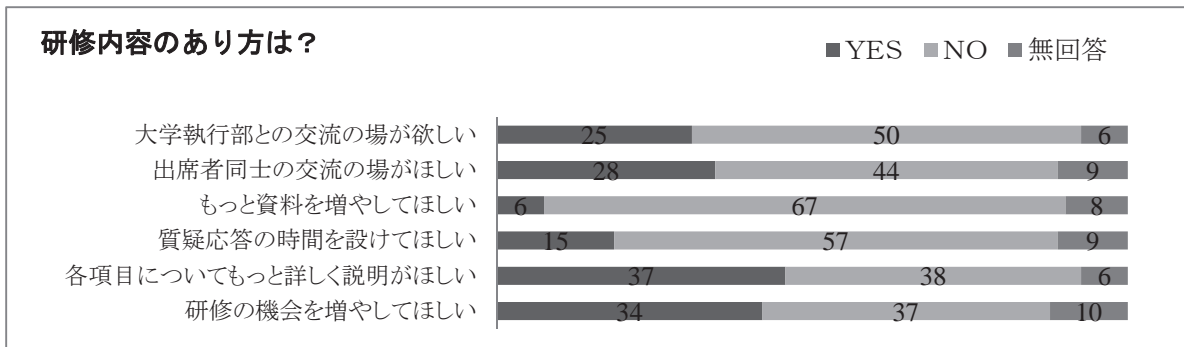
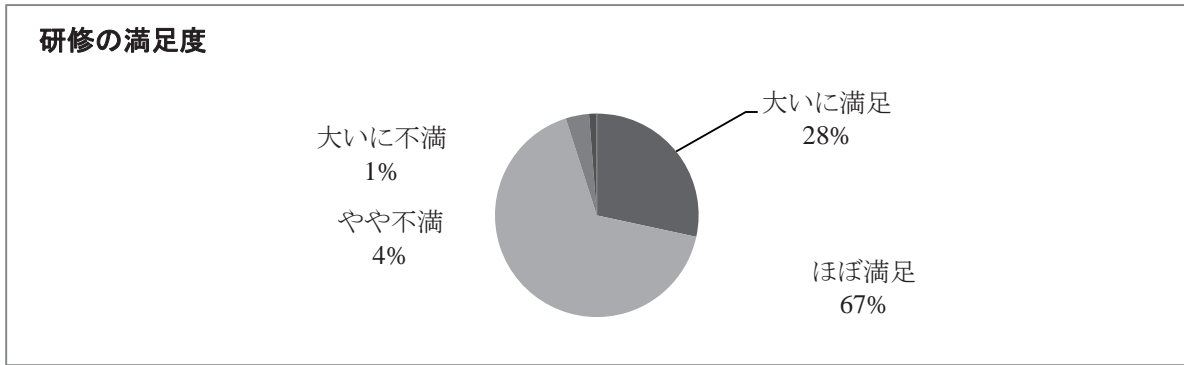
会 場：名古屋大学東山キャンパス野依記念学術交流館 2 階ホール

司 会：夏目 達也

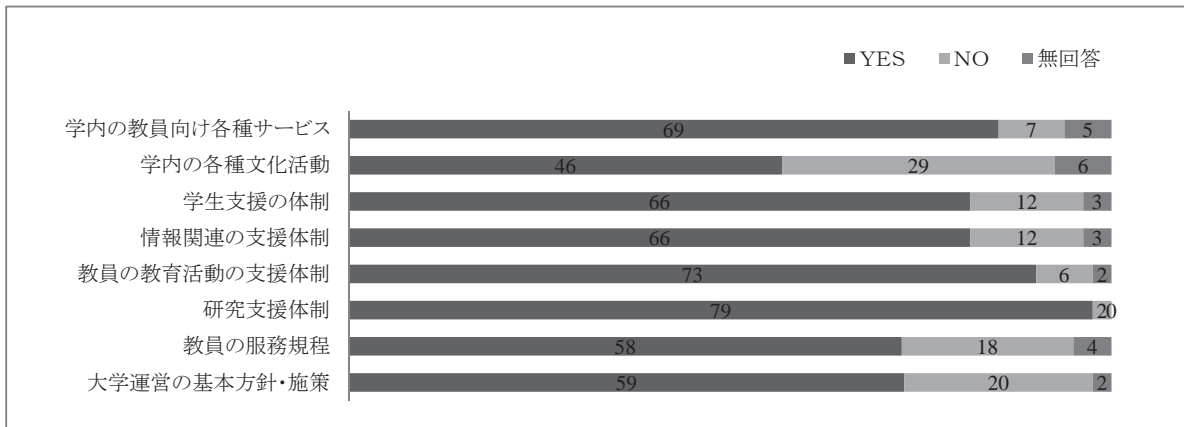
進 行：	9:30	受付
	10:00-10:20	歓迎のあいさつ 浜口 道成(総長)
	10:20-10:50	名古屋大学の概要 杉山 寛行(総務担当理事)
	10:50-11:00	新任教員ハンドブックの紹介 近田政博(高等教育研究センター准教授)
	11:00-11:30	研究支援に関するセミナー 國枝 秀世(研究担当副総長) 渡辺 正実(研究推進室副室長・総長補佐)
	11:30-12:00	国際化対応に関するセミナー 松浦まち子(留学生センターアドバイジングカウンセリング部門教授)
	12:00-13:00	昼食休憩(生協ランチビュッフェ・各部局ポスター展示)
	13:00-13:50	諸注意事項 各 10 分(質疑応答含む) 人事・労務上の制度 堀内 敦(総務部長) 防災対策 飛田 潤(災害対策室長・教授) 情報セキュリティ 加藤 芳秀(情報基盤センター特任助教) ハラスメント対策 小川 智美(ハラスメント相談センター相談員) 安全保障貿易管理等 寺内 常雄(産学官連携推進本部スーパーバイザー)
	13:50-14:00	休憩
	14:00-14:50	授業改善ワークショップ 中井 俊樹(高等教育研究センター准教授)
	14:50-15:00	アンケート用紙記入・回収 研修終了
	15:00	メンター希望者面談(高等教育研究センター・男女共同参画室)



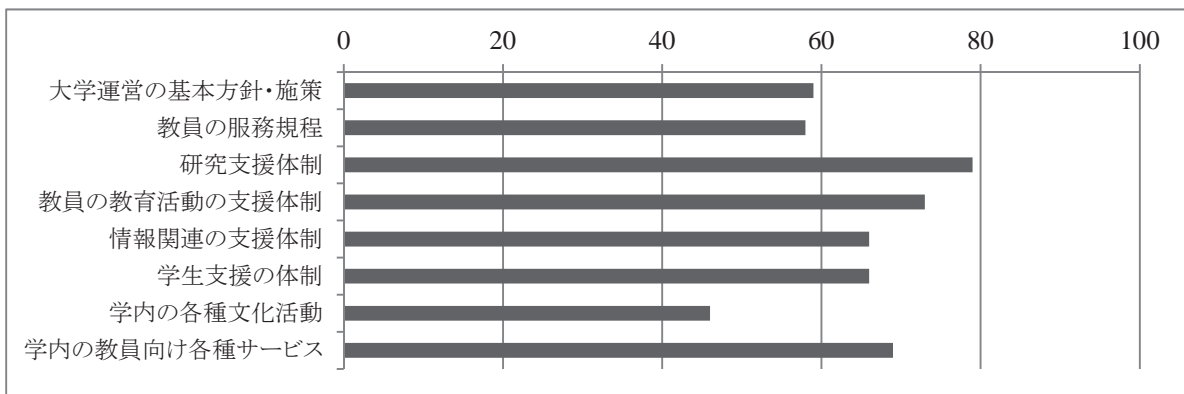
参加者アンケート集計結果



新任教員にとって必要な情報（項目別回答数・全回答数との割合）



新任教員にとって必要な情報（項目別回答数・項目間における回答数の差）



その他 留学生の生活サポート(書類の英語化や相談窓口)、共済関係の説明

研修全般についてのご意見・ご不満(自由記述)

- ・大学の目標や概要がよくわかった。また新任教員ハンドブックも活用できる。
- ・大学教員生活の概要が分かったので良かったです。もっと時間に余裕があると良いかも。
- ・一時間半ほどで一度トイレ休憩がほしかった。
- ・午前中部屋が寒かった。そもそも「かけいきん」？とかを知らないもので、ついていけませんでした。
- ・具体的で良く分かりました。
- ・資料が多すぎる。また、外国語と日本語の資料が見分けにくい。
- ・限られた時間内に盛り沢山の情報なので、致し方ないと思うが、ややオーバーフロー気味であった。
- ・会計・検収・調達関係も説明があればありがたいです。
- ・説明を準備している人とそうでない人の差が激しい。
- ・時間が長いと感じた。
- ・昼食時にポスターとテーブルの間がせまく、ポスターが見つらなかった。
- ・とくに留学生受け入れの多い研究室には国際協力スタッフがいらしてくださいと助かります。
- ・ご説明ありがとうございました。参考になりました。個別説明会があれば、ご案内ください。
- ・大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・途中ちょっと早かったです。
- ・ありがとうございました！
- ・有難うございました。勉強になりました。
- ・研修から先生と呼ばず、「さん」づけにすればいかがですか。
- ・資料について、デジタルの配布が先に案内されていれば荷物として楽になります。
- ・意見などの総合受付窓口や連絡先などがあると便利です。
- ・内容が多いので、2日くらいにわけてやっても良いかもしれない。
- ・参加させていただき、とても良かったです。年度途中の着任であったので、今回参加してわかったことも多く安心しました。
- ・とてもテンポよく勉強になりました。ありがとうございました。

学外研修 大学職員研修の進め方

○ FD・SD 教育改善支援拠点事業「大学職員研修の進め方」

日 時：2012年11月27日 13:30～16:00

会 場：岐阜大学サテライトキャンパス

対 象：国立私立大学の研修担当者、その他大学関係者

主 催：名古屋大学高等教育研究センター

共 催：名古屋大学総務部・岐阜大学人材開発部

概 要：大学経営の環境が厳しさを増している中で、大学職員の担う役割に期待が高まっています。大学職員には、通常の職務遂行にとどまらず、大学経営全般にわたる改革・改善への参画が求められています。同時に、それを担うための能力形成も重視されています。本セミナーでは、各大学でのSD(職員向け研修)と、大学間連携によるSDの実施について、どのような課題があるのかを検討します。

進 行： 13:00 受付
13:30-13:35 主催者あいさつ
13:35-13:55 第1講演「大学職員の能力形成に必要な視点」
講演者：夏目 達也(名古屋大学高等教育研究センター)
13:55-14:30 第2講演「早稲田大学における大学職員の能力向上の取組」
講演者：三浦 暁(早稲田大学人事部人事課長)
14:30-14:45 休憩
14:45-16:00 パネルディスカッション「SDの将来像と大学間連携」
パネリスト： 三浦 暁(早稲田大学人事部人事課長)
大矢 淳一(本学総務部職員課長)
安田 眞由美(岐阜大学人材開発部職員育成課長)
中井 俊樹(名古屋大学高等教育研究センター)
司 会： 近田 政博(名古屋大学高等教育研究センター)





実施報告

名古屋大学高等教育研究センターは十一月二十七日、岐阜大学サテライトキャンパスにおいて、「大学職員研修の進め方」セミナー(名古屋大学総務部・岐阜大学人材開発部共催)を開催した。東海地域の職員研修担当者を中心に四二の機関から六七名が参加した。

まず夏目達也名古屋大学高等教育研究センター教授が、「大学職員の能力形成に必要な視点」と題した講演の中で、能力形成・キャリア形成に関する職員の自発的努力の促進や支援が求められることを指摘し、能力形成の方法には多様な方法があり豊かな発想と研修観の転換が必要であると述べた。続いて三浦暁早稲田大学人事部課長が、「早稲田大学における大学職員の能力向上の取組」と題した講演の中で、早稲田大学における職員人材育成プログラムの全体像を紹介した上で、職員の問題意識から始めるプロジェクトを活用し、調査・分析・企画・立案・実行運営・評価の能力を備えた「プロジェクト型職員」の育成の現状を報告した。

これらの講演の内容を踏まえてパネルディスカッション「SD の将来像と大学間連携」が行われた。大矢

淳一名古屋大学総務部職員課長、安田眞由美岐阜大学人材開発部職員育成課長、中井俊樹名古屋大学高等教育研究センター准教授から各大学における実践が紹介され、三浦氏を含めて、職員の能力形成にはどのような課題があるのか、プロジェクト型職員をどのように育てることができるのか、職員の能力形成に大学間連携はどのような可能性をもっているのかなどが検討され、フロアからの質問や意見も加わり活発な議論が行われた。

また、『大学の教務 Q&A』などの FD・SD 教育改善支援拠点としての同センターの成果物も紹介され、さらに三月二日に開催する大学教育改革フォーラム in 東海 2013 で、議論を継続していくことになった。

(「教育学術新聞」平成 25 年 1 月 9 日 第 5 面掲載記事)

FD・SD教育改善支援拠点事業

大学職員研修の進め方

大学経営の環境が厳しさを増している中で、大学職員の担う役割に期待が高まっています。大学職員には、通常の職務遂行にとどまらず、大学経営全般にわたる改革・改善への参画が求められています。同時に、それを担うための能力形成も重視されています。

本セミナーでは、各大学でのSD(職員向け研修)と、大学間連携によるSDの実施について、どのような課題があるのかを検討します。

日時：2012年11月27日(火) 13:30~16:00

場所：岐阜大学サテライトキャンパス

(JR岐阜駅前・岐阜スカイウイング37 東棟4階)

対象：国公立大学の研修担当者、その他大学関係者

主催：名古屋大学高等教育研究センター

共催：名古屋大学総務部・岐阜大学人材開発部

お問合せ・申込み：名古屋大学高等教育研究センター

TEL:052-789-5696 E-mail: info@cshe.nagoya-u.ac.jp

*参加を希望される方は、氏名、所属、職名、連絡先電話番号をお知らせください。

なお、定員に達し次第、締め切りますので予めご了承ください。

参加費無料

【プログラム】

- 13:00 受付
- 13:30 主催者挨拶
- 13:35 第1講演「大学職員の能力形成に必要な視点」
夏目達也(名古屋大学高等教育研究センター教授)
- 13:55 第2講演「早稲田大学における大学職員の能力向上の取組」
三浦 暁(早稲田大学人事部人事課長)
- 14:30 休憩
- 14:45 パネルディスカッション「SDの将来像と大学間連携」
パネリスト：
三浦 暁(早稲田大学人事部人事課長)
大矢淳一(名古屋大学総務部職員課長)
安田真由美(岐阜大学人材開発部職員育成課長)
中井俊樹(名古屋大学高等教育研究センター准教授)
司会：近田政博(名古屋大学高等教育研究センター准教授)
- 16:00 終了

名古屋大学高等教育研究センターが出版した書籍を資料として各機関に1部提供いたします。

名古屋大学 部局等における研修

1. センター主催・共催

○ 2012年4月25日 特別セミナー「TAのためのライティング支援セミナー」

会 場：中央図書館5階多目的室

講 師：近田 政博(高等教育研究センター)

主 催：中央図書館、教養教育院、高等教育研究センター

対 象：現在 TA を担当している、あるいはこれから担当予定の大学院生

概 要：大学生が的確なレポートを書けるようになるために、TA としてどのような支援が必要かを学びます。基礎セミナーなど、低年次科目の TA を担当する大学院生が対象です。

○ 2012年5月8日 大学院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー2012「クリティカルシンキングの技法－科学技術と社会の接点から－」

会 場：理学南館1階理学セミナー室

講 師：伊勢田 哲治(京都大学)

主 催：高等教育研究センター

共 催：GCOE「宇宙基礎原理の探求」、グリーン自然科学国際教育研究プログラム

○ 2012年5月17・18日 大学院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー2012「研究倫理ワークショップ」

会 場：理学南館1階理学セミナー室

講 師：小林 信一(筑波大学)、齋藤 芳子(高等教育研究センター)

主 催：高等教育研究センター

共 催：GCOE「宇宙基礎原理の探求」、グリーン自然科学国際教育研究プログラム

○ 2012年5月29日 大学院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー2012「Writing is thinking! - Introduction to the logical thinking in academic writing -」

会 場：理学南館1階理学セミナー室

講 師：Paul W. L. Lai(教養教育院)

主 催：高等教育研究センター

共 催：GCOE「宇宙基礎原理の探求」、グリーン自然科学国際教育研究プログラム

○ 2012年5月30日 特別セミナー「第1回レポート書き方講座:テーマをどう表現するか」

会 場：中央図書館5階多目的室

講 師：近田 政博(高等教育研究センター)

主 催：中央図書館、教養教育院、高等教育研究センター

概 要：大学で求められるレポートにはいくつかの作法とコツがあります。1・2年生のうちにこれらを実践に身につけておきましょう。

○ 2012年6月8日 大学院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー2012「科学技術とは何かーガリレオを歴史の観測点にしてみるー」

会 場：理学南館1階理学セミナー室

講 師：塚原 東吾(神戸大学)

主 催：高等教育研究センター

共 催：GCOE「宇宙基礎原理の探求」、グリーン自然科学国際教育研究プログラム

○ 2012年6月13日 大学院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー2012「科学技術と社会ー対話する社会へー」

会 場：理学南館1階理学セミナー室

講 師：平川 秀幸(大阪大学)

主 催：高等教育研究センター

共 催：GCOE「宇宙基礎原理の探求」、グリーン自然科学国際教育研究プログラム

○ 2012年6月25日 大学院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー2012「イノベーションと科学技術」

会 場：理学南館1階理学セミナー室

講 師：伊地知 寛博(成城大学)

主 催：高等教育研究センター

共 催：GCOE「宇宙基礎原理の探求」、グリーン自然科学国際教育研究プログラム

○ 2012年6月27日 特別セミナー「第2回レポート書き方講座:論証の基本をマスターする」

会 場：中央図書館5階多目的室

講 師：近田 政博(高等教育研究センター)

主 催：中央図書館、教養教育院、高等教育研究センター

概 要：学術的なレポートや論文では、論理的な筋道を立てて相手に説明することが求められます。その方法を具体的に紹介します。

備 考：5月に開催した特別セミナー「第1回レポート書き方講座:テーマをどう表現するか」の続きです。今回からでも受講可能です。

○ 2012年6月29日 大学院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー2012「話す技法」

会 場：理学南館1階理学セミナー室

講 師：平野 美保(京都ノートルダム女子大学)

主 催：高等教育研究センター

共 催：GCOE「宇宙基礎原理の探求」、グリーン自然科学国際教育研究プログラム

○ 2012年7月20日 研究マネジメントセミナー2012「研究グループを率いるために」

会 場：理学南館セミナー室

講 師：藤巻 朗(工学研究科、研究推進室)

主 催：研究推進室、高等教育研究センター

○ 2012年8月28日・29日・30日 サイエンスイラストレーション・サマースクール 2012 in あいち

会 場：全学教育棟

講 師：Jennifer E. Fairman (ジョンズ・ホプキンス大学)

主 催：グリーン自然科学国際教育研究プログラム、GCOE「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合」、高等教育研究センター、産学官連携推進本部あいちサイエンスフェスティバル事務局

共 催：名古屋造形大学、名古屋大学物質科学国際研究センター、名古屋大学博物館

協 力：ジョンズ・ホプキンス大学医学部医療アート専攻、トロント大学バイオメディカルコミュニケーションズ専攻、名古屋大学研究推進室、名古屋大学リサーチ・アドミニストレーション室、東北大学大学医学系研究科

後 援：在名古屋米国領事館、名古屋アメリカンセンター

コーディネーター：奈良島 知行(サイエンスイラストレーター、Tane+1 LLC 代表)

○ 2012年9月4日 教職員のためのワークショップ「はじめて留学生を受け入れる—教員と留学生の信頼関係をどう築くか—」

会 場：法政国際教育協力研究センター・留学生センター2階 CALE フォーラム

講 師：松浦 まち子(留学生センター)

田所 真生子(留学生センター)

坂野 尚美(留学生センター)

山口 博史(国際交流協力推進本部)

渡辺 留美(国際交流協力推進本部)

虎岩 朋加(国際交流協力推進本部)

近田 政博(高等教育研究センター)

主 催：留学生センター、高等教育研究センター

対 象：教職員

概 要：外国人留学生は大学が国際的な教育・研究環境を形成する上で重要な役割を果たしています。しかし、教職員の側に留学生を受け入れる準備が十分にできているとは、必ずしも言えません。名古屋大学留学生研究会では、2011年3月に『名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック』を制作し、留学生受け入れにおいて教員が直面する課題への対応方法を紹介しました。本セミナーでは、このハンドブックの内容を活用しながら、留学生と教職員が信頼関係を築くために、教職員にどのような配慮や工夫が求められるかについてのケーススタディを行います。留学生問題にご関心をもつ教職員の方のお越しを歓迎します。

○ 2012年9月12日 「研究発表資料をつくる—ポスター・スライドづくりの理論と実践」

会 場：全学教育棟中棟3階 SIS ラボ

講 師：遠藤 潤一(広島国際学院大学)

主 催：情報科学研究科、高等教育研究センター

○ 2012年9月13日 院生・教職員のためのスキルアップセミナー「授業で図書館を活用する方法」

会 場：中央図書館5階多目的室

企画・司会：近田 政博(高等教育研究センター)

講師：野末 俊比古(青山学院大学)

米澤 誠(東北大学附属図書館総務課長)

主催：中央図書館、高等教育研究センター

対象：教員、教員をめざす大学院生

概要：授業に附属図書館の資源をうまく活用することで、学生の学習活動をより促進すると同時に、授業をもっとスムーズに運営することができるかもしれません。このセミナーでは青山学院大学と東北大学の活用事例を紹介します。

○ 2012年10月31日 特別セミナー「第3回レポート書き方講座:論文要旨をどうやって作成するか」

会場：中央図書館5階多目的室

講師：近田 政博(高等教育研究センター)

主催：中央図書館、教養教育院、高等教育研究センター

対象：主に学部一、二年生

概要：自分で設定した主題をもとにして、論文の全体像をどのように設計するか、読者にいかに的確かつ簡潔に伝えるかを学びます。

備考：6月に開催した特別セミナー「第2回レポート書き方講座:論証の基本をマスターする」の続きです。今回からでも受講可能です。

○ 2012年11月28日 特別セミナー「第4回レポート書き方講座:出だしで勝負する」

会場：中央図書館5階多目的室

講師：近田 政博(高等教育研究センター)

主催：中央図書館、教養教育院、高等教育研究センター

対象：主に学部一、二年生

概要：論文や学術レポートを書く際に最も重要かつ難しいのは「出だし」部分(序章)です。出だしに書くべきことは何か、留意すべき点は何かについて理解を深めます。

備考：10月に開催した特別セミナー「第3回レポート書き方講座:論文要旨をどうやって作成するか」の続きです。今回からでも受講可能です。

○ 2012年12月19日 特別セミナー「魅力的な研究計画書の書き方—大学院入試に向けて—」

会場：中央図書館5階多目的室

講師：近田 政博(高等教育研究センター)

主催：中央図書館、高等教育研究センター

対象：大学院進学を希望する学部4年生および学部研究生(主に文系)

概要：大学院入試で最も重要なのは研究計画書の内容です。論理的かつ説得力のある研究計画書の書き方について学びます。

備考：自分の研究計画書を持参してください。途中段階の内容でかまいません。受講者同士でコメントします。

○ 2012年12月12日 中央図書館特別セミナー「プレゼンテーション入門」

会 場：中央図書館2階ディスカバリ・スクエア

講 師：中井 俊樹(高等教育研究センター)

主 催：中央図書館、高等教育研究センター

対 象：学部一、二年生

概 要：プレゼンは苦手？いきなりスライドから作り始めていませんか？基本のルールを押さえておけば、少しの工夫で伝わりやすく説得力のあるプレゼンができます。準備に取りかかる前に前提を確認する、発表の骨格を作る、レイアウトを統一する、図表で情報を整理する、リハーサルする…など、プレゼンの段階ごとのポイントを学びます。

2. センター・スタッフ協力

○ 2012年4月3日 平成24年度全学教育科目担当教員FDにおける教養科目分科会GP報告「現代社会と教育」

会 場：全学教育棟本館

報 告：近田 政博(高等教育研究センター)

主 催：教養教育院

対 象：教養科目担当教員

○ 2012年4月18日 平成24年度名古屋大学新規採用職員研修「異文化への対応：大学教員とのコミュニケーション方法」

会 場：豊田講堂会議室

講 師：近田 政博(高等教育研究センター)

主 催：総務部職員課

対 象：新規採用職員

○ 2012年6月12日 平成24年度名古屋大学附属病院臨床実習指導者研修「教えるということ」

会 場：名古屋大学附属病院

講 師：中井 俊樹(高等教育研究センター)

主 催：名古屋大学附属病院

対 象：職員(看護師)

○ 2012年7月7日 平成24年度前期第6回B人セミナー「学位への道、学位からの道 博士のキャリア開発を考える」

会 場：インキュベーション施設1階プレゼンテーションルーム

講 師：齋藤 芳子(高等教育研究センター)

主 催：ビジネス人材育成センター

対 象：博士課程学生、ポストドクター

概 要：学位とはなにか、社会からどのような期待と要請があるのかを踏まえながら、学位取得後のキ

キャリア展開の可能性と、来る日に向けた能力開発への道筋を考えていきます。(※文部科学省科学技術人材育成費補助金 ポストドクター・キャリア開発事業(イノベーション創出若手研究人材養成) 社会貢献若手人材育成プログラム)

○ 2012年7月18日 2012年度 豊かな人間形成のための学びの杜・学術コース:地球市民学探求講座「世界の学校文化—その多様性が示唆するもの」

会 場 : 附属高等学校図書館

講 師 : 近田 政博(高等教育研究センター)

主 催 : 大学院教育発達科学研究科中等教育研究センター(CSES)

対 象 : 高校生

概 要 : 学校の文化やルールは国や地域によって大きく異なります。なぜそのような違いが生まれるのでしょうか。学校文化の違いは生徒の成長にどのような影響を与えるのでしょうか。さまざまな国の事例について意見交換することを通して、日本の学校文化を相対的に見るようになるでしょう。

○ 2012年8月8日 医学部保健学科 FD「学生の求める学習支援とは」

講 師 : 夏目 達也(高等教育研究センター)

主 催 : 医学部保健学科

対 象 : 教職員

○ 2012年9月11日 2012年度グローバル30 新任教員オリエンテーション

会 場 : 法政国際教育協力研究センター・留学生センター2階 CALE フォーラム

企画・司会 : 近田 政博(高等教育研究センター)

主 催 : 国際部国際企画課

対 象 : G30 新規採用教員およびその受け入れサポートをしている教職員

概 要 : G30 新規採用教員が名古屋大学にスムーズに適応できるように支援する目的で行う。当日のプログラムは、「歓迎のあいさつと G30 プログラムの概要」(渡辺芳人理事(国際担当))、「G30 学生の入学状況と履修状況」(G30 プロジェクトコーディネーター正嶋宏祐教授)、「日本の大学文化と名古屋大学への適応について」(Peter BUTKO 国際交流協力推進本部特任教授(化学))、Martin HERSCHEND 国際交流協力推進本部特任准教授(数学))、「“Nagoya University New Faculty Handbook”および名古屋大学教員メンタープログラムの紹介」(近田政博高等教育研究センター准教授)、「学務上の諸連絡について」、「意見交換と懇談会」である。(使用言語:英語)

○ 2012年10月15日 平成24年度名古屋大学附属病院臨床実習指導者研修・人材育成担当者研修・クリティカルケアコース研修・サポーターズ研修「コーチング」

会 場 : 名古屋大学附属病院

講 師 : 中井 俊樹(高等教育研究センター)

主 催 : 名古屋大学附属病院

対 象 : 職員(看護師)

○ 2012年11月14日 医学系研究科大学院FD:大学の国際化を推進していくために「外国人研究生を受け入れる際に留意すべきこと―異文化理解の観点から―」

会 場 : 大幸キャンパス医学部保健学科東館大講義室

講 師 : 近田 政博(高等教育研究センター)

主 催 : 医学系研究科(医学部保健学科)

対 象 : 教職員

概 要 : 外国人(大学院)研究生は大学が国際的な教育・研究環境を形成する上で重要な役割を果たしています。しかし、教職員に外国人(大学院)研究生を受け入れる準備が十分に備わっているとは言えず、オファーがあったとしても不安や苦勞が先行し断っている場合が少なくありません。本FDでは、外国人(大学院)研究生を受け入れるメリット、適切な受け入れ判断の方法、そして外国人(大学院)研究生と信頼関係を築くために教職員が行うべき配慮や工夫について学習・検討いたします。

○ 2013年1月16日 教育発達科学研究科FD「授業改善の工夫」

講 師 : 夏目 達也(高等教育研究センター)

主 催 : 教育発達科学研究科

対 象 : 教職員

○ 2013年3月5日 平成24年度国際業務トレーニング研修「大学職員のための異文化コミュニケーションセミナー」

会 場 : 法政国際教育協力研究センター・留学生センター2階CALEフォーラム

主 催 : 国際部国際企画課

対 象 : 事務系職員(留学生または外国人研究者と接点のある業務をしている方、またはする予定のあるほうで、異文化対応の経験が比較的浅い方)

定 員 : 40名

概 要 : 留学生や外国人研究者に対応する業務の中で、文化の相違への理解や、異文化誤解等から生じる「異文化問題」への対処方法等を身につけることを目的とする。当日のプログラムは、「異文化理解概論」(松浦まち子留学生センター教授)、「事例紹介」(大屋友美子国際部国際企画課主任)、「事例検討」(近田政博高等教育センター准教授)である。

名古屋大学外における研修等

- 2012年4月19日 名古屋市立向陽高等学校『総合的な学習の時間』講演「大学で求められる力」
講 師：近田 政博(高等教育研究センター)
開 催：名古屋市立向陽高等学校

- 2012年5月19日 愛知政治大学院専門政治コース講座「説得力のある文章の書き方」
講 師：近田 政博(高等教育研究センター)
開 催：自由民主党愛知県連

- 2012年5月23日 科学コミュニケーション研修「非専門家に研究を伝える」
講 師：齋藤 芳子(高等教育研究センター)
開 催：科学技術振興機構 サイエンスコミュニケーションセンター

- 2012年5月30日 「教員養成学部型初年次教育の構築をめざして―学生の学習ニーズの多様化への対応―」
講 師：夏目達也(高等教育研究センター)
開 催：東京学芸大学

- 2012年6月21日 科学コミュニケーション研修「非専門家に研究を伝える」
講 師：戸田山 和久(情報科学研究科)
齋藤 芳子(高等教育研究センター)
開 催：自然科学研究機構 生理学研究所 広報展開推進室

- 2012年7月13日 「クリティカルシンキングを活かした問題解決の技法」
講 師：中井 俊樹(高等教育研究センター)
開 催：愛知教育大学

- 2012年7月25日 静岡県立小笠高等学校教員研修「大学が求める書く力―大学初年次教育における学術的文章の書き方・アカデミックライティング指導の実際―」
講 師：近田 政博(高等教育研究センター)
開 催：静岡県立小笠高等学校

- 2012年8月3日 2012年度 第42回天文天体物理若手の会夏の学校(公募企画セッション:みせてもらおうか、修士・博士の実力とやらを?)「博士たちへの社会的期待」
講 師：齋藤 芳子(高等教育研究センター)
主 催：天文・天体物理若手の会
後 援：日本天文学会

- 2012年8月8日 「メンタリングプログラムの実践を通して学んだこと」
 講師：中井 俊樹(高等教育研究センター)
 開催：東北大学

- 2012年8月21日 「授業改善に向けたFD」IDE大学協会中国・四国支部大学セミナー
 講師：中井 俊樹(高等教育研究センター)
 会場：ホテルグランヴィア広島

- 2012年8月24日 教員研修「学習意欲を高める授業づくり—シラバスの効果的な作成法—」
 講師：近田政博
 開催：天使大学

- 2012年8月28日 河合塾トライデント教員研修「学生の学習意欲を高める方法」
 講師：近田 政博(高等教育研究センター)
 会場：河合塾トライデント 外国語・ホテル専門学校

- 2012年8月28日 日本リメディアル教育学会第8回全国大会(シンポジウム「学習支援における教職協働の営み」)「大学を越えた教職協働による研修教材の開発」
 講師：中井 俊樹(高等教育研究センター)
 会場：立命館大学衣笠キャンパス
 主催：日本リメディアル教育学会
 後援：立命館大学、京都府教育委員会、京都市教育委員会、大学コンソーシアム京都
 概要：FD・SD 教育改善支援拠点事業の一環として、名古屋大学では『大学の教務Q&A』を2012年3月に刊行した。同書は、学内外の教職員のネットワークを通して現場から教務の知識を収集して整理した研修教材である。国による指針の解説とは異なり、大学側から教務の知識を広く発信するという点に特徴があると言える。本報告では、同書を作成する経緯を教職協働の観点から振り返ることで、教職協働のあり方についての議論のきっかけを提供したい。

- 2012年8月30日 第2回高等教育開発フォーラム(プレゼンテーションセッション)「社会人学生はどのような教授法や研究指導を求めているのか」
 会場：帝京大学八王子キャンパス17号館
 発表：近田 政博(高等教育研究センター)
 主催：日本高等教育開発協会(JAED)

- 2012年9月6日 2012年度私立大学図書館協会西地区部会東海地区協議会実務担当者研修会「大学生と大学教員に図書館をアピールする方法—教員の目線から—」
 講師：近田 政博(高等教育研究センター)
 主催：私立大学図書館協会(JASPUL)西地区部会東海地区協議会研究会

○ 2012年9月10日 「大学におけるメンタリングの実践」

講 師：中井 俊樹(高等教育研究センター)

会 場：信州大学

○ 2012年10月4日 内部質保証システムの構造・人材・知的基盤の開発に関する研究会「参照文書の開発と活用の可能性」

講 師：中井 俊樹(高等教育研究センター)

開 催：大学評価・学位授与機構

○ 2012年10月13日 桜美林大学大学院大学アドミニストレーション公開研究会:学生・教員に信頼される大学職員を考える「名古屋大学高等教育研究センターの歩み—研究開発物を中心に—」

会 場：名古屋学院大学白鳥キャンパス曙館3階301号

講 師：近田 政博(高等教育研究センター)

主 催：桜美林大学大学アドミニストレーション研究科

後 援：高等教育研究センター

○ 2012年10月21日 ネットワーク大学コンソーシアム岐阜「高等教育機関の歴史—教育機会拡大と質保証—」

講 師：夏目 達也(高等教育研究センター)

主 催：ネットワーク大学コンソーシアム岐阜

○ 2012年10月24日 愛知県リカレント教育推進会議「社会人の学び直しと高等教育—機関の役割」

講 師：夏目 達也(高等教育研究センター)

開 催：愛知県リカレント教育推進会議

○ 2012年10月27日 日本理学療法士協会教員研修会「専門職教育における教員の落とし穴とその対策」

講 師：夏目 達也(高等教育研究センター)

開 催：日本理学療法士協会

○ 2012年11月5日 シラバスに関する研修会「誰のため、何のためのシラバスか—シラバスの書き方・使い方」

講 師：中井 俊樹(高等教育研究センター)

開 催：龍谷大学大学教育開発センター

○ 2012年11月9日 神奈川県内大学教務連絡協議会教務関連業務研修会「大学の教務の実践的知識の共有」

講 師：中井 俊樹(高等教育研究センター)

会 場：麻布大学

○2012年11月15日・16日 AWA サポートセンター第3回メンター研修「大学におけるメンタリングの方法」

講 師：中井 俊樹(高等教育研究センター)

会 場：徳島大学蔵本キャンパス(15日)、常三島キャンパス(16日)

○2012年11月24日 大学教育学会2012年度課題研究集会シンポジウムⅡ「FDの実践的課外解決のための重層的アプローチ」

司 会：近田 政博(高等教育研究センター)

会 場：くまびきメッセ(島根県立産業交流会館)5階501大会議室

主 催：大学教育学会

共 催：島根大学

後 援：島根県教育委員会

○2012年12月17日 PFFP研究会:大学教員を育てる—入職前と入職後の能力開発「名古屋大学における大学教員準備講座の取り組み」

報 告：近田 政博(高等教育研究センター)

会 場：京都大学東京オフィス

○2012年12月26日 河合塾トライデント教員研修「教育評価の具体的方法」

講 師：中井 俊樹(高等教育研究センター)

会 場：河合塾トライデント

○2013年1月17日 「学習に関する基礎知識」.

講 師：中井 俊樹(高等教育研究センター)

開 催：愛知県看護協会

○2013年1月28日 北陸先端科学技術大学院大学平成24年度第3回FD・SDセミナー講演「大学院における研究室教育の質保証について考える」

講 師：近田 政博(高等教育研究センター)

開 催：北陸先端科学技術大学院大学大学院教育イニシアティブセンター

○2013年2月9日 これからの「非大学型高等教育」フォーラム:まなぶコストはたらくスキル〜京都・日本・海外 はたらくための学習(社会)デザイン『ノンフォーマル学習』で学位取得?—職業経験の成果評価に関するフランスの取り組み」

会 場：キャンパスプラザ京都

講 師：夏目 達也(高等教育研究センター)

主 催：特定非営利活動法人学習開発研究所

後 援：京都府、京都新聞社、公益財団法人京都産業21、京都大学高等教育研究開発推進センター、株式会社山岡製作所、一般社団法人人材育成と教育サービス協議会

○ 2013 年 2 月 21 日 神戸国際大学 FD「大学初年次教育の改善」

講 師：夏目 達也(高等教育研究センター)

開 催：神戸国際大学

○ 2013 年 2 月 28 日 金城大学全学 FD 集会講演「大学生が自ら学ぶ習慣を身につけるための支援方法」

講 師：近田 政博(高等教育研究センター)

開 催：金城学院大学

○ 2013 年 3 月 26 日 一橋大学平成 23 年度概算要求(2011 年度～2013 年度)「社会科学系大学院におけるパッケージ型キャリア支援プログラムーキャリア支援室大学院部門設置による支援基盤の確立」外部評価委員会

委 員：近田 政博(高等教育研究センター)

○ 2013 年 3 月 27 日 九州大学グローバル 30 研究会「ベトナムの中等教育制度と高大接続について」

講 師：近田 政博(高等教育研究センター)

会 場：九州大学箱崎キャンパス

教員メンタープログラム

概要

赴任間もない新任教員にとって、大学における活動に不安はつきものである。教員メンタープログラムは、大学において一定の職務経験をもつ教員と交流することで、新任教員が大学教員として成長していくことを支援するプログラムである。男女共同参画室と協力してプログラムを運営している

担当者

中井 俊樹(名古屋大学高等教育研究センター)

主な活動内容・成果

- 1) 新任教員研修において教員メンタープログラムを広報し、希望者にメンター教員を紹介した。
- 2) パンフレットおよびホームページを通して、希望者にメンター教員を紹介した。
- 3) 英文パンフレット「Nagoya University Faculty Mentoring Program」を作成した。
- 4) 2012年度は23組のメンター教員とメンティ教員のマッチングを行った(2013年2月15日現在)。
- 5) 昨年度「メンター・アワード 2012 優秀賞」を受賞したことにより、濱口道成総長のコラム「ダイバーシティはユニバーシティの活力」がワーキングウーマン・パワーアップ会議のウェブサイトで掲載された。
- 6) 平成 24 年度名古屋市女性の活躍推進認定企業の優秀賞を名古屋大学が受賞した。受賞理由として、「メンタープログラムなどを実施した結果、教員に占める女性の割合が増加し、研究分野における女性教員の躍進に繋がっている。」と指摘された。
- 7) 他大学において教員メンタープログラムに関する講演を行った。

メンタリングに関する講演

「メンタリングプログラムの実践を通して学んだこと」(2012年8月8日、東北大学)


「大学におけるメンタリングの実践」(2012年9月10日、信州大学)

「大学におけるメンタリングの方法」(2012年11月15日、16日、徳島大学)

What is the Faculty Mentoring Program?

New faculty members might feel alone and have questions about their activities at the university. The Faculty Mentoring Program was set up to support professional development of new faculty members through exchanges with experienced faculty members. In the program, the new faculty member is called the mentee and the faculty member who supports the mentee is referred to as the mentor.

The benefits of mentoring programs, which are widely used in universities and other organizations, have been acknowledged. The program is an important faculty development activity.



Program Objectives

The following benefits for mentees are expected:


- Having someone new faculty members can easily turn to for advice related to work and daily life
- An opportunity to deepen their understanding of the university
- Enabling new faculty members to acquire the knowledge and skills needed for teaching and research work
- Gaining an opportunity to think about career development
- Enabling new faculty members to create various networks through their mentor

The Faculty Mentoring Program is also meaningful for mentors. Exchanges with new faculty members generate new ideas and energy and provide mentors with an opportunity to review their own teaching and research experience and consider their future careers.

The Mentoring Process

- 1 Signing up for the program**
Faculty members who have worked at the university less than three years can join at anytime. When signing up for the program, faculty members provide information such as when they have free time in their schedules and their expectations and hopes regarding the program.
- 2 Matching**
An appropriate mentor is selected, taking into consideration the desires and profile of the mentee. The mentor contacts the mentee regarding the first meeting.
- 3 First meeting**
During the first meeting, the mentor and mentee confirm such matters as the goals of the mentoring activities and plans for meeting places and frequency of meetings.
- 4 Regular activities**
The two work out not only meeting details, but also other activities such as campus tours and observing classes. The Program Office can also be consulted anytime.
- 5 Feedback**
The results of the mentor activities are reported back to the Program Office. The feedback details are used to improve the program.

Mentees are faculty members who have worked at the university less than three years.
It is expected that interaction with the mentor will help the mentee grow as a university faculty member.



Mentors are faculty members who have worked at Nagoya University for at least five years.
They are expected to provide leadership and help the mentee with understanding and support.

Comments from the Mentees

We have received the following comments from mentees who have taken part in the program:

"I had a fixed-term contract and was worried about career development. The advice I received from my mentor was a major source of support. The interaction with a trustworthy mentor made it possible for me to unreservedly pursue my own possibilities."

"I learned the difference between being a graduate school student and university faculty member. I received advice on how to interact with students as a teacher, which is quite different than interacting with them as a senior classmate."

"I was allowed to observe my mentor's classes. This was a great help because I had no experience being in charge of a class. It was very stimulating in terms of learning how to create material and incorporate visuals."

"My mentor took me to various events such as the Meldal Salon and seminars attended by faculty members in various fields. I felt that the number of my mentors grew five- to ten-fold. The faculty members that I got to know introduced me to other faculty members my own age. This helped me increase my acquaintances in very short time."

How to apply

If you would like to make use of this program, please include the following five pieces of information in the body of an e-mail and send it to the address below. You should also state if you would prefer a mentor of the same sex.

1. Name
2. School/Institute/Center
3. E-mail address
4. Hopes and expectations of the activities
5. Days and times it is easy for you to find time to meet

Send the e-mail to: Faculty Mentoring Program Office
(Center for the Studies of Higher Education)
info@cshe.nagoya-u.ac.jp

Q & A

What type of people are mentors?

You will be introduced to a mentor who has a desire to help the next generation of faculty members. Mentors conduct themselves in line with set guidelines so mentees do not need to worry about mentors forcing their personal views on them or leaking personal information that comes up during the mentoring activities. In the unlikely case that a mentee is not compatible with his mentor, he can end the relationship at anytime and there is no need to explain why. A new mentor will be introduced if the mentee would like one.

What type of advice do mentors give?

The mentor talks about various issues including how to teach classes, how to obtain research funds, how to build a career as a university faculty member, and how to balance life and work. Mentees should not hesitate to talk about their problems with mentors and ask questions.

How often do we meet?


At the first meeting, mentees and mentors decide how often they will meet. Many pairs meet once a month.

Are mentors the only people in this program providing advice?

Senior faculty members of the school where a mentee works are valuable colleagues who can provide detailed information on the specialization of the mentee and his or her career development. It is important for new faculty members to increase the number of faculty members they can consult with individually. The program is intended to supplement rather than replace this kind of natural connection.

Is consideration given to people who are not good at talking to people of the opposite sex?


If desired, people are introduced to a mentor of the same sex. Some faculty members want a mentor who of the same sex because they would like advice on balancing work with marriage, childcare, and nursing, etc.



**Center for the Studies of Higher Education,
Nagoya University**
Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya, 464-8601
Telephone: 052-789-5696. FAX: 052-789-5695
http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/
info@cshe.nagoya-u.ac.jp

Nagoya University Faculty Mentoring Program

Introducing your mentor



Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University

東海高等教育研究所刊行物の利用促進

概要

2009年3月に解散した東海高等教育研究所の書籍ならびに季刊誌を名古屋大学高等教育研究センターおよび名古屋大学附属中央図書館において公開し利用促進を図っている。

これまで、東海高等教育研究所の刊行物を高等教育研究センターにおいて閲覧できるようにし、東海高等教育研究所の季刊誌である『大学と教育』全49号を名古屋大学附属中央図書館において閲覧できるようにした。さらに、東海高等教育研究所の刊行物一覧と内容を紹介するホームページを作成した。

今年度は、『大学と教育』全49号の主要論文を本人に許諾を得てインターネット上で公開する作業に着手した。

担当者

中井 俊樹(名古屋大学高等教育研究センター)

東海高等教育研究所の刊行物

『大学と教育』全49号(1991年から2009年)

東海高等教育研究所『大学再生の条件－大学教育に新しい風を』大月書店、1991年

東海高等教育研究所『何のための大学評価か－大学改革の核心を問う』大月書店、1995年

東京高等教育研究所・東海高等教育研究所・高等教育研究会(京都)共編『大学ビッグバンと教員任期制』青木書店、1998年

東海高等教育研究所『大学を変える－教育・研究の原点に立ちかえって』大学教育出版会、2010年

東海高等教育研究所の刊行物のホームページ

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/projects/tokaiken/>

研究会活動

アカデミック・ライティング研究会

メンバー

- 近田 政博 (名古屋大学高等教育研究センター准教授)
Paul W. L. Lai (名古屋大学教養教育院アカデミック・ライティング支援室特任准教授)
渡辺 哲司 (文部科学省初等中等教育局 教科書調査官)

本年度の活動目標

- 1) 全学教育科目「学術論文の書き方入門」(前期、文系基礎科目、担当:近田政博)の実践を通して、大学生のアカデミック・ライティング能力向上をめざす。
- 2) 上記の授業の成果を学会発表および学術論文としてまとめる。
- 3) 高等教育研究センター、附属図書館、教養教育院の共催による「レポート書き方講座」をシリーズ開催して、大学生のアカデミック・ライティング能力向上をめざす。
- 4) 大学生に「論理的な文章を書く経験」を奨励することをねらいとして、「2012 年度名古屋大学学生論文コンテスト」を実施し、前年度よりも多く、より質の高い応募論文を確保する。
- 5) TA を対象とする学部生へのライティング支援スキルのためのセミナー、および大学院進学希望者を対象とするアカデミック・ライティング基礎能力形成のためのセミナーを実施する。

本年度の活動内容と活動成果

- 1) 上記授業「学術論文の書き方入門」の目標を、「大学で求められる学術的な文章がどのようなものかを理解し、一定の論理的手続きに基づいて文章を組み立てられるようになること」と設定した。本授業は平成24年度から新たに開講した。名古屋大学では平成23年度から大学院生向けの外国語(英語、ドイツ語、フランス語、中国語)によるアカデミック・ライティングを学ぶ授業(いわゆる Mei-Writing)が開講されている。一方、学生数の上で中核を占める日本人学部生を対象にしてアカデミック・ライティングの基礎を提供する授業はこれまで存在しなかった。そこで、同研究会では本授業を開講することによって、こうした全学教育カリキュラム上の「隙間」を埋めたいと考えた。

全体の流れは、論文主題の作成→主題の論証方法の検討(三段論法を用いて)→論文要旨の作成→論文出だしの作成→先行研究の探索と整理、というプロセスをたどった。本授業の履修者は学部1年生127名、3年生1名、4年生1名、計129名である。内訳は、文学部25名、教育学部27名、法学部41名、経済学部23名、情報文化学部11名、他大学の学生2名であった。全学教育の規定により、文系基礎科目である本授業にTAはつかなかった。

本授業のオリジナル教科書として、小冊子『Mei-writing 日本語版 論理的に書く技法(初版)』(原作 Paul W. L. Lai、編集・訳 近田政博)を制作し、受講者全員に無料配布した。この教科書は2011年度に附属図書館で実施した「レポート書き方講座」シリーズの内容を文章化したものであり、Lai氏(名古屋大学教養教育院アカデミック・ライティング支援室特任准教授)の原作を近田が翻訳・編集した。講義の大半はこの教科書を用いて近田が担当したが、数回分は上記のLai氏および附属図書館情報サービス課の職員(堀友美氏、安福奈美氏)、渡辺哲司氏(文部科学省)、丸岡充氏(名古屋大学学務企画課長)、坂本真一氏(丸善出版株式会社)などの学内外の有識者にゲストスピーカーを

依頼した。

授業を進める上で、異なる学部の学生が混ざるように4人一組のグループを編成した。各グループにはグループ共通の題材として、現代の日本社会において是非が問われている問題(大学の秋入学への移行、死刑制度、裁判員制度、原発の再開、消費税の増税)のいずれかを選択するか、あるいは相談の上で別途の題材を提案させた。

受講者はこのグループ共通題材に基づいて各自で主題を設定し、5種類のワークシート(A4サイズで各1枚)を作成した。それぞれ、「論文主題の作成」、「論証方法の提示」、「論文要旨の作成」、「序章の作成」、「論証に必要な先行研究の整理」である。題材はグループ共通だが、課題作成は個人ベースで進める方式をとった。随時設けたグループワークの中で相談すること、互いのワークシートにコメントすることを奨励した。成績評価は上記ワークシートを各20点満点として採点する方式をとった。これらのワークシートを土台とした本格的な論文の作成までは本授業では課さなかった。ただし、授業で得られた知見を一定の文章にまとめて「2012年度名古屋大学学生論文コンテスト」に応募することを推奨した。

また、授業時間以外の学習を促進するために本授業のフェイスブックグループを作成し、参加を呼びかけた。結果的に58人の参加があった。これにより「ワークシートなどのファイルを随時アップロードできる」「採点結果などのフィードバックコメントを随時できる」「学生がフェイスブックグループを通して課題を提出できる」「学生からのコメントを集約することができる」「参考文献やゲストスピーカーについて紹介できる」といった利点を享受することができた。

こうしたSNSを大人数授業にどのように利活用できるのかについては、継続的な検証が必要であろう。

- 2) 上記授業および「名古屋大学学生論文コンテスト」(2011年度分まで)について成果をまとめ、次の学会発表を行った。また、渡辺哲司氏と意見交換を進めながら、下記の論文を作成した。

- ・近田政博「アカデミック・ライティングをどう組織化するかー『名古屋大学 学生論文コンテスト』の事例を中心にー」大学教育学会第34回大会(北海道大学、2012年5月27日)
- ・近田政博「『学術論文の書き方入門』の授業実践ー文書作成に対する学生の苦手意識は軽減できるかー」『名古屋高等教育研究』第13号(名古屋大学高等教育研究センター編、2013年3月)

- 3) 「レポート書き方講座」を4回シリーズで開催した(会場は中央図書館5階多目的室、講師はいずれも近田政博)。のべ参加者は101名であった。

2012年5月30日「第1回レポート書き方講座ーテーマをどう表現するか」

2012年6月27日「第2回レポート書き方講座ー論証の基本をマスターする」

2012年10月31日「第3回レポート書き方講座ー論文要旨をどうやって作成するか」

2012年11月28日「第4回レポート書き方講座ー『出だし』で勝負する」

- 4) 「2012年度名古屋大学学生論文コンテスト」を高等教育研究センター、教養教育院、附属図書館の共催で実施した(協賛:コクヨマーケティング株式会社、名古屋大学消費生活協同組合)。2012年度の応募論文は40本を数え、前年の21本を大きく上回った。いくつかの授業で同コンテストを課題とし

て活用した教員を得られたこと、上記「学術論文の書き方入門」を開講したことが影響したものと考えられる。

- 5) TA および大学院進学希望者を対象とするセミナーを下記のように開催した(講師はいずれも近田政博、会場は中央図書館)。

2012年12月19日「魅力的な研究計画書の書き方ー大学院入試に向けて」(参加者16名)

主 催 : 高等教育研究センター、附属図書館

2012年4月25日「TAのためのライティング支援セミナー」(参加者12名)

主 催 : 高等教育研究センター、教養教育院、附属図書館

○ 2012年度名古屋大学学生論文コンテスト

主 催 : 高等教育研究センター、教養教育院、附属図書館

協 賛 : コクヨマーケティング株式会社、名古屋大学消費生活協同組合

事務局幹事 : 近田 政博

事務局担当 : 大谷 良子

フィードバックシート作成担当 : 東 望歩

進 行 : 2012年6月 ポスター、チラシ、ウェブによる広報開始
2013年1月11日 応募締切
2013年1月28日 高等教育研究センター教員・研究員による予備審査結果集計
2013年2月21日 審査員四名(山本 一良教育担当理事・副総長、戸田山 和久総長補佐・名大生協理事長、佐野 充附属図書館長、早川 義一高等教育研究センター長)による本審査
2013年2月28日 受賞者連絡、応募論文へのフィードバックシート送付
2013年3月7日 表彰式

受賞論文: 優秀賞 「効率主義社会で生きる私達に“和声”が伝える音楽の癒しとは？」
医学部5年 金山 知弘
優秀賞 「痴漢冤罪の昏き闇一正しく裁かれる世界へー」
法学部1年 川浦 翔太
優秀賞 「ケアから探る、今を生きる意味」
医学部2年 新藤 さえ
優秀賞 「書籍再販制の論文タイトル」
(名大生協理事長賞) 法学部1年 土屋 遼准
優秀賞 「大学生が持つ“ひとり”の認識～積極的孤独と消極的孤独」
文学部1年 吉川 千尋
優秀賞 「国際秩序観の相剋としての日清戦争」
医学部5年 山田 悠至

2012年度
名古屋大学学生論文コンテスト

●論文内容= 応募論文においてとりあげるテーマ/問いを明確に記述したうえで、文献等を活用して論じてください。
 内容領域は問いませんが、当該領域を専門としない人にも理解できるよう記述してください。
(論文題目がホームページに掲載されていますので、参照してください。)

●応募期間= 2013年1月11日[金]13時まで

学問のススメ、論文へススメ。

学生生活にスパイスは足りていますか？
 授業に出る、レポートを書く、試験勉強をする、
 サークルに入る、友達と遊ぶ、
 本を読む、アルバイトをする…
 まだまだもの足りない人へ
 学問の書りのスパイスを贈ります
 読書の秋も過ぎたので、冬は度
 ——さて、論文へススメ——



2012

応 募 要 項

応募資格 名古屋大学に在学する学部学生

応募規定 ○応募論文は、原著、未発表かつ日本語で書いたものに限りです。
 ○審査対象論文は1人1編のみとします。
 ○ホームページ (<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ronbun/>) に掲載されている書式に従い、論文と応募用紙それぞれについて電子ファイル(PDFまたはWord)を作成し、メール送信してください。

応募先 E-mail: info@cshe.nagoya-u.ac.jp


審査 本学教員による

表彰 数名以内に賞状および副賞

結果発表 ○2013年2月上旬を予定
 ○発表に際し、入賞者の所属学科および氏名を公表いたします。
 ○入賞作品は名古屋大学学術機関リポジトリに掲載いたします。

その他 論文の書き方に関する各種文献を中央図書館2階ラーニングコモンズおよび高等教育研究センター(東山キャンパス文系総合館5階)にて閲覧できます。

●主催=名古屋大学高等教育研究センター、教養教育院
 ●共催=名古屋大学附属図書館 ●協賛=ココロマーケティング株式会社、名古屋大学消費生活協同組合
 ●問合せ先=名古屋大学高等教育研究センター 2012年度名古屋大学学生論文コンテスト担当
 Tel: 052-789-5696 E-mail: info@cshe.nagoya-u.ac.jp URL: <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ronbun/>



資料2 2012年度名古屋大学学生論文コンテストの投稿論文題目

書籍再販制の展望
なぜホームレス問題はなくなるのか
痴漢冤罪の昏き闇 ―正しく裁かれる世界へ―
政治的無関心と政治参加の可能性
愛国心教育の在り方
「草食系男子」から考える男性の変化 ～男は男らしくあるべきか～
日本の離婚数の変化とその背景、今後の問題
18歳と20歳の違いとは？ ～選挙権年齢引き下げの賛否から考える～
なぜ図書館は電子書籍を貸し出さないのか
現代死生観の考察
地方分権改革としての「道州制」
言葉の誕生と影響～心と脳から見て～
効率主義社会で生きる私達に、“和声”が伝える音楽の癒しとは？
若者と大人の社交辞令の相違
国際秩序観の相剋としての日清戦争
秋入学により就職難は進行するか
クラウド化する直接民主制とアルゴリズム的世論形成
ゆとり教育の成果と社会的評価
なぜ不満のある社会が名大生の幸福を作るのか
若者が購入する商品の3つの特徴からみる若者のすがた
ブラック企業と甘えの意識調査
恋愛は若者を救えるか
1968年と現代のテレビ欄から見る社会の変化
英語学習における英英辞典の有用性
日本人力士はなぜ横綱になれなくなったのか
人類の永遠のテーマ、ゴミ問題～ゴミとどう向き合うべきか～
ケアから探る、今を生きる意味
結婚離れを引き起こしているのは本当に経済的要因なのか
今の若者の人間関係の質を向上させていくためには
なぜ「キョロ充」は嫌われるのか
弓道を通して見た武道の存在意義
ファッションを楽しむおしゃれな若者。彼らはなにを考える？
ロシア語と英語における”ir”の発音に関する考察
韓国の学歴社会を考える
大学生の持つ”ひとり”の認識～積極的孤独と消極的孤独～
近代の孤児――ナショナリストの孤独
大学生の投票率低下の原因は何か
安定的な共存と平和にむけた新たな枠組みを作るための日本の役割
メディアの改革はどうあるべきか
若者の英語学習の現状と日本の将来

資料3 2012年度名古屋大学学生論文コンテスト表彰式の様子



アカデミック・リーダーシップ研究会

メンバー

夏目 達也(名古屋大学高等教育研究センター)

近田 政博(名古屋大学高等教育研究センター)

中井 俊樹(名古屋大学高等教育研究センター)

齋藤 芳子(名古屋大学高等教育研究センター)

大塚 雄作(京都大学)

大森 不二雄(首都大学東京)

中島 英博(名城大学)

吉永 契一郎(東京農工大学)

活動目標

大学環境が厳しさを増す状況の中で、大学経営の高度化が強く求められている。この状況に対応するため、本研究では、大学の教育・学習部門におけるアカデミック・リーダーシップを形成・継承・発展するための具体的かつ有効な方策を検討する。

具体的には、以下の内容を解明する。

- ・日本と諸外国における大学経営陣のリクルート、経営陣着任前の準備の実態
- ・諸外国との比較により、日本の大学における経営陣のリクルート・研修の特徴
- ・大学経営陣が職務を遂行する上で必要な知識・スキルの内容、およびその習得方法
- ・大学経営陣に必要な知識・スキル習得を支援するための研修の内容・方法
- ・研修を提供する主体、および提供の方法

本年度の活動内容

1) 2012年5月、7月

研究会総会を開催し、この場で各メンバーによる研究成果を報告した。また、アカデミック・リーダーシップに関する研究状況に関して、招聘した研究者からレクチャーを受けた。

2) 2012年5月11日

前・長崎大学教育担当副学長・橋本健夫氏を招聘し、講演会を開催した。同大学における教育改革およびそこにおける副学長の担う役割等について報告を受けるとともに、質疑応答を行った。

3) 2012年7月19日

イギリス・オックスフォード大学グリーンテンプレートンカレッジ学長 デイビッド・ワトソン卿(Sir David Watson)を招聘し、講演会を開催した。イギリスの大学での学長経験や大学経営に関する国際比較研究から得た知見をふまえて、大学経営のリーダーとして求められる能力や準備とはいかなるものであるかについて報告を受けた。その後に講演参加者とともに質疑応答を行った。また、名古屋大学理事・副学長2名、国際部長とともに、イギリスの大学改革と学長の役割・リーダーシップのあり方について意見交換を行った。

4) 2012年9月11日

前・フランス高等教育・研究省副局長・アラン・クーロン(Alain Coulon)氏を招聘し、講演会「フランスの大学改革と執行部のリーダーシップ」を開催した。「欧州高等教育圏」の構築をめざす作業がEUと各国レベルで進められている。フランスでは、高等教育および研究活動でのすぐれた成果により同国の国際競争力を確保すべく、近年、大学改革が矢継ぎ早に実施されてきた。2012年6月まで、サルコジ政権の高等教育・研究省副局長として、この動きを促進してきた。その立場から、同政権が進めてきた改革の概要を紹介するとともに、今後の政策展開、大学と行政機関との関係のあり方、そこにおける大学執行部の役割等について報告を受けた。参加者とともに、質疑応答を行った。

5) 2012年10月

アメリカで開催された専門・組織開発協会(POD)に代表を派遣して、アメリカおよび主要国の大学における教育改革やそこにおける大学執行部・一般教員の役割について調査と情報収集を行った。

本年度の活動成果

○ 学会報告「教育改善における大学執行部の役割とリーダーシップ」

大学教育学会第34回大会において、ラウンドテーブルを開催し、研究発表を行うとともに、参加者とともに議論を行った。

日時：2012年5月26日 9:30-12:10

会場：北海道大学高等教育推進機構 E313

発表：橋本 健夫(長崎大学)、大森 不二雄(首都大学東京)、夏目 達也(名古屋大学)

司会：近田 政博(名古屋大学)

趣旨：現在、多くの大学で教育の質向上に向けて、教育改善が進められている。そこでは、大学執行部、とりわけ教育担当副学長の役割が大きい。全学レベルでの改革であればもちろん、各学部レベルの改革においても、教育担当副学長はさまざまな形で関与している。副学長は自身が直接の改善主体になることは少ない。改善の主体は、多くの場合、格部署で教育を担当する教員であったり、それを側面から支援する職員であったりする。彼らの改善の取組を後方から支援することが、副学長の中心的な役割となる。そこに副学長のリーダーシップ発揮の難しさの一端がある。

各大学での教育改善の取組において、副学長と教育担当者との間でどのような役割分担をしているのか、リーダーシップ発揮のために副学長はどのような工夫をしているのか等について、具体的な事例を通して考える。

参考資料：ラウンドテーブル報告「教育改善における大学執行部の役割とリーダーシップ」『大学教育学会誌』第34巻第2号(通巻第66号) pp.112-115、2012年11月

○ 刊行物「大学経営高度化を実現するアカデミック・リーダーシップ形成・継承・発展に関する研究」

平成22年度～平成24年度科学研究費補助金(基盤研究(B)22330213、代表 夏目達也)最終成果報告書を作成した。(2013年3月末刊行予定)

教育学における 映画を教材とした授業開発研究会

教育や子どもに関する映画は無数にあり、これまでも教育学の授業において映画は教材として多様に用いられている。しかしながら、それらの実践は授業者個人によるもので、授業実践の共有が十分に図られていない。また、映画を教材として用いた授業の方法についても十分には検討されていない。本研究会は、映画を教材として用いた教育学の授業実践について研究する。

メンバー

代表 小林 忠資（名古屋大学大学院教育発達科学研究科 博士後期課程）
田中 秀佳（名古屋大学大学院教育発達科学研究科 博士後期課程）
寺田 佳孝（愛知教育大学 非常勤講師）
中井 俊樹（名古屋大学高等教育研究センター）

活動目標

映画を教材として用いた教育学の授業実践を行い、その有効性を受講者からの評価を含めた多様な観点から検討する。そして、映画を用いた教育学の授業を開発し、授業モデルの構築を図る。また、授業モデルの発表並びに授業実践集の公表をとおして、映画を教材として用いた教育学の授業実践の共有化を図る。

本年度の活動内容

1) 研究会の目標と活動内容の設定

2012年9月19日に第1回研究会を実施し、研究会の目標と活動内容について議論し、研究会の方向性を決定した。

2) 映画を用いた授業実践に関する先行研究の収集と検討

2012年12月8日、12月14日に第2回、第3回研究会を実施し、米国の臨床医学教育の分野において、映画を用いて臨床医学に関する授業を行う Cinemeducation(=Cinema “映画”+medical “医学”+education “教育”)の授業実践に関する先行研究の検討を行った。

3) 映画を用いた授業実践と検討

2013年2月10日に第4回研究会を実施し、それぞれの映画を用いた授業実践について報告を行った。そして、受講者からのフィードバックを含め、多様な視点からそれぞれの授業実践と映画を用いた授業の効果に関する検討を行った。

4) データベースの枠組みの構築

2013年2月12日に第5回研究会を実施し、授業実践の共有化を図るためにデータベースの構築を決めた。データベースに実践記録を投稿するためのフォーマットについて議論した。

本年度の活動成果

- 研究発表 田中秀佳、寺田佳孝、小林忠資、中井俊樹「映画を教材とした授業モデルの構築—『ジェネリックスキル』の育成を目的として—」大学教育改革フォーラム in 東海(2013年3月2日、名古屋大学)
- 研究発表 寺田佳孝、小林忠資、田中秀佳、中井俊樹「アクティブラーニングに向けた授業開発の検討—授業教材としての映画の可能性—」大学教育改革フォーラム in 東海(2013年3月2日、名古屋大学)
- 研究発表 小林忠資、田中秀佳、寺田佳孝、中井俊樹「映画を教材として用いた教育学の授業実践と効果」大学教育研究フォーラム(2013年3月15日、京都大学)

研究推進・支援研究会

メンバー

- 代表 渡辺正実(名古屋大学研究推進室)
鎌田恭子(名古屋大学研究推進室、研究協力部研究支援課)
- 幹事 齋藤芳子(名古屋大学高等教育研究センター)
玉井克哉(名古屋大学URA室)
水谷泰則(名古屋大学研究推進室、研究協力部研究支援課)

活動目標

研究活動の高度化・複雑化や、ニューパブリックマネジメントを取り入れた行政改革の結果、大学の研究活動を推進、支援する方策も高度で多様で複雑になってきている。本研究会は、本学における現状および課題の把握、研究者および事務職員の研究推進・支援スキル向上を目的とする。

本年度の活動内容と活動成果

- 1) 現状の研究推進・支援活動について、関係者間で率直な意見交換を行った。
- 2) 上記 1) の内容も踏まえつつ、若手教員や研究支援にあたる職員が研究を円滑にすすめられるよう、研究マネジメントセミナー2012「研究グループを率いるために」を研究推進室と高等教育研究センターの合同で企画実施した。
- 3) 大学における研究管理業務について執筆し、『名古屋高等教育研究』第 13 号に特集論文として掲載された。

齋藤芳子「大学における研究アドミニストレーション職の専門性と能力開発」『名古屋大学高等教育研究』第 13 号、2013 年 3 月 (<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publication/journal>)

○ 研究マネジメントセミナー2012「研究グループを率いるために」

- 日 時：2012 年 7 月 20 日 13:30-15:00
会 場：名古屋大学東山キャンパス 理学南館 1 階 セミナー室
講 師：藤巻 朗(工学研究科、研究推進室)
主 催：研究推進室、高等教育研究センター
参 加：20 名(アンケート回答 20 名)

参加者アンケート集計結果

このイベントをどちらでお知りになりましたか？(複数回答可)

チラシ 6 電子メール 12 推進室の HP 1 その他 2

全体としていかがでしたか？1つお選びください。

満足 17 やや満足 3 どちらともいえない 0 やや不満 0 不満 0

本日の内容は今後役に立ちそうですか？1つお選びください。

とても役に立つ 12 ある程度役に立つ 8 どちらとも言えない 0 あまり役に立たない 0 まったく役に立たない 0

改善点があれば教えてください。(回答数 4)

- ・参加者をもっと多く募るべき。
- ・セミナーの内容をもう少し詳しくチラシ等で知りたかった。

印象に残ったことを教えてください。(回答数 8)

- ・経験に裏打ちされ、説明にインパクトがある。普段気がつかない角度からの指摘が今後活かせる。
- ・分野の異なる先生の考え方、研究室の運営方法を知ることができ、今後役立ちそうな内容であった。
- ・大変ためになりました。
- ・学生に対する教育体制、競争的資金獲得のための心得。
- ・科研費の審査について(応募の参考になった)
- ・グラント審査の背景が聞けてためになった。
- ・審査員としての意見、審査方法など
- ・内容に対しての時間が短い。もう少し質疑応答しながら具体的な事例を議論できれば良い。(例:学生のメンタルケア)
- ・参加申し込みが3年以下の若手に絞られていたが、もう少し範囲を広げても、みなさん興味のある内容だと思いました。

その他ご意見や感想を自由にお書きください。(回答数 5)

- ・少し網羅的になられたかなという印象。ポイントを掘り下げて欲しかったところがある。
- ・事務室にいるだけでは分からない話が聞けて良かった。
- ・自分自身、学生の安全管理について再確認できた。
- ・学生としても教員としても日本の大学での研究がはじめてなので、色々と参考になりました。
- ・企画の主旨をもっと明確にすべき。「外部資金をもっとどンドンとって来い」と言ってもらえばそれはそれで気持ちがいい。

研究グループを率いるために

2012年7月20日(金) 13:30-15:00

場所: 東山キャンパス 理学南館 1階 セミナー室



これから研究リーダーになっていく方々を支援するセミナーです
研究マネジメントの基礎知識・スキルを確認しながら
想定される課題への対応を教職員とともに考えていきます
あわせて、各種リソースへのアクセスをご紹介します

参加費
無料

講師: 藤巻 朗 工学研究科教授

対象: 本学教職員(教員は研究グループリーダー経験3年未満を目安とします)

定員: 30名(先着順) ただし経験の浅い方を優先する場合があります

申込期限: 2012年7月19日(木) 正午

申込方法: 電子メール本文に、1.氏名、2.所属部局、3.メールアドレス、4.TEL(内線)を記入の上
info@rep.provost.nagoya-u.ac.jp まで送信して下さい。



主催: 名古屋大学 研究推進室 & 高等教育研究センター

お問い合わせ先: 研究推進室

Ext: 6410 E-mail: info@rep.provost.nagoya-u.ac.jp

高等教育研究センター

Ext: 5696

human resource

fund raising

accounting

responsible conduct

proposal writing

public outreach

大学院共通的教育研究会

メンバー

代表 戸田山 和久(名古屋大学情報科学研究科／教養教育院)

幹事 齋藤 芳子(名古屋大学高等教育研究センター)

活動目標

大学院修了者に対する社会の要請の変化、大学院入学者の多様化、学術研究そのものの変質などを受けて、ここ数年、大学院教育は再構築を迫られるようになった。そのなかで、専門分野の枠を越えた大学院共通的教育のありかたが主要な論点の1つになっている。

本研究会は、この状況をふまえて、以下の活動を実施する。

- 1) 大学院共通的教育に求められる要素の検討
- 2) 個別要素をテーマとする課外セミナーの企画とフィードバック
- 3) 大学院共通科目についての提言

本年度の活動内容・活動成果

- 1) 大学院共通的教育に求められる要素の検討

海外事例(英国、欧州科学財団、ほか)と国内の議論(筑波大学、大阪大学、ほか)を照合し、要素を抽出した。

- 2) 個別要素をテーマとする課外セミナーの企画とフィードバック

大学院共通科目への展開を念頭において、さまざまな要素で課外セミナーを企画し、フィードバックを得た。[本報告書 p.150-160、183-194 参照]

- ・院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー2012
- ・サイエンスイラストレーション・サマースクール 2012 in あいち
- ・研究発表資料をつくる
- ・学術広報誌制作教室 2012

- 3) 大学院共通科目についての提言

大学院における基礎教育としてのプログラム構築に関し、上記 1、2 を踏まえて提言事項をまとめた。さらに、名古屋サイエンスコミュニケーション教育研究会と連携し、名古屋大学における大学院共通科目として「研究のビジュアルデザイン」の提案を行った。[本報告書 p.150、156 参照]

○ 大学院共通科目についての提言

<p>過去3年間のセミナーの状況</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 受講理由は、指導教員からの推薦があつて、もしくはリーディング大学院スキルセミナーに認定されるので、というものが多 ・ 終了時刻を気にする受講生がおり、5～10分程度の延長にもクレームがつくことがある ・ 参加者の満足度は比較的高く、スキル系、基盤系による差が見られない ・ 課外セミナーの形式で開講した場合、書く、話すなどのスキル系の回は受講者が多いのに対し、科学とは、研究とは、社会との関係は、といった研究活動の基盤を問うようなテーマの回は少ない ・ グループワークやグループディスカッションの時間が長いと好評で、さらに時間をとって議論したかったというコメントも見られる(ただし、教員側からは、2時間は長いという意見が寄せられることがある) ・ 講義の後にいきなり全体討議に移ると、意見が出にくかったり、もっと意見を述べたかったというコメントが寄せられたりする ・ 基盤系の回のアンケートでは、今まで考えたことがなかったことを考えられた、いろいろな意見を聞けたためになった、といったコメントが見られる ・ アンケートによれば、異分野からの参加者との交流に刺激を受けている
<p>大学院共通科目構築のポイント(内容)</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 英国や欧州で標準となっている「トランスフェアラブル・スキルズ」を基にすることで国際水準を確保する ・ 「トランスフェアラブル・スキルズ」の各要素について、日本の大学院の実情にあわせて濃淡をつける ・ 教員および学生が事前に抱く希望に沿わせる必要はなく、実際の受講者(またはオブザーバー教員)のフィードバックをとって改善する
<p>大学院共通科目構築のポイント(時間数)</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業内容によって受講すべき研究の進捗段階を大まかに定め、内容と段階に応じて通常開講か集中講義かを決定する ・ 1単位科目を積極的に導入する ・ 時間外学習の要求量が少ない演習、実習の形態を積極的に検討する ・ 同種の授業を複数開講し、多くの学生が受講できるようにする
<p>大学院共通科目構築のポイント(必修と選択)</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 必修科目の時間数を限定する ・ ただし、科学技術論、研究倫理、科学技術と社会などの基盤的テーマは必修に織り込む ・ スキル系は選択科目とし、ハンズオンの内容とする
<p>大学院共通科目構築のポイント(授業法)</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ ディスカッションやグループワークを中心とするような教授法を採用 ・ 前半に講義、後半にワークといった形で別けるよりも、数回のワークと成果発表の合間に関連する知識を提供する形が望ましい ・ 参考資料、参考文献リストなどを用意すればなお可 ・ スキル系の授業では、必ず、研究倫理などの基盤的テーマに触れたり、当該内容との関連を説明したりする(クロスカリキュラム)

大学院共通科目構築のポイント(クラス編成)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 分野の多様性を確保したクラスを編成する(他分野の学生との交流を経て、自身の専門性を意識、再考してもらうため) ・ ポスドク等の参加も認める(視野を広げてもらうため)
大学院共通科目構築のポイント(その他)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究活動やキャリア形成へのプラス面が理解されやすいようにコンテンツを見せることで、指導教員の理解を得る ・ 共通教育、基礎教育としての意義が明確なものに絞る(専門分野に特徴的な内容は各部局で開講されており他研究科履修／聴講の制度もあるので敢えて外す。これにより、各研究科が修了要件を定めやすくなり、研究科間の差異も出にくくなる)
大学院共通科目の構築例(必修科目)
<p>学術研究入門 Jump start your research</p> <p>形式： 1 単位、1 年次 前期、通常開講</p> <p>内容： 大学院における研究活動とは(キャリア開発の意義と方法)</p> <p>批判的思考法</p> <p>公正研究・研究倫理</p> <p>論理的文章術</p> <p>スライド／ポスター制作</p>
<p>学術研究の遂行と表現の技法 Proceeding and presenting your research</p> <p>形式： 1 ないし 2 単位、1 年次 後期、通常開講</p> <p>内容： アカデミックライティング</p> <p>パブリックスピーキング</p> <p>サイエンスイラストレーション</p> <p>プロジェクト運営</p> <p>科学技術と社会</p>
<p>専門家として生きるために Preparing to be a professional</p> <p>形式： 1 単位、2 年次 前期、集中講義</p> <p>内容： 科学技術・学術とは何か～異分野を知る(他大学との交流なども念頭におく)</p> <p>知識生産のシステムを知る(産学官連携、研究開発評価など)</p> <p>社会サービス／アウトリーチの技法</p> <p>他者の学習を支援する技法(メンタリング、コーチング、ファシリテーション、ティーチングなど)</p>
大学院共通科目の構築例(選択科目)
<p>論理的思考を軸にしたアカデミックライティング</p> <p>形式： 2 単位、通常開講／集中講義</p> <p>内容： 名古屋大学教養教育院で開講されている講座内容を想定している。</p>
<p>パブリックスピーキングとパブリックライティング</p> <p>形式： 1 単位、通常開講／集中講義</p>

<p>内容： 話す技法(対専門家、対非専門家、口頭発表、講演、ポスター、面接試験など) 書く技法(学術広報記事、プレスリリース、研究費申請書、就職のための書類など)</p>
<p>研究のビジュアル表現技法</p>
<p>形式： 2単位または1単位×2、集中講義</p> <p>内容： 名古屋大学大学院共通科目「研究のビジュアルデザイン」として提案のもの。1単位×2とする場合は、科学の可視化(イラストレーション)と学術情報デザインとで分ける。 [本報告書 p.154 参照]</p>
<p>知識生産プロジェクトのマネジメント</p>
<p>形式： 1単位、通常開講／集中講義</p> <p>内容： 名古屋大学教養教育院で開講されているものを基にする。 プロジェクトマネジメントの基本 知識生産活動の特異性 産学官連携の基礎知識(知財管理を含む) 地域貢献の事例(リバースイノベーションなどの概念説明を含む)など</p>
<p>キャリア形成</p>
<p>形式： 1単位または2単位、通常開講</p> <p>内容： 名古屋大学情報科学研究科／ビジネス人材育成本部で開講されている「キャリア形成論」を想定する。</p>

図書館活用研究会

メンバー

近田 政博(名古屋大学高等教育研究センター准教授)

岡部 幸佑(名古屋大学附属図書館情報サービス課長)

本年度の活動目標

- 1) 授業時間以外の学生の学修活動を促進するために、授業活動に附属図書館の資源を利活用する仕組みが必要である。「学修支援から授業支援へ」という趣旨のセミナーあるいは研究会を開催する。
- 2) 大学図書館協会・協議会等が企画する各種研修会に招聘参加し、大学図書館およびその職員が抱える課題を把握する。

本年度の活動成果

- 1) 上記の趣旨をもとに、同研究会では名古屋大学の教員に附属図書館の資源活用を呼びかけるためのセミナーを企画しようと考えた。しかし、現行の資源(学術リポジトリ、授業資料ナビなど)が十分に整備されているとは言えない状況を考慮し、当初の方針を変更した。代わりに、この課題に関する学外の有識者を招聘し、名古屋大学で何ができるかを検討するためのキックオフとなりうるようなセミナーを企画・実施した。また、「大学教育改革フォーラム in 東海 2013」では、同研究会として大学図書館に注目したオーラルセッションを企画・実施した。

○ 教職員のためのスキルアップセミナー「授業で図書館を活用する方法」

日 時：2012年9月13日

会 場：中央図書館5階多目的室

主 催：高等教育研究センター、附属図書館

講 師：野末 俊比古(青山学院大学教育人間科学部教授)

米澤 誠(東北大学附属図書館総務課長)

司 会：近田 政博

趣 旨：授業に附属図書館の資源をうまく活用することで学生の学習活動をより促進すると同時に授業をもっとスムーズに運営することができるかもしれません。このセミナーでは青山学院大学と東北大学の活用事例を紹介します。

○ 大学教育改革フォーラム in 東海 2013 オーラルセッション「協同学習の場としての大学図書館」

日 時：2013年3月2日

会 場：名古屋大学中央図書館ラーニングコモンズ

座 長：岡部 幸佑(名古屋大学附属図書館情報サービス課長)

報 告：中田 晴美(名古屋学院大学)

次郎丸 章(静岡大学)

趣 旨：長い間、多くの大学生にとって大学図書館は書庫にすぎなかった。ようやく近年になってラーニングcommons等が整備されるに伴い、大学図書館は学習空間としての可能性を飛躍的に高めつつある。このことは大学図書館が「本を借りる」「読む」という個人完結型の学習空間から、「仲間と一緒に調べる」「思案をめぐらす」「相談する」「協同作業を行う」という総合的な知的生産活動の拠点へと変貌しつつあることを意味している。学習の質を高めるためには、施設面の拡充だけでは不十分である。図書館が積極的に学生の学習意欲を喚起し、持続的に学習支援を行うソフト面の創意工夫も同時に必要となる。このセッションでは、図書館が学生を知的探検へと誘うための知恵について考えたい。名古屋学院大学と静岡大学の事例を通して、大学生が図書館の活動に参加することによって、彼ら自身が何を学んだのか、同時に図書館がどのように活性化したのかという観点から議論を深めたい。

2) 各種大学図書館協会・協議会等が企画する次の2つの行事に招聘参加した。

○ 2012年度 私立大学図書館協会東海地区協議会 実務担当者研修会

研修会の趣旨：“学び”を支援する図書館力を鍛える

「図書館力」としたのは、大学の中での学習支援という図書館の役割を認識し、大学に対して図書館の力をアピールできることを意識しました。自信を持ってアピールするためには、図書館員個のスキルアップが必要であり、各ワーキングの内容やライティング支援等を通して、学びをサポートする力を身につけます。

日 時：2012年9月6日～7日

会 場：入鹿の里 MUSICA(研修施設:愛知県犬山市)

講 演：大学生と大学教員に図書館をアピールする方法－教員の目線から－

講 師：近田 政博

○ 平成24年度東海地区大学図書館協議会研修会「海外大学図書館にみる学習支援」

研修会の趣旨:ここ数年来、日本の大学図書館において学習支援の重要性が謳われているが、なかなか実効的なサービスとはなっていない。金沢大学附属図書館、静岡大学附属図書館、名古屋大学附属図書館の三大学連携事業として平成23年度に行った香港、シンガポール、オーストラリアの大学図書館におけるラーニングcommonsや学習支援に関する調査や、日米での比較等、学習支援への取り組みにおいて先行している海外での事例をとおして、日本の大学図書館での現状を確認し、今後、学習支援へどう取り組んでいけば良いのかについて考える。

日 時：2012年12月13日、

会 場：中央図書館5階多目的室

パネルディスカッション「海外の事例から何を学ぶのか」

パネリスト：山田 政寛(金沢大学大学教育開発・支援センター准教授)

長澤 多代(三重大学附属図書館研究開発室准教授)

コーディネーター・司会:近田 政博

院生・教職員のためのスキルアップセミナー

授業で 図書館を 活用する方法

授業に附属図書館の資源をうまく活用することで
学生の学習活動をより促進すると同時に
授業をもっとスムーズに運営することができるかもしれません。
このセミナーでは青山学院大学と東北大学の活用事例を紹介します。

2012年
9月13日(木) 14:00 - 16:00

場所：中央図書館 5階 多目的室

対象：本学に在籍する教職員、教員を目指す大学院学生

講師：野末 俊比古氏(青山学院大学教育人間科学部准教授)

「授業と図書館を結びつける：学習・教育支援の意味と展望」

米澤 誠氏(東北大学附属図書館総務課長)

「情報を使う力の育成法：コピペを超えるライティングを目指して」

参加申込：予約優先 申込・詳細…附属図書館トップページ > 講習会

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/guide/literacy/guidance.html>

主催：名古屋大学高等教育研究センター、附属図書館

お問合せ：中央図書館情報サービス課参考調査掛(平日8:30-17:15)

Tel : 052-789-3679 E-Mail : sanko@nul.nagoya-u.ac.jp

名古屋 I R 研究会

メンバー

岡田 有司(高千穂大学人間科学部)

川那部 隆司(立命館大学教育開発推進機構)

鳥居 朋子(立命館大学教育開発推進機構)

代表 中井 俊樹(名古屋大学高等教育研究センター)

幹事 藤井 都百(名古屋大学評価企画室)

山田 剛史(愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室)

本年度の活動目標

インスティテューショナル・リサーチ(以後、IR)に関する大学の現場における実践的な知識を、IRに従事する教職員と高等教育の専門家によって収集・整理し、来年度にかけて研修教材を作成する。

本年度の活動内容と活動成果

- 1) 大学教育改革フォーラム in 東海 2012(2012年3月3日、於・名古屋大学)のポスターセッションで成果発表「データに基づく大学改善—現場で集めたIRのギモン」(発表者:藤井都百、中井俊樹、鳥居朋子、岡田有司、川那部隆司)を行った。
- 2) MJIR2012(2012年9月、於・九州大学)で成果発表「データに基づく業務改善の現状調査—愛知県私立大学の認証評価用自己評価書の分析—」(発表者:藤井都百、中井俊樹)を行った。
- 3) 大学教育改革フォーラム in 東海 2013(2013年3月2日、於・名古屋大学)でオーラルセッション「日本の大学における I R の実践とノウハウ」を企画し、成果発表「公開データを使用した自大学の現状把握の事例」を行った。
- 4) 研究会を開催し、各大学で教職員に対する聞き取りを行った。
 - ・2012年8月27日、立命館大学
 - ・2012年11月30日—12月2日、愛媛大学
 - ・2013年3月18日、立命館大学
- 5) IR書籍(仮題:大学のIR Q&A)の第一ドラフトを作成した。

なごや科学リテラシーフォーラム

メンバー

- 代表 川勝 博（名城大学総合数理教育センター センター長・教授）
浪川 幸彦（椙山女学園大学教育学部 教授）
佐藤 成哉（愛知淑徳大学文学部 教授）
戸田山 和久（名古屋大学大学院情報科学研究科 教授）
村上 美智子
- 幹事 谷口 正明（名城大学総合数理教育センター 准教授）
内田 達弘（名城大学総合数理教育センター 助教）
安田 淳一郎（岐阜大学教養教育推進センター 准教授）

活動目標

名古屋地区で科学教育に携わる大学教員が連携し、大学での科学リテラシー教育の質を高めることを目的とする。本フォーラムは平成 20 年度より活動を続けている。

本年度の活動内容

- 1) 科学リテラシー講演会の実施
- 2) 昭和科学夜話の実施

今年度は、大学での科学リテラシー教育に関するシンポジウム(科学リテラシー講演会)を1度開催し、大学教員・大学生・小中高教員など幅広い層の参加者と意見交換を行った。さらに、昭和生涯学習センターと連携して自然科学に関する市民講座(昭和科学金曜夜話)を 5 回実施し、一般市民と研究者との議論をつなぐ役割を果たした。

本年度の活動成果

- 第9回科学リテラシー講演会「3. 11以後の科学リテラシー～あなたは市民？それとも大衆？」

日 時：2012 年 6 月 9 日 13:30-16:30

会 場：名城大学名駅サテライト

講 師：戸田山 和久(名古屋大学大学院情報科学研究科)

対 象：学生、教員、一般市民(定員 95 名程度)

概 要：東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故をうけて昨年8月に閣議決定された第四期科学技術基本計画では、政策立案への幅広い国民参画が謳われています。この動きを画に描いた餅にしないためには、いくつものことを考えなければなりません。市民に必要な科学リテラシーって何だろう。市民と専門家はどのように協同すればよいのだろうか。そのためにはどんなコミュニケーションが必要なのだろうか。こうした問題をみなさんといっしょに考えたいと思います。

○ 昭和科学金曜夜話 第1回「銀河鉄道の夜の謎を考える～人間と科学とは～」

日 時：2012年10月19日 19:00-20:30

会 場：名古屋市昭和生涯学習センター3階視聴覚室

講 師：川勝 博(名城大学総合数理教育センター)

主 催：名古屋市昭和生涯学習センター

共 催：なごや科学リテラシーフォーラム、名城大学総合数理教育センター、名古屋大学産学官連携推進本部あいちサイエンスフェスティバル事務局

○ 昭和科学金曜夜話 第2回「昆虫の生存戦略～脱皮・変態とホルモン～」

日 時：2012年11月16日 19:00-20:30

会 場：名古屋市昭和生涯学習センター3階視聴覚室

講 師：水口 智江可(名古屋大学大学院生命農学研究科)

主 催：名古屋市昭和生涯学習センター

共 催：なごや科学リテラシーフォーラム、名城大学総合数理教育センター、名古屋大学産学官連携推進本部あいちサイエンスフェスティバル事務局

○ 昭和科学金曜夜話 第3回「おもしろ科楽実験オンパレード～君の能力に挑戦～」

日 時：2012年12月21日 19:00-20:30

会 場：名古屋市昭和生涯学習センター3階視聴覚室

講 師：佐藤 成哉(愛知淑徳大学文学部)

主 催：名古屋市昭和生涯学習センター

共 催：なごや科学リテラシーフォーラム、名城大学総合数理教育センター、名古屋大学産学官連携推進本部あいちサイエンスフェスティバル事務局

○ 昭和科学金曜夜話 第4回「生殖補助医療の倫理」

日 時：2013年1月18日 19:00-20:30

会 場：名古屋市昭和生涯学習センター3階視聴覚室

講 師：武田 穰(名古屋大学産学官連携推進本部)

主 催：名古屋市昭和生涯学習センター

共 催：なごや科学リテラシーフォーラム、名城大学総合数理教育センター、名古屋大学産学官連携推進本部あいちサイエンスフェスティバル事務局

○ 昭和科学金曜夜話 第5回「福島原発事故から科学技術ジャーナリズムを考える」

日 時：2013年2月15日 19:00-20:30

会 場：昭和生涯学習センター3階視聴覚室

講 師：藤吉 隆雄(名古屋大学産学官連携推進本部)

主 催：名古屋市昭和生涯学習センター

共 催：なごや科学リテラシーフォーラム、名城大学総合数理教育センター、名古屋大学産学官連携推進本部あいちサイエンスフェスティバル事務局

- 海外からの視察の受け入れ：Eleanor Vandegrift, Associate Director of Science Literacy Program,
University of Oregon.(2013年3月18日)

- 平成24年度なごや科学リテラシーフォーラム活動報告書、2013年3月(発行予定)

名古屋

サイエンスコミュニケーション教育研究会

学術研究によって得られた知見は、研究チームのなか、学会等の研究コミュニティ内、さらには政府、企業や市民一般とのあいだで、繰り返し表現され、磨かれていく。科学を伝える技法の習得は、科学技術の専門家にとって欠かせないものである。

表現技法には種々あるなかで、ライティングについては書籍があったり授業が開講されたりと比較的進んでいる印象があるが、視覚表象については立ち遅れている感が否めない。また、非専門家とのあいだのコミュニケーションに目を向けると、双方向コミュニケーションが重視されるなかで基本的な学術広報についての蓄積は立ち後れ気味である。さらに、媒介者としてのサイエンスコミュニケーターが注目された反面、研究者自身のスキルはさほど強調されてこなかったという状況もある。

本研究会では、上述の残された課題に取り組むべく、視覚表象、学術広報、研究者のための研修プログラムの3つの分科を設置して、それぞれ活動を実施している。

メンバー

第1分科「サイエンスイラストレーションおよびビジュアルライゼーション教育の検討、試行」

秋庭 史典(名古屋大学大学院情報科学研究科)

茂登山 清文(名古屋大学大学院情報科学研究科)

藤吉 隆雄(名古屋大学産学官連携推進本部)

足立 ゆうじ(名古屋造形大学)

齋藤 芳子(名古屋大学高等教育研究センター)

第2分科「学術広報の検討、トレーニング機会の提供」

福井 康雄(名古屋大学大学院理学研究科)

早川 貴敬(名古屋大学大学院理学研究科)

鳥居 和史(名古屋大学大学院理学研究科)

齋藤 芳子(名古屋大学高等教育研究センター)

第3分科「研究者のための科学コミュニケーション研修プログラムの開発」

戸田山 和久(名古屋大学大学院情報科学研究科)

小泉 周(自然科学研究機構生理学研究所)

齋藤 芳子(名古屋大学高等教育研究センター)

統合事務局

齋藤 芳子(名古屋大学高等教育研究センター)

本年度の活動内容と活動成果

第1分科「サイエンスイラストレーションおよびビジュアルライゼーション教育の検討、試行」

- 1) 科学の視覚表象技法のトレーニング機会として、「サイエンスイラストレーション・サマースクール 2012 in あいち—科学を可視化するサイエンスイラストレーションの技法を学ぶ」および「院生・教職員のためのスキルアップセミナー 研究発表資料をつくる:ポスター・スライドづくりの理論と実践」を学内外共同で企画実施した。
- 2) 上記セミナーに関するフィードバックを踏まえて今後の展開の方向と方策を検討し、次年度の大学院共通科目「研究のビジュアルデザイン」の提案を行った。なお、この提案に関する活動は、大学院共通教育研究会と連携して行った。
- 3) 大学院共通科目「研究のビジュアルデザイン」におけるテキストとなる小冊子「研究を視覚的に伝える—学術情報デザインの基礎」を制作した。

第2分科「学術広報の検討、トレーニング機会の提供」

- 1) 学術らしさを伝える広報誌のあり方を念頭において、「学術広報誌制作教室 2012」を学内外との連携のもとに企画実施した。
- 2) 上記セミナー内容とそのフィードバックを、サイエンスアゴラ 2012 で発表した。
- 3) 総括の方法について、検討を行った。

本分科の活動は、「科学研究を伝える広報誌制作手法の追求」(科研 23650506、代表 福井康雄)と連携して実施した。

第3分科「研究者のための科学コミュニケーション研修プログラムの開発」

- 1) 研究者のための科学コミュニケーション研修のあり方を構想した。
- 2) コアカリキュラムとして、「研究者のための科学コミュニケーション Starter's Kit」を使用した参加型研修プログラムを開発した。
- 3) 研修成果の記録、共有のためのポートフォリオのあり方について検討した。

本分科の活動は、JST サイエンスコミュニケーションセンターならびに日本科学未来館と連携して実施した。

○ サイエンスイラストレーション・サマースクール 2012 in あいち

サイエンスイラストレーターという仕事は北米では専門職として確立しており、大学院修士課程が整備されています。しかし、日本では系統だったカリキュラムすら、まだつくられていません。そこで、同分野を長年リードし創立 100 周年を迎えたジョンズ・ホプキンス大学医学部のサイエンスイラストレーション入門コースを3日間のダイジェストで開講します。

今回は、オブザベーション・ドローイングと呼ばれるサイエンスイラストレーションの基礎技法を用いて頭蓋骨模型をデッサンします。その後、スキャナーでパソコンに取り込み、グラフィックソフトを用いて細部を仕上げていきます。

講師 : Jennifer E. Fairman (ジョンズ・ホプキンス大学)

日 時 :2012年8月28日・29日・30日 各日 10:30~16:15

会 場 :名古屋大学東山キャンパス 全学教育棟

対 象 :大学院生、研究員、一般 (定員 20名程度)

主 催 :名古屋大学 グリーン自然科学国際教育研究プログラム、GCOE「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合」、高等教育研究センター、産学官連携推進本部あいちサイエンスフェスティバル事務局

共 催 :名古屋造形大学、名古屋大学物質科学国際研究センター、名古屋大学博物館

協 力 :ジョーンズ・ホプキンス大学医学部医療アート専攻、トロント大学バイオメディカル・コミュニケーションズ専攻、名古屋大学 研究推進室、名古屋大学 リサーチ・アドミニストレーション室、東北大学大学院 医学系研究科

後 援 :在名古屋米国領事館、名古屋アメリカンセンター

コーディネーター :奈良島 知行(サイエンスイラストレーター、Tane+1 LLC 代表)

□ 参加者アンケート集計結果(初日)

このセミナーは有意義でしたか？

とても有意義 21 ある程度有意義 5 どちらとも言えない 0 あまり有意義でない 0 まったく有意義でない 0

このセミナーの中で印象に残ったことを教えてください

- ・さまざまな background な人たちがいたこと
- ・ジェニファーさんの講義
- ・アメリカのカリキュラムに関すること
- ・新しい世界でした
- ・左上から照明をあてるという常識が存在すること
- ・トレースの際の鉛筆ぬり
- ・Science 25% Art 25% Communication 50%
- ・オブザベーションドローイングの実際を見れたこと
- ・サイエンスイラストレーションのアメリカでの実際を聞くことができたこと
- ・デッサンとサイエンスイラストレーションの違い
- ・最初の座学での作品紹介と、デッサンのレクチャー
- ・ファインアートやデザインとも異なる、イラストレーションならではの分野に触れられたこと
- ・初めてのことばかりで、すべてが印象的です
- ・さまざまなバックグラウンドの方が参加されているところ
- ・被写体の写真としての参考資料を作る時の光の当て方。レフ板を置く、光をトレーシングペーパーのフィルターを通してやさしくすることにより(グリッド板の用意も)陰影がやわらかくなるという撮影技法。
- ・海外のイラストレーターの仕事について知れたことや、他の日本でもメディカルイラストレーターを目指し方々と会えたことが貴重だったと思います。
- ・ジェニファー先生のデモンストレーション、影の入れ方など参考になった。
- ・講師の作品
- ・講師の先生がデッサンする様子を生で見られたこと

- ・本人がサイエンスイラストレーションの話をしてくれて、英語はあまり分からなかったが、なにか伝わるものがあった。
- ・生物学のスケッチと描き方が違ったこと
- ・サイエンスアートの重要性(情報共有・伝達)
- ・Jennifer 先生の鉛筆画のタッチの柔らかさ
- ・対象物のとらえ方(光の当て方や陰影について)
- ・ウイルスや分子などの説明をしたイラスト(ウイルスの entry や作用について、絵を用いて説明したいと思っているため)
- ・講師の先生もスタッフの先生も親切でした。講師の先生の絵はとても素晴らしく勉強になりました。
- ・絵をかくのはもともと好きなので、サイエンスと組み合わせた今回のような仕事があるとわかってよかった。
- ・サイエンスイラストレーションを専門にしている大学の課程があること。

このセミナーを改善するとしたらどのような点でしょうか？自由にお書きください

- ・最初にすべての process の demonstration をしてくれると、最初からこのクラスの overall picture が見えて良いと思う。
- ・期間が長いとよいですね！
- ・Jennifer のセミナーなのか、日本人講師のセミナーなのか？もっと Jennifer に多くのことを聞きたかったです。
- ・デッサンするものが見えにくい。
- ・サイエンスイラストレーションが現場・社会でどう活躍しているか？もう少し詳しく聞ければよかった。
- ・モチーフは一人一個ずつ欲しかった。
- ・頭蓋骨の数を増やす。
- ・席によってモニターの見やすさに落差が激しいことへの対処
- ・スクリーンがいくつかあると良かったです。
- ・講義以外の実習時は、被写体を置いた机を囲むように椅子を並べてスケッチするなどがあれば、もっと描きやすいと思いました。
- ・実演をもう少し見やすくしてもらえると良いと思います。手元が見やすい会場だと良いと思います(デスクにライトがあるとか)。1人1台 PC をもらって、PC の写真を見てスケッチのほうがやりやすいと思います。
- ・スケッチする画面が見づらかった。個々で PC 画面を見ながらやりたかった(目が悪いので)。
- ・最初の概論で、もう少し日本語で補足がほしかった。
- ・作業時間の割り振りや見学など、作業しやすい流れでした。
- ・スタッフの方が多く、細やかに見ていただけたのが良かったです。
- ・スクリーン(プロジェクタ)が少し見にくかった。
- ・美術の知識がまったくなく、絵がどのような工程でできるのかもイメージがなかったので、大まかな流れを写真なども用いて最初に説明があると、もっとうれしかったです。転写のやりかたを間違えてしまったので、そういうミスも減らせるかと思います。すみませんでした。
- ・紙や台紙にテープを貼る時、方法がやや分かりにくかったので、サンプルが1つ2つあると分かりやすそうです。

- ・頭蓋骨より、植物も選択して書ければ、直接活かせる技術になると思いました。
- ・英語が分からなくて残念だった。
- ・頭蓋モデルの数を増やす。
- ・あらかじめモデル用の美しくバランスの良い写真を準備しておく。
- ・対象物が少ないので、じっくり観察して描くことが難しい。1人1つとまでいかなくとも、数人で1つぐらいの個数があると、より作業しやすいと思う。
- ・題材を見やすくしていただけると嬉しいです。
- ・英語セミナーで、理解できてない人がたくさんいただろうと思います。主旨がわかりにくすぎます。何をしたらいいのかまったくわからない。

その他、セミナーについてのご感想やご意見を自由にお書きください

- ・今日はありがとうございました！
- ・楽しいです。
- ・とても有意義なセミナーだった。ためになりました。講師の先生もいろいろ教えてくださりよかったです。
- ・実演がもう少し見やすいようにしていただけるとよいと思います。
- ・セミナーに来られている方も、レベルの高い人たちが多く、とても刺激になった。
- ・普段の生活ではなかなか知ることのできない分野を知ることができる面白い機会だったと思う。
- ・できたら関東(東京・神奈川)でも開催していただきたいです。
- ・とても楽しいです。ありがとうございました。
- ・初日であるが、非常に興味深い内容であった。
- ・来年度はぜひ名古屋でも Advanced コースを開催してください！
- ・英語も大変聞きやすかったため、説明などわかりにくいことはなかった。逆に複数の方が一度に話してしまわれるほうが混乱してしまうと思う。
- ・京都でもぜひ開いてください。

参加者アンケート集計結果(最終日)

今日の活動は楽しかったですか？

とても楽しかった 16 まあまあ楽しかった 0 普通 2 あまり楽しくなかった 0 全然楽しくなかった 0

今日の活動はわかりやすかったですか？

とてもわかりやすかった 12 まあまあわかりやすかった 4 普通 1 少し難しかった 1 とても難しかった 0

以前もこのような活動に参加したことがありますか？

よく参加している 0 参加したことがある 5 今日がはじめて 13

また参加したいと思いますか？

積極的に 13 機会があれば 4 どちらともいえない 0 あまり参加したくない 0 もう参加したくない 0

今まで、自然や科学・技術に興味がありましたか？

とても興味があった 16 まま興味があった 2 どちらともいえない 0 あまり興味はなかった 0 全然興味はなかった 0

今日参加して、自然や科学・技術への興味が高まりましたか？

更に興味を持った 12 少し興味を持った 3 変わらない 3 少し興味が薄れた 0 全然興味はなかった 0

今度は今日のような活動にお友達を誘ってみたいですか

とても誘ってみたい 10 誘ってみたい 7 あまり誘ってみたいくない 1 誘ってみたいくない 0

○ 研究発表資料をつくる—ポスター・スライドづくりの理論と実践—

近頃はポスターやスライドによる研究発表の機会が多くあります。そこで求められる「見てもらえる、なかが伝わる」ビジュアル表現のスキルは、社会人になってからも広く使えるものです。

本セミナーでは、理論と実践の両面から、研究発表ポスター・スライド制作のスキル向上を目指します。基礎からはじめますので、経験の浅い方にも実践を振り返りたい方にもオススメです。

講 師 : 遠藤 潤一 (広島国際学院大学)

日 時 : 2012年9月12日 10:00-12:00 (理論編)、13:00-15:30 (ポスター実践編)

会 場 : 名古屋大学東山キャンパス全学教育棟中棟3階 SIS ラボ

対 象 : 大学院生、教職員 (実践編定員 25名)

主 催 : 本学情報科学研究科、高等教育研究センター

□ 参加者アンケート集計結果 (実践編)

受講者内訳 (所属)

情報科学研究科 3 医学系研究科 4 工学研究科 1 理学研究科 5 生命農学研究科 2

これまでにポスター発表を行ったことがありますか？

ある 13 これまではないが予定はある 4 予定もない 1

全体としていかがでしたか？

満足 9 やや満足 5 どちらとも言えない 1 やや不満 1 不満 0

このセミナーの中で印象に残ったことを教えてください

- ・ためになった事が多すぎて書ききれません。
- ・ソフトに慣れるのが大変だった。でも実際に作りながら説明を受けることができ、よかった。
- ・実際に操作ができた点が良かった。
- ・午後の部はあまり役に立たなかった。
- ・イラストレーターでポスターを作成したことはありませんでしたが、役に立つ機能がたくさんありました。

このセミナーを改善するとしたらどのような点でしょうか？自由にお書きください

- ・特にありません。
- ・はじめからポスターをつくるのはよくないと思う。作ってあったポスターの批評を期待していた。
- ・Windows の Power Point でやりたい。
- ・普段 Windows 環境を使用している人のために、Windows 環境も用意できるとよい。あるいは「Mac で読み込めない画像データ」についてのサポートが少しでもあるとよい。
- ・イラストレーターの使用法講座ではなく、自分の元々作っていたポスターのどこが悪くてどう直せばよいといったアドバイスが欲しかったです。
- ・一人一人にアドバイスがあるとよかったです。

その他、セミナーについてのご感想やご意見を自由にお書きください

- ・勉強になりました。お忙しいなか、ありがとうございました。
- ・念のため PDF,PPT ファイルは用意していたのですが、テキストや図表のデータを持ってきた方が便利でした。あらかじめ「イラストレーター (Mac 環境) でファイルをつくります。」とアナウンスしていただけたら、と思いました。
- ・Mac に慣れていなくて困りました。持ち込んだファイルもズレていて使えませんでした。最初に Mac を使用することを伝えて頂ければありがたいです。
- ・イラストレーターのソフトを初めて使用し、操作方法を覚えるのに精一杯であったが、貴重な機会になった。どこかでソフトを手に入れて、操作方法をマスターして、スムーズに作成できるようになりたいと思う。
- ・Mac のスペックが低いです。
- ・ありがとうございました！

○ 学術広報誌制作教室 2012

科学技術が複雑かつ高度に生活と結びつく現代社会において、学術機関と社会、科学技術者と市民のあいだの連携や対話が求められています。科学技術の活動やその成果を伝えることは、その基礎となる重要な活動です。広報誌制作教室 2012 では、学術広報誌の記事を作成・編集するスキルとして書くスキルと描くスキルを取り上げます。学術論文制作にも通じるところのある汎用性の高いスキルを確認しながら、広報スキルへの展開を考えます。

講師：福井 康雄（本学理学研究科）

渡辺 政隆（筑波大学）

田中 佐代子（筑波大学）

日時：2012年9月25日 13:00-18:00

会場：名古屋大学東山キャンパス理学南館1階 理学セミナー室

対象：大学院生、教職員、一般（定員40名程度）

主催：「科学研究を伝える広報誌制作手法の追求」（科研23650506、代表 福井 康雄）

共催：名古屋サイエンスコミュニケーション教育研究会、「科学者のためのサイエンスイラストレーション作成ガイド」（科研22615004、代表 田中 佐代子）

協力：名古屋大学大学院理学研究科 広報委員会

○ 大学院共通科目「研究のビジュアルデザイン」提案シラバス

科目名	研究のビジュアルデザイン
単位数	2
開講時期	(前期、2日間の集中講義で2回)
教員名	田中佐代子(筑波大学芸術系准教授) 遠藤潤一(広島国際学院大学情報デザイン学部(来年度情報文化学部へ改組)専任講師)
履修条件あるいは 関連する科目等	とくになし
目的と目標	研究の発想や支援には、視覚的な思考のもつ創造性や、全体を俯瞰する力がおおきくかかわっている。この授業の目的は、デザインについての知識を深めるとともに、科学の可視化であるサイエンス・ビジュアリゼーションと、発表資料のデザインに関する原理や手法を理解し、研究との相乗効果を高めることにある。講義と制作を通して、グラフィクスやイラスト、ポスターやスライド制作の基礎的な技術を身につけ、研究の遂行や発表に役立てることが目標である。
内容と計画	「サイエンス・ビジュアリゼーション」(前半) 研究発表に際して用いられるデータの可視化や科学イラストレーションの原理について講義し、それらの制作を通して、図にかかわる基本的な技術を習得する。 第1回 授業のオリエンテーションとデザイン概論 第2回 サイエンス・ビジュアリゼーションの考え方と手法 第3回—第7回 ビジュアリゼーションの制作 第8回 制作物の講評とビジュアリゼーションの可能性 「研究発表資料のデザイン」(後半) 研究発表で使用されるプレゼンテーションスライドやポスターのデザイン手法について講義し、それらの制作を通して、コミュニケーション技術を習得する。 第9回 デザインの考え方と研究発表 第10回—第13回 研究発表資料のデザイン 第14回 制作物の講評と情報デザインの展開 第15回 研究とビジュアルをつなぐリテラシー
成績評価の方法と基準	授業への出席と議論への参加などの平常点および提出した制作物、レポート等
教科書・参考書 ・参照情報等	田中佐代子『科学者のためのビジュアルデザインハンドブック』(配布) 遠藤潤一『研究を視覚的に伝える—学術情報デザインの基礎』(配布) Felice C.Frankel, Angela H.DePace “Visual Strategies: A Practical Guide to Graphics for Scientists and Engineers”, Yale University Press(参考書) 遠藤潤一ほか『情報デザインベシクス』(参考書)
連絡先	茂登山清文(情報科学研究科・内線 4774)
連絡事項	① 制作にあたっては、Macintosh コンピュータと Adobe CS を使うが、その簡単な使用方法のレクチャーも授業内で行う。② 制作では、既に作成または発表したグラフィクスやポスターをリメイクするので、それらを持参することがのぞましい。③ 前後半の講義の間に、デザインの展覧会などを見学し、レポートしてもらうことがある。

科学を可視化するイラストレーション技法の基礎を学ぶ

Celebrating 100 Years
TEACHING EXCELLENCE IN MEDICAL ILLUSTRATION

サイエンスイラストレーション・サマースクール 2012 in あいち

2012年8月28日(火)～30日(木)

名古屋大学(東山キャンパス)で開催

受講申込 URL <https://aichi-science.jp/events/single/476>



講師 **Jennifer E. Fairman**

ジョンス・ホプキンス大学医学部
医療アート専攻 助教

医学・生命科学イラストレーションの修士号をジョンス・ホプキンス大学医学部で取得。医学・科学イラストでは手描きとPCワークの両方を扱い、2Dアニメ、ウェブ、インタラクティブ、グラフィックレイアウトまで幅広くこなす。ペンギンなどのネイチャー系イラストでも知られる。2011年に創立100周年を迎えた専攻の記念誌表紙デザインも手がけた。

スクールの課題

『オブザベーション・ドローイング』と呼ばれるサイエンスイラストレーションの基礎技法を用いて頭蓋骨模型をデッサン。

その後、スキャナーでパソコンに取り込み、グラフィックソフトを用いて細部を仕上げます。

受講料：無料

ただし、懇親会費は実費をいただきます。
サマースクール期間中に完成しない場合は、電子メール等による追加指導のもとで自主的に完成させる努力が求められます。

定員：20名程度(大学生・院生・一般を対象とします)

大学院初學者レベルで開講しますので、受講希望者のバックボーン・レベルを考慮のうえ選考します。

8月28日(火)10:30～12:00に実施する座学講義のみ、追加定員20名程度を募集します。

募集期間：8月1日(水)～8月19日(日)

上記URL上の応募フォームで受け付けます。締め切り後、受講可否を8月21日(火)までに電子メールで通知します。



コーディネーター **奈良島 知行**
サイエンスイラストレーター Tane+1 LLC代表

桑沢デザイン研究所を経て、百科事典や図鑑向けのイラストを描く仕事を開始。1977年、東京にイラストレーション・プロダクション「Studio Sloth」を設立。1987年に渡米。ナショナルジオグラフィック、サイエンティフィックアメリカンなどの科学雑誌から広告まで、フリーランスイラストレーターとして数々のプロジェクトに参加。

主催：名古屋大学 グリーン自然科学国際教育研究プログラム / GCOE「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合」/ 高等教育研究センター / 産学官連携推進本部あいちサイエンスフェスティバル事務局

共催：名古屋造形大学、名古屋大学 物質科学国際研究センター / 博物館

協力：名古屋大学 研究推進室 / リサーチ・アドミニストレーション室、ジョンス・ホプキンス大学医学部 医療アート専攻、トロント大学バイオメディカル・コミュニケーションズ専攻、東北大学大学院医学系研究科

後援：名古屋アメリカンセンター(申請中)

お問い合わせ：名古屋大学 産学官連携推進本部
担当：藤吉(ふじよし)

tel : 052-747-6527

E-mail : illustration@aichi-science.jp



市民と研究者・専門家が気軽に語り合うイベント

SAKAE
ScienceTalk

さかえサイエンストーク

表現の本質

～サイエンスイラストレーション～

ゲスト: Jennifer E. Fairman
ジョーンズ・ホプキンス大学医学部
医療アート専攻 助教



「イラストレーションの本質は事実に限りなく近づく説得力ある描写」と説く名古屋造形大学前学長の高北幸矢氏が、サイエンスイラストレーションについてジョーンズ・ホプキンス大学の Jennifer E. Fairman 氏と語り合います。

ホスト: 高北 幸矢
デザイナー、清須市はるひ美術館館長、
名古屋造形大学前学長



2012年8月30日(木)

18:30 ~ 20:00

入場無料 スカイデッキ入場料600円が必要です。

定員: 先着 30 名程度

会場: 名古屋テレビ塔スカイデッキ
(地上90m屋内展望台)



科学を可視化するイラストレーション技法

サイエンス・イラストレーション

を愛知県に紹介します。



企画展

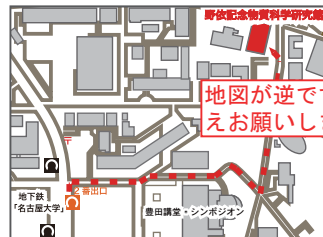
サイエンスを絵で伝える

～北米の Science Illustration～

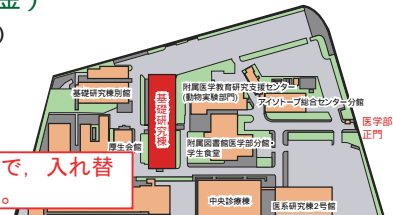
“サイエンスイラストレーション・サマースクール 2012 in あいち”に登場するサイエンスイラストレーション講師陣の作品を展示。Jennifer E. Fairman (サマースクール講師, ジョーンズ・ホプキンス大学), 在米のサイエンスイラストレーター奈良島知行(同講座コーディネーター)などの代表作を見るチャンス。

2012年8月6日(月)～8月17日(金)

会場: 名古屋大学(鶴舞キャンパス)
医学部基礎研究棟(講義棟)1階



地図が逆ですので、入れ替えをお願いします。



2012年8月28日(火)～9月7日(金)

会場: 名古屋大学(東山キャンパス)
野依記念物質科学研究館ケミストリーギャラリー

主催: 名古屋大学 グリーン自然科学国際教育研究プログラム / GCOE「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合」/ 高等教育研究センター / 産学官連携推進本部あいちサイエンスフェスティバル事務局
共催: 名古屋造形大学, 名古屋大学 物質科学国際研究センター / 博物館
協力: 名古屋大学 研究推進室 / リサーチ・アドミニストレーション室, ジョーンズ・ホプキンス大学医学部 医療アート専攻, トロント大学バイオメディカル・コミュニケーションズ専攻, 東北大学大学院医学系研究科
後援: 名古屋アメリカンセンター(申請中)

お問い合わせ: 名古屋大学 産学官連携推進本部
担当・藤吉(ふじよし)
tel : 052-747-6527
E-mail : illustration@aichi-science.jp



情報科学研究科 + 高等教育研究センター
院生・教職員のためのスキルアップセミナー

研究発表資料をつくる

ポスター・スライドづくりの理論と実践

趣旨 近頃はポスターやスライドによる研究発表の機会が多くあります。そこで求められる「見てもらえる、なかみが伝わる」ビジュアル表現のスキルは、社会人になってからも広く使えるものです。本セミナーでは、理論と実践の両面から、研究発表ポスター・スライド制作のスキル向上を目指します。基礎からはじめますので、経験の浅い方にも、実践を振り返りたい方にもオススメです。

日時と会場

2012年9月12日 [水] 全学教育棟中棟3階 SISラボ
午前の部 [理論編] 10:00 - 12:00
午後の部 [ポスター実践編] 13:00 - 15:30

講師 遠藤潤一氏 (広島国際学院大学情報デザイン学部講師)

対象 午前の部 [理論編] 本学に在籍する大学院学生または教職員 研究員含む
午後の部 [ポスター実践編] 本学に在籍する大学院学生または研究員

参加 無料

申込 午後の部 [ポスター実践編] のみ必要, 9/11 [火] 締切
所属, 学年または職名, 氏名, メールアドレスをinfo@cshe.nagoya-u.ac.jpまで送信してください
情報科学研究科所属の方は, 事務室教務掛でもお申しいただけます
定員25名 情報科学研究科枠あり, 希望者多数の場合は後期課程在学学生を優先します
午後への参加は不可. ポスター制作に使用するテキストや図のデータ (作成中または作成済みのポスターデータなど) を電子ファイルで持参することが望ましい

内容

[理論編]

発表ポスターについて
デザインの原則
個別の要素のデザイン 文字, 段落, 色, グラフや表, 図
スライド制作の場合

[ポスター実践編]

ポスター作成に適したアプリケーションの使い方
ポスターの改善
講評

問合せ→ 高等教育研究センター 齋藤 内線5696 | info@cshe.nagoya-u.ac.jp

学術広報の

科学技術が複雑かつ高度に生活と結びつく現代社会において、学術機関と社会、科学技術者と市民のあいだの連携や対話が求められています。

科学技術の活動やその成果を伝えることは、その基礎となる重要な活動です。広報誌制作教室2012では、学術広報誌の記事を作成・編集するスキルとして書くスキルと描くスキルを取り上げます。学術論文制作にも通じるところのある汎用性の高いスキルを確認しながら、広報スキルへの展開を考えます。

世界へ

日時：2012年9月25日(火)13:00-17:00+情報交換会(1時間程度)

場所：名古屋大学理学南館1階 理学セミナー室

対象：若手教職員、研究員、大学院生、学部生等 / 定員：40名

申込み：●<https://www.a.phys.nagoya-u.ac.jp/kouhoushi/hidoca/>の参加登録フォームから。または
●電子メール本文に氏名、ふりがな、所属、役職、学年、情報交換会参加の有無をご記入の上
kouhoushi@phys.nagoya-u.ac.jp宛てに送信してください。締め切りは9月24日(月)正午です。

ようこそ

プログラムと講師

13:00 - 13:10 趣旨説明 福井康雄(名古屋大学大学院理学研究科)

13:10 - 14:50 古今東西サイエンスライターの著作に学ぶライティング術
渡辺政隆(筑波大学広報室/サイエンスコミュニケーター)

(休憩)

15:05 - 16:45 科学技術者のための伝わるイラストレーション術
田中佐代子(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

16:45 - 17:00 まとめ

*終了後1時間程度の情報交換会を予定しています。

事務局：早川貴敬、島岡和史(理学研究科)

主催：「科学研究を伝える広報誌制作手法の探究」(特許23850596、代表・福井康雄)

共催：名古屋サイエンスコミュニケーション教育研究会

協力：名古屋大学大学院理学研究科広報委員会

広報誌制作教室

名古屋哲学教育研究会

実施体制

代表 戸田山 和久(名古屋大学大学院情報科学研究科 教授)

幹事 久保田 祐歌(愛知教育大学教育創造開発機構 大学教育研究センター 研究員)

活動目標

名古屋地区等で哲学を教える教員が、所属大学を越えて日ごろの教育実践を共有し、知見を交換する機会を提供する。同時に、哲学を専門とする大学院生に、教授法について学ぶ機会を提供する。加えて、市民との対話の機会を設け、哲学教育の裾野を広げる取り組みを行う。

本年度の活動内容

平成 24 年 9 月、12 月、平成 25 年 2 月に哲学教育を中心テーマとして対話を行う「哲学カフェ」を名古屋大学内のクレイグスカフェにて開催した。「哲学カフェ」は、哲学研究者だけでなく、広く市民が参加し、それぞれの意見や考えを率直に語り、対話する場である。年齢や職業の異なる参加者が、大学において受けてきた・受けている哲学教育について振り返り、対話するなかで、哲学研究者が哲学を専門としない学生にとっての哲学系科目受講の意義や教育のあり方を捉え直し、教育実践に還元するためのきっかけを提供する試みとして企画した。

第 1 回目は「哲学教育の意義とは?」、第 2 回目は「教養科目の『哲学』で学生は何を学んだらよいのか?」をテーマに、三浦隆宏氏(カフェフィロ/椋山女学園大学)を進行役として実施した(詳細は、「実施概要」及び三浦氏の論稿を参照)。第 3 回目は、哲学教育に限らず、広く大学教育をテーマとする問いを選定するという方向付けを行い、「大学生にとって必要な教養とは?」をテーマとした。哲学カフェでは、哲学を専門としない(あるいは専門としていなかった)参加者が、対話を通じて哲学教育の内容や意義、哲学の面白さについて考えを深める一方、現在、哲学教育を行う研究者にとっては、哲学の面白さを学生に伝えるにはどうしたらよいかなど、自身の授業における教育のあり方について改めて振り返る機会となった。哲学カフェでの市民との対話を通して、大学における教育のあり方を研究者が捉え直し教育実践に活かすという、今年度からの新しい試みは今後も継続する予定である。

本年度の活動成果

- 1) 哲学教育にとっての哲学カフェの意義を明確にするために文献調査を行うと共に、計 3 回の哲学カフェを開催した。その内容や効果及び意義を分析しまとめた。
- 2) 哲学カフェで提起されたテーマ「哲学の面白さをどのように学生に伝えたらよいのか」を、3 名の哲学研究者が担当する授業において検討し、WS 企画として応用哲学会第 5 回年次研究大会(平成 25 年 4 月、於南山大学)への発表申請を行った(発表承認済)。
- 3) 大学教育改革フォーラム in 東海 2013(平成 25 年 3 月 2 日、於名古屋大学)においてポスター発表「教室の外で哲学をまなぶー哲学カフェという手法について」(代表者:三浦隆宏、共同発表者:久保田祐歌)を行った。

○ 名古屋哲学教育研究会 2012 第 1 回哲学カフェ「哲学教育の意義とは？」

進行役：三浦 隆宏（カフェフィロ／椋山女学園大学人間関係学部講師）

日 時：平成 24 年 9 月 18 日(火)17:00～18:30

場 所：名古屋大学理学部E館1階 クレイグス カフェ

参加者アンケート集計結果

哲学カフェの満足度とその理由(自由記述)

【満足度 5】(回答者 15 名中 3 名)

- ・ いろんな意見が自然な会話の流れで出てきたのがおもしろかった。(自分が話しすぎたかもしれないのが失敗ですが・・・)。[教員・倫理学・10 年]
- ・ 普段接することのない話が聞けたから。[大学院生・工学・環境学]
- ・ そもそも議題をひっくり返す様々な議論が出てとてもおもしろかったです。[学部生・発達教育臨床]

【満足度 4】(回答者 15 名中 7 名)

- ・ 科学的に考える、見るという事に関して考える事ができたので。普段考えた事なかったので。[大学院生・理学研究科]
- ・ おもしろかったです。[学部生・教育学部臨床心理学]
- ・ 議論があちこちしてしまって、すっかりしなかったことがあった。[大学院生・国際地域文化研究科]
- ・ 議論が循環してしまったのは残念と感じました。あと、ファシリテーターの方も座ってもいいのでは？[大学職員・ドイツ文学(学生時代の専攻)・5. 6 年]
- ・ 他の方の考え方を聞くことができ、貴重な機会になりました。もう少し時間があるとよかったです・・・4です。[大学院生/高校非常勤講師・文学研究科・2 年]
- ・ いろいろな立場からの意見があったこと。しかし、“哲学”と“教育”についての共通理解になかなか近づけなかった。[大学教員・経営学部/経営学研究科・30 年]
- ・ 議論自体おもしろかった。[その他・哲学]

【満足度 3】(回答者 15 名中 5 名)

- ・ 評価基準を持っていません。[大学教員・人文学部・10 年]
- ・ ぐだぐだになった。[大学院生・文学研究科]
- ・ 議論の枠組みの議論が長引いてしまったのが残念でした。[大学院生・情報科学研究科]
- ・ 参加者に依存しすぎた作り(進行)なので、結局何が言いたいのか、まとまった見解が得られなかった。強引でもまとめてほしかった(趣旨と違うのでしょうか)。[大学非常勤講師・哲学・3.5 年]

哲学を専門としない学生が哲学を学ぶ意義についての考え(自由記述)

- ・ 世の中にはほとんどない考え方をすることができる、ということを知ったり、世の中にはよくわからないがおもしろそうなものがある、ということを知ったりすることに意義があると思います。[教員・倫理学・10 年]
- ・ 対話の中で出てきた、2 種類の「哲学」について、さらに掘り下げて、その 2 種類をどのように学ぶのか。専門のそれぞれ持つ「哲学」と考え方のプロセスとなりうる「哲学」を共に学ぶことで、意義が出てくると感じます。[大学院生・工学・環境学]
- ・ 今、彼らがつかっている池(これまでつかっている池)以外に、海や湖があることを伝える場所がなけれ

ば、今の日本の学生は、自ら学ぶ行為も場所へ出かけることもしないと思う。「生きる」ことの多様性を伝えることは意義があると思う。どんな形であっても。[学部生・発達教育臨床]

- ・今日話を聞いていると考える事≡哲学みたいなのを感じたので人間は考える生き物なので、まあ学生に限らず人間みんな必要なのかなーって思いました。で、必要なものなら、スムーズにするように哲学を学ぶ事は無駄ではないのかなーと思いました。[大学院生・理学研究科]
- ・宗教教育も(政治教育もあまり)なされていない現代日本では、なぜ生きるのか? どう生きるのか? という問題に直面したとき、自分なりの答え、信念を築いていくための“ツール”が、不足している気がします。自分なりの哲学、生きる意味を考えていくためにも、学校教育の中で、そのためのヒント、いくつかのツールを紹介するというのは、意義深いことだと思います。[学部生・教育学部臨床心理学]
- ・哲学はもっとシンプルに「自分とは誰か?」という最大の問いをそれぞれ考え、対話して人とかかわることで自分を見出していくというのが大切だと思います。[大学院生・国際地域文化研究科]
- ・ものの考え方を学ぶこと、批判精神を養うことにつながるため、とても重要だと考えています。[大学職員・ドイツ文学(学生時代の専攻)・5.6年]
- ・教えるものが持っている「哲学の楽しさ」を、哲学を専門としない学生に伝えられないのが多くあると思います。「哲学」ということばに限らず、「生き方」や「あり方」を考える機会になってほしいと思います。[大学院生/高校非常勤講師・文学研究科・2年]
- ・自らの“立場”、“生きる領域”、“専門とする世界”の限界と意義を批判的に理解することへと拓いていくこと。[大学教員・経営学部/経営学研究科・30年]
- ・哲学史、ととらえますが、その知識と理解を深めることは、今、世界で、身の回りで起きているできごとをどう理解するか、解釈するか、のリソースを得ることになると思うので、どんどんやればよいと思います。[その他・哲学]
- ・哲学史を学ぶ意義はあまりないと思います。哲学の問題がなぜ問題なのかかわかることが意義なのは。[大学教員・人文学部・10年]
- ・ものを考える道具だてが得られる。[大学院生・文学研究科]
- ・おそらく、文学や建築学を学ぶのと同様程度には、意義があるように思う。様々な他の学問よりも意義深いとするのは、なかなか難しんじゃないかと思います。[大学院生・情報科学研究科]
- ・哲学の何をどう教えるのかによると思う。哲学「史」教育はいらない。[大学非常勤講師・哲学・3.5年]
- ・倫理的な問題に立ち入った時に、また、自分自身の人生について悩んでしまう時に判断を間違えないため。倫理的な善悪とそれを裏付ける根拠を考えないとそのコミュニティの独特の論理で暴走する危険がある。また個人の思考がないと自身の保身や欲を優先するのが人。在り方を正すため。興味がある学問をずっと続けていくとふとした瞬間に霧散するかもしれない。人の心は変わるのが常。純粋な興味だけでなく使命とかそういうのがあるとモチベーションを維持できるかもしれない。[学部生・理学部生命理学]

感想やコメント・提案(自由記述)

- ・落としどころをどうつけるのかがむずかしいと思いました。具体的なテーマでの哲学カフェにも参加したいと思います。[教員・倫理学・10年]
- ・これまでに、こういう話を聞ける・話せる機会はなかったため、とても楽しめました。今後も、月1回あるようなので、ぜひ参加したいと思いました。[大学院生・工学・環境学]
- ・また参加したいです。[学部生・教育学部臨床心理学]

- ・次回は、またちがうテーマ(ピンポイントで)で深い議論がうかがえたら(自分は参加するつもりなし?! ぼうかん者でもよいですか?)楽しそうです。またおじゃましたいです。[学部生・発達教育臨床]
- ・難しい事話してるなあって。[大学院生・理学研究科]
- ・哲学を知っている人と知らない人が同じ場にいるのは、根本的にまとめるのは難しかったと思います。自分は哲学専攻なので、三浦さんの苦労がわかりました。[大学院生・国際地域文化研究科]
- ・必ずしも結論に達する必要はないと思いますが、全体を通じて、「哲学」、「教育」のそれぞれについて、定義—共通理解—を取り決めた上で、議論を進めてゆく必要があるのかな、と感じました。その上で、たとえば、哲学することを学ぶ/教える意義とは何か、について話し合うといった方向で、議論を進めてゆく、等々。その他:フランスのリセ(高校)における哲学教育事情、また三浦さんご自身の「哲学教育」の実践についても、ぜひお話を聞きたいです。[大学職員・ドイツ文学(学生時代の専攻)・5.6年]
- ・名札があるとよかったです(名前の分からない方が多かったので・・・)。[大学院生/高校非常勤講師・文学研究科・2年]
- ・特に、“高等教育の危機”であると考えますので、よい試みです。次回からも参加したい。[大学教員・経営学部/経営学研究科・30年]
- ・面白かった。[その他・哲学]
- ・哲学カフェ、難しいですね。今回の問題なら、「意義は何か」という仕方で問うより、「哲学をどう教えるべきか」という仕方で問う方が話しやすかったかもしれません。[大学教員・人文学部・10年]
- ・進行おつかれさまでした。[大学院生・情報科学研究科]
- ・事前に HP などである程度意見や疑問などを集めておいて、それをネタにしてみたらどうか。[大学非常勤講師・哲学・3.5年]

○ 名古屋哲学教育研究会 2012 第 2 回哲学カフェ

「教養科目の「哲学」で学生は何を学んだらよいのか？」

進行役：三浦 隆宏 (カフェフィロ/椋山女学園大学人間関係学部講師)

日 時：平成 24 年 12 月 21 日(金)17:00~18:30

場 所：名古屋大学理学部E館1階 クレイグス カフェ

参加者アンケート集計結果

哲学カフェの満足度とその理由(自由記述)

【満足度 5】(回答者 10 名中 5 名)

- ・教員ではない一般の方の意見を多く聞くことができた。[大学非常勤講師・哲学・3年]
- ・みんなの意見を反映されたいい会話ができたと思います。[その他]
- ・みんなの考え・意見が聴けて非常に新鮮でおもしろかったです。[学部生・心理]
- ・いろいろな意見を聞けてたのしかった。[無職]
- ・哲学を勉強した事がないので難しく感じる所もあったが、自分とは違う他の視点からの意見がきける所が面白いと感じた。[その他]

【満足度 4】(回答者 10 名中 4 名)

- ・哲学について、沢山の考え方を知ることが出来た。[小学校図書館ボランティア]

- ・とても楽しめました。仕事で途中参加となってしまう、全体を満喫することができなかったので(自分のせいで)－1点にしました。[大学教員・教育社会学・5年]
 - ・楽しく参加することができました。キーワードとしては、「構え」と「他者性」が心に残りました。難しいのは、「どのように」という問題でしょうか。非常に難しい教科ですね。[大学教員・教育原論・3年]
 - ・様々な意見が聞けた。もう少し学生がいるとよい。特に、哲学に全く興味のない学生が最低一人必要。
[学部生・外国語学部]
- 【満足度3】(回答者10名中1名)
- ・「大学」教養に特化してましたので。[高校教員]

教養科目の「哲学」で哲学を専門としない学生は何を学ぶとよいのか(自由記述)

- ・問いの立て方、考え方、「わかる」ことでなく、「わからない」ことを受け入れながら考えること。[大学非常勤講師・哲学・3年]
- ・経済学。もっと教養を身につける為に新聞を読んだ方がよいと思います。[その他]
- ・考え方、思考法を学ぶのだと思います。言葉では表せないことを勉強しているように思います。哲学はひな型になるように思います。[学部生・心理]
- ・自分を「他者」化して、新鮮な目でみて、おどろくこととその歴史を学ぶこと。[無職]
- ・教養は哲学の面白さを感じる時間になると良いと思った。身近な部分を取り扱おうとよいと思う。[その他]
- ・“武道の型”という言葉が印象に残った。コミュニケーションを直接とることに慣れていない若い人たちには型は大切かも→でも、これって受け身型の学び？→むずかしい・・・[小学校図書館ボランティア]
- ・今皆さんのお話を聞いて思ったのは、「哲学的思考のプロセス」「哲学的な問いの立て方、論じ方」のかな、と。[大学教員・教育社会学・5年]
- ・問いを立てるとか、自己を疑うだとか、そういう部分が教育目標としてあるのは、話し合いの中で出た「他者」を組み入れることになるのでしょうか。自己の生き方、他者の生き方、社会や世界との関係をどうやって学生が自分のものとして考えられるか、難しいですね。[大学教員・教育原論・3年]
- ・分からない。少なくとも、自分で考える力をつけること。[学部生・外国語学部]
- ・汎用性の高い、哲学の知識・スキル・態度。柔軟な思考力、寛容性。[高校教員]

感想やコメント・提案(自由記述)

- ・若干テーマが狭い感じがあるので(個人的には興味深かったが)、より一般的に興味を惹けるテーマの方がよいかもしれない。[大学非常勤講師・哲学・3年]
- ・大学外への広報。[無職]
- ・今後も参加して、哲学を勉強していきたいと思った。[その他]
- ・名大に来る前は大阪におり、そこでたまに哲学カフェに参加していました。専門が違っても学べる事が多く、また機会があれば参加したいなと思っています。本日はありがとうございました。[大学教員・教育社会学・5年]
- ・これからもいろんな所で哲学カフェを開いて下さい。[その他]
- ・おもしろかったです。[学部生・心理]
- ・又、機会があれば参加したいと思います。[大学教員・教育原論・3年]

○ 名古屋哲学教育研究会 2012 第 3 回哲学カフェ「大学生にとって必要な教養とは？」

進行役：三浦 隆宏（カフェフィロ／椋山女学園大学人間関係学部講師）

久保田 祐歌（愛知教育大学教育創造開発機構 大学教育研究センター 研究員）

日 時：平成 25 年 2 月 15 日（金）17:00～18:30

場 所：名古屋大学理学部E館1階 クレイグス カフェ

参加者アンケート集計結果

哲学カフェの満足度とその理由（自由記述）

【満足度 5】（回答者 6 名中 2 名）

- ・全員が対話する型になっており、それぞれの人の意見が参考になりました。[大学教員・経営学部/研究科・30 年]
- ・色々な人のお話がきけてとても勉強になりました。[科目等履修生・心理]

【満足度 4】（回答者 6 名中 4 名）

- ・討論という形でなかったことが少し残念。反対意見がもっとであればよかったと思う。[その他:OL]
- ・哲学カフェについての、というより、自分の今回の参加姿勢についての不満が少しありました。・・・自分の中で考え込んでしまった。[無職・哲学]
- ・日頃聞く事が出来ない考えを聞く事が出来て興味深かった。さらに時間があれば具体的な事柄に踏み込めて良かったかもしれない。[学部生・理学部]
- ・自由に討論ができ、話題が尽きてしまうこともなかった。[学部生・外国語学部]

大学生にとって必要な教養とは何であるか（自由記述）

- ・その大学の中で、それを基盤として世界を見ることが出来るようになること。[大学教員・経営学部・30 年]
- ・まだつかめていませんが、誰とでも会話できる引き出しを持っているような人というイメージがあるので、その力を引き出せるような学問だと思います。[科目等履修生・心理]
- ・自分を開いていく事。こういった討論の場に積極的に参加することが必要だと思う。[その他:OL]
- ・歴史意識。[無職・哲学]
- ・未知のものに対応する下地となるもの・・・実際に何があるかというのは難しい。（人生経験のある方に教えて頂きたい）。[学部生・理学部]
- ・その時点でよくわからない教養を身につけようという意思。[学部生・外国語学部]

〈感想やコメント・提案（自由記述）〉

- ・非常に自然でよかったと思います。[大学教員・経営学部/研究科・30 年]
- ・楽しかったです。ありがとうございました。[科目等履修生・心理]
- ・名古屋大学らしい教養のある論議だったと思います。[その他:OL]
- ・続けることが大事だと思います。[無職・哲学]
- ・やはり教養というと知識的なものというイメージがあったのでそうではないという意見が聞けて刺激になった。[学部生・理学部]
- ・こういったサロンのような機会をもっと増やしていただきたいと思います。[学部生・外国語学部]

哲学教育にとっての哲学カフェの意義

久保田 祐歌(愛知教育大学)

1. 哲学カフェとは何か

哲学カフェは、一つのテーマ(問い)について、カフェに集まった参加者が、進行役をガイドとして自由に語り合うという、対話の場である。哲学カフェの発祥はフランスのバスチユ広場のカフェ・デ・フェールで、マルク・ソーテが1992年に始めた「哲学ディスカッション」である。参加者はドリンク代だけで自由に哲学的議論に参加できる。哲学カフェは、その後フランス全土のカフェに広がり、今や日本においても、大阪、東北、長崎、関東などの各地で実施されている。国内における哲学カフェは、2000年から徐々に広がりを見せ、2005年以降では、「CAFE PHILO(カフェフィロ)」(大阪大学に事務所を設置)のように一つの団体の取り組みとして、哲学カフェが組織的に推進されるようになっていく。

国内で実施されている哲学カフェにおいては、「進行役」と呼ばれる人が対話をガイドする。この進行役を務める者には、哲学を専門とする大学院生を含む哲学研究者が多く見られる(そもそも哲学カフェを主催するのは哲学研究者である理由による)。しかし、哲学カフェの進行役は、プラトンやデカルト、カントなどの哲学者の思想に関する専門的な知識を、哲学的知識をもたない参加者に伝授することがその役目ではない。そうした哲学者の思想に基づいて、カフェでの対話を一定の方向に導くことも哲学カフェの場では意図されていない。サイエンスカフェにおいて専門家(科学者)が会の始めに話題提供を行うような仕方では、哲学者が哲学的知識を提供するわけではない。カフェフィロにおいて、哲学カフェの位置づけの一つとして、「市民(各種専門家を含む)が、みずから哲学的対話/議論を営むことを促進・支援する」(カフェフィロ会則第3条)という文言で明示されているように、哲学的トレーニングを受けた哲学研究者は、哲学的な対話を行うに際して始終「支援者」の役割を担うのである。

2. 哲学カフェのもつ意義

通常の対話や議論と、「哲学カフェ」における対話の違いはどこにあるのだろうか。哲学カフェで扱われるテーマは、生活全般に関わるもの(「生きる意味とは?」「幸福と不幸」「自分の時間/家族の時間」等)や他者とのかかわりに関するもの(「親切とおせっかい」「どこまで人に迷惑をかけてよいか?」等)、アイデンティティに関わるもの(「その人らしさとは何か?」「ふつうと人なみ」等)、哲学的な問いに関わるもの(「知るとはどういうことか?」「『世界』とはなにか?」等)など様々である(カフェフィロのHPを参照)。こうした、いわゆる哲学的な問いに限定されない、多様なテーマで哲学カフェの参加者たちは対話を行うことができる。ソーテは、カフェで「哲学ディスカッション」する際の重要なポイントとして、どのようなテーマでも哲学的方法で扱えることを挙げている。哲学カフェの「哲学」部分を分かりやすく表現しているため、少し長い以下に引用する。「哲学に決まった対象はない。哲学とは、教えたり研究したりする「分野」ではなく、ある精神状態、自分の知性の使い方なのだ。哲学者に特定の対象はない。哲学者は、紋切型や常識的世論、支配的なイデオロギー、宗教的啓示、科学によって出された答えなどから出発して、それらを吟味する。従って、どんな素材も哲学的考察の対象となる。新たに哲学を始める人も、テーマの立派さに怯える必要はない。そんなものはないのだ。哲学の対象に特別なものはない。「哲学する」とは、すでに答えは与えられているが実際にはうまくいっていない問題を、文字通り「再検討の対象とする」ことなのだ。答えは無数にあり、それらの答えが対立したり、矛盾し合うこともある。哲学者は、しっかり見て、その混乱を整理

し、理性をレフェリーとするべく努める。」(ソーテ、46-47 頁)。

哲学カフェの進行役は、予め定まった結論に参加者を導かず、参加者の多様な語りを整理し、秩序づけ、対話の流れをよくする。参加者は、哲学カフェでのテーマに基づく対話によって、普段じっくりと考えずに機械的動作で済ましていた事柄や違和感を覚えつつも深く考えずにいた事柄を思い出し、その意味を問い直し、それを他者に表現する機会をもつ。さらに、他者の考えを聞き、改めて自分の考えを掘り下げたり広げたりすることもできる。哲学カフェに参加することは、現実社会への何らかの効能を瞬時にもたらすことはないが、他者と共に、クリティカルに自分の思考を見つめ直すためのきっかけをもたらすのである。進行役にとっては、日常の場で哲学を実践しスキルを磨き、自身の思考を広げる機会となりうる。

3. 哲学教育に対する哲学カフェの意義

以上のような哲学カフェの特徴を踏まえて、名古屋哲学教育研究会による「哲学カフェ」においては、次の三つを現時点での活動目標としている。(1)「哲学カフェ」の開催により、参加者が哲学的対話を行うきっかけを作る、(2)市民との哲学教育及び大学教育に関する対話を通して、大学教員が別の角度から日ごろの実践を振り返る機会を提供する、(3)哲学研究者(他の参加者も含む)が進行役を務め、対話のために必要なガイドとしてのスキルを向上させる機会を提供する。

こうした哲学カフェの取り組みを通して、哲学系教養科目を含む大学教育をより実り豊かなものとして、大学生が感じ取られるように提示できる可能性がある。今後も、哲学カフェを定期的実施すると共に、上記の三つの目標を十分に達成するために、哲学カフェ開催のための指針(進行役の役割及び進行方法を含む)を作成し、ノウハウやティップスを参加者間で共有できるようにすることを課題としたい。

【参考文献】

CAFE PHILO(カフェフィロ)ウェブページ <http://www.cafephilo.jp/>

樫本直樹(2009)「ともに考え、議論すること—<哲学カフェ>の実践から考える」、『龍谷哲学論集』第 23 号、龍谷哲学会、pp.43-58.

名古屋大学高等教育研究センター発行(2009)『研究者のための科学コミュニケーション Starter's Kit』マルク・ソーテ著、堀内ゆかり訳(1996)『ソクラテスのカフェ』、紀伊國屋書店

三浦隆宏(2003)「席をもうけるということ——アーレント政治理論と哲学カフェ」、『臨床哲学 第 5 号』、pp.33-48.

武田朋士(2007)「哲学カフェにおける対話と哲学性」、『コミュニケーションと現代社会:平成 16 年度～18 年度広域文化形態論講座共同研究報告書』、pp.1-9.

徴候知のトレーニングとしての哲学カフェの進行経験

三浦 隆宏(カフェフィロ/椋山女学園大学)

名大理学部内のクレイグスカフェにて、哲学カフェを二度行なった。進行役として簡単に振り返っておきたい。

初回(2012年9月18日)のテーマは、「哲学教育の意義とは?」。はじめに年輩の男性が、「そもそも哲学がどういう意味なのかを定義しないことには、哲学教育について話しようがない」と言われ、そこから各々の参加者が「哲学」をどう捉えているのかを聞くことから始めることになった。いわば、テーマの前段から話が始まったわけだ。これは、哲学カフェにおいてよくあることである。そして、今回の案内文にあった「哲学を専門としない学生に哲学を教える意義、哲学を専門としない学生が哲学を学ぶ意義」という文章において、すでに二種類の哲学が区別されて用いられているという指摘から、その「二つの哲学」とはどういうもので、また両者はどう違うのかについての議論で大きく時間がとられ、結局、一時間半の時間内では「哲学教育」という主題にまで行くことができなかった。

進行役として苦しかったのは、最初に口火を切られた年輩の参加者が、妙に上から目線な物言いをされる方で、たとえば参加者の発言内容を私がまとめていると、「そういうふうには捉えられない」と言われ、なかなか他の参加者と対等な立場では発言なさろうとせず、その点を気にしながらの進行となった。「議論があちこちしてしまって、すっきりしなかった」、「哲学と教育についての共通理解になかなか近づけなかった」、「参加者に依存しすぎた作り(進行)なので、結局何が言いたいのか、まとめた見解が得られなかった」という参加者アンケートの言葉が示すように、隔靴搔痒の思いが残るカフェになったように思う。

後日、参加してくれた仲の良い研究者に、「三浦さんは10年以上も進行役をしているのに、あたかも初めての進行かのように見せるところがすごい」と言われてしまったが、それはなるほどその通りかもしれない。その実、私は哲学カフェのあいだずっと立ちっぱなしだったのだが、これはある意味、発言者に対して正対しすぎているのである。もちろん、正対するのが悪いわけではないが、これでは参加者の発言に対して常に私が受け答えをするかたちになってしまい、なかなか参加者どうしの対話にはなりにくい。大阪での一般市民の方々との哲学カフェにはある程度の慣れを感じていたのだが、今回は名古屋での最初の、しかも知り合いの(哲学カフェに興味関心をもつ)研究者がいる環境でもあったため、私の中にへんな気負いがあったのはやはり否めない。

つづく二回目(2012年12月21日)のテーマは、「教養科目の「哲学」で学生は何を学んだらよいのか?」にした。ここでは、前回のように自由に口火を切らせる進行ではなく、最初にこちらから、教養科目の哲学を担当したことがある、あるいは現にいま担当している参加者に、発言を促すことで進行を開始した。そして、若い非常勤講師ほど概論の授業であろうとテーマを設定して、学生の関心を引く授業をしていることがわかった、それに対して、「哲学科の専任教員の先生は一般教養の授業であろうと古代ギリシア思想に特化した話しかしなかった」という意見も出てきて、会場に笑いが起きる。さらにアメリカで哲学を学んだ参加者からは、アメリカでの哲学の授業内容にかんする発言も出てきた。それらの意見から、「哲学はある程度の人生経験を積んでからのほうが、動機をもって学ぶことができる」という話の流れができつつあるなど思いながら進行をしていると、「哲学はまったく知らない」と前置きをしたある女性が、イギリスでの小学校教育についての見聞をもとにした発言をされる。イギリスでは小学校の頃から哲学的な問いを子どもたちに考えさせる授業があるというのだ。そこで、たしかに哲学的なことを考えるうえで「子ども」であるこ

との重要性がよく言われますよねという、それまでとは逆の話の流れが形成されもする。「その意味で、大学1、2年の教養課程の期間というのは、受験勉強で子どもの頃のような知的好奇心を失い、さらにはまだ人生経験もあまり豊富ではないという、哲学を主体的に学ぶうえでかなり条件の悪い時期に当たるのではないか」ということを確認して、一時間半のカフェを終えることとなった。「みんなの意見を反映させたい会話ができた」、「みんなの考え、意見が聴けて非常に新鮮でおもしろかった」、「自分とは違う視点からの意見がきける所が面白いと感じた」などの感想からも、この回の哲学カフェは参加者の満足度が高かったのではないかと思われる。

さて、以上の二つを踏まえたうえで、哲学カフェにおける進行とはどういうものなのかについて少し考えてみたい。進行役のことをファシリテーターと呼ぶことからわかるように、進行とは参加者どうしの対話を促進させることである。それではどのような促進の仕方があるのだろうか。ひとつは二回目のときのように、進行役がある程度イニシアティブをとって道筋を作り、そこに参加者の発言を絡めていくというやり方がある。たとえば、非常勤の経験者や一般教養の「哲学」を受講したことのある人たちに「具体的にそれはどういう授業であったのか」を訊いてみる。つまり、具体例を複数の参加者から挙げてもらいながら、その間に新たな論点を探し出したり、そこからの議論の持って行き方を模索するわけである。研究者ならいざ知らず、一般市民の参加者は、それほど「哲学的な議論」をしたがっているわけではあるまい。むしろ、あるテーマについて他の人々がどう考えているのかを知りたいと思っている人が多い。ゆえに、具体例からうまい具合に話の道筋を作っていくことがたとえできなくても、参加者からさまざまな具体的な発言を引き出すことができれば、それほど対話の場が大崩れすることもない。いくつかの具体的な言葉を踏まえ、抽象的に議論の段階を引っ張り上げようとし、それが難しいと感じるや、再び新たな論点に対して参加者から具体的な発言を求める。この一連の流れをさりげなく行うことを最近の私は心がけている。

このようにある程度介入する進行方法を認めたいうえで、とはいえ、それとは異なる対話の促進の仕方もあるのではないか。それは初回の私が期せずしてそうしてしまったように、無理に進行をしようとしなない(あるいはうまい進行ができない)ことで、参加者たち自身での対話の促進を(結果として)図るというやり方である。

その場にたまたま集まった人々の自主的な発言に委ねられる哲学カフェにおいては、即興性の度合いがとても高い。ゆえに、進行役としては思いもよらない方向に話が進んでしまい、文字通り途方に暮れる場面に出くわすときが多々ある。しかし、進行役としての役目がうまく果たせず、進行役自身が苦しんでいるとき、参加者たちはそれまでのように進行役に進行を一任するのではなく、自分たち自身で対話の舵取りをしようという動きが出てくる場合があるのだ。あくまでも結果オーライにすぎないと言われればそれまでだが、こういう参加者主体の対話の促進方法もまたひとつのやり方なのではないか。そして、この後者の場合であれば、なにも哲学カフェの進行役は哲学をある程度勉強した人である必要もないことになるだろう。

では、哲学カフェの進行経験によってひとはどのようなことを身に着けることができるのだろうか。最後にこの点について展望を記しておきたい。『臨床知と徴候知』(作品社)の序論「人間の生の「知」——臨床知と徴候知」において、編者の一人である後藤正英が、「相手(他者)の出方によって触発されることで働きだす受動的知であるという点では、徴候知と臨床知は同じものであるといえるだろう」(22頁)と述べている。徴候知とは、中井久夫やカルロ・ギンズブルグによって発見された概念で、「本質的に受動的な認知の形態」(19頁)をとり、「相手の出方が容易には予測できず、不意打ちがありうるような状況で働く認知の在り方」(20頁)を指すという。先の振り返りからも明らかなように、哲学カフェにおいて進行役は、受動＝

受苦的な立場に身を置くことが頻繁に起こる。いわば、「耳をそばだてて周囲の気配に細心の注意を払っている状態、あるいは、何かが起こる予兆を感知すべく身構えている状態」(18 頁)に置かれ続けるのが、進行役なのだ。中井自身は徴候知として、医学の知や戦争術を、そしてギンズブルグは「徴候知という推論的パラダイムに注目した」(23 頁)人物として、モレツリやフロイト、シャーロックホームズらを挙げているとのことだが、哲学カフェの進行経験も、徴候知＝臨床知を涵養するためのひとつのトレーニングとして位置づけられるのではないか、そういう予感をいまの私は抱いている。

名古屋哲学教育研究会2012 哲学カフェ 哲学教育の意義とは？

哲学的な問いについて対話を行う「哲学カフェ」を開催します。テーマは「哲学教育の意義とは？」です。
進行役として、「カフェフィロ」などで哲学カフェを実施してきた三浦隆宏氏(相山女学園大学人間関係学部講師)をお招きします。大学で哲学を専門としない学生に哲学を教える意義、哲学を専門としない学生が哲学を学ぶ意義について対話を行う予定です。ご興味・関心のある方は、ぜひご参加ください。

日時: 2012年9月18日(火)17:00~18:30
場所: 名古屋大学理学部E館1階 クレイグス カフェ
<http://www.nagoya-u.ac.jp/global-info/access-map/higashiyama/>
(東山キャンパスマップD2の5番の建物)

進行役: 三浦 隆宏氏(相山女学園大学人間関係学部講師)

参加自由 ※ワンドリンクご注文ください。

主催: 名古屋哲学教育研究会 後援: 名古屋大学高等教育研究センター
問い合わせ先: 久保田 祐歌(愛知教育大学大学教育研究センター)
y.kubota@u-aec.ac.jp/0365-25-2548

名古屋哲学教育研究会2012 第2回 哲学カフェ 教養科目の「哲学」で 学生は何を学んだらよいのか？

9月に引き続き、参加者どうしの対話を通じてある問いについて考える哲学カフェを開催します。テーマは「教養科目の「哲学」で学生は何を学んだらよいのか？」です。

以前より減りつつあるとはいえ、いまでも多くの大学で教養科目としての「哲学」が設置されています。では、哲学を専門としない学生たちはこの科目から何を学んだらよいのでしょうか？哲学教師は何を教えたらいよいのでしょうか？

ご興味・関心のある方は、ぜひご参加ください。

日時: 2012年12月21日(金)17:00~18:30
場所: 名古屋大学理学部E館1階 クレイグス カフェ
<http://www.nagoya-u.ac.jp/global-info/access-map/higashiyama/>
(東山キャンパスマップD2の5番の建物)

進行役: 三浦 隆宏(カフェフィロ/相山女学園大学)

参加自由 ※ワンドリンクご注文ください。

主催: 名古屋哲学教育研究会 後援: 名古屋大学高等教育研究センター
問い合わせ先: 久保田 祐歌(愛知教育大学大学教育研究センター)
y.kubota@u-aec.ac.jp/0365-25-2548

FD・SD教育改善支援拠点事業

名古屋哲学教育研究会2012 第3回 哲学カフェ 大学生にとって必要な教養とは？

参加者どうしの対話を通じてある問いについて考える哲学カフェを開催します。昨年の9月、12月に続き、3回目となる今回のテーマは「大学生にとって必要な教養とは？」です。

大学の教養教育カリキュラムにおいては、大学生として、社会人として身につけるべき内容を踏まえた授業が開講されています。専門教育に比べて、とかく軽視されがちな教養教育について、「大学生にとって必要な教養」を問い直すところから考えます。ご興味・関心のある方は、ぜひご参加ください。

日時: 2013年2月15日(金)17:00~18:30
場所: 名古屋大学理学部E館1階 クレイグス カフェ
<http://www.nagoya-u.ac.jp/global-info/access-map/higashiyama/>
(東山キャンパスマップD2の5番の建物)

進行役: 三浦 隆宏(カフェフィロ/相山女学園大学)
久保田 祐歌(愛知教育大学)

参加自由 ※ワンドリンクご注文ください。

主催: 名古屋哲学教育研究会 後援: 名古屋大学高等教育研究センター
問い合わせ先: 久保田 祐歌(愛知教育大学大学教育研究センター)
y.kubota@u-aec.ac.jp/0365-25-2548

能力認定学位研究会

メンバー

夏目 達也(名古屋大学高等教育研究センター)

近田 政博(名古屋大学高等教育研究センター)

中井 俊樹(名古屋大学高等教育研究センター)

齋藤 芳子(名古屋大学高等教育研究センター)

加藤 かおり(新潟大学大学教育機能開発センター)

活動目標

本研究では、日本、アメリカ合衆国、フランスにおける企業の労働力ニーズや労務管理の手法の変化の動向を調査するとともに、これらの企業側の変化に対する高等教育機関の対応の状況や将来戦略の内容等について調査・研究する。そのために、以下のような課題を設定する。

- 1) コンピテンシーによる労務管理に関する研究動向の調査を行う。
- 2) 高度職業人に対するニーズやコンピテンシーによる労務管理導入の状況に関する調査を行う。
- 3) 日本、アメリカ、フランスの高等教育機関を対象に、企業の労働力ニーズへの対応について、主に教育課程と学生の就職支援策等の点から調査する。
- 4) 中央(連邦)政府の労働省と教育省を対象に、企業における新しい労務管理導入や、それに対する各高等教育機関の対応策に関する政府の方針・具体的な政策等について調査する。
- 5) 上記の調査結果をふまえ、日本の大学における学生の就職促進・支援方策のあり方について検討する。

本年度の活動内容

- 1) 2012年6月3日

日本高等教育学会第15回大会において、自由研究発表「能力評価重視で修学免除の学位授与システムに関する国際比較」を行った。発表に向けて、研究メンバー間で議論を行い、意見の調整を図った。

- 2) 2012年11月

マルタで開催されたヨーロッパ大学継続教育ネットワーク(EUCEN)の年次大会に代表を派遣して、ヨーロッパ諸国の大学における能力評価学位に関する制度と運用の実態に関して情報・資料の収集を行った。

本年度の活動成果

- 自由研究発表「能力評価重視で修学免除の学位授与システムに関する国際比較」

日 時：2012年6月3日 10:20-11:30

会 場：東京大学本郷キャンパス経済学部3階第3教室

発 表：夏目達也、加藤かおり、近田政博、中井俊樹、齋藤芳子

物理学講義実験研究会

メンバー

- 代表 三浦 裕一(名古屋大学大学院 理学研究科 准教授)
小西 哲郎(名古屋大学大学院 理学研究科 准教授)
中村 泰之(名古屋大学大学院 情報科学研究科 准教授)
古澤 彰浩(名古屋大学教養教育院 専任講師)
千代 勝実(山形大学基盤教育院 教授)
齋藤 芳子(名古屋大学高等教育研究センター 助教)
幹事 安田 淳一郎(岐阜大学教養教育推進センター 准教授)

活動目標

理系講義で学生が体験的に学習する機会を作り、理論と実験を関係づける手法の1つとして、講義中の実験(以下、「講義実験」)を導入する方法がある。現在、講義実験の器具開発と活用には、各大学の教員が各自で取り組んでおり、そのノウハウが共有されていない。そこで我々は、学内外の講義実験に関するノウハウを抽出し、各大学の教員間で共有できるネットワークを形成することを目的として活動を行っている。

本年度の活動内容

- 1) 新規講義実験の開発・集積
- 2) 既存講義実験の調査と改善
- 3) ハンドブック・ウェブサイトの普及
- 4) ハンドブック・ウェブサイトの体裁・機能の改善
- 5) 講義実験の効果測定法・評価法の検討と実施

会合日 2012年4月11日、5月9日、6月27日、7月20日、9月6日、10月24日、11月21日、12月19日、2013年1月15日(2月も開催予定)

本年度の活動成果

学内FD 「講義実験研究会による、講義実験の紹介とニーズに関する議論」平成24年度第2回名古屋大学全学教育科目担当教員FD 科目別FD：物理学FD(2012年9月24日、名古屋大学)

研究交流 ミニワークショップ「現象と概念を結ぶー物理学講義実験という挑戦(2)」大学教育改革フォーラム in 東海2013(2013年3月2日、名古屋大学)

研究発表 安田淳一郎、齋藤芳子、小西哲郎、中村泰之、千代勝実、古澤彰浩、三浦裕一「物理学講義実験における系統的演示実験ー提示順序の理論的考察ー」大学教育学会第34回大会(2012年5月27日、北海道大学)

- 研究発表 三浦裕一「物理学講義における系統的演示実験—自由落下の放物運動の誤解と理解—」
日本物理学会 2012 年秋季大会 (2012 年 9 月 21 日、横浜国立大学)
- 研究発表 三浦裕一、安田淳一郎、中村泰之、小西哲郎、千代勝実、古澤彰浩、齋藤芳子「物理学講義における系統的演示実験のための教材開発と導入方法」大学教育改革フォーラム in 東海 2013 (2013 年 3 月 2 日、名古屋大学)
- 研究発表 三浦裕一、安田淳一郎、中村泰之、小西哲郎、千代勝実、古澤彰浩、齋藤芳子「物理学講義における系統的演示実験—作用・反作用の理解を促進する教材開発—」日本物理学会第 68 回年次大会 (2013 年 3 月 26 日、広島大学)
- 研究発表 安田淳一郎、小西哲郎、中村泰之、千代勝実、古澤彰浩、齋藤芳子、三浦裕一「物理学講義における系統的演示実験—科学的推論能力の評価—」日本物理学会第 68 回年次大会 (2013 年 3 月 26 日、広島大学)
- 研究発表 中村泰之、安田淳一郎、小西哲郎、千代勝実、古澤彰浩、齋藤芳子、三浦裕一「物理学講義における系統的演示実験—シミュレーション教材の調査と効果的活用法の検討—」日本物理学会第 68 回年次大会 (2013 年 3 月 26 日、広島大学)

留学生研究会

メンバー (50 音順)

田所 真生子(名古屋大学留学生センター 特任准教授)
近田 政博(名古屋大学高等教育研究センター 准教授)
虎岩 朋加(名古屋大学大学院教育発達科学研究科 助教)
坂野 尚美(名古屋大学留学生センター 特任准教授)
松浦 まち子(名古屋大学留学生センター 教授)
山口 博史(名古屋大学国際交流協力推進本部 特任講師)
渡部 留美(名古屋大学国際交流協力推進本部 特任講師)

本年度の活動目標

- 1) 名古屋大学の各部局が実施する各種研修における異文化対応に関する講演等
- 2) 『名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック』に基づいた教職員用ケース研修教材作成とこれを用いたワークショップの企画・実施
- 3) 名古屋大学グローバル 30 新規採用教員に対するオリエンテーションの企画立案
- 4) 国内外の留学生政策に関するセミナーの企画・実施

本年度の活動成果

- 1) 各種研修会から招聘依頼を受け、異文化対応や国際化対応についてセミナーを実施した。

○ 平成 24 年度 名古屋大学新任教員研修

日 時：2012 年 4 月 6 日
場 所：野依記念学術交流館 2 階ホール
講 演：「国際化対応に関するセミナー」
講 師：松浦 まち子
主 催：高等教育研究センター、総務部職員課

○ 平成 24 年度 名古屋大学新規採用職員研修

日 時：2013 年 4 月 18 日
場 所：豊田講堂第一会議室
講 演：「異文化対応について」
講 師：松浦 まち子、近田 政博
主 催：総務部職員課

○ 医学系研究科 FD

日 時：2012 年 11 月 14 日
場 所：医学部保健学科大講義室(大幸キャンパス)
講 演：「外国人研究生を受け入れる際に留意すべきことー異文化理解の観点からー」

講 師：近田 政博

主 催：医学系研究科(医学部保健学科)

2) 本研究会の主催行事として、次のようなワークショップを企画・実施した。

○ 名古屋大学教職員のためのワークショップ「はじめて留学生を受け入れるー教員と留学生の信頼関係をどう築くかー」

日 時：2012年9月4日

場 所：法政国際教育協力研究センター CALE フォーラム

趣 旨：外国人留学生は大学が国際的な教育・研究環境を形成する上で重要な役割を果たしています。しかし、教職員の側に留学生を受け入れる準備が十分にできているとは、必ずしも言えません。名古屋大学留学生研究会では、2011年3月に『名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック』を制作し、留学生受け入れにおいて教員が直面する課題への対応方法を紹介しました。本ワークショップでは、このハンドブックの内容を活用しながら、留学生と教職員が信頼関係を築くために、教職員にどのような配慮や工夫が求められるかについてのケーススタディを行います。留学生問題にご関心をもつ教職員の方のお越しを歓迎します。

備 考：このワークショップでは、次の4つのケース教材(「留学生受け入れをめぐる」 「予期せぬ出来事ーお土産と自己紹介をめぐる」 「研究室の人間関係」 「適応障害の留学生への対応」)を作成した。各ケース教材はA4で2ページ程度のもので、大学が留学生を受け入れる際に起こりうる葛藤を留学生側と教職員側の双方の視点から事例として構成した。参加者は4~5人程度からなる小グループを構成し、問題の所在や解決策について意見交換を行った。個人情報保護のため、これらの教材はワークショップ終了後に回収した。ケース教材を用いて学内研修を実施する例は珍しいので、その方法論は蓄積されていない。継続的に検討を重ねる必要があるだろう。

ナビゲーター：田所真生子、近田政博、虎岩朋加、坂野尚美、松浦まち子、山口博史、渡部留美

3) 下記の外国人教員向けオリエンテーションについて研究会で企画立案を行った。

○ 2012年度グローバル30新任教員オリエンテーション

日 時：2012年9月11日

場 所：法政国際教育協力研究センター CALE フォーラム

趣 旨：G30新規採用教員が名古屋大学にスムーズに適応できるように支援する

備 考：同オリエンテーションの実施に合わせて、『名古屋大学新任教員ハンドブック英語版』(Nagoya University New Faculty Handbook)を制作し、参加者に配布した。同ハンドブックを制作する過程で留学生研究会において意見交換を行った。なお、同ハンドブックは高等教育研究センターが国際部国際企画課、学部部学務企画課、総務部職員課の協力を得て、平成24年度教育奨励費(総長裁量経費)によって制作した。

事務担当：国際部国際企画課

4) 同研究会として下記のセミナーを行い、高等教育研究センターの招聘セミナーとして位置づけた。

○ 名古屋大学高等教育研究センター第 113 回招聘セミナー

「中国の高等教育における国際教育戦略」

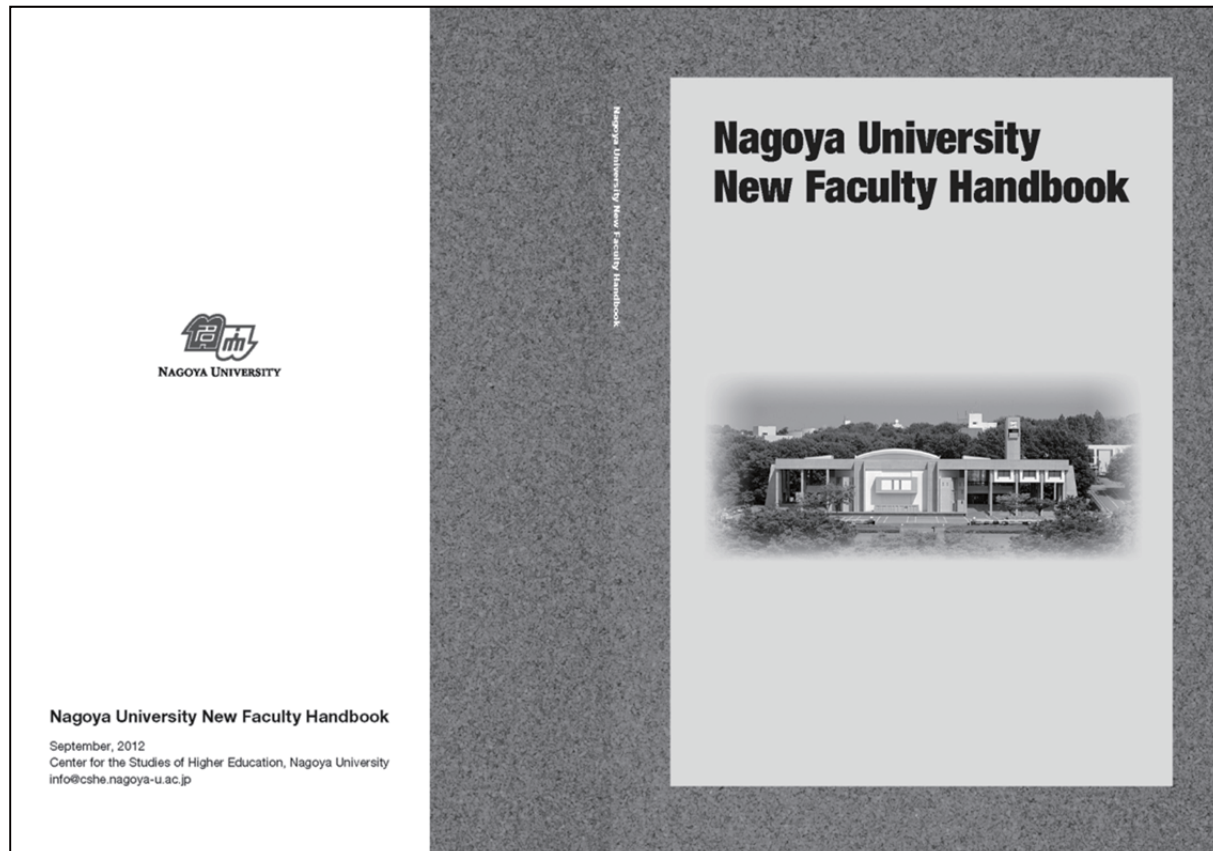
日 時：2012 年 12 月 21 日

場 所：名古屋大学文系総合館 7 階オープンホール

講 師：黒田 千晴氏(神戸大学留学生センター准教授)

趣 旨：これまで中国は留学生送り出し大国として語られることが多かった。しかし、今日において中国はすでに日本を上回る留学生受け入れ大国であり、2020 年までに 50 万人の留学生を受け入れる計画が進行中である。また、トランスナショナルプログラムなど、高等教育の国際化に向けてさまざまな戦略を打ち出している。このセミナーでは、急速に変貌しつつある中国の国際教育交流戦略について紹介し、日本の高等教育への知見を得たい。

資料 Nagoya University New Faculty Handbook 表紙



教材・プログラム開発

博士のキャリア展開に資する スキル開発プログラム

設計と実施

名古屋大学高等教育研究センターでは、世界的な博士教育改革の潮流および日本の動向を踏まえ、院生やポスドク等を対象とするトレーニングプログラム「院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー」を開発、実施している。このトレーニングプログラムは近い将来の正課への展開を念頭においており、英国や欧州科学財団が提示した「トランスフェアラブル・スキルズ」を基に設計している。研究科や GCOE、リーディング大学院プログラムとの共催により、各部局の状況を把握しつつ、理解増進に努めてきたものである。

本センターにおけるセミナー開催にあたっては、学内他部局で提供されてこなかったテーマを中心に取り上げている。2010 年度の課外プログラムは「コミュニケーション」を、2011 年度は「研究活動とその環境」をテーマに複数のセミナーを開催した。

本年度の「院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー 2012」は、大学院共通的教育研究会における内容の検討を踏まえ、科学技術論や研究倫理から、クリティカルシンキング、ライティング、スピーキング技法までを幅広く取り上げた。また関連事業として、本センターまたは本拠点が支援する研究会の活動のなかで「サイエンスイラストレーション・サマースクール」、「研究発表資料をつくる」「学術広報誌制作教室 2012」を開催した。

1. 院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー 2012

専門家として自立する日に備えて、さまざまな場面で活用できる「トランスフェアラブル・スキル」の獲得を支援するセミナーです。(グリーン自然科学国際教育研究プログラム認定スキルセミナー)

会 場 : 理学南館 1 階 理学セミナー室

対 象 : 大学院生、研究員等 (各回 定員 50 名程度)

主 催 : 高等教育研究センター

共 催 : GCOE「宇宙基礎原理の探求」、グリーン自然科学国際教育研究プログラム

2. サイエンスイラストレーション・サマースクール 2012 in あいち

サイエンスイラストレーターという仕事は北米では専門職として確立しており、大学院修士課程が整備されています。しかし、日本では系統だったカリキュラムすら、まだつくられていません。そこで、同分野を長年リードし創立 100 周年を迎えたジョンズ・ホプキンス大学医学部のサイエンスイラストレーション入門コースを 3 日間のダイジェストで開講します。

今回は、オブザベーション・ドローイングと呼ばれるサイエンスイラストレーションの基礎技法を用いて頭蓋骨模型をデッサンします。その後、スキャナーでパソコンに取り込み、グラフィックソフトを用いて細部を仕上げていきます。

講 師 : Jennifer E. Fairman (ジョンズ・ホプキンス大学)

日 時 : 2012 年 8 月 28 日・29 日・30 日 各日 10:30~16:15

会 場 : 全学教育棟
対 象 : 大学院生、研究員、一般 (定員 20 名程度)
主 催 : グリーン自然科学国際教育研究プログラム、GCOE「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合」、高等教育研究センター、産学官連携推進本部あいちサイエンスフェスティバル事務局
共 催 : 名古屋造形大学、名古屋大学物質科学国際研究センター、名古屋大学博物館
協 力 : ジョーンズ・ホプキンス大学医学部医療アート専攻、トロント大学バイオメディカル・コミュニケーションズ専攻、名古屋大学 研究推進室、名古屋大学 リサーチ・アドミニストレーション室、東北大学 大学院 医学系研究科
後 援 : 在名古屋米国領事館、名古屋アメリカンセンター
コーディネーター : 奈良島 知行(サイエンスイラストレーター、Tane+1 LLC 代表)

3. 研究発表資料をつくる—ポスター・スライドづくりの理論と実践—

近頃はポスターやスライドによる研究発表の機会が多くあります。そこで求められる「見てもらえる、なかが伝わる」ビジュアル表現のスキルは、社会人になってからも広く使えるものです。

本セミナーでは、理論と実践の両面から、研究発表ポスター・スライド制作のスキル向上を目指します。基礎からはじめますので、経験の浅い方にも実践を振り返りたい方にもオススメです。

講 師 : 遠藤 潤一 (広島国際学院大学)
日 時 : 2012 年 9 月 12 日 10:00-12:00 (理論編)、13:00-15:30 (ポスター実践編)
会 場 : 全学教育棟中棟 3 階 SIS ラボ
対 象 : 大学院生、教職員 (実践編定員 25 名)
主 催 : 情報科学研究科、高等教育研究センター

4. 学術広報誌制作教室 2012

科学技術が複雑かつ高度に生活と結びつく現代社会において、学術機関と社会、科学技術者と市民のあいだの連携や対話が求められています。科学技術の活動やその成果を伝えることは、その基礎となる重要な活動です。

広報誌制作教室 2012 では、学術広報誌の記事を作成・編集するスキルとして書くスキルと描くスキルを取り上げます。学術論文制作にも通じるところのある汎用性の高いスキルを確認しながら、広報スキルへの展開を考えます。

講 師 : 福井 康雄 (理学研究科)、渡辺 政隆 (筑波大学)、田中 佐代子 (筑波大学)
日 時 : 2012 年 9 月 25 日 13:00-18:00
会 場 : 理学南館 1 階 理学セミナー室
対 象 : 大学院生、教職員、一般 (定員 40 名程度)
主 催 : 「科学研究を伝える広報誌制作手法の追求」(科研 23650506、代表 福井 康雄)
共 催 : 名古屋サイエンスコミュニケーション教育研究会、「科学者のためのサイエンスイラストレーション作成ガイド」(科研 22615004、代表 田中 佐代子)
協 力 : 名古屋大学大学院理学研究科 広報委員会

院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー2012

○ クリティカルシンキングの技法—科学技術と社会の接点から—

日 時： 2012年5月8日 15:00-17:00

講 師： 伊勢田 哲治（京都大学）

概 要： クリティカルシンキングは、知識の生産や活用をより確かなものにするために有効なスキルです。このセミナーでは、科学技術と社会の界面にある事例をとりあげ、その考察の中からクリティカルシンキングの技法を学びます。

参加者アンケート集計結果

今回のセミナーは有意義でしたか？1つお選びください

とても有意義 14 ある程度有意義 15 どちらとも言えない 2 あまり有意義でない 0 まったく有意義でない 0

このセミナーの中で印象に残ったことを教えてください

- ・CT するかどうかを考えるために結局 CT しなければならないこと
- ・資料による受ける印象の変化、メタ CT という考え方
- ・異なる専門分野の方だと、やはり考え方のベースも異なっていたのが興味深かった
- ・前提を考えることで2つの議題を比較するという考え方
- ・議論をする上で、「議論すべきものか」ということを考えることに、すごく重要性を感じた。ディスカッションで的確に効率的に議論する考え方を教わることで良かった。
- ・CT をいろいろした後で、メタ CT が出て来たこと。頭が固くなりすぎては、良い CT もできないのでは。
- ・グループディスカッション形式がおもしろかったです。
- ・議論が中心というのがめずらしかったです。面白かった。
- ・自分の課題分への賛否が少数派だった・・・。
- ・考え方そのものについて考える、さらに、考えるかどうかを考えることは新鮮だった。
- ・知識と目的を持ってグループディスカッションができたので楽しかった。
- ・各グループで様々な視点の差異があったこと。
- ・グループディスカッションは大変興味深かったです。
- ・合コン→不要、学会→必要
- ・メタ CT (CT しなくてよいことがある) という考え方は面白かった。
- ・暗黙の前提を見つけることの難しさ、メタ CT
- ・議論2の対立構造を見抜く作業が難しかったこと。
- ・クリティカルシンキングは非常に重要で、日頃から心がけていた考え方であるが、本セミナーを通して、クリティカルシンキングすべき場合とそうでない場合の定義が明確化した。議論する相手、事象によって、コストとベネフィットを把握することが、非常に重要である、と感じた。
- ・メタ CT。クリティカルシンキングをするかどうかクリティカルシンキングする必要性を強く感じた。生産的な議論になるための必須条件であると思う。
- ・議論の時間が多く、体感できてよかった。
- ・暗黙の前提に生じるズレ

- ・けっこうみんな発言するなあということ
- ・暗黙の前提の話
- ・参加者同士で議論し合うという形式は良かったと思う。
- ・メタ CT という概念
- ・ディスカッションスタイル
- ・自分と違う感性の持ち主の意見の面白さ
- ・ものごとを一概に良い、悪いだけで二分するのは短絡的な考え方だということがわかりました。なぜ良いのか、なぜ悪いのかを自分の立場だけでなく相手の立場に立って考えなければと思いました。

このセミナーを改善するとしたらどのような点でしょうか？自由におかきください

- ・文章は短い方がよい
- ・メールに事前に読むように入れてほしかったです。
- ・やはり議論の時間がもっとあれば、と思いました。逆に今回の能力をしっかり身に付ければ短時間でもいいのかもしれませんが。
- ・もう少し CT について詳しく勉強したかったです。
- ・ディスカッション時のグループ分けをもう少し工夫(専門、性別を分散させる等)
- ・もう少し時間が長いと良いと思いました。先生の考え方を聞いたりする時間がもう少しほしかったです。
- ・もう少し、人数が多いディスカッションの方が楽しいと思った。賛否の意見がもっと聞ければいいと思う。
- ・私は就職活動でグループディスカッションを経験していましたが、修士、博士の学生では不慣れな人が多そうだと感じました。もう少し具体的に司会や書記の仕事を指定してもいいと思います。
- ・事前の情報量が多かったと感じました。
- ・もう少し時間がほしかったです。クリティカルシンキングの研究自体にも興味がありました。
- ・ディスカッションの時間はもう少しあった方がよかった
- ・事前リーディングスの徹底、事前リーディングスの時点で着眼点を指示するべきかもしれない。
- ・もう少し長い時間をもうけて、参加者同士の意見をさらに共有すること。
- ・具体的な技術をもっと学びたかった。
- ・血液型のテーマはあまり面白くない。科学的に正しくない、というのは参加者があたりまえに知っていた。メタ CT の話が出る前から、「今さらこんな話・・・」と思った。「微妙な問題」こそがおもしろいと思う。血液型は、その点が不満だった。
- ・もう少し、ディスカッションの数をしぼる代わりに長く時間をとる。
- ・ディスカッションが非常に盛り上がったため、もっと時間をとって話し合えた方が良かったかもしれない。
- ・基本的にはこのままでよいが、教室を2つに分断した討論会は面白いと思う。
- ・時間をのばす
- ・討論にかける時間を十分にとる
- ・講師の方の声が少し聞き取りにくい
- ・内容に対して時間が短すぎると感じた。もう少し深い内容まで理解したかった。
- ・ディスカッションの時間をもう少し長くとってほしかった。
- ・ディスカッションと議論(演習問題)の量が多くて十分に話し合う時間がない。量を減らしてじっくり考える時間をもうけた方がよい。

その他、セミナーに関わるご感想やご意見を自由にお書きください

- ・GD など参加型で面白かった。
- ・また近いうちに開催してほしいです。
- ・大変面白かったです。ありがとうございました。
- ・ディスカッションがセミナーに取り入れられていたことで楽しくやれた。
- ・興味深かったです。ありがとうございました。
- ・議題も非常にピンポイントで分かりやすく、とても参考になりました。

○ 研究倫理ワークショップ

日 時：2012年5月17日・18日 13:30-17:00

講 師：小林 信一（筑波大学）、齋藤 芳子（高等教育研究センター）

概 要：研究活動に従事するうえで、誠実性、研究不正、研究倫理に対するセンスは不可欠です。研究不正（FFP）、研究費の不正使用、その他のコンプライアンスを、具体的な事例を交えて考えていきます。責任ある研究行為をめざすことの意義と道徳的想像力・道徳的判断力の必要性についても、理解を深めます。

参加者アンケート集計結果

今回のセミナーは有意義でしたか？1つお選びください

とても有意義 5 ある程度有意義 3 どちらとも言えない 1 あまり有意義でない 0 まったく有意義でない 0

このセミナーの中で印象に残ったことを教えてください

- ・告発すべきかどうかに関する一連の discussion
- ・自分が思っていたよりも研究の不正が行われていること
- ・通常はあまり議論しないことを話し合ったこと
- ・グループディスカッションを行い自分の持っていない考え方や、ポスドク、ドクターの人たちの生の声を聞いて非常に有意義だった点。
- ・グループディスカッションを行う中で、様々な意見を聞くことができ、面白かった。
- ・”個人所有のパソコンの利用”、”休日や夜遅くまで研究室にいる”など、自分が当たり前のようにしていたことが問題になる場合もあること
- ・研究不正が、どんな状況でも起こりうることを自覚することが、一番重要だということや、研究不正を起さない、起きないようにするためのコミュニケーションが何よりも大切だということ。
- ・理工学の院生・PD と話をすることができ、素直な意見で議論ができて良かった。小林先生の話では、倫理規定がまだ整備されて間もない、ということに驚いた。
- ・かぜとおしが良いかんきょうをつくる！！あせらないようにけんきゅうのけいかくをする！

このセミナーを改善するとしたらどのような点でしょうか？自由にお書きください

- ・時間配分
- ・要点をまとめて時間を短くする
- ・参加人数が少ない。2日間の長時間はとりにくい。

- ・せっかく議論したので、実際の事例と比較したり、不正を行った人々の背景とかの考察もあったほうがよいのでは？
- ・事前のアナウンスをしっかりと、もっと多くの人で議論したい。
- ・グループ討議を④までやってみたかったです
- ・とても面白く有意義だったので、参加者が増えて欲しい。
- ・無い、まんぞく

その他、セミナーに関わるご感想やご意見を自由にお書きください

- ・今まで研究倫理に関するお話をお聞きする機会がなかったので、良かったです。また、講義ではなく、ワークショップという形でディスカッションの場もあり、良かったです。
- ・グループでのディスカッションが面白かった。
 - ・とても有意義な時間をありがとうございました。研究倫理についての感受性を常に維持していくことが個々人にとっての不正を防ぐ一歩だと感じました。
- ・企業では、もっと固いと思いますので、学校から学ぶのが重要だと思います。

○ Writing is thinking! – Introduction to the logical thinking in academic writing –

日 時： 2012年5月29日 16:00-18:00

講 師： Paul W. L. Lai (教養教育院)

概 要： 学術論文をはじめとする各種の専門的著述においては、その帰結を読者に納得してもらえよう論理的展開が求められます。このセミナーでは、論理的思考力を磨き、論理的に議論を組み立てる技法を体験していきます。(Mei-Writing Workshop 合同開催・英語使用)

参加者アンケート集計結果

今回のセミナーは有意義でしたか？1つお選びください

とても有意義 9 ある程度有意義 11 どちらとも言えない 1 あまり有意義でない 1 まったく有意義でない 0

このセミナーの中で印象に残ったことを教えてください

- ・英語のレベルが高かった。
- ・academic writing のアプローチにも種類があることがわかりとても有意義だった。3つのアプローチの内 Process Approach で論文を作成していたので、他の方法も試したい。
- ・logical thinking に基づいた研究テーマの構築の実践は、見ていて勉強になった。
- ・Impressive and beneficial
- ・intro(他の writing のやり方&academic writing の定義)が長いです。Mei writing 授業紹介と感じました。
- ・logical thinking and writing structure.
- ・"logical thinking"が、どういうものなのかをととてもシンプルに分かりやすく説明していただけたのがよかったです。
- ・論理的な文の組み立て方
- ・I know about importance logical writing for academic papers. How to extend writing with arguments.
- ・1 sentence で研究内容を伝えることが簡単ではなくて、訓練によってより specificity が増すこと。
- ・セミナー後半での、研究内容の表現。簡潔な一文での表現の必要性が理解できた。

- ambiguity を排除することで clear で convincing になる点。
- いきいきしてる
- 日常の文章と論文用の文章がちがうことが例をまぜるなど納得できました。
- 最後の work が印象深かった。自分自身で自分の研究に間をして深めていきたい。
- 残りの 30 分で実際にデモンストレーションを行ってみて、セミナーの趣旨がだいぶ伝わった。
- logical thinking の大切さ
- ロジカルに考えることの重要性
- いかに論理的にかくか、考えるかは、やり方を変えれば身に付けられること。Thesis→logical argument→Abstract→build the body. この考え、意識をもつてのぞむこと。同じラボの方の研究についての discussion をきくことができたこと。
- 具体的な事例を使って、議論することがとてもよかったです。
- 最後に事例を挙げた説明があり、これがわかりやすかった。
- How to learn the English paper and make sure the keyword.

このセミナーを改善するとしたらどのような点でしょうか？自由にお書きください

- 特になし。
- もっと logical thinking に関する例とか、書き方とかふやすこと。
- provide more examples of How to write scientific writing.
- 講義室形式ではなく、円卓や discussion 用の会場にしたらより interactive になると思います。
- more practice will be better
- 英語と前もって告知すべきだと思います。
- 例えばコンピューターの話のような具体例を増やしてほしい。多少英語が聞き取れなくても、イメージ作りに大きく役立つから。
- bad abstract, good abstract のケーススタディを通して、だとか「論理的に議論を組み立てる技法」を体験したかったです。最後の 30 分間みたいなのをセミナーのメインにして欲しかったです。
- academic writing の作り方を教えてほしい。
- もっと参加型にしてもらえるとうれしい。
- 英語で講義することを知らなかった。ワークがあるなら、少し考えてこればよかった。
- もう少し discussion の時間が欲しかった。
- もし、事前に講義の内容を知らせていただければもっと準備します。

その他、セミナーに関わるご感想やご意見を自由にお書きください

- 論文の書き方は英語の習得具合によらないということなので、なんとか論理的に書けそうな気がした。
- 今回、初めてこの手の方法論を学ぶセミナーに参加した。日頃の研究の進め方、論文の書き方を見直す良い機会であった。今後もこのようなセミナーを開いて欲しい。
- 具体的にどう logic で paper を書くのかを教えてくださいと思ったんですが、若干違うなと感じています。
- I like it.
- Thank you for your interesting talk. I'd like to join Summer Seminar. I'm happy to get its information!
- Mei writing のイントロセミナー(昨年開講前の)と内容が重複していたので、新鮮味が足りなかったで

す。告知していただければよかったですと思います。スキルアップセミナーですか？おもしろいセミナーだとは思いますが、こういう形式のセミナーに単位を与えるのはどうかと思います。

•More English セミナー will be a good chance for the international students.

○ 科学技術とは何か—ガリレオを歴史の観測点にしてみる—

日 時：2012年6月8日 16:00-18:00

講 師：塚原 東吾（神戸大学）

概 要：科学技術は、いつ、どこで、そしてどのように、成立してきたのでしょうか。このセミナーでは、現在「科学技術」と理解されているものを考えるのに、まずはガリレオという人物に目を凝らしてみます。歴史のレンズを覗くことで、科学技術の現代におけるあり方を考え直す機会になればと思います。

参加者アンケート集計結果

今回のセミナーは有意義でしたか？1つお選びください

とても有意義 4 ある程度有意義 7 どちらとも言えない 1 あまり有意義でない 1 まったく有意義でない 0

このセミナーの中で印象に残ったことを教えてください

- 一世代前の化学者のイメージ(お茶の水博士)と、現代の化学者のイメージ(阿笠博士)の変遷。
- 昔から今までの科学者の歴史の推移について学べたこと。科学者に対するイメージの再認識。
- ガリレオから始まった科学技術の一連の歴史
- まず、人との考えの「ズレ」に驚いた。人とのコミュニケーションをはかる際にはこの「ズレ」を考えて自分の考えを伝えなくてはいけないと思いました。また、今日は自分がどんな気持ちで実験にのぞんでいるのか、改めて認識させられました。
- 科学者や自分のポジションをプロットする上で、他の人たちの科学に対する考えを聞くことができ勉強になった。歴史的なできごとの中で、科学そのもののポジションが変化していることに気付かされた。
- 歴史は鏡(鑑)
- お茶の水博士から阿笠博士への科学者のイメージの変換。おなじ研究室にいるのに考え方が真逆であったのが印象に残った。科学についていろいろ考えると違った意見が多い。
- 他の分野の人の話が聞けてよかったです。
- 自分の中の科学者と他の人の科学者の定義がズレているとよくわかった。
- お茶の水:市民(社会)のための科学→アガサ博士、ドラえもん的便利なものの変遷
- かけ足でしたが、熱く語っていただいて、とても面白かったです。ざっくりとは知っていましたが、情熱が知識を結びつけてくれるような気がしました。
- 体験型セミナーに参加したことがなかったので、どんなものか知らないことばかりでおどろいた。
- 受講生が少なかったこと。こういう分野に興味がない人が少ないのは残念です。
- 3次元空間にプロットしたこと。

このセミナーを改善するとしたらどのような点でしょうか？自由にお書きください

- 時間配分、最後が急ぎ足だった。
- 時間配分
- 制限時間

- ・三次元空間で人を表すことがすごく難しく、面白い反面もとうまく伝えられたらと自分の表現力のなさにもどかしくなりました。あとは、もう少し時間があればよかったと思いました。
- ・時間が足りなかった。ディスカッションやグループワークで時間がかかってしまうので、もう少し時間をのばしてほしい。
- ・ワークシートをもう少し明解なものにすると話が進めやすいような気がしました。
- ・時間はもう少し余裕があったほうが良かった。
- ・時間を長く取るか、話題をしぼるか、前もってアンケートをくばるべき。
- ・2時間でワークショップだと、話が盛り上がる前に終わってしまうので残念に思いました。
- ・講義と作業の内容の間に少しギャップがあった気がします。
- ・時間を延ばす。

その他、セミナーに関わるご感想やご意見を自由にお書きください

- ・楽しかったし、気付くことも多く、また受けたいと思えました。
- ・科学について考える上で、ガリレオ一人を元にしただけで多くの議論が生まれて面白かったです。
- ・視野が広がりました。ありがとうございます。
- ・大変貴重な経験をありがとうございます。
- ・学部生にも広く告知していただけると嬉しいです。

○ 科学技術と社会—対話する社会へ—

日 時： 2012年6月13日 15:00-17:30

講 師： 平川 秀幸（大阪大学）

概 要： 2011年3月11日の東日本大震災と福島第一原発事故を境に、社会・市民と科学技術、政治との関わりは、変わることが求められています。この変化で注視したいのが「対話」です。科学技術をめぐる対話は、何のために、どのようにして行われるのか。一緒に考えていきます。

参加者アンケート集計結果

今回のセミナーは有意義でしたか？1つお選びください

とても有意義 6 ある程度有意義 5 どちらとも言えない 0 あまり有意義でない 1 まったく有意義でない 0

このセミナーの中で印象に残ったことを教えてください

- ・専門家が市民に合わせるべき。と市民も努力をすべきと。真向から対立する意見が出たこと。確かにどちらも重要である。両者の主張を聞くことで、自身も意見を持つことが出来たと感じた。
- ・「専門家と市民(知識のない人)とのコミュニケーションの場」があるということを初めて知りました。どうしても市民はマスコミの情報に流されがちなので、正しい知識を得られる場があるというのは良いことだと思います。
- ・TwitterのTLで平川さん「集辺」を眺めるときよりも、(失礼な書き方ではあるが)真つ当な話であった。平川さんのTwitterのRTは「悪いお友達」が多すぎるのではないかな。
- ・リスクとは、発生確率の大きさだけでなく、総合的なリスクの受忍性の度合いである。
- ・ポストイットに書き出し、1つずつ皿にのせながら、似た内容のものがあれば他の人ものせるやり方は、とても話をしやすいやり方だと思いました。偏りなく、活発に議論できました。

- UK の GM nation が失敗だった(too late)という事実がっかりした。(もう打つ手はないのか?) 今回の原発事故で、市民の専門家に対する信頼が失われたが、同時に、専門家の市民に対する不信もあらわになったと思う。後半の Discussion で「専門家は-」と「市民は-」と両サイドの意見が出たことからそう思った。
- 参加者の少なさ
- 英国のシステムや 10 年前の BSE 関連の事例を引用していたこと。疑問点? ①英国のシステムは成功しているのか? ②当時の BSE への政治対応は、現在どう評価できるのか。
- 数多くの方は専門家と非専門家とのコミュニケーションが難しいということです。
- 全て、真新しい事でしたので新鮮でした。

このセミナーを改善するとしたらどのような点でしょうか? 自由にお書きください

- ただ最後のディベート後に他班の意見に意見する時間が十分に得られなかったこと。
- 時間配分
- 参加者全員が理解できる用語、話し方に変える。時間配分を考慮する。
- 「じゃあ、どうするか?」という問いに対しての回答を掘り下げられるようになると良いと思う。3時間かけても問題意識の洗い出しまでしか進めなかったのが、時間的には厳しいか…
- 講師と参加者との討論の時間を長くする(今回なかった)
- もう少し、参加人数を増やせれば、と思います。大学院生 - PD ぐらいのレベルを想定するのは結構だと思いますが、別の層(若手教員、意欲のある学部学生)を受け入れても良いのではないかと思います。(タイトルに「院生・ポスドクのための」と入っていると他の層は参加しにくい)
- 時間、2回に分けても良い分量でした。
- もう少し時間や話し方を上手に講義時間を使えたら良かった。
- もっと時間がいただければ、講義も討論も十分にできると思います。
- 時間の管理。前も後も予定がつかまっています。良い話がきけただけに惜しいです。

その他、セミナーに関わるご感想やご意見を自由にお書きください

- 参加者 12 人というのは想像した人数の 1/5 くらい。この手のセミナーは、全学で開催しても良いのでは。
- pub. engagement の結果をちゃんと評価して欲しい。(どれくらい効果があるのか? やらないよりやった方がマシ、程度では費用対効果の理由で落とされるので)
- 先生の講義を聞いて、本当に勉強になりました。また、専門家、市民、政府などの関わりについて深く研究していきたいと思います。ありがとうございました。
- こういった機会が増えると良いと思います。色々な形式で。講義形式に拘らず。ありがとうございました。

○ イノベーションと科学技術

日 時 : 2012 年 6 月 25 日 15:00-17:00

講 師 : 伊地知 寛博 (成城大学)

概 要 : イノベーションの経済・社会における重要性が増し、政策としてその推進を図ることも世界的潮流です。科学技術に関する研究による知識の生産にとどまらず、多様な価値の創出につなげることも求められています。科学技術の専門家になろうとする皆さんにぜひ理解・共有してほしい概念などを提供します。

参加者アンケート集計結果

今回のセミナーは有意義でしたか？1つお選びください

とても有意義 7 ある程度有意義 3 どちらとも言えない 3 あまり有意義でない 0 まったく有意義でない 1

このセミナーの中で印象に残ったことを教えてください

- これまで正直なところイノベーションという言葉はそれ自体は知っていても、きちんとした意味は知らなかったもので、今回この意味を知れたことで自分がこれから先自分を持って世の中に出ていくために必要なことの一つが身にしみた気がする。
- 講義の中でも、繰り返し出てきた、「イノベーション」の意味があまり分かっていなかったのだというのが印象的でした。それから、各国と日本との政策の違いに温度差があるので、そこが改善されればいいと思います。
- 世界と日本のイノベーションの違いがあることが分かり、日本はもっとイノベーションを重視していかななくてはいけないと感じた。
- 世界の中でも日本はイノベーションと国との相関性が上手くいっていないということ。この状態を改善しなければ日本は企業的にも経済的にも向上しなくなると思った。
- 今までよく分からなかったイノベーションのイメージが明確になった。確かに日本でイメージされるイノベーションは技術革新に他ならない。実際には経済・社会的な価値を生み出す、もっと生活にまで下って来るものをイノベーションということがわかった。そういう意味では講義でも言っていたように、日本の政策は諸国とは異なるものだと思う。「政策の柱」イメージ・・・日本:技術革新→発展→イノベーション、諸国:イノベーション→要求→技術革新
- イノベーションに関しての日本やその他の国の扱われ方。「イノベーション」を掲げている会社
- アップルの売り文句と日本メーカーの売り文句の違い。社会の仕組みは「与えられるもの」ではなく、「変えられるもの」だということ。
- 定義があいまいで、少なくとも一般市民には多くの誤解を持たれているにも関わらず、コーポレート・スローガンや企業の目標などでよく使われているイノベーションという言葉が、バズワードに見えてきた。
- 価値というものは消費されて初めて生まれるもので、発明や発見、開発されただけではダメだということ。何かを作るときには消費されることを考えて作らなくてはいけないと気付きました。
- イノベーションという言葉から技術革新と連想していたが、そういう意味ではなかったことが印象的だった。
- イノベーションの定義に消費されることが必要であること。
- イノベーション≠技術革新
- 日本は他国に比べてイノベーションの認識が不足していて政府が積極的にイノベーションを推進していないということ。
- シュムペーター「創造的破壊」の概念:鉄道が発展すれば馬はいらなくなる←いつも自分が考えていたことだった。何かが発展する一方で何かは衰退するのはしょうがないことなのではなかろうか？

このセミナーを改善するとしたらどのような点でしょうか？自由にお書きください

- 内容自体は悪くないと思うので、もう少しイベントの内容やらをメールなどを通じて、深く知っておきたいと思った。

- ・もう少しディベートやディスカッションを行い、聞いているだけでなく参加できるようにした方が良い。
- ・イノベーションの例としてハイブリッド車とLED が例として挙げられていたが、イノベーションの変化をもっとスライドを用いて、分かりやすく説明してほしい。
- ・より活発な討論を求める形態にすべきかもしれない。
- ・特にありません
- ・今日のセミナーは大局的で一般的なものと感じました。そのため、イノベーションが身近なものとして捉えられませんでした。
- ・告知不足。知らなかった。5月開催分も参加したかった。
- ・もう少し広報をし、参加者が多いと後半の議論が活発になったと思う。
- ・概念的な話が多く、論点があまり親しみのない所だったので、理解しづらかったと思う。具体的な例に深く触れる方がいいのかもしれない。
- ・マイクの入りをもっとよくした方が良かったと思う。少しきこえづらかった。

その他、セミナーに関わるご感想やご意見を自由にお書きください

- ・予想していたセミナーとはずいぶん違っていたが、現在の日本の現状について深く理解することができ、大変有意義なセミナーでした。
- ・今日は文科系(?)社会科学の話がきけてよかった。社会に対して何かしていこうとする時には、自然科学、社会科学双方の知識が必要と考えているので、内容は少しだったが聞けてよかった。

○ 話す技法

日 時： 2012年6月29日 13:30-15:30

講 師： 平野 美保 (京都ノートルダム女子大学)

概 要： 成果の発表はもとより、アイデアを練るため、支援を受けたり仲間を募ったりするためにも、話すスキルは重要です。自らの話し方を振り返り、聞きとりやすく、場面にあった話し方について、討議や練習をしながらスキルを磨きます。

参加者アンケート集計結果

今回のセミナーは有意義でしたか？1つお選びください

とても有意義 14 ある程度有意義 5 どちらとも言えない 0 あまり有意義でない 0 まったく有意義でない 0

このセミナーの中で印象に残ったことを教えてください

- ・話し方が重要→意識しなければ改善しない
- ・図形を隣の人に説明するゲーム…説明することの難しさと、相手の反応を見ることの重要さに気付きました。発声練習は今後続けていけたらいいなあと思います。
- ・"PREP"はじめて聞きました。普段の会話でも気をつけて、説得力のある話し方を身に付けたいと思います。
- ・話し方で他人に与える印象が大きく違うという点で、やはり明るく元気な話し方は好感をもて、魅力的に思えた。
- ・分かりやすく、好印象な話し方の方法。口を大きく開けることの大切さ。

- ・発声練習
- ・話し方を意識するだけで聞き手への伝わり方がかわる。
- ・話すトーンで印象がかなり変わったこと。
- ・日本語を話す時のトーンは上から下へ。
- ・声でその人に向いている職業までイメージ出来ることが印象に残っています。
- ・話し方や声の調子で、自分について相手が受ける印象が異なる点。
- ・話し方だけで相手の印象や話の内容の興味に影響するということが印象に残りました。今後、自分の研究や自分自身を売り込むために、話す技術は重要であると感じました。
- ・実際に受講者に体験させることによって、効果的に名人が認識、理解できたと思います。
- ・相手を意識した話し方
- ・相手に説明して絵を描いてもらう場面で、全体像を先に伝えなければここまで伝わらないかと驚きました。大きさに話したつもりでも、聞き手にはちょうどいいくらいであるというのも意外で印象に残りました。
- ・話すことがあまりに日常的に行っていることなので、意識しないとなかなか改善されない。
- ・実際に話すのがたくさんあって少しはずかしかった。
- ・発生練習！
- ・とてもためになるセミナーでした。今まで意識していなかったことを意識できたのでよかったです。間！強調！イントネーション！そしてシンプルに！行動にうつします！
- ・「ものは言い様」ではなく「受け取り様」だと再認識しました。聴き手に与える印象までも予測して、話し方を意識したいと思いました。ありがとうございました。

このセミナーを改善するとしたらどのような点でしょうか？自由にお書きください

- ・ランダムにしてなるべく違う学科の人と話がしてみたい(自由席だと集まってしまう)
- ・今回のセミナーには大変満足しています。もう少し遅い時間の方が人が集まったかもしれないと思います。
- ・話し言葉と読み言葉(高い音から下がるか、低い音からはじめるか)の違いが印象的でした。このような話をもっと教えていただきたいかったです。
- ・就活等にも有意義だと思うので、早い時期から数回行ってもらえると学生からするとメリットがあると思う。
- ・時間、と機会、もっとあっても良いと思う。
- ・特にありません
- ・フォローアップの機会を設けること。(ex「受ける回」→学会で発表する→「省〇の回」とか)
- ・参加型で楽しく、特には改善する必要はないと思います。
- ・シンキングタイムが短めだったので、もう少し、長いと良い。
- ・1週間くらいの集中講義の形式をとっても、十分な内容と思われれます。
- ・発声の時、立った方がよいのでは？
- ・どのへんの人に向けての内容かとか知りたかった。(タイトルからどういう内容なのかわかりにくい)
- ・時間配分。最後に近づくと圧迫感が。それ以外はとても満足でした。ありがとうございました。

その他、セミナーに関わるご感想やご意見を自由にお書きください

- ・大変素晴らしい内容だった。具体的な改善のしかたが分かった。

- 人数はこれくらいが限度かしら、と思います。全員の意見が聞けて講師の人とコミュニケーションできる人数ではないかと。
- 発表に苦手意識があり、発表の時は、声が小さくなったり早口になりがちですが、元気良く大きな声で、話をするよう心がけたいと思います。楽しい講義をありがとうございました。
- とてもためになる講義でした。
- はじめから聞ければよかったです。
- 本日はありがとうございました。
- とても、おもしろかったです。
- 話す技術のセミナーは初めて受けたので、とても興味深く、おもしろかったです。今後に役立てたいと思いました。
- ありがとうございました！とても勉強になりました！！
- 今日はとても多くのことが学べました。ありがとうございます。
- とても有意義な時間でした。ここで学んだことを日々の生活にも活かしていきたいと思います。
- 今回はさすがはずかしかったですが、とても楽しかったです。基本が大切なのを痛感しました。ありがとうございました。
- ありがとうございました！

大学の教務 Q&A

1. 概要

教務部門の実務経験の豊富な職員と高等教育を専門とする教員によって、教務を担当する職員に必要な知識・スキルを明確にし、研修教材『大学の教務Q&A』を作成した。

2. プロジェクト体制

中井 俊樹(名古屋大学高等教育研究センター)

齋藤 芳子(名古屋大学高等教育研究センター)

長尾 義則(名古屋大学大学院環境学研究科)

村瀬 隆彦(佐賀大学学務部)

上西 浩司(奈良教育大学入試課)

水谷 早人(日本福祉大学学生支援部)

辰巳 早苗(大阪樟蔭女子大学修学支援課)

3. 主な活動内容・成果

- 1) 2012年3月25日に『大学の教務Q&A』(玉川大学出版部)を刊行した。
- 2) 『大学の教務Q&A』の刊行に伴い、大学の教務に関する執筆や講演を行った。

4. 『大学の教務Q & A』の構成

はじめに

第1部 大学教務のための7つの指針

1. 教務は担当者の裁量が大きいことを理解する
2. 関連法規を理解して適切に判断する
3. 教育の論理を常に重要視する
4. 学生の多様性を尊重する
5. 社会常識に照らして検討する
6. 他の構成員と連携を進める
7. 力量を高める機会をつくる

第2部 Q&A形式で学ぶ大学教務

- 入学(Q1-6)／学籍(Q7-21)／履修(Q22-25)
カリキュラム・授業(Q26-37)／教員(Q38-42)
単位認定(Q43-49)／卒業・修了(Q50-55)
学位(Q56-64)／教員免許・資格(Q65-69)
学生支援(Q70-73)／留学生(Q74-78)
障害学生(Q79-83)／証明書(Q84-91)



大学論(Q97-100)／コラム「授業料の収受」「すぐれた研究者はすぐれた教育者なのか」「教員、学生から信頼されるのには」「大学職員と「非正規雇用」職員」「データの構造から大学の共学のしくみを理解する」「サービスの公平性」「大学職員のヨコのつながり」「東日本大震災復旧・復興支援と大学の変革」ほか

第3部 大学教務のための資料

年間スケジュール／教育関連法令の読み方／大学教育関連主要法令／主な審議会答申／教務の基礎用語／気になるカタカナ語・外来語／教務の基礎英単語／高等教育の動向の情報源

参考文献

おわりに

執筆者プロフィール

大学の教務に関する執筆や講演（一部）

中井俊樹「大学教務の指針」『文部科学通信』305号、2012、pp.12-14.

中井俊樹「大学を越えた教職協働による研修教材の開発」日本リメディアル教育学会第8回全国大会、立命館大学、2012年8月28日。

上西浩司、中井俊樹「大学の教務の実践的知識の共有」神奈川県内大学教務連絡協議会教務関連業務研修会、麻布大学、2012年11月9日。

中井俊樹「大学職員の実践的知識をどのように共有するか」『大学職員研修の進め方』岐阜大学、2012年11月27日。

上西浩司、辰巳早苗、小野勝士、村瀬隆彦「教務の実践的知識の共有」『大学教育改革フォーラム in 東海 2013』オーラルセッションⅢ、2013年3月2日。

參考資料

拠点の概要と設立経緯

設立経緯

名古屋大学高等教育研究センターは、1998年4月9日に学内共同研究施設として設置されました。センター長(併任)、専任教員4名と非常勤研究員・職員数名からなる部署です。

国際的な視野のもとに高等教育の発展に戦略的に貢献することをミッションとして掲げ、研究開発の成果を踏まえた知見の提供や問題解決への参画を行っています。これらを通じて、名古屋大学および高等教育機関の質の向上、さらには高等教育機関の社会への貢献をめざしています。2010年6月10日には、FD・SD教育改善支援拠点として、文部科学省より教育関係共同利用機関(大学の教職員の組織的な研修等の実施機関)に認定されました。

The Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University was established on April 9, 1998, as one of the university's interdepartmental education and research institutes. It consists of a director (concurrent), four full-time academics, and several part-time researchers and assistants. With a mission to make a strategic contribution to the advancement of higher education with international perspectives, the Center imparts knowledge and participates in problem solving based on the findings of its research and development activities. Through these activities, the Center aims to facilitate quality enhancements in Nagoya University and other higher education institutes, and consequently seeks to serve for the society. On June 10, 2010, the Center was approved by MEXT (the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) as one of the Inter-University Research Hub for faculty and staff development.

研究領域

- | | |
|----------------|---|
| ・教授学習論 | Teaching and learning |
| ・学生論 | University students |
| ・カリキュラム論 | Curriculum at higher education |
| ・組織開発とリーダーシップ | Organization and leadership |
| ・大学と社会 | Role of university in society |
| ・高等教育政策、学術研究政策 | Higher education policy, Academic research policy |

活動内容

高等教育に関わる実践的な研究を進めつつ、以下のような活動へと展開させています。

- ・大学教職員のためのFD・SD教材開発と提供
- ・テーマ別FD・SD研究会の支援
- ・個別教員に対するメンタープログラムの設計と実施
- ・学部生・大学院生の学習支援
- ・各種交流会の企画運営
- ・FD・SD担当者との交流・情報交換

The Center is engaged in practical research into higher education, while also being involved in the following developmental activities.

- 1 Creating and providing tools for faculty and staff development
- 2 Proving professional development programs at different career stages and on strategic issues
- 3 Supporting voluntary groups for faculty and staff development by theme
- 4 Designing and providing mentoring programs for individual faculty members
- 5 Developing and providing tools and programs to support students' learning
- 6 Planning and organizing various exchange events
- 7 Facilitating personal and informational exchanges among practitioners

特徴ある活動

・FD・SD 教材開発における協働

センターの教材開発経験を活かして、現場の教職員が FD・SD 教材の開発に携わることを積極的に支援しています。これにより、さまざまな経験、スキル、ノウハウを収集して共有することを可能にし、さらには教職員間のネットワークづくりや課題の共有を図っています。なお、開発された教材は、時間と場所を選ばない自己研修のツールとして活用されています。

Collaboration on Tool Creation

The Center encourages faculty and staff to participate in the creation of self-development tools and/or materials for teaching and learning, based on our experience in this area. Through these activities, it also collates the multitude of experiences, skills, and knowledge faculty and staff can learn from each other and promotes networking and strategic collaboration. These developed tools are utilized as materials for self-training, which help people to learn at any time and in any place.

・時宜に応じた集合研修

キャリアステージ毎の集合研修に加えて、時宜にかなう集合研修も提供しています。これまらの研修事例には、大学の国際化に伴う「専門を英語で教える際の方法」、情報技術の発展に伴う「授業に ICT を活用する方法」、大学院拡大に伴う「研究指導上の留意点」などがあります。

Programs for Faculty, Staff and Students' Development

In addition to the specific developmental programs for different career stages, the Center also provides seminars and workshops on current/strategic issues. Examples of past training programs include “How to teach one's major subject in English” to facilitate the internationalization of the university. “How to utilize ICT in a class” to facilitate the development of information technology, and “Tips for research supervisors” to cater to the expansion of graduate schools.

・テーマ別 FD・SD 研究会の支援

FD・SD に関わるテーマ別研究会を支援しています。これまでに名古屋経済学教育研究会、名古屋哲学教育研究会、名古屋 SD 研究会、名古屋大学留学生研究会、なごや科学リテラシーフォーラムなどが教職員有志によって組織され、活動が展開されています。

Supporting Voluntary Groups

The Center supports voluntary groups that are theme-oriented and involved in faculty and staff development. Volunteers from the faculty and staff have organized several groups such as the Nagoya Study Group on Economics Education, Nagoya Study Group on Philosophy Education, Nagoya SD Study Group, NU Foreign Student Study Group, Science Literacy Forum Nagoya, ect., and the Center is active in helping them with their activities.

・教員メンタープログラム

個々の教員に対する支援として、メンタープログラムを運営しています。新任教員が一定の勤務経験をもつ教員と交流することを促進しているほか、授業に悩みをもっているなど教員個々のご要望に応じてメンターマッチングを行っています。

Faculty Mentoring

The Center conducts a mentoring program to support individual faculty members. The program promotes exchanges between new and experienced members of the faculty, while also providing mentor-matching services, as requested by individual faculty members, who are experiencing issues in academic life.

・大学教員準備講座

大学教員をめざす大学院生等を対象に、大学教員になるために必要な基本的知識やスキルの習得を支援する「プレ FD」を実施しています。これらは、大学院生に対するキャリア形成支援の意味をもっており、大学院生のための研修シリーズとも連動させています。

Preparing Future Faculty

The Center provides a Program for Preparing Future Faculty, which helps postgraduate students who would like to be faculty members in the future acquire fundamental knowledge and skills. This program also assumes an aspect of career development support for graduate students, and is linked with training programs for postgraduate students.

センターおよび拠点の規程

名古屋大学高等教育研究センター FD・SD 教育改善支援拠点運営委員会規程

(平成 22 年 7 月 20 日規程第 14 号)

(趣旨)

第1条 名古屋大学高等教育研究センター規程(平成 16 年度規程第 195 号)第 5 条第 2 部の規程に基づく名古屋大学高等教育研究センター(以下「センター」という。)の FD・SD 教育改善支援拠点運営委員会(以下「拠点運営委員会」という。)に関する事項は、この規程の定めるところによる。

(審議事項等)

第2条 拠点運営委員会は、センターの教育関係共同利用拠点としての利用及び運営に関する事項について審議する。

(組織)

第3条 拠点運営委員会は、次に掲げる拠点運営委員をもって組織する。

- 一 センター長
 - 二 センターの教授 1 名
 - 三 学務部長
 - 四 名古屋大学以外の学識経験者若干名
 - 五 その他センター長が必要と認めた者
- 2 前項第 4 号及び第 5 号の拠点運営委員は、センター長の推薦により、総長が任命又は委嘱する。
- 3 前項の推薦を行う場合は、センター長は、名古屋大学センター協議会の議を経るものとする。

第4条 前条第 2 項の拠点運営委員の任期は、2 年とする。ただし、再任を妨げない。

- 2 前項の拠点運営委員に欠員が生じた時は、その都度補充する。この場合における拠点運営委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第5条 拠点運営委員会に委員長を置き、第 3 条第 1 項第 1 号の拠点運営委員をもって充てる。

- 2 委員長は、拠点運営委員会を招集し、その議長となる。ただし、委員長に事故がある場合は、あらかじめ委員長が指名した拠点運営委員が議長となる。

(定足数)

第6条 拠点運営委員会は、拠点運営委員の過半数の出席によって成立し、議事は、出席者の過半数によって決する。

(意見の聴取)

第7条 拠点運営委員会が必要と認めたときは、拠点運営委員以外の物の出席を求め、その意見を聴くことができる。

(専門委員会)

第8条 拠点運営委員会が必要と認めるときは、専門委員会を置くことができる。

(雑則)

第9条 この規程を定めるもののほか、拠点運営委員会に関し必要な事項は、拠点運営委員会の議を経て、センター長が定める。

附則

この規程は、平成22年7月16日から施行し、平成22年6月10日から適用する。

名古屋大学高等教育研究センター規程

(平成16年度規程第195号)

改正 平成18年2月27日規程第69号

平成22年7月20日規程第13号

(目的)

第1条 名古屋大学高等教育研究センター(以下「センター」という。)は、国内外の研究者の協力を得て、学部及び大学院における教育・研究活動との連携の下に、高度教育に関する研究・調査を行い、高等教育の質的向上に資することを目的とする。

2 センターは、教育関係共同利用拠点として、センターにおける教育・研究上支障のない場合に、他の大学の利用に供することができる。

(職員)

第2条 センターに、センター長その他必要な職員を置く。

(運営委員会)

第3条 センターに、名古屋大学センター協議会規程(平成17年度規程第68号)第3条第2項の規程により委任された事項その他センターの運営に関する事項を審議するため、運営委員会を置く。

2 運営委員会の組織及び運営に関し必要な事項は、別に定める。

(評価委員会)

第4条 センターに、センターの研究活動及び運営全般に関して学外者の立場から助言及び評価を得るため、評価委員会を置くことができる。

2 評価委員会の組織及び運営に関し必要な事項は、別に定める。

(FD・SD教育改善支援拠点運営委員会)

第5条 センターに、教育関係共同利用拠点としての利用及び運営に関する事項を審議するため、FD・SD教育改善支援拠点運営委員会(以下「拠点運営委員会」という。)を置く。

2 拠点運営委員会の組織及び運営に関し必要な事項は、別に定める。

第6条 この規程の定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、運営委員会及び名古屋大学センター協議会の議を経て、総長が定める。

附則

この規程は、平成 16 年 4 月 1 日から施行する。

附則(平成 18 年 2 月 27 日規程第 69 号)

この規程は、平成 18 年 4 月 1 日から施行する。

附則(平成 22 年 7 月 20 日規程第 13 号)

この規程は、平成 22 年 20 日から施行し、平成 22 年 6 月 10 日から適用する。

名古屋大学高等教育研究センター運営委員会規程

(平成 16 年度 4 月 1 日規程第 197 号)

改正 平成 18 年 2 月 27 日規程第 69 号

平成 19 年 3 月 28 日規程第 106 号

平成 24 年 3 月 29 日規程第 105 号

(趣旨)

第1条 名古屋大学高等教育研究センター規程(平成 16 年度規程第 195 号)第 3 条第 2 項の規程に基づく名古屋大学高等教育研究センター(以下「センター」という。)の運営委員会に関する事項は、この規程の定めるところによる。

(審議事項等)

第2条 運営委員会は、名古屋大学センター協議会規程(平成 17 年度規程第 68 号。以下「協議会規程」という。)第 3 条第 2 項の規程により委任された事項(以下「委任事項」という。)その他センターの運営に関する事項について審議する。

- 2 運営委員会は、委任事項の審議の結果を名古屋大学センター協議会(以下「協議会」という。)に遅滞なく報告しなければならない。この場合において、協議会規程第 3 条第 1 項第 4 号に規程する事項の審議を行ったときは、可能な限り予算の執行等の前に報告しなければならない。
- 3 運営委員会は、協議会規程第 3 条第 4 項の規程により、再議の求めがあった場合は、その求めに応じて審議した結果について協議会に報告しなければならない。

(組織)

第3条 運営委員会は、次に掲げる運営委員をもって組織する。

- 一 センター長
- 二 大学院文学研究科、大学院教育発達科学研究科、大学院法学研究科及び大学院経済学研究科の教授、准教授又は講師のうちから 2 名
- 三 情報文化学部、大学院理学研究科、大学院医学系研究科、大学院工学研究科及び大学院生命農学研究科の教授、准教授又は講師のうちから 2 名
- 四 大学院国際開発研究科、大学院多元数理科学研究科、大学院国際言語文化研究科、大学院環境学研究科、大学院情報科学研究科及び大学院創薬科学研究科の教授、准教授又は講師のうちから 1 名
- 五 教養教育院長

六 センターの教授及び准教授

七 その他本学の大学教員で運営委員会が適当と認めた者

2 前項第2号から第4号まで及び第7号の運営委員は、総長が任命する。

(任期)

第4条 前条第2項の運営委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 前項の運営委員に欠員が生じたときは、その都度補充する。この場合における運営委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 運営委員会に、委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。ただし、委員長に事故がある場合は、あらかじめ委員長が指名した運営委員が議長となる。

(定足数)

第6条 運営委員会は、運営委員の過半数の出席により成立し、議事は、出席者の過半数によって決する。

2 前項の規定にかかわらず、センター長候補者の選考及び教員人事に関する議事を審議する運営委員会は、運営委員の3分の2以上の出席により成立し、当該議事は、出席者の3分の2以上をもって決する。ただし、客員教授及び客員准教授に係る教員人事を審議する場合は、過半数の出席により成立するものとする。

(雑則)

第7条 この規程に定めるもののほか、運営委員会に関し必要な事項は、運営委員会の議を経て、センター長が定める。

附則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附則(平成18年2月27日規程第69号)

この規程は、平成18年4月1日から施行する。

附則(平成19年3月28日規程第106号)

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附則(平成24年3月29日規程第105号)

この規程は、平成24年4月1日から施行する。

委員会実施状況

第3回拠点運営委員会

日時

平成24年6月13日(水) 13時30分～15時20分

場所

名古屋大学 高等教育研究センター会議室

出席者

早川委員長(名古屋大学) 羽田委員(東北大学) 大塚委員(京都大学) 安村委員(中京大学)
青木委員(南山大学) 池田委員(名城大学) 夏目委員(名古屋大学) 一居委員(名古屋大学)

陪席者

近田准教授(名古屋大学) 中井准教授(名古屋大学) 丸岡学務企画課長(名古屋大学)
都筑学務企画課総務掛長(名古屋大学) 牧学務企画課総務掛員(名古屋大学)

議題

1. FD・SD 教育改善支援拠点運営委員会委員の交代について
2. 2011年度事業報告及び事業費決算(案)について
3. 2012年度活動方針及び事業費執行計画(案)について
4. その他

運営委員会委員名簿

委員 羽田 貴史 (東北大学 高等教育開発推進センター教授)

委員 青野 透 (金沢大学 大学教育開発・支援センター教授)

委員 大塚 雄作 (京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授)

委員 安村 仁志 (中京大学 副学長)

委員 青木 清 (南山大学 副学長)

委員 池田 輝政 (名城大学 副学長)

◎ 委員 早川 義一 (名古屋大学 高等教育研究センター長)

委員 夏目 達也 (名古屋大学 高等教育研究センター教授)

委員 一居 利博 (名古屋大学 学務部長)

◎は委員長

拠点が提供している教育改善支援ツール

1. 刊行物：書籍

- 1-1 中井俊樹・上西浩司編著 齋藤芳子・辰巳早苗・長尾義則・水谷早人・村瀬隆彦著『大学の教務Q&A』玉川大学出版部,2012年3月
- 1-2 夏目達也・近田政博・中井俊樹・齋藤芳子『大学教員準備講座』玉川大学出版部,2010年3月
- 1-3 近田政博『学びのティップス 大学で鍛える思考法』玉川大学出版部,2009年11月
- 1-4 中井俊樹編著 岩城奈巳・齋藤芳子・高木ひとみ・夏目達也・堀江未来・安田淳一郎・渡部義和著『大学生のための教室英語表現 300(CD付)』アルク,2009年4月
- 1-5 中井俊樹編著 北村友人・齋藤芳子・高木ひとみ・近田政博・戸田山和久・夏目達也・藤井基貴・堀江未来・和栗百恵著『大学教員のための教室英語表現 300(CD付)』アルク,2008年12月
- 1-6 中井俊樹・戸田山和久・夏目達也・近田政博・齋藤芳子・藤井基貴・堀江未来・高木ひとみ・北村友人・和栗百恵『英語で教える秘訣 大学教員のための教室英語ハンドブック』アルク,2008年3月
- 1-7 中井俊樹・山里敬也・中島英博・岡田啓『eラーニングハンドブック ステップでつくるスマートな教材』マナハウス,2003年8月
- 1-8 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹『成長するティップス先生 授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部,2001年4月

2. 刊行物：冊子

- 2-1 名古屋大学高等教育研究センター・総務部職員課・学部学務企画課編 /国際部国際企画課協力『Nagoya University New Faculty Handbook』2012年3月
- 2-2 名古屋大学高等教育研究センター・総務部職員課・学部学務企画課編『名古屋大学新任教員ハンドブック』2012年3月
- 2-3 Paul W. L. Lai 著 近田政博編訳『Mei-Writing 日本語版 論理的に書く技法』2012年3月
- 2-4 齋藤芳子編著 戸田山和久・中井俊樹著『研究者のための科学コミュニケーション Starter's Kit』2011年6月(第2版)
- 2-5 近田政博編 高木ひとみ・田中京子・近田政博・土井康裕・松浦まち子・渡部留美著『名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック』2011年3月
- 2-6 名古屋 SD 研究会制作 中井俊樹・齋藤芳子・長尾義則・村瀬隆彦・上西浩司著『教務のQ&A』2011年3月

- 2-7 物理学講義実験研究会編 三浦裕一・小西哲朗・中村泰之・千代勝実・齋藤芳子・安田淳一郎・森昌弘著『物理学講義実験ハンドブック』2011年3月(第2版)
- 2-8 Jane Creaton・中井俊樹・齋藤芳子編著『Eight Principles for Linking Research and Teaching』2010年5月
- 2-9 名古屋大学経済学教育研究会編 多和田眞監修 伊藤志のぶ・栗原裕・近藤健児・實多康弘・柳原光芳著(執筆協力 岡田和久・小川健・進藤優子・董維佳・沖本まどか・光岡聖浩)『経済学英語ハンドブック 授業で使える例文集』2009年3月
- 2-10 Richard James・Gabrielle Baldwin 著 近田政博訳『研究指導を成功させる方法 学位論文の作成をどう支援するか』2008年1月
- 2-11 戸田山和久監修 /齋藤芳子編著 夏目達也・近田政博・中井俊樹著『Researching Japanese Higher Education:1998-2008』2008年
- 2-12 名古屋大学高等教育研究センター(戸田山和久・夏目達也・近田政博・中俊樹・鳥居朋子・齋藤芳子)制作・カリキュラム開発研究会(黒田光太郎・浪川幸彦・速水敏彦)制作協力『ティップス先生のカリキュラムデザイン』2007年3月
- 2-13 近田政博・中井俊樹・鳥居朋子・中島英博・田中秀佳『プロフェッショナルスクールのための授業設計ハンドブック』2004年1月

3. 刊行物：冊子・リーフレット シリーズ

- 3-1 『ティップス先生からの7つの提案』
 大学生編(2011年3月) 教務学生担当職員編(2007年5月) IT活用授業編(2006年7月)
 大学編(2005年9月) 学生編(2005年9月) 教員編(2005年9月)
- 3-2 ファカルティガイド
 多人数授業の工夫(2011年7月) ミニットペーパーを活用する(2011年7月)
 留学生を受け入れる(2011年3月) マスメディアに情報を提供する(2011年3月)
 物理学講義に実験を取り入れる(2011年3月) プレゼンテーションを指導する(2011年1月)
 学生同士でレポートの読みあわせをさせる(2011年1月)
 学生を図書館に行かせる(2011年1月) メンター教員のためのガイド(2010年10月)
 メンティ教員のためのガイド(2010年10月) 市民を対象に講演する(2010年3月)
 授業にICTを活用する(2010年3月) 学生に的確なレポートを書かせる(2010年3月)
- 3-3 『名古屋大学新入生のためのスタディティップス』
 2008年度版 (1)「学識ある市民」をめざして (2)学問を始めよう！(2008年3月)
 2007年度版 (1)「学識ある市民」をめざして (2)自発的に学ぼう (2007年3月)

WEB 高等教育研究センター>出版物>研究開発成果物

3-1 『ティップス先生からの7つの提案』

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/>

2-5 『名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック』

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ryugakusei/>

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/ryugakusei_handbook.pdf

2-8 『Eight Principles for Linking Research and Teaching』

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/LinkingResearchandTeaching.pdf>

2-9 『経済学英語ハンドブック 授業で使える例文集』

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/english_handbook.pdf

2-11 『Researching Japanese Higher Education:1998-2008』

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/Researching_Japanese_Higher_Education.pdf

2-12 『ティップス先生のカリキュラムデザイン』

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/curriculum_design.pdf

3-3 『名古屋大学新入生のためのスタディティップス』

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/stips/>

2-13 『プロフェッショナルスクールのための授業設計ハンドブック』

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/prohandbk.pdf>

WEB 高等教育研究センター>教授・学習サポートツール

2-1 『Nagoya University New Faculty Handbook』

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/file/NewFacultyHandbook_final.pdf

2-2 『新任教員ハンドブック』

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/file/handbook_final.pdf

3-2 『ファカルティガイド』

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/facultyguide/>

3-1 『ティップス先生からの7つの提案』

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/>

1-8 『成長するティップス先生』

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/>

2-12 『ティップス先生のカリキュラムデザイン』

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/curriculum_design.pdf

2-5 『名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック』

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ryugakusei/>

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/ryugakusei_handbook.pdf

2-4 『科学コミュニケーション Starter's Kit』

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/scicomkit/>

3-3 『名古屋大学新入生のためのスタディティップス』

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/stips/>

WEB 高等教育研究センター>教授・学習サポートツール>高等教育グローサリー

アウトカム評価、アカデミック・ライティング、アドミッションポリシー、移転可能なスキル、インフォーマル学習、オナーズ・プログラム、学修時間、学習歴認定制度、学生の研究体験、科目番号方式、カリキュラム、キャップ制、キャリア教育、教育メンター制度、共同学位制度、経験学習論、コア・コンピテンシー、コースパケット、サイエンスショップ、サービスラーニング、初習教育、成績評価点平均値、大学の教科書、マイクロティーチング、ライティングセンター、ラーニングコモンズの活用、ルーブリック

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/he_glossary/

WEB 高等教育研究センター>教授・学習サポートツール>シラバステンプレート

高等教育内容論—学習支援(近田政博、2007年度後期)
高等教育基礎論—研究方法(近田政博、2007年度前期)
高等教育経営論—大学組織論(中井俊樹、2006年度後期)
高等教育内容論—授業設計(近田政博、2006年度前期)
高等教育内容論—学士課程教育論(中井俊樹、2006年度前期)
基礎セミナーA「大学時代に学生はどのように発達するのか」(中井俊樹、2006年度前期)
高等教育内容論—学習支援(近田政博、2005年後期)
情報哲学の展開 2—心とロボットの現代哲学入門(戸田山和久、2005年度後期)
人類生存のための科学 2(戸田山和久、2005年度後期)
基礎セミナー「大学と職業の間」(夏目達也、2005年度後期)
高等教育経営論—組織とリーダーシップ(中井俊樹、2005年度後期)

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/syllabus.html>

WEB 高等教育研究センター>教授・学習サポートツール>ミニットペーパーテンプレート

白紙、罫線入り、罫線入り(問題)、二段組(質問)、二段組(問題)

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/minute.html>

FD・SD教育改善支援拠点の活動（２）
平成24年度総合報告書

2013年3月29日発行

制作・発行 名古屋大学 高等教育研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp
名古屋大学消費生活協同組合印刷・情報サービス部
印刷・製本 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
E-mail insatsu@coop.nagoya-u.ac.jp

